Ｖｅｎｔｏ～風の少女～

芳田尚哉

Ｅｐｉｌｏｇｏ　１

　ここが最初だった。
　その時は、なんでもなかったんだ。
　だけど……。
　目の前のスクリーンを観る。
　そこに映し出されているのは今週で上映が終わる映画『思い出との再会』だ。ちょっとした軽い推理サスペンスものだ。
　人気は上々の作品だったのだが、最終週の最終日の朝一番となると人はいない。長い間上映されていたので、ほとんどの人が観てしまったというのもあるのだろう。
　作品自体はよくできていると思う。だけど、もう一度観ようという気にはなれないのは事実だ。
　それでも、俺はもう一度観に来ている。きっと、あの時を再び体験できると思ったからだろう。
　予想通り、他に客はいなかった。だけど、隣の席も俺が購入している。というよりは、ペアの前売りチケットで購入したので自然とそうなってしまっただけ。あの時もそうだった……。
　懐かしいな……。
　たった一年前の事なのにそう思う。いや、正確にはまだ一年は経っていない。だけど、あと一月ほどで一年だ。
　俺はスクリーンに目をやった。
　主人公が危機に陥っていた。
　ああ、この後は敵役がやってきて……。
　もう既に知っている展開を思い浮かべながらぼんやりとしている。
　そうそう。それで敵役が急に味方になって一緒に……。
　最初に観た時はそれなりにワクワクしたものだが、二度目となるとそれほどでもない。むしろ、細かい所に目がいってしまってストーリーなんてどうでもよく感じる。
　俺はよくそんな観方をする。最初は普通に映画を観る。それで面白い、この映画は最高だ……とか思った作品はもう一度観る。そして、伏線やら、細かな部分に隠された演出やらを観る。それは、制作者にとっては嬉しいのかやめて欲しいのか、そんなものはただの一般人の俺にはわからない。
　そんな事を考えている間に映画は終わっていた。
　キャストやスタッフの名前が流れる。
　制作者に敬意を表しよいん余韻を味わう時間。
　作品を振り返る時間。
　作品を頭の中で巻き戻し、早送り再生する時間。
　だけど、今回はそんな事はできなかった。
　どうしてもあの時が思い出される。むしろ、思い出してしまうかもしれないと思ってやってき

たのだから、それでいいのかもしれないが。
　それでも辛い。
　自虐的な自分にうんざりする。
　だけど、こんな事で辛いとかい 云っているようじゃダメだな……とも思う。
　やがて終わり、席を立つ。そして、誰もいない劇場を見回す。
　９番という自分が座っていた席番号が最初に目に付いた。
　スクリーン、二〇〇ほどの客席、映写窓……。
　広いな……。
　誰もいない劇場はそう表現するに相応しい。
　人で溢れる満員の劇場よりも、人が少ない劇場の方が趣があると思う。
　誰にも邪魔されないプライベートな空間が、プライベートでない空間に存在するのだから。その矛盾空間が矛盾だらけの世界に生活する矛盾の俺には心地いい。
　作品よりも空間に余韻を感じながら階段を下りていく。
　そして、スクリーンの前に立ってスクリーンを見上げる。
〝スクリーンに穴が空いているって知ってる？〟
　それを確かめるようにスクリーンを見ると、はっきりとわかる。確かに小さな穴が空いている。
　なんとなく、胸ポケットに入れてあった二枚のチケットを見る。一枚は半券が切り取られているが、もう一枚はそのままだ。
〈スクリーン③　Ｈ列　９番〉
〈スクリーン③　Ｈ列　１０番〉
　切り取られていない方のチケットが淋しそうだ。
　だけど、切らない。
　このチケットはこのままだ。
　でないと、俺は受け入れられないだろうから……。
　あれから、俺はまだ涙を流していない。
　それは、事実を受け入れていないからだ、と言われた。
　でも、どうやったら受け入れられるのか、誰か教えてくれよ。
　どうしたら泣けるんだよ。
　気が付けば、清掃をするために劇場の人が入ってきていた。
　その人は俺を不思議そうに見るが、なにも言わない。まあ、干渉される筋合いなんてないんだから当然だが。
　それでもずっとスクリーンの前に立っていると、声を掛けられた。なんでも、劇場内の空気の入れ換えをするので外に出て下さい、との事だった。空気を循環させる際に埃が立つのだそうだ。その為、無人にするのだそうだ。
　その時になって劇場を出る。
　時計を見ると映画が終わってから十分が経っていた。

通路には次の上映を観るために待っている人がいる。だが、それは別の作品で、このスクリーンでさっきの映画は上映されない。あとは夜にもう一度上映されて終了だ。次は、先週から上映が開始されたラヴロマンスが上映される。
俺は通路を無言で歩く。端からは暗いヤツと見えているに違いない。自分でそう思うのだから、相当じゃないだろうか。
普段なら、通路の額に入れられた近日上映のポスターを見るのだが、今はそんな気分になれない。しばらくは来ないつもりだから、どうでもいい。
エスカレーターに乗って一階に上がる。
ポスターやパンフレットやその他グッズなんかを売っているコーナーを過ぎ、チケットカウンターの前を通り過ぎ外に出る。
ショッピングモールの一部なので人が絶えない。
そんな人ごみに紛れるように、駅に向かう無料送迎バスに乗り込んだ。

★　★　★

菜々ちゃん。
空を見上げる。
この先にいるのか？
菜々ちゃん。
その時、ふわりと風が吹いた。
――『あたし、風になりたいんだ』
菜々ちゃんの言葉が甦った。
涙が溢れた。
止まらなかった。
今までの感情が全て溢れてきた。
ねぇ、菜々ちゃん。
空に向かって呼びかける。
菜々ちゃんは風になったよ。
今も俺の心の中を吹き抜けていった。
菜々ちゃんのそよ風は、ずっと俺の心の中で……。
菜々ちゃん……。

「どうよ、このゲームは」
　また始まった。
「おいおい、そんな、うんざりです……ってな顔するなって」
「うんざりだっての」
「そんな事言って、ホントは気になるんだろ？　えぇ？」
「そうだな、気になるな。どうしてお前はいっつもそんなゲームを持っているのかってな。しかも、俺の部屋にいるってのがさらに気になる」
「んなの、いつもじゃんか。今さら気にする事でもないだろーが」
　いつもだから、だろうが。それに、既に俺の部屋にはこいつが持ち込んだソフトが溢れている。
それも、今現在発売されているものじゃなく、一昔前のパソコンゲームだ。
「そうやって」
　俺の隣にいた侑浩が口を挿む。ったく、ややこしくなる。
　ただでさえ厄介なヤツがいるのに……どうすんだよ。
「いちいち細かい事気にすんなや」
「ほんまや」
「どこが細かい事だ」
　とか、そんな事を言っている間に高遠は自分が持ってきた旧式のノートパソコンを起動させた。
「あのさ、どうしてお前はそんなに昔のゲームに詳しいんだ？　今の機種だと対応してないからできないはずだろ」
「いい事を訊いてくれた。ホント、よくぞ訊いた。それはだな、これだ！」
　そう言って、高遠はノート型のパソコンを指した。
「これこそ、およそ十年前のノートパソコンだ。しかも、千年紀仕様だ。これのお蔭で、当時のゲームのほとんどがプレイできる。まあ、コレより以前の年代仕様にしか対応していないものもあるから、それはちょっと無理なんだがな。だが、これさえあればほとんどのゲームをする事ができる。もう、当時の感動できる良作を堪能できるのさ！　これぞ我が至福！　天国に誘われる瞬間だ！」
　なるほど……確かに当時の機種があれば問題ない。だが……。
「それはいいとして、どうしてそんなものがあるんだ？　それに、その当時のソフトなんて売ってないだろ？　よく見れば、ほとんどが初回限定版ってなってるし」
　そうなのだ。売っているはずがない。ましてや初回限定版なんて、すぐに売り切れてしまうものじゃないのか？
「またしてもいい質問だ。ちなみに、これらは全て初回版だぞ。表記がないのは、そういう分類がないものだ。全ては発売日付近に購入されたものなのだ。そしてこれらの素晴らしきソフトは

、とある方から譲り受けたものなのだ！　だから、問題ナッシング！」
　……問題ナッシング？　どういう言葉だよ。
「ナッシングって、お前はそれをプレイしていい年齢なのか？」
「孝志よ、そんな細かい事を気にしていてはいかんぞ。小さな人間にしかなれんぞ」
「一応、ダメなんじゃないか？」
「いいのだ！　おれが承認する！」
「わけわかんねぇよ！」
「わけがわからないなどとは言語道断！　……このあとに〈横断歩道〉と続けようか〈一刀両断〉と続けようか……う～ん、悩む……」
　と、腕を組んで真剣に悩み始める。
「おい、高遠。お前は結局なにが言いたいんだ？」
　俺の言葉に高遠は思い出したように、
「おお、そうだった。大切な事を忘れるところだった。年齢なんぞ、数え年で数えればちゃんと対象内ではないか。つまり、おれがこれらのゲームをする事になんの障害もない！」
「すごい理屈だな……」
　ある意味正論であるが……。ものは考えようという事なのだろうか。それを屁理屈とも云うのだが。
「どうやら、納得してくれたようだな。つまり、おれは最強なのだ！」
「はぁ？」
　また、わけのわからない事を……。
「おれこそが、最強のゲーマーなのだぁっ！」
　違うぞ、絶対。
　しかし、それを口に出すのはためらわれた。ある意味、こいつは最強だと思った。
「それにしても、世のゲームの主人公はどのくらいの知識があるんだろうな？」
　と、高遠が呟く。
「知識って、なんだ？」
「いやぁ……このテのゲームってさ、なんだか無茶してないか？　まあ、現実でも大差ないんだろうけどさ。ホント、どのくらいの知識があるんだろうな？　絶対、知らずにヤってるよな」
「……」
　またか。それにしても、こいつの情報源はどこからだ……っていうか、俺もそれに付き合えるくらいの知識があるんだよな。なんだか、改めて考えるとゲンナリするな。とにかく、ないよりはある方がいいけどな。
「そこいらのヤツってさ、本当に知識がないよな、男女問わずさ。知っておくべき事のはずなのにな」
「確かにな」
「いわゆる生をやってるわけだが、悪影響だよな。バカな野郎たちが知識も無しに真似するんだよな。ところで、お前は知っているのだろうな、当然」

　おい、どうしてそこで俺に話を振る？
「あ、ああ。まあ知ってはいるけどさ……」
「さすがだ。やはりその辺のバカな野郎とは違うな」
「それは褒めてもらったと思っていいのか？」
「ああ、もう拍手喝采だ。ならば、お前に語ってもしょうがないな。……だが、下ネタトークは楽しいからな、盛り上がるか」
　なにゆえ、下ネタトークで盛り上がらねばならんのだ？
「棄却！」
「受諾しろっ！」
　受諾しろって……。
「まあ、無理矢理にでも始めさせてもらおうか。いわゆる妊娠しやすい日（こういう言い方は好きじゃないが危険日）と言われている日を知らずにニャンニャンしておるのか」
　ニャンニャンって……お前、いつの時代の人間だ？
　と、突っ込んでも無駄だろうな。心にしまっておこう。
「そうだな。知らないヤツがほとんどだろうな」
「バカばっかりだからな。というわけで、お前に問う。知っていると言うなら答えてみよ。その日とはいつぞや」
　……ホントに無理矢理に参加させられてるな。まあ、いっか。
「生理の初日から数えて十四日前を基準に前後二、三日だ」
　どうして、俺はこんな事を語っているのだろうか。深く考えると余計に落ち込んでしまう。考えない方がよさそうだ。
「おお、さすがだ。正しい知識を会得しているようだな。おれは嬉しいぞ。感動した」
「それは光栄だ」
　俺はゲンナリとしてきた。もう、どうなってもいいさ。構うもんか。なんだか開き直ってくる。
　って、俺はいったいなにをしようとしてたんだっけ？
　……そうか、どうして高遠と侑浩がここにいるのかって話だ。すっかりはぐらかされた気がする。
「それでだ、高遠。どうしてお前はここにいるんだ？」
「そんなの決まってるだろうが。このゲームをプレイするためだ」
　そう言ってパッケージを高々と掲げる。『眠り姫』ね……。
「ほんでさ、そのゲームおもろいんか？」
「そうだな……面白いというよりは、泣けるって感じだな。それほどエロくはない。むしろ、胸が痛くなるような感じだ」
「そうなんか……」
　そんな部屋の主をほっぽった会話をしながら、高遠はゲームをインストールしていく。って、やった事ないんか。

「なあ、高遠」
「なんだ？」
「お前さ、そのゲームやった事あるのか？」
「ない」
　即答。
「じゃあ、どうして内容を知ってるんだ？」
「んなもん、雑誌とかの情報でさ。それに、前評判もあったしな。ちょっとした噂程度だが、このゲームは泣けると評判だ」
　ゲームで泣くって、俺には経験がないからな……よくわからん。だが、話には聞くよな、こいつからだけど。
「っと、ディスクを入れ替えてっと」
　高遠は嬉々とした表情で作業を進める。まあ、俺としてもここまでくればどうでもいい。あとは野となれ山となれだ。
　実際、何度か高遠がプレイしているのを見ていたが、素直に面白いと思った。こいつが持ってくるものに限って言えば、ハズレがない。明らかにシナリオ重視のヤツばかりだ。
　こいつが持ってくるのはオーソドックスなＡＶＧ。しかも過去の人気作品。その当時を噂でしか知らない連中にとってはお宝のはずだ。そんな名作が俺の部屋に大量に持ち込まれている。
「よっしゃ、インスト終了。さっそく始めようか」
　そう言って、マウスポインターを移動させて〔最初から〕を選ぶ。
　真っ暗な画面の下の方のウインドウに文章が表示される。と、すぐにＦ５のキーを押す。オートモードにするためだ。これで、自動的に文章が適度な速度で送られていく。
　どうやら、最初は主人公の寝起きのシーンのようだ。両親不在で妹と一緒に住んでいるという設定らしい。主人公は、その妹に起こされるというわけだ。
「ありきたりな設定だな」
　俺がぼやくと、
「そこがいいんだろうが」
「そうやそうや」
　二人して俺を責める。まあ、定番に勝るものなしって気もするけど。
　どうやら季節は今と同じで新学期の前という設定らしい。入学式の準備で学校に行くというわけだ。
　どうやら、普通の学園ラブコメのようだ。
「この王道って感じがいいな」
　喜びながら画面に釘付けの高遠。
「そうやな。確かにこの王道ならではの安心感がいいよな」
　同意する侑浩。
　ったく……まあ、特にする事もないからいいんだけどさ。と、自分に言い訳をして俺も画面を見る。

　入学式のドタバタ。悪友とのドタバタ。そして、帰り際に桜の木の下に立つ少女――

【少女】
「……」
　どこかで見た事がある気がする。どこだっけか？
　頑張って思い出そうとするが思い出せない。
　気のせい……か？
　でも……確かにどこかで会ったような気がしなくもない。
　いや……思い過ごしだよな……。
　まあ、こっちを見ているからって俺の事だとは限らないし。
　そう思うのって自意識過剰だよな。
【少女】
「アキちゃんだよね？」
　突然、その女の子が俺にそう言ってきた。
　確かにそれは俺の名前だ。
　って、アキちゃん……？　なんだか懐かしい呼び方だ。
　確か昔、俺の事をそう呼んでいたのがいたような……。
　……えっと……。
　あーっ！
【文誠】
「もしかして、苺花か？」
　俺がそう言うと、その女の子は嬉しそうに微笑んだ。どうやら間違いないらしい。
【苺花】
「ただいま、アキちゃん」

　うわぁ……ベタな展開だ。
「なるほどな……懐かしい幼なじみとの再会か……ますます王道って感じだな」
「おお。これは期待できるんやないか？　こう、こそばゆいくらいの恋愛を」
「そうだな。これは期待大かも」
　なんだか、俺だけ蚊帳の外って感じで盛り上がっている。なんだかな……。まあ、いいとは思うけどな。
「それにしてもだな……」
　ふと高遠が考えるように言った。
「このゲーム、妙にえっちぃよな……」
　まだ始まったばかりだというのに、そんな事を言いだした。
「どこがや？　普通やんか」
　高遠の言葉に侑浩が即座に反論する。

「なにをほざくかっ！　このヒロインの名前を見ろ」
　言われて、俺と侑浩は画面を見る。
「可愛い名前じゃないか」
　俺は素直にそう思った。
「甘いな。イチゴという字がえっちぃじゃないか。なんだかえっちぃくないか？　そう思わないか？」
「言われてみれば、なんとなく……」
　まあ……なんとなくだが、そんなイメージはある。だが、えっちぃって……。
「甘いわっ！　なんとなくではいかんのだっ！　イチゴという字はな、くさかんむりに母と書くだろ？　それはだな、イチゴが女性の乳房に似ているからそういう字になったのだよ。ほれほれ、えっちぃだろ？」
　確かにそうだけどさ……。にしても、こいつは……このテの知識はすごいよな……。そうだ、こいつを試してやるか。
「でもさ、毎と書く場合もあるだろ？」
「あれは俗字だ」
　おっ、珍しくまともな知識があるじゃないか。
「俗字？　俗字ってなんや」
「俗字っていうのはだな……」
　と、そこで考え込む高遠。仕方ない。俺が助け船を出してやるか。俺が話を振ったわけだしな。
「俗字っていうのはな、俗間に用いる正格でない漢字の事だ。まあ、普通は使わない漢字って事だな」
「そのくらい、おれだって知っとーわ」
「……おい、なんで、お前が関西弁使っとんねん。関西弁はオレの専売特許やないか！」
「じゃかーしー！　確かに関西弁だ、広く言えばな。だがな、確かコレは兵庫……明石の辺り、もしくは神戸ら辺で使われとー言葉なのだ」
　おいおい、どうしてそんなに自慢気に話すんだ？
「ちくしょー！　知らんかった。まんまとしてやられたわ」
　おいおい、お前もどうしてそこで悔しがるんだ？
「まあ、よれはよしとして、俗間ってなんや？」
「俗間ってのはな、世俗の間とか俗人の仲間とか世間っていう意味だ。ちなみに世俗っていうのはな、世の中の風習とか、世の中、世間の普通の人っていう意味だ。それと、誰もツッコまないから流したが、正格というのは、規格に正しくかなっている事だ」
「先読みするとは……お主やるな」
　なんだ、それは……。
「だがな、それは声に出せば同じやから、あえてツッコまんかったんや」
「まあ、文字で著さないとわからないけどな」

「おい、お前ら！」
「なんや」
　なんなんだよ。俺は怠そうに高遠を見た。うわっ、なんだかご立腹だ。
「お前らな、なにを文学的な話をしてるんだよ。おれがせっかくいわゆるＹ談というものをしようと目論んでいたというのに……。どうして、そんなくそ真面目な話をしとーねん」
「って、どうしてその言葉を無理矢理使おうとしとんねん」
「お前に対抗しとーねん。悪いかっ」
「悪いわっ」
　……ったく。どうしてこうなるのかね……。
　俺はため息を吐くしかなかった。
　そんなこんなで、とりあえずそこでセーブして、二人は帰っていった。
　ったく……。もうすぐ新学期だってのに。それに、今年は受験だしな……色々とあるはずなのに……どうして俺たちはこうものんびりなのかね……。
　窓の外は茜色に染まっていた。

★　★　★

　翌日は（いや、〝も〟という方が正しい）特にする事がない。今日は高遠たちも来ないし、小学生の頃からお世話になっている椎崎夫妻も今日は用事があるとかで会えない。まあ、しょっちゅう行くのも気が引ける。向こうは俺を本当の弟のように可愛がってくれるから、こんな俺を邪険に扱う母親と一緒にいるよりはマシだ。でも、今日はその最後の楽園とも云える椎崎夫妻と会えないのでは絶望的だ。
　ホント、今日はどうしよう……。
　受験勉強でもするのが当然なのだろうが、そんな気分じゃない。
　そう思いながらも机の前に座る。
　なにしようかな……。
　そんな時、ふとある紙が視界に入った。それは、映画のペアチケットだった。
「そういや、こんなもん貰ったっけ」
　それを手に取ってしげしげと見る。
　それは、話題になったアクション映画のものだ。アクション映画と云っても、恋愛の要素が強いらしいのだが。
『天国のＸ』というのが邦題だ。原題は知らない。
「まだ上映してるのかな……」
　そう思って、インターネットに接続して、よく行っている映画館のＨＰを開く。
「まだやってるのか……」
　上映している事を確認して映画館に向かう。
　ペアチケットなのでペアが望ましいのだろうが、この際仕方ないだろう。ペアチケットはやは

り同時に利用して欲しいらしく、以前にペアチケットを貰った時は高遠と分けて別の日に観に行った。その時に、一緒に使って下さい、みたいな事を言われた記憶がある。
　その記憶が甦って億劫になるが、別に構わないだろう。
　そんな事を考えながら、映画館の最寄りの駅に向かう。
　この映画館は駅から離れたショッピングモールの中にある。なので、そこまでの無料送迎バスが出ている。
　俺が着くと、ちょうど発車時刻だったので慌てて乗る。
　朝早く、しかも平日とあって人は少ない。俺の他に四、五人くらいだ。
　人の少ないバスに揺られながら、俺は久しぶりの映画館に胸躍らせていた。
　ここ最近は機会がなくてなかなか行けなかった。窓の外の景色を眺めながら、ふと考える。
「だいぶたまったな……」
　色々と公開作品がたまってしまっている。
　あやうく上映期間を過ぎてしまう作品もある始末だ。ったく、やってられない。
　でもまあ、観れるのだから結果オーライってヤツだろう。
　観に行く時は、まとめてできるだけ連続で観る事にしている。まあ、俗に〝階段〟と言われているらしい。せっかく行くのだから、まとめて観る方が面倒でなくていい。
　それ故に三作品を観賞して七時間を越える事もしばしばだが、それはそれで楽しかったりもする。ある意味、快感だ。
　今回はこの一本だけだが。
　そんな俺がよく行くのは、少し遠いが《C^IELARKO KINEJO》という名前の映画館だ。日本語に直せば……虹映画館となる。まあ、直訳ではあるが。
　この映画館は、その名の通りスクリーンが多い。
　八つのスクリーンと、それとは別にプレミアスクリーンと呼ばれるスクリーンがある。ここは普通のスクリーンと違って、広々としてゆったりとしたリクライニングできる椅子で観る事ができる。収容人数はそれほど多くはないが、それがまたよかったりもする。それだけの設備なのでそれ相応の値段であるが……時々、通常料金で観る事ができる。お得だ。
　もちろん、通常のスクリーンは相当数の人数を収容できる。
　まあ、これだけのスクリーン数なので、様々な作品を上映している。なので、俺のように階段で観る人間にしてみれば天国だ。
　いちいち別の劇場に行かなければならない映画館とは違って、ちょっとした移動ですむ。
　そうそう、この映画館は他と違ういいところがある。俺はこのサービスがあるからここに来ると言っても過言ではないだろう。
　そのサービスはポイントサービスだ。作品の上映時間がポイントとなってそのポイントに応じて様々なサービスがある。
　ポップコーンや飲み物と交換できたり、映画グッズや劇場オリジナルグッズと交換できたりもする。他では手に入らないようなプレミアムグッズがあったりもする。
　ここまではどこにでもあるポイントサービスなのだが、その他に、大量のポイントを必要とす

るが、上映リクエストなんてサービスがある。これは、過去の作品をリクエストすれば決まった枠に上映してもらえる。もちろん、一般の客も料金を払えば観る事ができる。これは、ここオリジナルだ。
　あとは金額分のポイントで映画を観る事ができたりと様々だ。
　まあ、他の劇場でもポイントサービスは実施している劇場はあるが、ここはそれ以外にも嬉しいサービスがある。こっちが本命かもしれない。
　それは、映画の上映終了時刻が表記されているのだ。もちろん、他の劇場でも表記されている場合がある。しかし、それは所詮は五分単位。それでは適当すぎる。しかし、ここは一分単位なのだ。そう、きっかりとしている。
　五分単位だと、上映終了と同時に別のスクリーンで上映が始まる際、わずかにずれ込んでしまう可能性がある。トレーラーが観れない場合がある。だが、一分単位だとそれが少なくてすむ。こんなサービスはここだけだろう。俺のような観方をする人間からすればありがたい。
　噂によれば、この劇場が出来て一年ほどが経った頃、わがままな客がわがままをほざいて、劇場がそれに応えた……という事らしい。まあ、そのようなわがままな客のわがままにも丁寧に応える態度が好きだ。
　ちなみに、今日のこのペアチケットはそのわがままな客に貰ったものだ。この話は、そのわがままな客が自慢気に語っていたのだ。自分が映画館のサービスを変えた、と誇らしげに語ってくれた。別に、こっちはなにも訊いていないのに。
　それにしても、わざわざこのような手間を掛けるというのは、サービス業の鑑ではないだろうか。
　系列では実施していない独自のスタイルだったようなのだが、他の系列も次第にこれを見習うようになっていった。それは他の劇場でも採用するようになってきた。細やかなサービスの先駆けであるこの劇場で観る事は、ちょっとした誇りだ。
　それから程なくして、上映終了予定を二週間ほど前から告知するようになった。これで、いきなり今週で終わりとか焦らなくてもすむ。
　本当に細かい事だとは思うが、そういう事が客としては有り難い。
　そんなサービスを実施しているからだろうか、駅から遠いという不利な立地条件であるにもかかわらず客足は増すばかりだ。平日でもそれなりの人が観に来ている。休日ともなれば行列は必至だ。なので、絶対に休日には行かない事にしている。
　そんな事をしているから、最近はなかなか来れなかったのだが……。だいたい、学生が休日以外に映画を観るなんて、しかも受験生がそんな事あまりしない。
　そんな事を考えている間に映画館に到着した。
　映画館の中にはいると、大きく引き延ばされた上映スケジュールがある。その横には、今週から上映の作品と、今週で終了の作品が書かれている。
　その今週で終了の作品の中に、この『天国のＸ』があった。しかも、金曜日だったので、本当に最後だった。
「危うく無駄にしてしまうところだった……」

　もしこのチケットを無駄にしてしまうと、あとでなにを言われるかわかったものじゃない。助かった……。心底安堵していた。
　それからチケットカウンターに向かう。平日の朝なので人が少ない。カウンターにも二人ほどしかいない。
「『天国のＸ』学生一枚」
　チケットカウンターで俺と同じくらいの女の子がチケットを買っていた。
　へぇ〜、あの子も観るんだ。
　そう思った瞬間、身体が勝手に動いていた。それは、その子が出した生徒手帳に見覚えがあったからだ。それは、俺と同じ汐嶺学園のものだった。
「すいません。ちょっとすいません」
　俺は慌ててその子の所に行くと、例のペアチケットを出していた。

「すいません。これでお願いします」
　突然の俺の行動にカウンターの人は驚いたようだったが、向こうは特に気にしていないらしく、普通に処理してくれた。
　だが、女の子の方はそうはいかない。目をパチクリとさせていた。状況を処理しようとするのだが、上手くいかないという事が手に取るようにわかる。
「えっと、あとこれ」
　そう言って、マイレージカードを出す。これを出さないとポイントが貯まらない。
「ご希望の席はございますか？」
　この映画館は全席指定だ。なので、上映時間ギリギリでもチケットさえ先に買っていればいい席で観れるというわけだ。だが、俺は別段そんなにこだわらない。観れればどこでもいい。それは、あの人の考えでもあるのだが。
「えっと……」
　チラリと隣の女の子を見るが、どうもそんな声は聞こえていそうもない。
「どこでもいいです」
　と、そう言っておく。そう言えば、真ん中から観やすい席を選んでくれる。
　まあ、チケットカウンターの人によっては、前の方中心だったり、後ろの方中心だったり……と、若干違う。
　でもまあ、そんな事気にしないし。
「それでは、真ん中の方の席をお取りしておきますね」
　そう言って、パソコン画面に入力すると、チケットが出てくる。
　そして、マイレージカードにポイントを入れる。
　そういえば、あの人はよく通っていてカウンターの人に覚えられていたらしい。人がいない時は、少し雑談なんかもしたそうだ。
　年間一〇〇本を目標にしていた年があったそうで、その年はなんとか目標を達成したそうだ。
「では、地下の３番スクリーンになります」
　そう言って、チケットとマイレージカードを渡される。
「はい」
　そう言って受け取ると、茫然としたままの女の子を連れて地下へのエスカレーターに向かう。
　その途中にパンフレットやグッズ、前売り券を売っている売店があるのだが、まだ開いていない。
　そこを通り過ぎて、エスカレーターで下に降りる。
「あ、あの……」
　女の子が口を開いた。
「なに？」
「あの……ペアチケット……」

「ああ、あれ。別になんでもないって」
「でも、誰かと一緒に……」
　地下に着いた。エスカレーターを降りる。
「そんな心配しなくていいよ。どうせ、相手なんていないんだし」
「そ、そうなんですか？」
　女の子は驚いた顔をした。
「そうそう、名前まだ言ってなかったね。俺は室田孝志。君と同じ汐嶺学園の新三年」
　そう言いながら生徒手帳を見せる。
「あ、あたしは愛藤菜々です。えっと……同じで、新三年です」
　そう言って、彼女も生徒手帳を俺に見せる。
　へぇ〜……愛藤さんって言うのか……。同じ学年なんて偶然だな。映画好きのあの人なら絶対〝Serendipity〟とか言うんだろうな。
「同じ学年だったんだ。じゃあ、知ってると思うけどさ、日本史の吉田先生。このチケットは吉田先生に貰ったものなんだ」
　俺はチケットの経緯を説明する事にした。でないと、愛藤さんは納得して映画を観てくれないかもしれないと感じたからだ。
「吉田先生ですか、知ってます。あの、変わった授業をする……」
「まあ、変わってるっていうか、授業っていうのかって授業だけどね。授業前に必ず常識、コモンセンスに関して語るしさ」
　それを言うと、愛藤さんは笑みを浮かべた。
「でも、あたしは好きです、ああいう授業」
「まあ、嫌いじゃないよ、俺も。っていうか、先生の中では一番親しいからね。非公式映画研究会の顧問だし」
「なんですか、それ？」
　愛藤さんは興味津々の目で訊いてきた。まあ、当然か。
「非公式映画研究会ってのはさ、その名の通り非公式の映画研究会なわけ」
「ふふっ」
　そんな当たり前な莫迦な事を言うと、愛藤さんは吹き出して笑った。
「吉田先生ってさ、映画好きらしいんだ。好きっていうか、習慣ってくらいに観ていた時期があったらしいんだ。その週に上映が始まるものは九割九分観ていたそうなんだ。まあ、全部じゃないのは、面白くなさそうってのがあるからみたいだけど」
　あっ……つい語ってしまった。やばいと思って愛藤さんを見ると、じっとこっちを見て聞いてくれている。
「ごめん、つい語っちゃって」
「ううん、室田君も好きなんですね、映画」
「……まあね。短い時間の中の完結したストーリーっていうのかな、短い中にその登場人物の人生が詰まってるじゃない。それを体感できるっていうか……数時間の間に一人の人物の人生を自

分のものとして感じられるっていうのか……なんだか上手く言えないんだけどさ……」
「ううん、わかる気がします。あたしはたまにしか観ませんけど、それでも楽しいですから。家でＤＶＤを観るのとは全然違って」
「そうそう。なんていうか、この劇場の雰囲気がまたいいんだ。それに、家だとどうしてもだれてしまって、途中でテレビの前を離れたりして、駄目なんだよね」
「それもありますね。やっぱり、映画は話題になっている頃が一番楽しめますし」
　愛藤さんって、結構同じ考えなのかもしれないな。わかっているっていうか、今まで話した事もなかったけど親しみやすい。
「ねえ、愛藤さん」
「なんですか？」
「新学期になったらさ、非公式映画研究会に来ない？　愛藤さんなら大歓迎だからさ。きっと、吉田先生も喜ぶと思うよ。なんたって、俺と先生の二人きりだから……」
「……」
　沈黙。やっぱり、突然ってのはまずかったよな……。いくら同じ学園だからって、今まで話した事もない、いわば初対面なわけだし……。
「……そうですね。暇な時だけなら……いいですか？」
　……。意外な答えだった。
「もちろん。大歓迎だって」
　嘘みたいな話だった。今まで淋しく先生と語り合っていただけだったから、なんだか華が咲いたような感じだ。今までの雰囲気も嫌いじゃなかったけど、やっぱり一人でも多くと語りたい。まあ、オタクの意見と言われれば否定はできないけど。
「そういえば、これ観たいな……」
　と、通路の飾られている近日上映作品のポスターが目に飛び込んできた。
「『大空の下で……』ですね。実はあたしも気にはなってます」
　この『大空の下で……』（邦画）は、ジャンルでいえば青春ものだ。学校生活の中で、本当に大切なものを見つける、という……どう考えても青春群像ものだ。
「そうなんだ。……でも、観に来れるかわからないな……」
「そうですね」
　と、俺たちは頷き合う。
　もちろん休日に来ればいいのだろうけど、俺はやっぱりイヤだ。
　かといって、平日は観れるかわからない。
　なにしろこの映画、どちらかといえば単館作品だ。
　派手なアクションシーンがあるわけじゃないし。
　それに、大人が観に来るとも思えない。
　キャストで客を呼ぼうとしている節もないし、本当に作品で勝負していると思う。
　だからこそ観たいのだ。
　でも、そう長い期間上映しているとも思えないし、観に行ける時間に上映しているかもあや

しい。
　残念だけど、諦めるしかないのかな……。
　もし運が良ければ観れるだろうけど。
「そろそろ始まるから、劇場に入りませんか？」
　そんな事を考えていると声を掛けられた。
　そういえば、チケットを買った時には既に上映開始時間の十分前くらいだったような気がする。
　早くしないとトレーラーが始まってしまう。
　それに、トレーラーの前の劇場オリジナルＣＭも気になる。
「あぁ、そうだね」
　と、その前にトイレに行く。まあ、映画を観る前の準備というかエチケット。でないと、上映中に行きたくなってしまうからね。
　そして、俺たちは劇場に入る。
「いらっしゃいませ、チケットよろしいですか。……Ｈ列になります」
　係の人が半券を切る。
「再入場の際は、半券をご提示下さい」
　俺は頷いて中に入る。短い通路がスクリーンに向かってある。そして客席を見ると、
「……誰もいない」
「誰もいませんね」
　彼女も同じ感想らしい。確認のため腕時計を見るが上映開始二分前だ。
「このまま誰も来なかったりしたら貸し切りだよな」
　と、呟く。そして、チケットに書かれている席に座る。
　昔、違う小さな映画館だが、貸し切り状態という事はあった。吉田先生も同様のようで、その話で盛り上がった事もある。多くの人は経験していないだろうが、あれは一種独特の趣がある。その世界を独占しているのだから。
「こんな事ってあるんですね」
　彼女はどうも馴染めないようだ。まあ、こんな状況なんて滅多にあるわけないから、経験がないのも理解できるし、戸惑う気持ちもわからなくはない。
「……確かに珍しいね」
「室田君は経験あるんですか？」
　その言葉になにかを感じたのか、愛藤さんが訊いてきた。
「まあ、ね。一回だけだけど、貸し切り状態っていうのがあった」
「その時は、一人だったんですか？」
　なにかを聞き出すかのような目。
「まあ。誰かと映画に来るなんてないからね」
　事実だった。階段なんて観方をするので、誰かを誘うなんてできるはずもなかった。だから、誰かと観るなんて初めてに近い。それに、今回は高遠や吉田先生でもなく愛藤さんなのだから。

女の子と映画なんて……まるでデートみたいじゃないか。
　急に意識してしまう。
　莫迦だな、俺。今まで話した事もないのに。初対面の相手にこんな事考えるなんて、莫迦丸出しじゃないか。
　とか、そんな事を考えている間に劇場の照明が落ちた。まだ完全に落ちてはいない。
　大音量と共に飲料会社のＣＭが始まる。ＴＶでは観ないちょっと凝った趣向のＣＭがあったりして面白い。それに、同じＣＭでもＴＶとスクリーンでは全然違うものに感じる。
　そのＣＭが終わると、トレーラーが始まる。十分くらいの間に五本くらいの予告。
　このトレーラーだが、上映される映画を観る客層に合わせて変えられているので、トレーラーを観ればこれから上映される映画がどのような感じなのか推測する事もできる。恋愛ものならトレーラーもこれから上映予定のそういうものが含まれる。サスペンスならサスペンス、ホラーならホラー、邦画なら邦画……そんな感じで。例外として、全ての客層に向けての場合は、あらゆるものが登場するので豪華な感じがする。もっと例外を云えば、注目作や話題作はこれらとは関係なく登場する。
　今回のトレーラーは、アクション映画の予告とラブロマンスの予告が二本、そしてＧＷに公開される注目の大作、そして分類がよくわからない映画……そんな内容だった。
　これから、ＧＷに上映される映画の予告が増える事だろう。ちなみに、このＧＷという言葉は映画業界の用語らしい。この時期に客が増えるのでそういうのだそうだ。それがいつの間にか意味を変え、普通の世界に浸透していった。……と、これは吉田先生から聞いた話。
　照明が完全に落ちる。作品の上映が始まった。
　音楽だけの風景。誰も喋らない。声のない風景。
　いつもと同じ。
　だけど、いつもと違う。
　隣には女の子がいる。さっき知り合ったばかりの女の子。それだけで全然違うんだから現金なものだ。
　結局、あれから誰も入ってこなかった。これで俺たち二人の貸し切り状態というわけだ。
　そういえば、あの時俺がペアチケットを出さなければ少し変わっていたんだな。
　劇場には同じ二人でも、こうして並んで座っている事はなかった。同じ列かもしれないし、別の列だったかもしれない。彼女の前だったかもしれないし、後ろだったのかもしれない。斜め前だったのかも……。
　いいや、そんな事はこの際どうでもいい。今は映画を楽しもう。俺はそのためにここに来たんだから。
　だけど、どうしても彼女の事を考えてしまって映画に集中できなかった。……いや、集中はしていたが、どこかで彼女の事を考えていた。あれ？　これってやっぱり集中してなかったんだよな。
　ストーリーをあまり覚えていない事からするに、やっぱり集中できていなかったんだな。まあ、仕方ないとしよう。

　彼女はスタッフロールが終わるまで立たなかった。普通ならここで帰ってしまう人が多い。俺が立たないからだろうか？
　スタッフロールが終わって席を立つ。訊いてみよう。
「ねえ、スタッフロールが終わるまで席を立たなかったけど、俺がいたから？」
　突然の質問に驚いたようで、
「……え？　そ、そんな事ないですよ。いつもそうですから。もしかして、室田君はあたしが立たないから……ごめんなさい」
「あぁ、違うんだ。俺は最後まで観る人間だからさ」
「そ、そうなんですか……。よかった。あたしのせいで不快な思いをさせてしまったんじゃないかって……」
「そんな事ないって。やっぱりさ、スタッフロールが終わるまで観て初めて映画を観ましたって言えると思うんだよね。それが終わる前に席を立つなんて、この映画は面白くもなんともありませんでしたって云うようなもんだって……これは吉田先生の受け売り」
「室田君って、吉田先生が好きなんですね」
「好きっていうか、ただウマが合うだけだって。同じ空気を持っているっていうか……そんな感じ」
「そうですよね。あれが終わる前に席を立つなんて、失礼ですもんね。それに、あれが終わってからまだ続くものもありますし」
「そうそう。特に邦画に多いんだよね」
「そうです。出て行っちゃった人たちってすごく損してますよね」
　なんだか、すごく話が合うな……。
　それからしばらくこれから上映される映画について話をした。
　特に話題になったのが『桜並木の街』というちょっと大人の恋愛ものだった。
　そういえば、その映画の主題歌って、あの人の奥さんが手掛けてたっけ。ふと、そんな事が頭をよぎった。
　そのあと、俺たちは別れた。

　そして、始業式ーー
　新学期の億劫さで、春休みの事は忘れかけていた。それは舞い散る桜のようにハラハラと心から消えていく。
　繰り返していく季節。だけど、なにかが違う季節。
　今年は受験生って事だし、なにかと束縛されそうだ。
　面倒な通過儀礼だな。
　こういう日は、椎崎さんの家に行こうかな……。よし、そうしよう。
　なにかがある時は椎崎さんの家に行く事にしている。俺の心のオアシスだ。あぁ……放課後が楽しみだ……とか思っていると、
「よう、孝志」
　莫迦な声がした。
「おはよう、室田君」
「ああ、おはよう、樹梨」
　俺は同じクラスの二葉樹梨にだけ挨拶する。
　二人とはずっと同じクラスだった。
　入学した時に仲良くなって……。まあ、高遠と樹梨はそれ以前からみたいだけど。
　とにかく、俺たちはなにかと一緒にいる事が多い。どうも周囲からはトリオという事になっているらしい。
　……という事は、俺も高遠と同類と見られているって事なのか？
　それは勘弁して欲しい。
　これは一種の屈辱だ。
「今日もいい天気ね」
「そうだな、こういう日には〝お兄ちゃん大好き〟とか妹が起こしてくれて……」
　ーースパン！
　スリッパが炸裂する。
「ったく、あんたはどうしてそんな事ばっかりなの」
「痛いって。新学年の初日からスリッパはないだろ、スリッパは」
　高遠は頭を押さえながら樹梨に抗議する。しかし、当然ながら樹梨は聞く耳持たない。
「……相変わらずだな」
　俺は失笑する。
　それにしても相変わらず気になるが、樹梨はスリッパをどこから取り出しているんだろう？　気が付けば高遠の頭を叩いている。
「とにかく、この莫迦が進級できた事が奇跡だから赦してあげるけど……」
「って、もう叩いたあとだろうが」
「それは仕方ない事だから」

「仕方なくない」
　……ったく、変わらないな、この二人は。
「悪い。痴話喧嘩ならあとで頼む」
「痴話喧嘩なんかしてないぞ」
「痴話喧嘩なんかしてないって」
　同時に言われた。
「息ピッタリだな」
　そう言い残すと、俺はクラス分け表が貼られている新しい学年の廊下目指して走った。ちなみに、下駄箱なんかは入学当初から変わらない。
「おい、孝志！」
「ちょっと、室田君！」
　後ろから声がするが振り返らず走った。
　ったく……朝から無駄な体力を使ってしまった。
「よぅ、孝志」
「おっす、侑浩」
「孝志、今年もよろしくな……と言いたいんやけど、残念ながら違うクラスになってしまったみたいやさかい。ちなみに、高遠と樹梨はお前と同じクラスや。まあ、今年も頑張れや」
　……。
「なあ、侑浩」
「なんや？」
「俺の時間を返せ。二十分とかは言わない。一分でいい、返せ」
「なに言ってん？」
「俺の楽しみは？」
「楽しみ？」
「そうだ、楽しみだ」
　そう、新学年のクラス替えの楽しみと云えば、〝新しいクラスはどうかな……？〟とか、〝誰と一緒かな……？〟とか、〝新しい担任は誰かな……？〟とか、なぁ？
　そのうちの一つを奪ったこいつをゆる赦せない。
「ああ、もしかして〝誰と一緒かな……？〟とか、ちょっと長くなるから割愛させてもらうけど、そんな事考えてたんとちゃうんか？」
「そうだ」
「そりゃ悪かったな。まあ赦してやってくれ。オレかて悪気があったわけやないし。悪気があるならもっとねちっこくイヤらしく言うさかい」
　なんにせよ、俺の時間は戻ってこないのか……。本当に癒されたい。
「そうや、ビックリやけど、隣のクラスにあのプリンセスと称されるマドンナがおったで」
　……誰の事だ？　あいにく、俺はこのテに疎い。っていうか、今時な……。
「おい、孝志〜ぃ！」

　その時、遠くから高遠と樹梨がやってきた。
「よお、お二人さん。どうやら、今年も同じクラスのようだ」
「そうなんだ……って、どうして言うのよ」
「そうだぞ、新学年の楽しみを奪う権利がお前にあるのか」
　やっぱりそうだよな。奪う権利なんてないよな。
「悪いな。その気持ちはよくわかる。心に染みてよくわかる。何故なら、俺も今し方こいつにやられたのだ」
　そう言って、侑浩を指す。
「いやぁ、やっちまったみたいやな」
　侑浩は照れ臭そうに頭を掻く。
「で、その報復としておれたちにも同じ事を……孝志、不幸の手紙は己の所で止めてこそ正義。それをばらまくなぞ、言語道断だ」
「そうそう。不幸は自分だけで他のみんなには幸せになってもらおうと願うのが人じゃないの？
　それが善意ってものでしょ？」
　……やっぱり、意見が合ってるじゃん、お前ら。
「言いたい事はよくわかる。だが、俺だって……」
「悪人め」
「悪人ね」
　二人して俺を責める。本当に俺が悪いのか？　そもそもの根元はこいつだ……と、今までそいつがいた場所には誰もいなかった。
　そして顔を戻すと、息の合った二人の顔がそこにあった。
「ところで悪人よ。今日の放課後なにか予定はあるか？　いや、ないな。あろうはずがない。おれ以外に友のいないお前に用事などあろうはずがない。というわけで、ちょっと付き合ってくれ」
　……勝手な持論で結論だな。全て断定で進行している。
　だが、用事らしい用事がないのも事実。椎崎さんの家に行くのは世間のしがらみから逃れたいというのが一番の理由だ。
　なもんで、別に必ず行かなければというものでもないし……いっか。
「わかった。で、なんだ？　告白なら却下だ。どこに付き合えばいい？」
「そうだな……体育館裏なんてどうだ？」
「……じゃあ、そういう事で」
　スタスタと立ち去る事にした。
「冗談だ」
　高遠に引き止められる。
「それにしても、あんたはいつの時代の人間？」
　冷たいツッコミ。樹梨……きっついよ、それ。
「で、本当のところは？」

「それは、お楽しみだ。まあ、悪い場所ではない。金がないとかいう却下は却下だ。今回はおれが奢っちゃる」
　奢りか……。まあ、金も掛からないようだし、変な場所ではないだろう。
「わかった、放課後だな」
「おう、了承してくれて有り難い。さすが同志だ」
「同志じゃねぇ！」
「莫迦ね」

★　★　★

　ってなわけで、放課後になったわけだが……。
「なあ、どこに行くんだ？」
　いつもとは違う方向。そういえば、こっち側ってのはあまり来た事がないな。俺の通学路とは逆だから、当然といえば当然か。
「まあ、黙っておれに付いて来い」
　ズビシと親指を立てて言う。
　なあ、そんなの男の俺に言ってもな……。それに……、
「で、やっぱりあんたっていつの時代の人間？」
　ほら、樹梨にツッコまれた。
「だーかーらー、どうしてお前まで一緒にいるんだ？」
「ほら、奢ってくれるんでしょ？　そんな機会、わざわざ逃す手はないじゃない」
「誰がお前に奢るなんて言った？　孝志は無理矢理連れて行くから仕方ないかとは思ったが……」
「そう。そうなんだ。ふぅん。へぇ〜」
「わかったよ、奢るよ。はい、奢らさせていただきます。よろしいでしょうか、樹梨様」
「それでよし」
　……高遠、樹梨に弱みでも握られてるのか？
　なんにせよ俺には関係ないか。それに、樹梨がいれば高遠の暴走も大丈夫だろう。
「で、どこに行くの？　こっちであんたが行きそうな店ってあったっけ？」
「最近見つけたんだ。ほれ、そろそろ見えてきたぞ」
　ん？　あれって、なんだ？
　そこには、ちょっとレトロな外観の店があった。まあ、こういう外観の店といえば、アンティークショップとか、喫茶店くらいか？
「あれって、シフォンじゃない」
　樹梨が意外そうな顔で言った。
　シフォン？　お菓子の名前でそんなのあったような。ケーキだっけ？　それがどうした？
「そうだ、喫茶店シフォン。ここが今日の目的地だ」

　へぇ～喫茶店ね。あんまり入った事ないな。
「あんたにしてはなかなかじゃない。ここって隠れた名店なんだから」
　そうなんだ。じゃあ、高遠もどこかでそれを耳にして……。って、それはいいとして、俺と来た意味がわからない。
「なあ、高遠。どうして喫茶店に俺を連れてくる？」
「……まあ、一人じゃ淋しいだろ？　だからなんだが……」
「で、そこまでしてどうしてここに来る必要がある？」
「まあ、細かい事は気にするな」
　そう言いつつ、高遠は店に入っていく。樹梨は樹梨で、嬉しいらしく笑顔で続く。まあ、俺も奢りだから構わないんだけど。たまには喫茶店でくつろぐってのもいいかもな。ちょっとした気分転換ってとこか。
　なんの気なしに店の中に入る。
「いらっしゃいませ」
　可愛らしい声に迎えられた。
　あれ……？　この声には聞き覚えが……。
　声の主を捜す。聞き覚えがあるという事は、知った顔であるという事。さあ、誰だ？　声の主は誰なんだ？
　店内を見回す。へぇ～落ち着いた感じでいいじゃないか。カウンターの向こうにはマスターらしい女性がいる。
　テーブル席にはちらほらと客がいる。
「おい、孝志、こっちだこっち」
「馬鹿、店内で騒ぐんじゃないの」
　大声で俺を呼ぶ高遠を隣に座っている樹梨がたしなめる。
　その二人の脇にはウエイトレスさんがいた。
「いらっしゃいませ」
　さっきの声だ。
「では、ごゆっくり」
　俺が席に着く前に逃げるように去っていった。なんなんだ？　っていうか、注文は？
「どうした、孝志」
「いや……」
　俺はウエイトレスの後ろ姿を眺めていた。
「孝志、視姦はいかんぞ、視姦は。犯罪者にだけはなってくれるな」
　――スパン！
「あいたっ！」
　頭を押さえる高遠。
「あんたは……ほら、室田君も。ちなみに注文なら勝手にしておいたから」
　勝手に注文した？　樹梨がいながらこの様か……。普通、勝手に人の注文をするか？　まあ、

高遠の奢りだし文句を言うのは筋違いか。
「さてと高遠。俺を呼んだ真相はなんだ？」
「だから言っただろ。一人で来るのが淋しかっただけだ。ここでゆったりとした時間を過ごすのが今回の目的だ」
　……マジで？　本当にそれだけが目的だったのか？
　いや、こいつの事だ、そんなはずがない。それだけの理由なはずがない。こいつはもっと裏でなにかを企んでいる奴だ。
「本当に本当か？」
　念のためもう一度訊く。
「本当の本当だ。お前は何度訊けば気が済むんだ？　さっきから何度も言っているだろうが、おれはここに安らぎを求めてきたのだと。そう、ここには安らぎがあるのだ」
　なんだか、さっきと変わってきてないか？　安らぎ……ね。
　その正体はわからないが、純粋に喫茶店でくつろごうと考えていたわけではない事がこれでハッキリした。
　さあ、正体はなにかな……。
　店内を見回す。しかし、怪しげなものはなにもない。ただの普通の落ち着いた雰囲気の喫茶店だ。
　だとすれば、奇抜なメニューでもあるのだろうか？　きっとそうに違いない。
〝カンガルーの串焼き〟
　とか、
〝鯨の刺身〟
　とか……はっ、もしかして〝ケバブ〟があったりするのか？　そうだ、喫茶店ならなきにしもあらずだ。
　ケバブの中でもポピュラーな〝ドネルケバブ〟なのか？
　そうだ、高遠の思考からするに、最も考えられるものだ。
九年前に話題になったゲームにちょっとだけ名前が登場しただけなのに妙に話題になった、あれがここにあるのか。最近、高遠が家に来てやっていたから、俺にとってはリアルタイムだ。なおさら気になる。
「どうした、孝志。にやけてるぞ」
　にやけてしまってるか。
　高遠の考えを先読みできた事がなんだか嬉しい。
「そうかそうか、俺を驚かせようと思って……」
　含みのある笑みで言う。
「なんの話だ？」
「まあ、もう隠さなくても……」
「お待たせしました」
　そこにウエイトレスがやってくる。

「待ってました……って、あれ？」
　俺はウエイトレスの顔を見て驚いた。

「ち、愛藤さん……？」
　そこにいたのは、春休みに映画館で会った愛藤菜々さんだった。
　って事は、さっきの声の主は……ビックリだ。
　と、目の前を見るとにやけただらしない顔の高遠がいる。
「……やっぱり、こういう目的か……」
　その横でため息を吐く樹梨。
　は……？　どういう事だ？　え……？　えっ……？
「こ、こんにちは、室田君」
　照れながら挨拶する愛藤さん。
「あ、うん。こんにちは」
　突然の事にしどろもどろになってしまう。なんとなく、あの時の光景が思い出されて照れ臭い。
「なにぃっ？　おい、孝志、お前は彼女と知り合いなのか？　えぇ？　どうなんだ、おい」
　テーブルに身を乗り出し俺のむなぐら胸倉を掴む。
　ーースパン！
「莫迦。テーブルに乗らないの」
　子どもをしか叱りつける母親のようだな。なんだか微笑ましい光景だな、胸倉さえ掴まれていなければ。
「……悪い」
　手を放して席に座り直す高遠。
「で、どうなんだ？」
　どうって言われてもな……。
「じゃ、じゃあ、ごゆっくりどうぞ」
　そう言うと、そそくさとその場を退散する愛藤さん。まあ、彼女は仕事中なわけだし、引き止められないよな。だが、なんとなく顔が赤かったような気がしたが、気のせいだろうか？
「で、どうなんだ？」
　答えない俺を責めるような目で見ながらもう一度訊かれる。
「もう、どうでもいいじゃないの。少なくともあんたには関係ないじゃない」
「いや、関係あるね。そう、学園の男子生徒全てに関係ある」
　……さっぱりわからん。
「春休みに偶然会ったんだよ、映画館で。それだけだ」
「本当にそれだけか？」
「そうだ」
　それ以外になにがあるってんだ？
「だが、それにしては……どうして彼女はお前の名前を知っている」

「……そ、それは……」
　なんだか、正直に説明するのはまずい気がしてきたぞ。
「たまたま生徒手帳を彼女が落としてだな、俺が拾って彼女に渡した、そういう事だ」
　ナイス・フィクション。これなら自然だろ。
「……なるほど、人のいいお前なら考えられなくもないか。その時に名乗るところなんて、お前らしいと云えばお前らしい。そこで名乗らない事が美学なのだと理解していない愚か者にはピッタリだ」
　莫迦にされたのか、俺。まあ、深く追求されるよりはマシか。
「まあ、室田君らしいよね、本当に」
「まあ、な」
　俺は目の前に置かれたオレンジジュースを一口飲んだ。
　……って、今気付いたがオレンジジュースを注文したのか、こいつは。まあ、奢られる身としては文句は言えないか。
　だが、膨らんだ妄想はどうすれないいんだ？
「なあ、高遠。目的はドネルケバブじゃないのか？」
「……はぁ～」
　高遠は大きくため息を吐いた。
「愚かしい、実に愚かしいぞ。おれは情けなくなってくる。ドネルケバブなんぞ、喫茶店にあろうはずが……いや、あったな、確か。そうだ、すっかり目的のために忘れていた。すいません、追加でドネルケバブお願いします」
　カウンターに向かって叫ぶ高遠。恥ずかしいぞ、同席者として。
「素敵な事を思い出させてくれたお前には感謝する」
　両手を握ってブンブンと上下に振る。
「あ、ああ。……なあ、ドネルケバブが目的じゃなかったんなら、なんなんだ？」
「彼女に決まっておろう。彼女のウエイトレス姿を見に来たのだ」
　ーースパン！　スパン！
　連打で決まった。
「ったく……そんな事を仰々しく語るんじゃない」
　頭を押さえる高遠。
「痛いぞ、樹梨。おれは本当の事を述べたまでだ。胸中を隠さず本当の事しか言わないおれをそう無下に叩くのは……」
「うるさい」
「樹梨、せめて台詞は最後まで言わせてくれよ」
「棄却」
　やっぱり、二人って仲いいな。息ピッタリの漫才コンビって感じだ。
　そんな事を考えているとにら睨まれた。もしかして顔に出てた？
「孝志、お前今なにを考えていた？」

「な、なにも……」
「『二人って息がピッタリだ。まさに夫婦漫才を見ているかのようだ』こんなところではないでしょうか？」
　後ろの席から声がした。
「だ、誰だ……」
　慌てて振り返る。そこには、見知らぬ女の子が座っていた。
「図星だったようですね」
「なっ……」
　言葉が出なかった。何故？　何故……心を読んだみたいに……。
「もしかして、心の声を聞く事ができるのか？」
　そうだよ、それ以外に考えられないじゃないか。
「いえ、そんな事はありません。ただ、自分が思った事を述べただけです。きっと同じ様な感想なんだろうと思いまして。事実、同じだったでしょ？」
　そう言って紅茶を飲む。
　その淡々とした喋りに圧倒されてしまった。
「ま、まあな」
　見知らぬ女の子にそう答えた瞬間、
「とぅぁくぅぁすぅぃ」
「むぅ〜ろぉ〜たぁ〜くぅ〜ん」
　ひ、ひぃぃぃっ！
「ご愁傷様」
　見知らぬ女の子が優雅に紅茶を飲みながら呟いた。
　ーーボフッ！
　ーースパン！
　正拳突きとスリッパが俺に炸裂した。
「ぐ、ぐむぅ……がはっ」
　俺はテーブルに突っ伏した。
　……。
　……。
　……。
　……。
　……。
　闇を漂う事幾ばく、我は目をオープンした。
　……いかん、脳に障碍が……。
　頭をブンブンと振る。
　ふぅ、なんとか無事だったみたいだな。よかった。息の合った……、
「『息の合った二人の攻撃に危うく命を落としかけた。だが、無事でよかった。生きているって

素晴らしいな』こんなところでしょうか」
　そう言うと、見知らぬ女の子は精算を済ませて店を出ていった。残されたのは、凄惨な現実だった。

★　★　★

　不思議な女の子と出会い、凄惨な現実から命だけは無事に脱出した俺は、心のオアシスに向かっていた。
　今度こそ椎崎さんの家に行こう。昼過ぎだし、きっといるだろう。っていうか、多分いると思う。
　椎崎誠司さんは俺の命の恩人だ。十年前になるのか、あの人に助けられたのは。
　俺がまだ小学生だった頃、登校中に車に轢かれかけた。その時に助けてくれたのが椎崎さんだ。それから、兄さんのように思って接している。憧れの人だ。
　その事故以来、母親がよそよそしくなったというか、どこか腫れ物を扱うような雰囲気を感じるようになった。そのせいもあってか、当時から椎崎さんの家にお邪魔させてもらう事が多かった。
　椎崎さんが結婚してからも、本当に邪魔だろうに遊びに行っていた。
　お蔭で、俺は兄さんと姉さんが両方できた。
　そして、二人に子どもが生まれると、妹ができたような気分だった。そして、弟も。いや、俺は椎崎さんの弟のようなものだから、姪と甥か。でもやっぱり妹と弟だな。
　そんな家族じゃないのに本物の家族のような関係が心地よかった。
　本物にはない温かさがよかったんだ。
　歩き慣れた住宅街。その中の一件の前で立ち止まる。
　また来てしまったけど……いいよな。例のごと如く、言われそうな気がするが、それはそれでいいもんだ。
　――ピンポーン！
　インターフォンを押す。
『はぁ～い』
　可愛い声がした。唯依ちゃんだな。
「誘拐犯です。椎崎唯依さんを誘拐しに来ました」
　端から聞くと警察に通報されそうな言葉だ。まあ、明らかに冗談だとわかるので誰もそんな事はしないだろうが。
『おとーさん、たかしにーちゃんがきたよ～』
　インターフォン越しにそんな声が聞こえる。
『唯依、今日はなんだ？』
『〝ゆーかいはん〟っていってたよ』
『そうか、じゃあ椎崎唯依捜査官、逮捕してきてくれ。おい、どうせ聞こえてるんだろ。入って

きていいぞ』
　……いつも通りわからない家だ。それにしても、六歳の女の子に捜査官とかわかるのか？　わかるなら、それはそれですごいけどさ。
　とりあえず、入ってきていいと言われたので入る事にする。
「お邪魔します」
「じゃまするならはいってくるな」
　可愛い声がする。唯依ちゃんだ。
「誠司さん、なにを変な言葉教えてるんですか」
　家の奥に向かって大きめの声で言う。
「いいだろ。間違った言葉じゃないだろ？」
　予想通りの返答がきた。
「間違ってますよ。コントじゃないんですから」
「そうか？　まあ、コント生活ってのもいいじゃないか」
　よくないですよ。……という言葉は言わないでおく事にした。
　俺も散々これに付き合ってきてるんだ。いまさらどうこうってのもなしだろ。
　階段を上がって誠司さんの書斎に向かう。
　ドアは開いているが、一応ノックはする。
「それにしても、今日は誘拐犯か。原点に戻った感じだな」
　いきなりのダメ出し。
「そろそろネタが切れてきちゃって……」
「それだけ、家に来てるって事だ。まあ、いいけどな」
　確かに、よくここに来る。自分の家は本当に眠るためだけに帰っているようなものだ。
「それで？　今日も用なしか？」
「……え、ええ。まあ」
「いいけどな。ゆっくりしてけよ」
　そんな事を言いながら、しっかりとキーを叩き続けている。
「ところで、今はなにを書いてるんですか？」
　彼、椎崎誠司さんは作家だ。デビューはライトノベルだったけど、今ではそれよりも評論の方が多い。まあ、評論というよりも、独自の持論を書いているだけのような気もするが。
　それだけでなく、ゲームのシナリオや絵本まで書いているというマルチさには閉口する。
「これか？」
　その言葉を言われて、俺は画面を見た。
「まだ企画段階なんだが、ゲームのシナリオを頼まれてさ。……まあ、それでプロットを書いている……と言いたいんだが、設定を考えている段階だ。どんな話かも決まってないしな。とにかく、キャラクターや世界設定だけでもと思ってな」
「へぇ〜、ゲームですか……」
　そういえば、久しぶりのような気がする。

「ゲームのシナリオって久しぶりですよね？」
「……そうだな。久しぶりだな。……そうだ！　お前の友達にゲームに詳しいヤツがいたよな」
　もしかして、高遠の事だろうか？
「ええ、いるにはいますけど、ヤツは主に美少女ゲームしかしませんし、それ以外は全然ですよ」
　だが、椎崎さんの返答は意外だった。
「それでいいんだよ」
「……へっ？」
「それでいいんだよ。なんたって、これはそのジャンルのものだからな。今度でいいから、その友達を連れてきてくれないか？　是非とも参考になる意見を聞きたいんだ」
「それはいいですけど……アイツは今のゲームよりも十年くらい昔のものばっかりですよ」
「なおさらいいじゃないか。今の世代には新鮮だ。それに、昔のユーザーには懐かしい。そういうのがいいんだよ。昔に流行した作品を彷彿とさせるもの。俺が求めていたのはそういうものなんだ」
　熱いな……。
「というわけで、頼んだぞ」
「は、はい。わかりました」
　俺はその熱意に承諾してしまった。
　それにしても、高遠と椎崎さんの会話って、すごい事になりそうだな……。
　少しだけだが不安がよぎった。
「たかしにーちゃん、あそぼーよー」
　そこに唯依ちゃんがトテトテと歩いてきた。
「そういえば、亜依さんはどうしたんですか？」
「ああ、亜依なら新曲の打ち合わせだとかなんとかで出掛けてる。ついでに誠也は幼稚園だ」
　どうも。俺が訊くであろう事を全部先に答えてくれまして。
「わかりました。じゃあ、しばらく唯依ちゃんと遊んでますね」
「ああ、そうしてくれ」
　それにしても、会話の間中ずっとキーを叩き続けてたのには、さすがだと思う。あんな事、できるものなんだな。
「それと、次に来る時はもうちょっとひねってくれよな」
「わかりましたよ。次は人喰いとかにしましょうか？」
「却下だ」
　即答された。
「こっちのネタがかぶる。やめてくれ」
　ネタがかぶる……？　今日って確か捜査官。……ああ、星環捜査官ね。
「……そういう事ですか」
　呆れてものも言えなかった。まあ、いいけどさ。それを理解した自分がイヤになった。

　それはともかくとして、唯依ちゃんと遊ぶ事になった。
「たかしにーちゃん。はやくはやく」
　俺は袖をクイクイと引かれた。
「わかったから……」
　まあ、イヤじゃないからいいんだけど。
「ねぇ、なにして遊ぶの？」
「えっとね……おにごっこ！」
　って、ダメだろそれは。
「唯依ちゃん、それはお父さんの邪魔になるからやめようね」
　優しく、屈んで目線を合わせて言う。
「ぅぅぅ～っ」
　残念そうに指をくわえられても……どうしたらいいんでしょうか。
「孝志、俺なら別に構わんから、好きに遊ばせてやってくれ」
「でも、いいんですか？」
「俺が言ってるからいいんだ。わかったか？」
「わかりました」
　それを聞いた唯依ちゃんはパァっと表情を明るくして、
「わ～～～い」
　と、両手を挙げて喜んでいた。
「じゃあ、たかしにーちゃんがおにだよ」
　……と、しかも俺が鬼らしい。まあ、いいんだけど。
「じゃあ、じゅう、かぞえてね。ずるっこはダメだよ」
「わかったよ」
　そう答えて、俺はゆっくりと数え始めた。
「いぃ～ち……にぃ～い……さぁ～ん……しぃ～い……ごぉ～お……ろぉ～く……しぃ～ち……はぁ～ち……きゅぅ～う……じゅぅ～う。さてと、唯依ちゃんを捕まえに行きますか」
　と言った瞬間だった。
「つかまえた」
　ハシッ……と誰かが足にしがみついてきた。誰が……と思い足元を見ると、
「……ゆ、唯依ちゃん」
　それは紛れもなく鬼ごっこをしている相手の椎崎唯依ちゃんだった。
「ねぇ、唯依ちゃん。なにしてるの？」
「おにをつかまえたの」
　屈託のない笑顔でそう言われると、俺にはどうする事もできない。
　……やってくれましたね、椎崎さん。あなたは娘を最強に育て上げました。さすがです。
　このようにウルウルとした健気で無邪気な瞳で見つめられて、俺はなにもできなかった。
　この場合、どうしたらいいんでしょう。

「孝志、どうかしたのか？」
「誠司さん、唯依ちゃんをどう育てたんですか？」
「ああ、抵抗できないだろ？　お前の負けだ」
　やっぱりワザとか……。ある意味で尊敬の対象です。
「唯依、そろそろ放してあげなさい」
「うん、わかった」
　これまた屈託のない笑顔で手を放す。
「誠司さん。完全に俺の負けです」
　まさに完膚無きまでに負かされてしまった。もう……。
　俺はしばらく唯依ちゃんと遊んでから椎崎家をあとにした。

★　★　★

　それにしても、新しいクラスというのはどうも馴染めない。当然といえば当然なのだが、どうも居心地が悪い。どこにも自分の居場所がないような気がする。かといって、新しい居場所を作ろうとは思えない。まあ、自然とそのうちなんとかなるだろう、という楽観的な考えでいる事がせいぜいだろうな。
　そんな事を考えながら授業が終わるのを待っていた。
　早く終わるといいな……退屈な授業は。
　――キーンコーン！　キーンコーン！　キーン……！
　そんな風に思っていると、ちょうど終業のチャイムが鳴った。
「ふぁぁぁ～」
　ようやく解放された喜びから大きなあくびをした。
　さてと、今日はもう帰ろうか。うん、それがいい。
　そう思いついたが吉日、俺はさっさと帰る用意を始めた。
　今日は椎崎さんの家に行くのはやめておこう。先日の口惜しさが甦る。あそこまで完膚無きまでにされるとは……全く椎崎さんの唯依ちゃんへの教育には参った。
　だから、今度行く時はきちんと心の準備をしてからにするとしよう。まあ、それまでにさらに強化されていなければ、なんとか対応できるくらいには。
　そう固く心に決めて帰ろうとした時、
「孝志」
　高遠に呼び止められた。
「なんだよ」
　怪訝そうに答える。本当にそんな気分なんだから仕方ない。
「そんなに面倒くさそうに言うなって。別にお前を取って喰おうってわけじゃなし。あのさ、今日、お前の家に行っても大丈夫か？」
「どうして、また」

「あのゲームを続きをするためにさ」
「わかった。それに、お前にも話があったし、あとで家に来てくれ」
「了解」
　さて、帰ろうか……と、
「室田君」
　今度は樹梨に呼び止められた。
「なんだ？」
　俺は少し不機嫌な顔で振り向いてしまった。まあ、完全に調子を狂わされてしまったんだ、赦してもらおう。
「なに、その変な顔は。……って、別にどうでもいいのよ、そんな事は。あのさ、さっきあの喫茶店で会った女の子が室田君にって、これ」
　そう言って渡されたのは小さなピンク色の封筒だった。
「な、なんだ、これ？」
　さっぱりわからなかった。
　だいたい、あの女の子に会ったのはあの時が初めてのはずだ。その女の子にこんなものを渡されるとは、どういう事だ？　確かに、女の子というものは手紙を書くのが好きだという。しかし、どう考えても宛先が俺であるというのが納得できない。
「さあ？　なんでしょうね」
　樹梨はニヤニヤしながら去っていった。
　さて、取り残された俺はどうすればいいのだろうか。
　選択肢は一つ。
　開封して中を読む事。
　しかし、こんな教室で読んでもいいのか？　なんとなく、恋愛には否定的な俺でもわかってきた。
　女の子から渡されるピンク色の封筒……これはいわゆる恋文ってやつか？
　その結論に達した瞬間、顔が熱くなるのがわかった。きっと、真っ赤な顔をしているに違いない。
　俺は慌てて教室を出た。そして、普段は誰も通らない廊下の隅っこで開封した。
〝今日の放課後、体育館の裏で待っています。〟
「……」
　なんだ、これ。
　この一文しかなかった。差出人の名前すらない。
　しかも、この文面はどう考えても昔の番長とかが果たし合いなんかで呼び出すときのものじゃないか？
　ゲームなんかじゃきっと、行くか行かないの選択肢が出ているんだろうな……と、高遠に汚染された頭で思ってしまった。
　でも……行かないわけにはいかないよな。

だいたい、俺には呼び出されるような心当たりはないし、呼び出すような生徒はうちにはいない。
第一、そんなものは十数年以上も前の話だ。
ったく……こんな事を考えてしまうのも高遠の影響かな。
それにしても、可愛らしい字だよな……。確かに、これじゃ番長とかっていう時代遅れな発想をしてしまった自分が恥ずかしい。だけど……いや、そんな事はないか。うん、ないない。でもやっぱ、なんだろうな、これは……。
とにかく、行ってみればわかるだろう。今時、そんな莫迦な事をするヤツがいるわけでなく、身の安全は保証されているはずだ。
でも、やっぱり、ちょっと怖いよな……。
遠くから誰がいるのかは確かめた方がいいよな……。
俺は物陰に隠れて体育館裏をこっそりと見る。
そこには人がいた。
誰だ？
服装からしてうちの学園の生徒のようだ。どうやら部外者ではないらしい。
しかも、あの制服は女子……。どうやら、そこにいるのは我が学園の女子生徒らしい。確かに、筆跡がそれらしかったので予想の範疇だが……それでなんなんだ？
俺は一応警戒しながらも（だって、彼女が囮という事も考えられるからな）近付いていった。
「あの……この手紙で俺を呼びだしたのって、君？」
俺はそこにいる女子生徒に声を掛けた。体育館裏は薄暗く、相手の顔がハッキリとしない。
「え、あ、は、はい」
驚いた感じの声が返ってきた。
あたふたとしているが、俺を呼びだした本人である事は間違いないらしい。
さて、どうするんだ、これから。
「あ、あの……あたし……」
それにしても、どこかで聞いた事のある声なんだよな……。
それも最近。誰だっけかな……。
「あた、あたし……」
女子生徒はあたふたとしたまま上手く言葉が出てこないようだ。
「とにかくさ、落ち着いて。ほら、深呼吸して」
そう言うと、その女子生徒は真面目にも深呼吸をし始めた。
「すいません、なんとか落ち着きました」
そう言った女子生徒の顔には見覚えがあった。
「あっ……あの時の……」
そう、映画館で一緒だった彼女。それに最近、高遠に連れられて行った喫茶店でも……なんてこった、すっかり忘れてた。
「もしかして、覚えていませんか？」

「あ、いや、そんな事はないんだけど……ほら、薄暗いからよくわからなくて、その、なんだ。うん、そういう事だから……」
　今度は俺の方があたふたしてきた。
「深呼吸して落ち着いて下さい」
「そ、そうだね」
　俺は大きく深呼吸をした。
　ダメだ。まるで漫才のようだ。しかも、面白くない漫才。
「クスクス……」
　と、目の前の彼女は笑い出した。
「ど、どうしたの？」
「ごめんなさい。なんだかおかしくって……」
「あ、あはは……」
　苦笑い。だけど、なんだか緊張していた身体がほぐれた感じはする。結果的に効果的だったようだ。
「あのさ、この手紙って……」
「あの……やっぱりなにか変でした？」
　変でしたって……。
「彩が、そういう時はこう書くものだって……でもその後、笑ってるから変だとは思ったんだけど……」
「あの……根本的な事を訊くんだけど、カザシって？」
「あ、ごめんなさい。あたしの手紙を渡してくれた子なんだけど……」
「あぁ……」
　なるほど。あの喫茶店にいた不思議な女の子、カザシって名前だったのか……って、カザシってどんな字だ？　あだ名か？　よくわからない。
「それで、彩がそう言ったんですけど……」
　なんだか話が一巡してしまっているな。
「それで、俺をここに呼んだ理由って？」
「あ、あの……それは……」
　口ごもる名前を覚えていない彼女。なんていう名前だっけか。なんとか思い出さねば悪いと思うから頑張っているのだが、全く思い出せない。
「あ、あの……」
　彼女の顔が紅潮しているのがわかる。
「あの……あのですね」
　そこで彼女は深呼吸をして、勢いをつけて、
「ずっと好きでした。付き合って下さい」
　それはあまりに突然の事だった。

風が止まった。

突然だった。
突然すぎた。
まあ、心のどこかでは考えていたのだろうか。
いや、そんな事はないだろう。
だって、俺は今まで恋愛なんかとは無縁だったんだから。
恋愛否定組とかまではいかなくても、恋愛無縁組であった事は事実だ。無縁といえばもてないだけかと思われるので、ただ単にそういうのに興味がなかったという事にさせていただく。
そんな俺が……ね。
信じろなんて方が無理だろ。
正直、真っ先に考えた事は〝悪戯である〟という事だった。
今まで経験がなかったんだから、そう考えて当然だと俺は考える。
「え、えっと……」
だから、俺はその言葉に返す言葉がなかった。
「あ、あの、ごめんなさい。突然にこんな事言われても迷惑ですよね」
その沈黙を迷惑と受け取ったのか、彼女は謝りだした。
「あ、いや……そういうわけじゃないんだけど……あのさ、嘘とかじゃないんだよね？」
と、俺は間抜けな事を訊いてしまった。間抜けというよりも相手を傷つける事を。
「ほ、本気です。本当です」
彼女は必死にそう言ってきた。
そうだよな。嘘でこんな事が言えるはずがない。そう、彼女に限っては。彼女の事はよく知らないが、そんな事ができないという事は雰囲気でわかった。
さて、どうするべきなのか。
俺は彼女の事をあまり……というか全然知らない。だが、彼女は俺を知っている。だから……、
「うん、わかった。よろしく」
そう答えた。ただ、彼女を傷つけないためだけに。こういう場面で断れるほど、俺には恋愛経験というものがなかった。だって、皆無だったんだから。
「は、はい」
彼女は笑顔でそう言った。
それだけが救いのように思えた。

★　★　★

「孝志、来たぞ」
玄関先から声がした。どうしてこいつは家の前で叫ぶんだ？　インターフォンを押せばいいも

のを。
「入ってこいよ」
　俺は窓を開けて下にいる高遠に言う。
「了解」
　勝手知ったる他人の家という事で、お邪魔します、の声すらもなく部屋まで上がってくる。毎度の事なのでもう気にならないが、普通はどうかと思う。
「さてと、早速……」
　高遠はパソコンの画面を見る。
「お、もうタイトル画面じゃないかよ」
「そこまで起動させておいた」
「気がき 利くな、さすがだ」
　そう礼を言って嬉々とした表情で始める。
　ドタバタとした学園ラブコメが画面を支配する。どうやらクライマックスらしい。実際はどうなのかわからないが、なんだかシリアスな状況だ。

【文誠】
「どうしてだよ……。どうして苺花がこんな事に……」
　俺と苺花しかいない病室。もう何日経ったのだろう。
　苺花がこうなってから、どのくらいが過ぎたのだろう。
　もう、感覚がなくなってきている。
　ピッピッピッ……！　と、無機質な電子音だけがする。
　この音は苺花の命だ。この音がしなくなった時、苺花も……。
　くそーっ！　ちくしょーっ！
　俺は叫びたい衝動に駆られた。
　だけど、それはできなかった。
　目を開けてくれ……。目を覚ましてくれ……。
　……。
　気付けば眠っていたらしい。もう、外は明るくなっている。
　苺花を見るが全く変わらない。いつものままだ。
　無機質な電子音もいつものまま。
　苺花……目を開けてくれ……。
　俺は昔に聞いたお伽話を思い出した。
　森の中のお城に眠ったままの美しいお姫様がいました。そのお姫様を眠りから覚ましたのが、王子様のキスだったのです。
【文誠】
「……」
　だからといって、そんな事で目を覚ますはずがない。

　だけど……。だけど、もしかしたら……。
　なんだか目を覚ますような気がする。
　俺は思いきってキスをする事にした。
　もう、今の俺にできる事はこのくらいしかない。
　どうせなにもできないのなら……。
　俺は苺花の唇に自分のそれを重ねた。
　自分の命を吹き込むように……。そっと、優しく……。
　目を覚まして欲しいという願いを込めて……。
　そっと離す。
　お願いだから……。神様……。
【微かな音】
「……ん……んん……」
　俺は苺花を見た。
【文誠】
「……ま、まいか……」
　信じられなかった。現実だとは思えなかった。

　ゲームをしつつ高遠が、
「これって、嘘っぽすぎるよな……。実際、こんな事あるわけねぇだろうによ」
　と、毒づく。
「だけど、これがなんとも泣けるんだよな……。それも事実なんだ。奇跡でもなんでも、目覚めるなんてさ……」
　どっちなんだよ、とツッコミたくなる。
「どうしてだろうな。やっぱりさ、わかっていてもいい話だなって思えるのは……結局のところ、おれはこういうのが好きなんだろうな」
　と、急に、
「ところでさ、教室でなにか話があるって言ってたろ。あれ、なんだ？」
　そう言った。
　すっかり忘れていた。っていうか、聞いて欲しい話が増えてしまった。
「ここで選択肢なんだが、俺に関する話とお前に関する話、どっちからがいい？」
　そこで高遠は迷わず、
「おれ」
　即答した。
「そんなもん、自分に関する事の方が興味あるしな。で、おれに関する話ってなんだ？」
　相変わらず視線は画面を見ている。オートプレイにしてあるようで、目で文字を追っている。
「ああ、じゃあそっちから話すか」
「ほれ、さっさと話す」

「わかってるって。あのさ、俺の知り合いにさ、お前と話がしたいって言われたんだ」
「はぁ？　おれと話？　誰だ、それ」
　ぶっきらぼうな言い方なのは、ゲームに集中しているからなのだろうか。とにかく、話を続ける。
「俺が親しくさせてもらっている物書きの人なんだけどさ」
「はぁ？　物書き？　どうして、そんな人と知り合いなんだ？」
　途中で話の腰を折られる。
「あのな、最後まで話を聞け」
「わかった」
「で、その物書きの人がお前と話がしたいんだそうだ」
「それは聞いた。だから、どんな話だ？」
　まただ。いや、元の流れか。
「その人がさ、今度ゲームのシナリオを頼まれたそうなんだ」
「どんなゲームだ」
　俊敏な反応だった。
「今、お前がしているような感じのものらしい」
「なにっ！」
　そこで声色が変わった。
「それを早く言え！　……なるほど……で、どんなストーリーなんだ？」
　胸倉を掴んでガタガタとしてくる。喋りにくいので、その手を振り払ってから、
「……それが未定らしいんだよ。まだなにも決まっていないらしくてさ、そこで俺の知っているヤツ――つまりお前だけどさ、そういうゲームに詳しいヤツがいるって話でお前が出てきたんだ。そしたら、お前と話がしたいって言われて……」
「すぐ行こう！　今すぐ行こう！」
　どうやら高遠は乗り気のようだ。まあ、こんなヤツだって事はわかっていたけどさ。
「あのな、落ち着け。向こうにだって都合ってものがあるだろ」
「そ、そうだな。だが、出来る限り早くしようではないか。早く決めないと、発売が延期してしまう事だってあり得る。しかもおれの話が聞きたいという事は、おれ好みのゲームができるはずだ。ならば、そういうゲームは早くやりたいものだ」
　高遠理論を展開してくる。
「わかった。わかったから落ち着け。明日にでも都合を……」
「明日では遅いっ！　今すぐ電話しろ。そして、アポを！」
　こうなった高遠を止める事は俺にはできない。全く、面倒なヤツだ。
　仕方なく、俺は椎崎さんの家に電話を掛ける事になった。
　――プルルルル……プルルルル……プルッ！
『もしもし、椎崎ですが』
　女性の声だ。という事は亜依さんか。

「もしもし、孝志です。こんにちは」
『ああ、孝志君、こんにちは。今日はどうしたの？』
「すいません、誠司さんはいらっしゃいますか？」
『いるわよ。ちょっと待っててね』
　電話越しに、誠司さ～ん孝志君から電話ですよ、という声が聞こえた。
　それからしばらくして、
『もしもし。なんだ孝志』
　すこし怠そうな声がした。
「すいません、仕事中に」
　仕事を中断されて不機嫌なのかと思い、とりあえず謝っておく。
『それはいいんだが……くだらない用事なら却下だぞ』
　却下って……。だいたい、用事もないのに電話するわけは……いや、俺は用事もないのによく家に行ってるな。にしたって、用事をくだらないとかそういうもので判断するものじゃ……でも、この人ならしそうだよな。
「あのですね、この前話した俺の友達なんですけど、今から会いたいとか言ってるんですよ。どうですか？」
　くだらないかはともかくとして、どう考えても無理だろう。
『今からか？』
「ええ」
『それは無理だ』
　やっぱりという回答。
「ですよね」
『……まあ、明々後日くらいなら大丈夫だと思うが……』
「わかりました。ちょっと訊いてみますので、待っててもらえますか」
　意外にも大丈夫そうだ。まあ、これはあっちから頼んだ事だし、当然といえば当然なんだけど。
『早くしろよ』
　電話の口元を押さえて、
「高遠、明々後日ならいいそうだが、どうだ？」
「問題なし」
　高遠は相変わらずゲームに集中している。それでいて耳はちゃんと働いているというのは……集中していないのか？　でも、集中してるよな、これは。どうなっているのだろうか。こいつは聖徳太子か？
　そんな事はともかくとして、
「大丈夫だそうです。すみません、忙しいのに」
『構わないさ。第一、こっちが話を聞きたいって言ったんだからな。じゃあ、明々後日に来てくれ。時間はいつでも構わない』

　相変わらずアバウトだ。どのみち、常に家にいる人だから、不在という事はないだろうけど。
「わかりました」
『じゃあな。……おっとそうだ。次は気の利いたネタを頼むぞ』
　一瞬わからなかった。だが、すぐに気付いた。
「……はぁ」
『じゃあな』
　そう言って電話を切った。
　それにしても、この人はすごい。色々な意味でそう思う。
　……っていうか、ネタを期待されてもな……どうするんだ？　運び屋？　ＦＢＩ？　ＣＩＡ？　ＩＣＰＯ？　……なんだか、どれもやったしな……。ここは思い切って、郵便です、とか……ダメだな。いっそ、全く関係のない職業とか……。俺は心の中で頭を抱えた。
「孝志、どうなったんだ？」
　高遠の声で現実に戻る。
「ああ、そうだったな。明々後日に決まった。時間はいつでもいいそうだ」
　高遠に決定事項を伝える。
「そうか。明々後日が楽しみだな」
　高遠は本当に嬉しそうにしている。気楽な性格だな……と、少しうらやましい。
「それはそうと、お前に関する話ってなんだ？」
　すっかり忘れていた。ダメだな、最近、すぐに忘れてしまう。
「ああ、それなんだけどさ……」
　なんだか言いにくい。
「なんだ？」
　気もそぞろって感じだな。ゲームに集中しているのだから仕方ないと割り切るか。
　それにしても、どう言えばいいんだ？　上手い言い方がわからない。
「あのさ、俺……告白された」
　結局、ストレートに言ってみた。
「……」
　高遠は沈黙した。完全にカミングアウトしてしまったようだ。ゲームの音も聞こえてはいないだろう。
「……はぁ？」
　しばらくして現実に戻ったようだ。
「だから、告白された」
　もう一度言う。すると、軽くカミングアウトする。
「……誰に？」
「愛藤さん」
「チカフジ……って、あの愛藤か？　あの、学園のアイドルの」
　……アイドル？　なんだ、それ？

「アイドルってなんだ？」
「知らないのか、お前。愛藤菜々といえば、学園の男共の間じゃ相当な人気なんだぞ。こっそりと公式ファンクラブを作ろうかという勢いだ」
　いや、お前の勢いも相当なものだ。
「なんだ、それ？」
　ファンクラブって……。ん？
「っていうか、こっそりと公式って矛盾してないか？」
「そんな事はどうでもいい！」
　どうでもよくないだろ。
「お前、マジで愛藤さんに告白されたのか？」
　高遠の話題は完全にこっちのようだ。俺の質問なんて無視ってわけか。
「あ、ああ……」
「ふざけるな！　それでおれに自慢ってわけか。お前って最悪だな」
「違うって。告白されたんだけど、俺は愛藤さんの事よく知らないし、それにいきなり好きって言われても……それに、どうして俺なんか好きなのか……」
　そう言った時、高遠の目が変わった。今まで見た事もないくらい真剣な目だった。
「お前、それ、マジで言ってるのか？」
「あ、ああ……」
　その勢いに気圧されてしまう。
「お前、本当に最低だぞ」
　そう言って、胸倉を掴んでくる。
「お前、自分がなにを言ったかわかってんのか。それって、愛藤さんを冒涜する言葉だぞ。お前、誰かを好きになった事は？」
「……わからない。女の子を好きだなと思った事はあるけど、それが本当に恋なのかわからない」
「だったら、それは恋じゃない。だが、おれは安心した。本当にお前が最低なヤツじゃなくてな。お前は鈍感だ。ものすごく鈍感なヤツだ。なんにもわかっちゃいない。ある意味、最低だけどな」
　高遠が笑みを浮かべた。
「お前は恋を知らない。人を好きになった事はない。ライクはあってもラヴはない。いいか、この自称、愛の伝道師であるおれがお前を導いてやる」
　普段なら、その名前にツッコミを入れるところだが、今はそんな気分にはなれなかった。
「お前に言う言葉がある。おれの言葉じゃなくて、誰が言ったかは知らないが有名な言葉だ。しかと胸に刻み込めよ。〝人を好きになるのに理由なんてない。理由なんていらない。理由が必要なのは人を嫌いになる時だけだ〟……これがおれがお前に言ってやれる言葉だ」
　好きになるのに理由はいらない……か。そうなんだろうな。
「ありがとうな、高遠」

　素直な言葉だった。
　高遠からこんな言葉が聞けるなんて思ってもいなかった。予想以上に俺は感動していた。こんな言葉でも、今の俺には鮮烈だった。
　ありがとう。
　そう心の底から言えた。
「まあ、気にするな。だがしかし……納得できんな。どうしてあの愛藤菜々がお前を……ん？
　ちょっと待てよ。お前と付き合うという事は、おれと友達であるお前と……おおっ、つまりはマイフレンドになるわけか。そうかそうか。あの近寄り難かった愛藤菜々と堂々と会話できるのか。そうかそうか。彼女の彼氏の親友として……結構、鼻高々なポジションではないか、うん」
　……なんなんだ、こいつは。ちょっとでも感心した俺が馬鹿みたいじゃないか。っていうか、まんま馬鹿？
「とにかく、自分の事だし、じっくりと考えてみるわ」
「愚か者め！　そんなもの、即答でＯＫしろ！　女性の誘いを断るなど笑止千万！　乙女に恥をかかせるのか。勇気を振り絞った彼女を無下にするというのか」
「おいおい、俺は別に断るなんてまだ……」
　そう言って、ＯＫしたんだっけ、と思い出す。
「という事はＯＫという事だな」
「いや、それは……」
　何故だかハッキリとしない。
「なんだ、お前は！　ハッキリしろっ！」
「だから……」
　あぁ……堂々巡りか。
　結局、そのまま話は進まなかった。

　翌朝、どうにも憂鬱だった。
「はぁ〜……」
　朝からため息か……。
　ため息を吐くと幸せが逃げていくって云うけど、どうなんだろうな。まあ、当たっている気もするけど。確かに幸せは逃げているんだろうな。
　トボトボと学園に向かう。
　元気そうな周りがなんだか怨めしい。
　だが、今の俺の状況を周りに知られると大変なんだろうな。昨日、高遠に愛藤さんの事を聞いてから意識するようになってしまった。
　学園のアイドル……ね。
　だが、あれからも考えてみたのだが、どうしてそんなアイドルっていわれるような女の子が俺なんかを……？
　ああっ！　意識してしまってダメだ！
　そんな風にもだ悶えていると、
「よかったですね」
　抑揚のない声がした。
「え……？」
　その声の方を向く。
「あっ……」
　そこには、あの時の女の子がいた。喫茶店で会った愛藤さんの友達の……えっと……。
「おはようございます」
「お、おはよう」
　俺が戸惑っていると、
「自己紹介しておきますね。わたし、菜々の友達で水城彩っていいます。ちなみにカザシは、彩りって書くんです」
　へぇ……そんな字なんだ……。と、つい感心してしまった。
「えっと、俺は……」
　俺も自己紹介をしようとしたのだが、
「知ってます。室田孝志さん。菜々の彼氏」
　水城さんは意地悪げな笑顔で言った。
「あ、ごめんなさい。もう少し小さな声で言った方がいいですね。あまり知られると、あなたの命が危ういですからね」
　サラッと怖い事を言う。だが、それは事実のようだ。
「秘密の交際ですか。それもいいですね」
　なんだか、変な響きだな、それ。……って、

「どうして俺と愛藤さんが……」
「付き合い始めた事を知っているのか、ですか？」
　俺にしか聞こえないような小声で言う。
「あ、ああ」
　つられて俺も小声になる。
「別にあなたが小さな声で話す必要はないのでは？」
「いいじゃないか。それよりも……」
「そうでしたね。菜々に訊きませんでした？　あの手紙の事」
「あっ……」
　そういえば、あの手紙は……そういう事か。
「わかったみたいですね。ずっと前から相談されていたんです。もう二年くらいになりますか。それで、思い切って今回……わかっていただけました？」
　なるほどね……って、
「二年前からって……本当？」
「ええ」
　でも、二年前って俺たちが入学した頃じゃないか。
「わたしは、ここに来てから彼女と親しくなったのですが、その頃からあなたの事を見ていましたよ。健気ですよね。今時っていうくらいに」
　うっ……。なんだか、彼女を傷付けるなと釘をさされているようだな。もちろん、そのつもりなんてないけど。
「本当にいい子。信じられないくらいに純情で……よかったですね」
　そして、
「じゃあ、そろそろ教室に行かないといけませんから。できれば、帰りは一緒に帰ってあげて下さい。きっと、喜びますよ」
「ああ。でも……」
　一緒に帰る……突然だな。
　まさに昨日の今日だぞ。俺にだって、その……心の準備っていうか……。
「そうですね。教室になんて来たら、袋叩きになりかねませんね。でしたら、わたしが待ち合わせの手伝いでもしましょうか。それくらい、喜んでしますよ。菜々の幸せそうな顔を見たいですし。それなら、二人とも大丈夫でしょう？」
　すごい……。なんと完璧な作戦だ。って、作戦ってほどでもないけどな。
「そうだな。それがいいかもな」
　と答えながら、俺の中ではまだ決まっていない。
「じゃあ、またあとで」
　そう言って、水城さんは教室へ向かっていった。

　彼氏彼女という関係なのだから、一緒に帰ったって悪くはないし不思議でもない。

　だけど……だけどだ。
　昨日まで全く知らなかったわけで、昨日いきなり告白されたわけで……どうしたものだろうか。
　それに加えて、こういう事は恥ずかしい。
　今までこういう経験がなかったんだ、仕方ないと察してくれ。
　もう……どうするんだよ。
　とか考えているうちに、教室に着いていた。おっくう億劫だ……。
「よう、孝志」
　教室に入るなり高遠が大きな声で挨拶してくる。
「おう」
「どうした、孝志。そんなションボリとして……って、なんだかションボリなんて言葉久しぶりに言ったな……ふむ」
　と、一人で完結している。
「で、どうしたんだ。なんだか暗いぞ」
　そう言うと、肩に手を回して顔を近づけ小さな声で、
「いい事があったはずなのに、どうしたんだ？　もしかして、既に嫌がらせの手紙でも届いていたのか？」
　と、やけに物騒な事を言ってくる。
「あいにくだが、そういうものは届いていない」
「じゃあ、どうしたんだ？　もっと嬉しそうにするものだろうが」
「そうかもしれないけどな……」
「お前、もしかしてまだ悩んでいるのか？　まあ、仕方ないか。初心者にはつきものだ。そうだな……とりあえず付き合ってみたらどうだ？」
「とりあえずって……そんなの相手に……」
「悪いとかそんな事を考えるな。恋愛なんてものはな、相手をどう好きになるか、好きにさせるかの勝負なんだよ。今回の場合、相手はお前の事が好きなんだ。なら、お前は相手を好きになればいい。普段なら簡単には好きになれないかもしれないが、今回は異例だ。なにしろ相手があの愛藤菜々なのだからな。ならば、好きになる事など容易い事だ。逆の立場であれば困難極まりないがな」
　無茶苦茶な理屈だが、なんだかいい言葉に聞こえてしまうのは、俺に免疫がないせいだろうか。経験があれば違うのかな……。
「まあ、そういう事にしておくよ」
　それだけ言うと、俺は自分の席に着いた。

「おい、面会人だぞ」
　高遠の声で現実に引き戻される。気付けば授業は終わって、休み時間になっていた。
「起きてるか……」

　高遠が目の前で手を上下に振る。
「ああ、なんとかな」
「そうか。遠くを見るような目をしよってからに。ほれ、面会人だぞ」
　高遠が教室の前の扉を親指で指す。そこを見ると、
「水城さん……」
　俺は用件がわからないまま彼女の所へ歩いていった。
「なにか用？」
　そんな俺の質問にため息を吐き、
「なにかとは失礼ですね。せっかく、あなたたちの仲介をしているというのに……もう朝の事、忘れたんですか？」
　朝の事……？　あ、そういえば。
「ゴメン。考え事していたから、つい……」
「まあ、いいです」
　ため息を吐く。
「本題の前に訊きますが、あなたと菜々の事、他に誰か知っていますか？」
「他に……？　あ、高遠が知ってるな」
「そうですか……」
　水城さんは少し考え込む。もしかしてまずかったのだろうか。
「まあ、いいでしょう」
　どうやら、そうではないようだ。
「むしろ、その方が好都合かも知れませんね」
　そして、俺を見て、
「今日のお昼、食堂に来てください。できれば、親しい友人と一緒に。そう、あなたと菜々の事を知ってもあなたに報復しないような人と一緒に」
　と、サラリとすごい事を会話に盛り込んでくる。
「……わかった」
　少し気圧される。
「では、お昼休みに」
　そう言うと、彼女は自分の教室に戻っていった。
　昼休みか……。
「おい、どんな話だったんだ？」
　水城さんがいなくなるとすぐ、高遠が訊いてくる。
「お前には……」
　関係ない、と言いかけて、
「あのさ、昼は食堂でいいか？」
「あ、ああ、それは構わないが」
　突然の事にさすがの高遠も驚いている。

「じゃあ、そういうわけで、昼は食堂な」
　後ろで、そういうわけってどういうわけなんだ、とか声が聞こえるが、相手にしなかった。

「おい、どういう事でこうなったんだ？」
　俺たちは食堂へ向かっていた。
「さあな」
　本当にわからないのだから、そうとしか言えない。
　水城さんの考えなのだから仕方ない。
　きっと、なにかあるのだろうけど。
「まあ、お前が答えないのはいいとしてだなーー」
　そこまで言って、高遠は隣を見た。
「ーーどうしてこいつがいるんだ？」
「こいつとは失礼ね」
　高遠の隣を一緒に歩いていた樹梨が高遠を睨む。
「私がいるとまずいのかしら？　ねえ、室田君はどうなの？　私がいると迷惑かしら？　私としては、せっかくだから一緒に食べて上げようと思っているんだけど。なんたって、男同士で食べてもね……いまいち画としてまずいでしょ」
　樹梨が一緒というのは予定外だったが、まあいいだろう。水城さんも親しい友人と一緒にって言ってたし、樹梨なら言いふらすような事はしないだろう。
「まあ、いいんじゃないか。高遠にも言ってなかったけど、ちょっと食堂で別の人と一緒に食べる事になるだろうから」
「なに？　なんだと！」
　妙に大袈裟なオーバーリアクションだ。
「なんだ、連れがいたんだ。じゃあ、私はお邪魔かな」
「いや、別に邪魔じゃないさ。それと、高遠は驚きすぎだ」
　高遠は真顔に戻って、
「驚くに決まっているだろうが。孝志にそんな連れがいたとは……ん？　ま、まさか！」
　そうこう言っている間に食堂に到着した。席は満席に近かったが、
「こっちです」
　入るなり、水城さんが声を掛けてきた。どうやら、早めに来て席を取っていたらしい。まことに有り難い。
　そして、その横に目をやると……やっぱり。
「おい、孝志」
　高遠が肩に腕を回してきた。
「どういう事だ？」
「どういう事もなにもない。水城さんが企んだ事だ」
「貴様、人のせいにするのか」

「そういうわけじゃなくてだな……」
「まあいい。結果的におれは、あの愛藤さんと一緒にランチを楽しめるという事だからな。ナイスだ、孝志」
　そして、営業スマイルになって、
「やあ、おれ……いや、僕は室田君の親友で、丹羽嶋高遠と申すちんけな輩です。以後お見知りおきを」
　と、謎の日本語で自己紹介をする。
「は、初めまして……あ、あたしは……えっと」
　突然の事にあたふたとする愛藤さんが妙に可愛らしかった。
「そんな名前だったんですね。てっきり、高遠というのが名字かと思っていました」
　そんな愛藤さんを後目に、水城さんが淡々と喋る。
「よく言われるのだ。人はこの名前を名字だと思ってしまう。困ったものだ。しかし、カッコイイだろ。この名前は大好きだ。誇りと言っても過言ではないんだ」
　と、我を忘れて……いや、本来の高遠に戻って水城さんに語る。そういえば、俺も初対面の時はこういう風に語られたっけ。懐かしい思い出だ。
　俺は高遠をじっと見つめた。
　この際だから、今までの疑問をサッパリさせようか。
「あのさ、ずっと胸にしまっておいたんだけどさ。お前に訊きたい事があるんだ」
　そう言うと、高遠は表情を一変させて、
「残念ながら却下だ。おれは男を愛せる自信がない。あくまでもノーマルだからな……。お前の気持ちは嬉しいが、やはりおれは付き合うなら女の子がいいんだ」
　……？
「って、ちょっと待て！　そんなはずがないだろうが。俺だっていたってノーマルだ。そうじゃなくて、俺が訊きたいのは……」
「なんだ、違うのか。で、なんだ？」
　なんだ、そのちょっと残念そうな表情は。
「だからだな、お前の名前だよ。名前の方が高遠なんて珍しくないか？　普通、名字だろ？」
「ああ、その事か……。その事に関しては過去に幾度となく訊かれた。そして、その都度、おれは誠意を持って答えている。というわけで、お前にも教えなければならないようだな。このおれの最高機密を！　おっと、もちろん愛藤さんにも教えて差し上げましょう」
　最高機密？　たかだか……と言えば失礼だが、名前じゃないか。それほどのものなのか？　それほどまでにしなければならない理由って……？
　しかし、高遠があまりにも真剣な顔で言うので、思わず唾をゴクリと飲み込んでしまう。
「この高遠という名前の由来だがな……これは、おれの母親がとある漫画のファンでな。言っておくがアニメじゃないぞ。あくまでも漫画だ。その漫画は、世間一般からの識別で言えば少女漫画になるんだが、おれの母親はそういう分類名が嫌いでな、少女漫画だとは言わなかったんだ。おれもそう思うんだ。女の子が少年漫画を買う事はそれほど恥ずかしくない行為だと思うんだ。

だけど、男が少女漫画を買う事は恥ずかしいと思ってしまう。そして、周りは奇異の目で見る。それはおかしいと思うんだ。一種の差別だよな。それで、おれもそんな分類はしないようにした。世の中、分類に関係なくいいものはいいのに、そんなくだらない分類があるせいで評価されなかったりするんだ……と、話がそれたが、そのいわゆる少女漫画家の初期の頃の作品にそういう名前の男の子が登場したんだ。それはな、最初はおれのように名前にしたかったんだそうだが、編集チェックで名前にはおかしいという事で名字になってしまったんだ。だから、その人のファンだったおれの母親はリベンジをするかのように、おれの名前をそうしたんだ。その話を聞いた時、おれは正直感動した。嬉しかったんだ。その人の作品をおれも読んだからな。本当によかったんだ。いくつかアニメ化された作品があるのだが、どれも素晴らしいんだ。その漫画家は、アニメ化しそうでしない作品を目指していたんだが、あまりにいい作品なために世間がアニメ化を望んだんだ。それはいいと思う。もちろん、本人も了承しての事だしな。アニメ化する事によって、普段は少女漫画を読まない人間でさえ興味を持つようになっていいと思うんだ。でもって追加情報だが、その漫画家のアシスタントたちには、チーム名らしいものがあるんだ。こんな漫画家は少ない……いや！　未だかつていなかったのではないだろうか。さらに付け加えると、その漫画家がその作品を描いた年齢っていうのが、今のおれたちとそう変わらないんだ。それがまたすごいではないか。おれの母親も見る目があるよな。なんならお前にも貸してやるから心して読むがいいぞ。ホントに読んで損はない！　否！　むしろ、読まない方が損だ！」
「あ、ああ……まあ、そのうち借りるよ」
　なるほど……。そんな深い理由があったんだ……。
　俺は、素直に感動していた。
　高遠にしては、いい話だったから……と思ったら、
「とまあ、そんな事を語ったが、実はこれは後付けだ。そう言うとカッコイイだろ？　素敵だろ？」
「……」
「……」
「……」
　なんだと？　俺と愛藤さんと水城さんは沈黙した。
「……ったく、莫迦ね……。またそんな事……」
　と、樹梨だけが違った。どうやら、以前にこの話をされた事があるようだ。
「実際は、母親がカッコイイかなと思ったっていう、それだけの理由だ。しかしながら、今語った事も嘘ではない。そういう気持ちも結果的に込められている。実のところ、この名前はなかなかカッコイイだろ？」
「まあ、な……」
　そこは認めるべきなのだろう。人それぞれの感性で異なるだろうが、カッコイイとは思う。
「あんたはうっさい。……あ、ごめんなさい。自己紹介がまだだったわね。私は二葉樹梨。よろしくね、愛藤さん」
「え、あたしの事……？」

「まあ、知ってるわ、名前はね」
　そう言って、樹梨はウインクした。
「あ、そういえばあの時シフォンに……」
「なるほど。あなたたちは三人一組というわけですか」
「……まあ、そういう事になってしまうのか。おれとしては、樹梨とセットにされる事はちょっと遠慮したいのだが……」
「それは私の台詞。こっちこそ御免だわ。誰が好き好んであんたとセット扱いされなきゃいけないのよ」
「なんだと……」
　と、いつものようになってしまった。その様子を見て、愛藤さんだけがどうしていいのかわからずオロオロとしている。
「愛藤さん、いつもの事だから心配しないで」
「え、あ……そうなんですか？」
「そうみたいよ。心配しなくてもいいだって」
　水城さんがやけに冷静に告げる。
「あ、ごめんなさい。つい……」
　そこで、どうやら樹梨が今の状況に気付いたようだ。
「……ところで、どうしてこうなってるの？　この二人と接点なんてあるとは思えないけど……」
　と、愛藤さんと水城さんに訊く。
「まあ、色々とありまして……。これからも仲良くしましょうという事で、今日は一緒に昼食をと思ったんです」
　いたって冷静に淡々と水城さんが言う。
「あ、ごめんなさい。彩はいつもこうで……別に……」
「あ、ああ。別に気にしていないから安心して」
「悪かったわね、無愛想で」
「もう……わかってるならもう少し……」
「いいじゃない。これがわたしなんだから」
「もう……」
　と、ため息を吐く愛藤さん。
「菜々、あまりため息は吐かない方がいいよ。幸せが逃げていっちゃうゾ」
「誰のせいなんだか……」
「とにかく、楽しくお昼を過ごしましょう」
　と、またしても冷静に仕切る水城さんだった。
　なんだかんだで楽しく過ごせた。
　これが青春ってヤツなのだろうか？　だとしたら、今までってなんだったのだろうか。つまらない青春だったんだな……っていうか、青春だったのか、本当に……と、ちょっと朱夏の頃にで

も思うような事を考えてみる。
　とにかく、楽しかったという事でいっか。

★　★　★

　なんだかんだで、あれ以来、俺たちはグループのように行動する事が多くなった。昼食は一緒に食べるし、なにも用事がない時は一緒に帰っている。まあ、気付けば俺と愛藤さんだけにされていたりするんだけど……。
　だけど、今日は用事があるので俺は高遠と一緒に帰っている。数日前の約束があるからだ。念のために朝に電話を入れておいた。
　そんなわけで、俺たちは椎崎さんの家に向かっている。
「それにしても、おれに話って……もしかして、おれの意見でゲームの方向性が変わるのか……」
「さあな」
　高遠は目をキラキラと輝かせている。
「だとすれば、もう……こそばゆいぞっ！　ってなくらいの萌え萌えなものにしたいよな……ヒロインにはやっぱり、お兄ちゃんって……いや、兄さんも捨てがたい……かぁー！　たまらんね」
「……」
　お前はそういうヤツだったよ。
「しかしながら、今での謎で仕方がない。どうしてお前はそういう人と面識があるのだ？　もしや、お前は……」
「なんだよ」
「隠れオタク？」
「……違う」
「じゃあ、どうしてだ」
「……昔、ちょっとあってな。今じゃなんていうか、兄貴みたいなものだ。……って、言っておくが兄貴ってのは普通世間一般の意味で、お前が考えているようなものじゃないからな。純粋に兄さんのようなものなんだからな」
「……面白くない」
「……」
　ああ、こういうヤツだったよ。
　なんて話している間に到着してしまった。
　さて、今日はどういう風に行くべきか……。
「ん？　どうしたんだ、孝志」
　そんな事を考えていると、高遠が不思議そうな目で見てきた。
「あ、ああ……ちょっとな」

「なんだよ」
「まあ、いいや」
　俺は思いきってインターフォンを押した。
　――ピンポーン！
　ドキドキの瞬間だ。
『はい』
　この声は誠司さんだ。
「誠司さん、俺です、孝志です」
『却下！　面白くないぞ』
「……ごめんなさい」
『仕方ないな。まあいい、入れ』
「……はい」
　なんだか、絶対に普通の会話じゃないよな、これって。それにしても、この屈辱感というか敗北感はなんだろうか。たったこれだけの事なのに……。
「なあ、孝志。今のって……」
「ああ、気にしないでくれ。いつもの事だから」
「いつもの事……ね」
　さすがの高遠も、初めて椎崎家の洗礼を受けたのだから当然の反応だろう。俺だって、いきなり〝次に来る時はなにか面白くやってくれないか〟なんて言われた時は驚いて口が塞がらなかったからな……。よくわからない人だ。
　物書きには変わり者が多いと聞くが、この人はそういう意味では物書きだ。っていうか、形容しがたい。
「とにかく、部屋に上がらせてもらおう」
「そうだな」
　勝手知ったる他人の家という事で、二階へと向かう。そして、誠司さんの部屋のドアをノックする。
　――コンコン！
「入ってます」
「……そんなのわかってます。入っていいですか」
「……冷静に返すとはな。まあ、いい。とにかく入ってくれ」
「じゃあ……」
　と、俺は普通に入ったのだが、
「お邪魔します」
　と、高遠は言ってはならない事を言ってしまった。
「邪魔するなら帰ってくれ」
　と、誠司さんのどこか大阪の舞台でも見ているかのようないつものヤツだ。
「……えっ？」

　高遠は固まってしまう。そりゃそうだよな。これをいきなり言われれば、そうなって当たり前だ。
「高遠、気にしなくてもいい。ちょっとした意地悪だから」
「……あ、ああ。そうでしたか。どうにも突然で……不慣れなもので……」
　いや、それが当然の反応だ。俺のように慣れてしまっては……もう取り返しがつかないだろう。慣れてしまえば異常も日常だというが、本当だ……。
　それはさておき、相変わらずの部屋だな……。散らかっているというか、乱雑というか……だけど、これがいいのだから仕方ない。本人はどこになにがあるのかわかっているのだから、それでいいのだろう。いいという事にしておこう。
「ところで、誠司さんは高遠にどういう事を訊きたいんですか？」
「まあ、なんというか。市場調査ってヤツかな」
「いや、市場調査って……高遠はすごく偏ってますよ」
「それもありだろ。正直、俺はどういうものが流行っているのかよくわからない。そういう雑誌を見ても、どれがどうとかわからないからな。ちょっとした紹介じゃ、作品がどういったものかはわからないし、かといって全てをプレイするのも無理だ。だから、そういうゲームが好きな、そういうものを実際に購入する者からなにかいいアイデアをもらおうと思ってね」
　……理に適っている内容だとは思う。だけど、それで高遠を選ぶのはちょっと……な。不安だな……。
「わかりました。是非とも協力させてください。おれも最近のゲームにはなにか物足りなさを感じていたんです」
「そうか。その辺を詳しく聞かせてもらえるかな」
「それはもう！　おれが求めるゲームができるのであればなんなりと……」
「……それは保証しかねるが、それに近くはなるだろうね」
「わかりました！」
　と、活き活きしている。
「それじゃ早速……」
　そして、コアな話が始まった。俺は内容についていけないので部屋の隅で誠司さんが書いた小説を読んでいた。

「本当に凄い！」
　と、誠司さんの家を出てからずっとこの調子だ。どうやら、なかなか手応えのある会話だったようで、誠司さんも満足していた。
「孝志！　おれはこれからの未来に希望がもてた。あの人が書いたものを読ませてもらったのだが、明らかにおれ好みだ。おれのためではないかと思えるくらいにだ。どういった感じなのか雰囲気を掴むために即興でワンシーンを書いてもらったのだが、ツボをついた素晴らしいものだった。世間が求めているものを、欲しているものを理解している人だ。あの人が書くシナリオならば、さぞかし素晴らしいものが出来上がるだろう！　しかもその内容はおれが求める〝萌え〟

！　必ずや最高の作品が出来上がるに違いない。しかも、あの方が今度書く事になったブランドは、スマッシュヒットを連発しているところではないか！　あのブランドとのコラボレーション……
しかも、原画家は人気沸騰中の望月皐月さんだというではないか！　考えただけでも鳥肌ものだな……」
　と、いつにも増して熱く語ってくれた。
　残念ながら、俺には全くと言っていいほどわからなかったりするのだが。
「とにかくよかったじゃないか」
「もっと喜べよ。……それにしても、今日は素敵な出会いだった。まさか、これほどのものだとは……予想だにしていなかったぞ。もっと普通の感じかと思ったのだが……素晴らしい！　感動だ！」
　恥ずかしいな……。大声で……。
「まあ、お前だし反応としてはそんなもんだろう。しかし、おれはお前と友達で本当によかったと思う。お前のお蔭であのような素晴らしき経験ができたのだ。ノーマルな状況下では到底経験できなかったであろうからな！」
　ああ、もう……勝手にしてくれ。俺はため息を吐くしかなかった。

じとじと……。
じとじとじと……。
じとじとじとじと……。
あ〜！　じめじめとして……。
まあ、梅雨だからしょうがないんだけど……鬱陶しい！
そのくせ気温は高い。
ここは熱帯雨林かっ！
不快指数一二〇％！
……と、そう思っているのは俺だけではないようで、クラス中のヤツらが下敷きやノートなんかを団扇変わりにしている。
雨のせいで窓を閉め切って……って、何故に締め切らねばならないかっ！
つうのも、すごい風雨なのだ。近付いてきている颱風の影響らしい。
休みにならなかったのが不思議だ。まあ、校則で規定されている状況になっていないというわけで、仕方ないのだ。
そんな中、俺たちはロング・ホームルームをしていた。
というのも、近々ある体育祭についてだった。
基本的には生徒の運営で行われる体育祭は、その種目も生徒が決める。で、各人は最低でも三種類の競技に出ないといけない。
ちなみにチームは各学年八クラスを四つに分ける。それぞれ赤チーム、青チーム、黄チーム、緑チームとなる。ちなみに我ら四組は緑チームとなった。
とまあ、こういう風に割り振られた各学年が一堂に会し、四チームでの対抗戦となる。
優勝したからといって賞品もなにもないわけだが、どうにも燃えてしまう。
「孝志、お前はなにに出場するつもりだ」
「そうだな……」
俺は黒板に書かれている数々の種目を見る。
玉入れ、百足競走、綱引き、大玉転がし、スウェーデンリレー、パン食い競走、障害物競走、借り物競走、三人四脚、棒引き、騎馬戦、馬跳び競走、仮装競走、Ｘｍ競走、四〇〇ｍリレー、八〇〇ｍリレー、二〇〇〇ｍリレー。
多くの人が敬遠するのがリレーだろう。というか、俺は敬遠する。でも、スウェーデンリレーはちょっと面白いかも……。順番が遅くなる毎に距離が伸びて……って、最後の方はやっぱりきついな……。
Ｘｍは……怖さ半分ってとこか。ちなみにこの競技、当日にならないとなにをするかわからない。確か去年は後ろ向きで五〇ｍを走ってたっけ。一昨年は三個のバレーボールを抱えて一〇〇ｍを走っていたような気がする。
楽といえば玉入れとかかな……。しかも意外と面白かったりするし。で、毎年かなりの競争率

になって……。
　色々とあると悩むな……。
「というわけで、今年の出場者はこれで決定にしたいと思います」
　と、教卓に立っていた体育祭実行委員ーー通称・委員長（注：俺たちのクラスでは各行事の委員は全員その時期だけ委員長と呼ばれる）が言った。
　……って、ええっ？
　俺、なにも選んでないぞ。
　目を皿のようにして黒板を見る。
　……そこには俺の名前があった。
　どういう事だ？
「孝志、俺がエントリーしておいた」
　あ、あんですとーっ！
「た、高遠。どういう事だ？」
「いや、お前がアナザー・ワールドに行っていたようなのでな。こういうものはさっさと決めてしまわないと」
「だからって、どうしてお前が勝手に決めてるんだよ」
「安心しろ。別に全部リレーにするとかそんな事はしていない。無難なものを選んだつもりなんだがな」
「なに……？」
　俺は改めて黒板を見る。
　俺がエントリーされているのはーー綱引き、借り物競走、三人四脚。まあ、無難だろう。よしとしておこう。
「問題はあるか？」
「……いや、まあいい」
「だろ？　おれと一緒だ。頑張ろうぜ、孝志」
　……こいつと全部一緒なのか……。それは少し問題かも。
　でも、いまさらどうこう言ってもしょうがないよな。
「というわけで！　みんな、今年は優勝だ！」
　と、無駄に盛り上げてＬＨＲは終了した。
　体育祭といっても、別に事前に練習するような事があるわけもなく……。

★　★　★

　でもって当日ーー
　梅雨の晴れ間とでもいうのだろうか。快晴だ。
　ギラギラとした太陽が俺たちを焼き尽くさんとばかりに照らしている。
　ズバリー言でーー熱いっ！

日焼けするだろうな……というのもあるが、気持ち悪いくらい熱いのはいただけない。
「どーしてブルマじゃないんだー！　ブルマ最高！　ヴィヴァ・ブルマ！」
と、そんな事を叫んでいるのは……言うまでもないか。
恥ずかしいので離れる。
「ちょっと待て」
ガシッと肩を掴まれる。
や、やめてくれ～。こいつと知り合いだと思われたくない。
「何処へ行く、Ｍｙ同志」
「離せ。人違いだ」
手を払いその場を離れようとする。
「何処へ行くと訊いている」
さらに力を込めて掴まれる。
「人違いだ」
「どうしてこの学園はブルマじゃないんだ？」
真剣な目で訊いてくる。
どうでもいいだろ、そんな事。つうか、今さらか？　……いや、毎年言ってたな……。
「離せ」
手を払おうとするが払えない。
「話せ」
そう言うと、高遠が力を込める。
「痛いだろ」
「ならば答えろ」
「知らん。学園長にでも訊け」
「……面白味のないヤツだ。ブルマにハァハァしようとは思わないのか」
恥ずかしい。力説するな。
――スパン！
「はぅぁ」
高遠は頭を押さえてうずくまる。
「遅くなってごめんなさい」
そう言ったのは樹梨だった。
ああ、ちょっと今回は遅かったな。
「あんたは……ちょっと目を離すとこれなんだから……」
そう言うと、樹梨は高遠の首根っこを掴むとズルズルと引きずっていく。
「アイ・シャル・リターン！　アイ・ホープ・ブルマ！」
と、恥ずかしい言葉を叫びながら樹梨に拉致されていった。
「五月蠅い！」
――スパン！

と、乾いた音が響いた。
高遠、真っ当に生きろよ。
そんな姿を見送っていると、
「今日はいい天気ですね」
と、抑揚のない声がしたので振り返ると、
「水城さん……？」
と、その水城さんに隠れるように、愛藤さんもいる。
「ほら、どうして隠れるの。ちゃんと話とかしなさいよ、菜々」
と、水城さんが愛藤さんを前に押し出す。
「あ、わ、わ……こ、こんにちは」
よろけながら、顔を真っ赤にしながら言う。
「こ、こんにちは」
なんとも緊張してしまってぎこちない。
「まったく……未だにそれですか」
と、水城さんが呆れる。
でもしょうがないじゃん。いきなりさ、付き合うとかって言われても……。
「が、頑張ろうね」
愛藤さんは俯きながら言う。
「う、うん。頑張ろう」
「違う組なんですけどね。まあ、構いませんが」
「うっ……」
そうなのだ。俺たちは緑なのだが、愛藤さんのクラスは青なのだ。言ってしまえば敵同士！
「それはそれで、ロミオ＆ジュリエットって感じがしていいと思いますけど」
と、それだけ言うと歩き出した。
「ちょっと、彩、待ってよ……」
愛藤さんは慌ててそれを追いかけていった。
えっと……まあ、とにかく頑張ろう。

というわけで、開会式なんかも終わり――あ、ちなみに入場行進はない。適当に整列して校長のありがたくない話をちょっとだけ聞いて、さあ競技だという流れである。
各競技も、参加者が（一応ある）入場門に集まって入場してサクサクと競技を進めていくというわけだ。
こういうものは大抵最初はローテンションなわけだが、それもすぐにハイテンションに移行していく。
プログラムが三つくらい終われば次第に盛り上がってくる！
そんな盛り上がる頃にこの競技があった。
〝三人四脚〟

　二人三脚よりも断然高度な競技である。相手だけでなく、もう一人とも呼吸を合わせないといけない。なかなかに難しいものである。ちなみに、この三人組は男女混合でなければならないというルールがあったりする。男二人に女一人でも、女二人に男一人でもどっちでもいいのだが、とりあえず男女混合なのだ。
　だが、それは俺たちには関係ないと思われる。
「さて、ぶっちぎりで勝つぞ！」
　と、張り切っているのは右端にいる高遠。ちなみに俺は左端にいる。――で、誰が真ん中なのか……つまり女子は誰なのか、だが……。
「あんまり引っ付かないでよ。まったく……どうしてこうなるのかな……」
　と、ため息を吐く。
「それはこっちの台詞だ！　……と言いたいのだが、これは勝つためには絶対的に必要だと思われる。しばし辛抱しろ、樹梨！」
　そう、真ん中は樹梨なのだ。
　このトリオにしたのは高遠で、ヤツに言わせれば『おれたち三人に敵う者など存在しないっ！』なのだそうだ。
　それは褒め言葉なのかは不問にしておくとして、正直俺も同感だ。確かにこの面子なら大丈夫だろう。なんだかんだ言っても、樹梨と高遠の息はピッタリなわけだし、俺もこの二人になら合わせやすい。……と、認めるのは少し癪だが。
「まあ、頑張ろうぜ」
　というわけで、順調に進行していき、ついに俺たちの順番になった。
　何故か俺たちと同じ組には陸上部だけで構成されたチームや、卓球部だけで構成されたチームや、水泳部だけで構成されたチームなんかがいる。って、他の組はどうしてここに全力を注いでくるんだ。
「おい、これってすごすぎやしないか？」
「むぅ～……やはりか。予想はしていたが、ここまで顕著にされるとな……」
　高遠は納得したような顔をしている。
「どういう事だ？」
「わからない？　あなたを倒すために全力になってるのよ、みんな」
　と、答えたのは樹梨だった。
「はぁ？　俺を倒すため？」
「鈍感だな。まあ、相手がどこまで本気なのかは知らないが、樹梨が言った事で間違いないだろう」
「だから、どうしてなんだ？」
「鈍感ね。あなたと愛藤さんが付き合ってるって噂になってるわよ。細々とだけど、やっぱり愛藤さんって人気あるから、それを信じ込んで……まあ、本当なわけだけど、逆恨みして……そんなとこだと思うんだけど」
　なるほど……。

「わかったか。だからこそ、おれはこのメンバーにする事を提案したのだ。強豪チームに勝つためにはこれしかない！」
「……って、お前そこまで考えてか？」
「なるほど。あんたにしてはまともじゃない」
　樹梨が珍しく感心している。
「相手がお前を貶めようとしているのなら、こっちは全力でぶちのめしてやろうではないか。返り討ちにしてやろう！」
「なんだか変に燃えてるけど、とにかく頑張りましょう」
　はぁ……すごい事になってるな……。
「とにかく礼は言った方がよさそうだな、サンキュ」
「礼など必要ないさ。友情のためだ、気にするな」
　俺たちはスタートラインに並ぶ。
　うっわぁ……他の三組から敵意満載のオーラを感じるよ……。ｶﾞｸｶﾞｸﾌﾞﾙﾌﾞﾙ。
「セット！」
　スターターの言葉に、俺たちはいっせいに構える。
「孝志、絶対に勝つぞ」
「勝ちましょう」
「ああ」
　さぁ、俺たちの心は一つになった。誰が相手でも負ける気はしない。なんだかんだで、俺はこの二人を信用してる。だから、勝つ！
「ゴー！」
　その合図と共に、十二人が一斉に飛び出す。
　どの組も順調だが、その組み合わせが即席のため今ひとつ呼吸が合っていないように思える。特に女子にそれほどの闘志がないために、どこか空回りしているようにさえ感じる。だからこそ俺たちに勝機があるのだ。俺たちの心は一つだ。
　そして、それは結果として今現実としてここにある。
　俺たちは順調なペースで走っている。先頭を、だ。
　すぐ後ろには後続集団がいるが、このペースなら大丈夫そうだ。
　陸上部だろうと水泳部だろうと卓球部だろうと、所詮最後は個人競技なのだ！　俺たちのコンビネーションに敵うはずがない！
　トラックを一周するというものなので、ざっと四〇〇ｍくらいか。カーブもあって結構難度が高い。が、俺たちはカーブも難なくクリアしていく。他の三組はどうしてもカーブでスピードを落としてしまうようだ。
「孝志、その調子だ！　ぶっちぎりで勝つぞ！」
「ああ、もちろんだ！」
「油断大敵よ」
　と、樹梨が言った瞬間だった。

「うおっ」（高遠）
「うわっ」（孝志）
「きゃっ」（樹梨）
　少しだけタイミングがずれた。
「うおっとっと……」（高遠）
「うわったった……」（孝志）
「きゃっとっと……」（樹梨）
　が、なんとか持ちこたえた。
　しかし、その間に二番手だった卓球部に抜かれてしまった。
「ちくしょう」
「孝志、諦めるのはまだ早い！　これからが勝負だ」
「……そうだな！」
　俺たちは呼吸を整えると再び走りだした。
「もっと速く！　もっと速くだ！」
　そんな高遠の声に刺激され、俺たちはさっきまでよりも早いペースで走っていく。
　それほど離されていなかったので、あっという間に追いつく。
　そして最終コーナー。
　俺たちはそのままのペースで突っ込む！
　相手は当然ながらペースが落ちる。
「よし、行くぞ！」
「今度は気を付けないとね」
　高遠と樹梨の応援があるようなものだ。
「そうだな。気を抜かずにぶっちぎりだ」
　そして――俺たちはゴールテープを切った！
「やったな、孝志」
「ああ」
　……息が切れる。全力疾走は疲れる。っていうか、三人四脚で全力疾走ができるって……。
「ほら、他の三組がご到着のようよ」
　樹梨に言われて見ると、あからさまに悔しそうにしている。自分たちの不甲斐なさになのか、おいおいと号泣しているヤツもいる。そ、そこまで……。
「はっはっはっ……おれたちに勝とうなぞ、笑止千万！　一万光年早いわ！」
「莫迦ね、一万光年は距離よ」
　と、冷静にツッコむ樹梨。
「高遠と一緒でよかったよ。お前のお蔭で勝てたようなものだ」
「まあ、それほどまで感謝されるとは思っていなかったが……いいものだ。照れるが。とにかく、残りの競技もこの調子で勝つぞ！」
「ああ」

って、残りは借り物競走と綱引きだったな……。綱引きはなんとかなるだろうから、問題は借り物競走か……完全に個人競技じゃねぇかよ。ガンバロ。
とりあえず席……というか、緑が集まっている場所に戻る。
なんだかこの三人四脚で体力を使い果たしてしまったような気もする。
適当な場所に座る。別に椅子があるわけでもないので地べただが。
「暑い……」
もう少し曇っていれば涼しいんだろうけど、すこぶる快晴だ。
気温もそこそこ高いし、なにしろ運動しているわけで余計に暑く感じる。なので、学食に飲み物を買いに行くヤツが結構いたりする。
俺ものどが渇いたのでなにか買いに行くとしよう。あれだけの全力疾走だからな……買いに行くのも億劫だが、のどの渇きには代えられない。
「孝志、何処へ行く？」
立ち上がると、高遠に声を掛けられた。
「ちょっと学食にな」
「飲み物か。おれの分も……と言いたいが、どうせ自分で行けとか言うのだろ？」
「わかってるじゃないか」
「仕方ない。一緒に行こうではないか」
と、高遠も立ち上がる。
結局、高遠と二人で行く事となった。
「ところで、次の借り物競走はどうだ？」
歩き始めた瞬間、唐突に言われる。
「どうかと言われてもな……」
「お前に対してなにか仕組まれている可能性が高い。なにせ、親衛隊の連中はかなりの敵対心を持っているようだからな」
「……ちょっと待て。なんだその親衛隊ってのは」
「知らないのか？　愛藤菜々親衛隊の事だ」
「……なんだ、それ？」
「お前には以前、公式ファンクラブが設立されそうな勢いだと話したと思うが、それを立案し、ファンクラブの前身的な存在がこの親衛隊なのだ」
「……そんなものまであったのか」
「あったんだよ！　お前は自覚が足りなさすぎる！　あの三人四脚バトルを仕掛けてきたのも、おそらくはその連中だろう」
「ファンクラブに親衛隊ね……非現実的だな」
「……お前は……まあ、なにを言っても仕方ない」
と、高遠は大きなため息を吐いた。
俺はそんなすごい子の彼氏なんだ……とは思うのだが、どうにも現実味がない。それ以前に、彼氏彼女という感覚がよくわからないというのが本音だ。

「とにかく、おれはお前のサポーターズクラブだ。どんと頼ってくれ！」
　サポーターズクラブね……ツッコむのもな……。
「まあ、アリガトな」
　どう表現しようと、高遠がおれの心配をしてくれているって事には変わらないだろう。まあ、多分面白そうだからというのが大きいのだろうが、その辺は気にしない事にしておこう。
「それにしても……多いな」
「そうだな」
　食堂には学生が押し寄せていた。ひしめき合って暑さが倍増している。ホットだ。
「確かにここには冷えた飲み物があるし、食い物もあるが……冷房はないのだぞ！　なのにこれはいかがなものかっ！　自然暖房なんぞ、この直射日光だけで充分！　帰るぞ、孝志」
　そう言うと回れ右をして歩き出す。
「おい、飲み物を買いに来たんじゃないのかよ」
「忘れていたが、冷水機があるじゃないか」
「あるにはあるだろうが……みんな飲んでるだろうから、ぬるくなってるんじゃないか？」
「……孝志、甘いな……。確かに近い場所はそうかもしれないが、上の階の冷水機はどうだと思う？　誰もわざわざそこまで行かないだろう。という事はキンキンに冷えている、そう結論される！」
　いいけどよ……。
　と、校舎内に入ろうとした時、
「お疲れのようですね」
　振り向くと、水城さんがいた。もちろんその横には愛藤さんもいる。
「ああ、本当に大変だった。さすがだな、プリンセス恐るべしといったところか」
「そうみたいですね」
　と、冷静に会話をする高遠と水城さん。
「頑張って下さいよ、菜々も応援していますから」
　そう言われて赤くなる俺と愛藤さん。
「まあ、このおれがついているのだ、大丈夫だ！」
　と、胸を張る高遠。
「ほら、菜々もなにか言ってあげないと」
　そんな高遠はアウト・オブ・眼中のようで、水城さんは菜々ちゃんを前に押す。
「あ、あの……頑張ってね」
「あ、うん……」
　ポリポリと鼻の頭を掻く。すんごく照れるな……これ。
「ぎこちないな……」
「同感です」

　さて、そんな二人とも別れ、俺たちは水を飲んで元の場所に戻った。

グラウンドでは、Ｘｍ競走が行われている。今年は――おいっ、それって飴食い競走ぢゃん！
なんと、飴食い競走がそこで行われている。
顔を小麦粉で真っ白にした生徒がちらほらといる。
そして、この次は俺が出場する事になっている借り物競走だ。
この借り物競走は、組対抗である事には変わりないのだが、一斉に二十人が参加する。
普通のルールと同じで紙が入った封筒が途中にあり、そこに書かれているものを持ってゴールへとなる。もちろん、どの封筒を選んでも問題ない。そして、ゴールで紙と持ってきたものの照合が行われる。
その審査は、校長をはじめとする先生が五人、生徒側からは体育祭実行委員が五人、計十人の審査員によって行われる。八割の合格がないと認められないのだ。
って、なんだか大掛かりに思われるが……。
それよりも、紙に書かれている内容が素直に物であるとは限らない。人である事も屡々だ。
なんだかんだで進行していくが、明らかにおかしいよな……。借り物が〝莫迦〟とかって……どうやって判断するんだ？　つうか、それを考えたヤツが莫迦だろ。
で、俺の番になったわけだが……明らかに殺気を感じる。しかも同じ組のヤツからも感じるのは気のせいだろうか。
「セット！」
この競技はトラック内で行われるので二十人が横一列に並ぶ。
「ゴー！」
と、ゆっくりとスタートする。
別にここで急いでもしょうがない。全てはなにを借りる事になるのかという運だけだ。その引きで全てが決まるといっても過言ではないだろう。
だからここで走る必要などないのだ。
が――どうしてこいつらは全力疾走なんだ！
うわっ、あっという間に最下位だし。
「こら孝志！　さっさと走れ！」
と、後続の組にいる高遠が叫ぶ。
「わかったよ」
と、俺も走るわけだが、すでに封筒は一つしかない。
さて、俺が借りるものはなんだろうな……っ。あ、あんですと――っ！
〝恋人、若しくはＬＯＶＥな人〟
……。
誰だ！　誰だこんな借り物書いたのはっ！
……これって、公衆の面前で告白するようなものじゃないか。しかも、その判断はどうするんだ？　相手の承認なのか？
うっわ……。
でも……これって……やっぱり愛藤さんを連れていけばいい……んだよな。

　でもな……。
　どこか躊躇っている自分がいる。
　どうしよう……。
「おい、孝志！　なにをしているっ！　さっさと紙に書かれているものをゲットしに行かんか！」
　高遠の叱咤が飛ぶ。
　でもよ……。ヘルプの視線を送るが効果はない。
　確かに俺と愛藤さんはそういう関係という事になってるんだけど……なんだろうな、これ。
　恋人……この言葉がとても重く感じる。
　特にあれからなにか変化したわけじゃない。そりゃ、少しは話をするようになったけどさ、俺は愛藤さんの事をなにも知らない。
　もちろん、これから知っていく恋愛もあるのはわかってるし、理想論で綺麗な事しか見ていないのもわかってる。子どもの恋愛だと言われるのも理解している。
　それでも、俺の中ではそうじゃないんだ。
　なんと言われても、俺はそれを望んでいるんだろうな。
　正直、俺は愛藤さんの事をどう思ってるんだろう？　もちろん嫌いじゃない。告白されてドキドキした。それは嬉しかったのかな？
　今になってまた考えてしまう。
　どうなんだろう……。
　ここで即答できない歯がゆさ。
　ここで即答できない無力さ。
　ここで即答できない自分。
　情けなくなってくる。
　ここで即答できない自分が、愛藤さんと付き合っているなんて言えるはずがない。
　自分の心がわからないのに……。
　このまま適当な気持ちで愛藤さんと一緒にゴールに行く事はできない。
　だから……。
「棄権します」
　と、右手を挙げてゴール場所へゆっくりと歩いていく。
「孝志！　お前なにをしている！」
「悪い。これは無理だ」
　なんとも情けない顔してるんだろうな……。
「棄権……ですか？」
　係の生徒に訊かれる。
「はい、これは借りる事ができないので……リタイアでいいです」
　散々だな……。
「わかりました。……緑チーム一名リタイア！」

「た、たかしーぃっ！」
　高遠の叫び声をＢＧＭに、俺はグラウンドをあとにした。
「どうしたんだ、孝志」
　競技が終わるとすぐ高遠が駆け寄ってきた。
「なんでもないよ」
「なんでもないって事はないだろ。いったいなにを引いたんだ？」
　……言えないよな。言わない方がいいよな。
「秘密だ」
　俺は紙をビリビリに破いた。
「しかし……借りてこれないものが借り物競走にあるとは……それを引いた瞬間に負け決定という事か。恐るべし実行委員」
　まあ、勝手に解釈して納得してくれているみたいだし、放っておこう。
「とにかく悪かったな」
「まあ、構わんさ。それよりも元気を出せ。暗い顔はよせ」
　思いっ切り背中を叩かれる。
　そんなに暗い顔してたか、俺……。どうしようもないな……。
　自己嫌悪でいっぱいだ。
　はぁ……。

　午前の最終種目である騎馬戦が終了して昼休憩になった。
　食堂で食べるなり、弁当を食べるなり……まあ、この辺は普段とたいして変わらない。
　俺たちはいつものメンバーで弁当を食べる事になっている。
　とりあえず校庭の隅の木蔭にシートを敷く。
「よお」
　と、手を挙げながら侑浩がやってきた。
「ちゃんと忘れずに来たようだな」
「当然やで、高遠！」
　グッと親指を立てる二人。元気だね……。
「ところで、あの三人は？」
「それがだな……どこかへ行ってしまったのだ」
「なんや、それ。なんか弁当があるっつうから、結構楽しみにしてたんやけどな……」
　そうなのだ。前日に樹梨から、明日は昼の用意をしないでいい、という電話があったのだ。
「ったく……ゲットウニッセイのように体育祭の前日は翌日の弁当を一緒に作るというイベントがあるはずなのにな……」
「なんや、そのゲットウ……なんとかってのは」
「ゲットウニッセイだ。まあ、正式タイトルを略したものだがな」
「いつものヤツか」

「そうだ」
　またかよ……。高遠の美少女ゲーム談義はもういい。
　それにしても、どこに行ったんだ？
　とか思っていると、校舎の方から三人が歩いてきた。
「お待たせ」
　と、それぞれが大きな包みを持っている。
「樹梨……それはもしかして……」
　高遠がワナワナと震えている。
「ええ、私たちが作ったの」
「それって、もしかして愛藤さんも作ったのか？」
　と、かなり興奮している高遠。
「もちろん。三人でそれぞれ作ったんだから」
「マジでか！　感動だ！　まさか、学園のアイドルの手料理を食べられるなんて……孝志の友達でよかった……本当によかった……。サンキュー孝志！　これからも友達でいてくれ！」
　と、抱きついてくる。
「暑苦しい！　離れろ！」
　ーースパン！
「あんたはうるさい。それに、もうアイドルとか言うのはなしって言ったでしょ。学習能力のない……」
「元気ですね、相変わらず」
　と、そんな騒ぎをよそに、水城さんはシートに座ってセッティングしている。
「お、美味そうやんけ」
　と、蓋が開けられた重箱を見ながら、侑浩がよだれを垂らしていた。
　確かに美味そうだ……。
「ほら、菜々も」
「あ、うん……」
　と、愛藤さんもシートに座って持っている包みを開く。
「は、恥ずかしいな……」
　と、照れながら蓋を開ける。
　そこにはサンドウィッチや唐揚げといったものが入っていた。
「……」
　思わず絶句してしまう。
「どうしました？」
　水城さんに言われて我に返る。
「あ、いや……。すごいなと思って……」
「よかったじゃない、菜々」
「……」

と、愛藤さんは顔を赤くする。
なんだか俺も照れてしまう。
が、すぐに申し訳ない気持ちになる。
愛藤さんはきっと俺の事を真剣に想ってくれているんだと思う。なのに、俺は……借り物で迷ってしまった。そして棄権までした。
〝恋人〟という借り物で堂々と愛藤さんを連れていけない自分がいた。嫌いじゃないんだ。だけど、好きかと訊かれると自分でもよくわからない。
告白された時からずっとだ。なにかモヤモヤしたような……変な感じだ。
「さて、時間もあまりないし、食べましょうか」
樹梨も座って蓋を開ける。
「こうして並ぶと豪華やな……」
と、侑浩がえらく感心する。
「そうだな。こういうのも悪くない。樹梨の弁当でさえ美味しそうに見えるとは奇跡だ」
――スパン！
「悪かったわね、奇跡で」
余計な事を言わずに、素直に褒めればいいのに……。
まあ、ウジウジと考えてもしょうがないか。忘れるってわけにもいかないだろうけど、今だけでも考えないでおこう。
「さて、食べるで～」
と、楽しい昼食が始まった。
「それにしてもなんやろな、この成績は」
出汁巻きを頬張りながら侑浩が呟く。
「そうだな。しかし、これはある意味理想なんじゃないか？」
高遠は唐揚げを頬張りながら答える。
「そうかもしれんけどやな」
「なにを言うか。どこかがずば抜けていては白けてしまうだろう」
「それはそれで、おもろいと思うんやけどな……」
「接戦だからこそ萌え……違った、燃えるんじゃないか」
「そんなもんかね……」
「そんなものだ！」
と、食べる手を止める事なく熱い議論を闘わせる二人。
俺たちは完全に無視している。
二人の討論に反応しても仕方ないという事が、一緒に食べ初めて間もない愛藤さんや水城さんもわかってきたようだ。俺と樹梨はかなり前から無視していた。
が。
「フリフリのスコートをちらつかせながら応援されるというのも……」
――スパン！

「あがっ！」
　と、ちょっとでもそっちに話題がいくと、樹梨のスリッパが炸裂する。
「あんたは黙ってなさい」
　そのやりとりに愛藤さんがクスクスと笑う。
　つられて俺も笑う。
　水城さんも笑う。
「なんなんだお前らは。おれが……」
「笑い者やな」
　高遠が言い終わらないうちに、侑浩が追い打ちをかける。
「へぶっ！」
　と、謎の口効果音。
「莫迦ね」
　と、樹梨の冷たいツッコミ。
　そんな日常が繰り返される。
　きっと、こんな幸せで楽しい時間は学生の間だけなんだろうな……。
　でも……とも思う。
　俺たちなら卒業してもこんな風にできるんじゃないだろうか。
　そんな先の事を考えるのは少し早いけど。

　昼食も終わり、午後の最初の種目、仮装競走が始まった。この競技は衣装のユニークさ、出来映えなどで競われる……ただの仮装大会のような感じだ。
　一応、着順も結果に反映されるが前述の二つほど重要ではない。体育祭なので、一応体裁だけそうなっている。
　その様子を見ながら俺たちは次の綱引きの準備にかかる。
　やはり昼の最初の方はこういう走らない種目だろう。
　俺たちの周りには大勢の応援団（もちろんこの体育祭だけの応援団）が今か今かと開始を待ちわびている。彼らの方がテンションが高い。
　別に今年に始まった事じゃないので普通に感じるけどな。
「さあ、絶対に優勝するぞ」
　と、高遠も燃えている。
　まあ、こいつは日頃からこんなだけど。
　とにかく俺も負けたくはない。
　その間に仮装競走は終わって、ついに出番だ。
『綱引きに出場する選手は所定の場所について下さい』
　その放送とともに俺たちはグラウンドに出る。
　綱引きはそれぞれの色から二チームずつの計八チームのトーナメント制で行われる。
　ちなみに俺たちはグリーン・ツーだ。
　綱の中央には紐が結わえられていて、その先には旗が立っている。綱と旗を結ぶ紐は五十センチくらいだろうか、これが倒れた方の勝ちとなる。
　ルールとすればさほど難しいわけではない。
　が、ここで少し違う事があって、新入生は必ず戸惑ってしまう。まあ、それは始まればわかる事だ。
　俺たちは綱の横に相手チームと向かい合って並ぶ。相手はブルー・ツーだ。
　その横にはぞろぞろと応援団の連中が並ぶ。
「絶対に勝つぞ」
「ああ」
　互いに目線を交わす。
　特に俺は借り物競走で足を引っ張ったからな……。団体競技とはいえ、精一杯貢献しないと。
　それに、やっぱり勝ちたい。
「グリーン・ツー！　オー・ファイッ！　オー・ファイッ！」
　高遠が声を張り上げる。なにやらグリーン・ツーのチームリーダーになっているようだ。
「グリーン・ツー！　オー！」
『ファイッ！』

「オー！」
『ファイッ！』
　高遠に続きみんなも声を張り上げる。
　これで心が一つになる。
「セット！」
　その合図で俺たちは外側に向き直り綱を握る。
　この行動に多くの新入生が戸惑ってしまうのだ。それでも、見よう見真似で外側を向く。
　俺たちはそんな事を気にする事はない。まあ、新入生だった頃は驚いたが、不思議とこれが普通に感じられるようになってしまった。年に一度なのにな。
　他の三ヶ所でも準備が整うと、応援団の一人が鐘を取り出す。
　最初の一人が鳴らし始めるのを合図に、他の全員もそれに合わせる。
　チ、チチン♪　チ、チチン♪
　ゆっくりとした鐘の音。
　チチチン♪　チチチン♪
　と、徐々に早くなっていく。
　俺たちは唾をゴクリと飲み込む。
「ゴー！」
　開始の合図だ。
　チチチンチチチンチチチンチチチン♪
「ぅおぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！」
『そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　……！』
　みんなが一斉に外に向かって走り出す。
　その光景はまるでだんじり（山車）を曳いているかのようだ。
『そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　……！』
　咽がつぶれようが、声が嗄れようが、そんな事を気にする余裕もない。
　全身全霊で綱を引く。
　それは両チームとも同じなので、綱はなかなか動かない。
　膠着状態のままとにかく引き続ける。
『そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　……！』
　応援団も声を張り上げる。
　この綱引きは、最後のリレーを除けば最大の山場だ。
　そんな競技を座って見ていられる生徒はおらず、みんな立ち上がって応援している。
　なので、否応にも盛り上がる。
『そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　……！』
　しかし、当の俺たちにはその声はあまり聞こえてこない。綱を引くのに精一杯なのだ。
　力を抜けば負けてしまう。
　綱が手に食い込む。痛い。

　それでも俺たちは引き続ける。
　負けるわけにはいかない！
「孝志、ひっけーぇ！」
「おーぅ！」
　うおぉぉぉぉぉっ！
『そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　……！』
　俺たちは渾身の力で引き続ける。
『そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　……！』
　あとの事なんて気にしていられない。
　今この一瞬が大切なんだ！
「うぉぉぉぉぉぉぉっ！」
　声を張り上げて最後の力を振り絞る。
「でりゃぁぁぁぁぁぁぁっ！」
　高遠も同じのようだ。
『そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　……！』
　みんなも必死に綱を引く。
　こんなに綱引きごときに盛り上がるなんて莫迦だと思われるかもしれない。でも、俺たちにはこれが大切なんだ。莫迦だと思われても、愚かだと言われても、それでも当事者にしかわからない大切な瞬間なんだ。
　俺たちはこの大事な一瞬一瞬を宝物にしていくんだからなっ！
　バサッ！　バサッ！
　大きな旗が振られる。
　どうやら勝敗が決したらしい。
　チ、チチン♪　チ、チチン♪
　ゆっくりとした鐘の音に合わせるように俺たちは徐々に力を抜いていく。
　この際に興奮しすぎて力を抜けなかった生徒が数人前に突っ込む。まあ、恒例だな。
　かくいう俺たちもだが、たいがいの生徒は疲れきってその場にしゃがみ込む。
　勝敗を見る元気すらない。
「はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……」
　みんなが肩で息をしている。
　応援団も見ていただけの生徒たちも……。
　疲れた……。
　これしか考えられないや。
　結果、俺たちは勝っていた。旗は俺たちの方に倒れている。
『やったーぁっ！』
『よっしゃーっ！』
　みんなが飛び跳ねて喜ぶ。

よくそんな元気が残ってたな……。
まあ、それは俺もか。
喜びで疲れなんて吹っ飛んでしまったかのようだ。
「孝志、やったな」
「ああ」
高遠が抱きついてくる。
「うわっ！　やめろって」
「気にするな」
ったく……。
でも、その気持ちもわからなくもない。
『五分間の休憩後、二回戦を開始します。二回戦に進出したチームは、時間がきましたら所定の場所に集合して下さい』
五分間の休憩……。これが有り難いようで結構きつい。
この休憩で緊張の糸が切れるのか、ドッと疲れを感じる。
さて、次の相手は……。
残ったチームを確認する。
勝ったのは、レッド・ワン、イエロー・ワン、イエロー・ツー、グリーン・ツーか……。
イエローは両方残ったんだな……。
って事は、次の相手はイエロー・ツーか……。
強いのかな……？
まあ、どうでもいいか。
とにかく今は休みたい。
「孝志……」
今にも死にそうな顔で高遠が近付いてきた。
「なんだよ」
ちょっと怖いって、それ。鬼気迫るものがある。
「孝志……あとは頼んだ」
「はぁ？」
なに言ってるんだ？
「おれはここで終わりだ……。だから、あとの事はお前に託す」
「だからなにを……」
「お前にしか託せないんだ。お前だけだ」
「ちょっと待て。なんの話をしている？」
「チームリーダー、頼んだ……」
そう言うとその場に伏した。
「あ、あんですとーっ！」
つい大きな声を出してしまう。

「ちょっと待て、高遠……おいって」
　高遠の身体を揺するが、
「くぉぉぉ～……ぐぉぉぉ～……」
　って、寝てるし。
「おい……チームリーダーつったって……どうすんだよ。
『まもなく綱引き二回戦を開始します。選手は所定の位置に集合して下さい』
　おいおい……高遠は寝ちまったし……。
　しょうがないのか。
　……まあ、あの高遠だしな。
　それに、チームリーダーといっても、別段どうって事はないし。
「よしっ」
　と、頬を叩いて気合いを入れる。
　とにかく頑張るしかないか。

　綱の横に並ぶ。目の前にはイエロー・ツーの面々。
　やっぱり疲れている感じだな。それはこっちも同じだけど。
　この綱引き、後半になればなるほど死にそうになるよな……。疲労の色が濃すぎる。疲労困憊の状態って結構やばいんじゃないのか？
　まあ、そんな事はこの際どうでもいいか。
「グリーン・ツー！　オー・ファイッ！　オー・ファイッ！」
　高遠がしたように声を張り上げる。
「グリーン・ツー！　オー！」
　もうやけくそだ！
『ファイッ！』
「オー！」
『ファイッ！』
　俺の声に続きみんなも声を張り上げる。
　これで心が一つになる。
　だが、その声にも疲労が伺える。
　みんなも疲れてるんだよな……。
　でも、頑張ろう。
「みんな、疲れが残っているだろうけど、頑張ろう！　絶対に勝つぞ！」
　士気を高めるために声を掛ける。
『ぅおぉぉぉぉぉっ！』
　みんなは拳を挙げて叫んで答えてくれた。
　よし、これなら大丈夫だ。
　絶対に勝とう。

「セット！」
　大きく息を吐く。
　集中力だ。この数分……それが全てだ。
　外側を向いて綱を手に取る。
　チ、チチン♪　チ、チチン♪
　ゆっくりとした鐘の音。
　チチチン♪　チチチン♪
　と、徐々に早くなっていく。
　何度体験してもこの瞬間は緊張する。
「ゴー！」
　開始の合図だ。
　チチチンチチチンチチチンチチチン♪
『そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　……！』
　みんなが一斉に外に向かって走り出す。
　絶対勝つんだ！
「みんな、引っけぇっ！」
『ぅおぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！』
　俺たちは全力で引く。
　前に向かって足を進める。
　まるでビルでも引っ張っているみたいだ。
　相手も疲れているはずなのに……。
　きっこう拮抗してなかなか動かない。
「くっそーっ」
　歯を食いしばる。
『そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　……！』
　腹の底から声を振り絞る。
『そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　……！』
　その声が力になる。
　俺たちはゆっくりと進む。
「あと少しだ。ガンバレ！」
『ぅおぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！』
　絶対に勝つ！
『そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　……！』
　一気に力を入れて引く。
　バサッ！　バサッ！
　大きな旗が振られる。
　どうやら勝敗が決したらしい。

　チ、チチン♪　チ、チチン♪
　ゆっくりとした鐘の音に合わせるように俺たちは徐々に力を抜いていく。
　二回目ともなると、前に突っ込む生徒はいない。が、その代わりにその場に倒れ込む生徒が多くなる。
　どっちが勝ったんだ……。
　俺は中心を見る。
　旗は……俺たちの方に倒れている。
「みんな、勝ったぞ！」
　一瞬の沈黙。
『ぅおぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！』
　と、次の瞬間には笑顔が溢れる。疲れを吹き飛ばす笑顔だ。
　勝利という喜びが疲れを忘れさせてくれる。
　やったぞ、高遠。
　高遠がいる方を見る。
　高遠は起き上がってこっちを見ていた。
　親指を立てた拳を突き出す。高遠も同じように返す。
　ホント青春だね……。
『十分間の休憩後、決勝を行います。イエロー・ワンとグリーン・ツーの選手は時間通りに所定の場所に集合して下さい』
　疲れた……。高遠がいる場所まで足を引きずるように歩いていく。もう、身体ががたがただ。
「よう、勝ったぞ」
「さすがだな」
　お互いの拳をぶつける。
「いよいよ決勝だ。ここまできたら……」
「当然だろ。負けるつもりなんてないさ。そうだろ、高遠」
「もちのろんだ！」
　おうおう、やけに元気そうじゃないか。
「というわけで、おれは充分に休ませてもらった。決勝戦は頑張るぜ」
　……なに？
「お前、決勝に出るつもりなのか？」
「当然であろう。おれはグリーン・ツーのチームリーダーだぞ」
「それを俺に押しつけたのは何処の誰だ」
「細かい事を気にするな。そんなにちまちましてると、プリンセスに嫌われるゾ。やはり男は懐が深くないとな」
「そ……。ったく……確かにチームリーダーはお前だからな。邪険にするわけじゃないけどよ」

「それならよろしい！　さて、イエロー・ワンを叩きのめすぞ！」
　と、さっきまではくたばりそうだったのに……。ほんの数分で回復してからに……。
　まあ、こいつはこのくらいじゃないとらしくないからな。
　高遠は元気な足取りでチームメイトがいる場所に歩いていく。
「二回戦突破おめでとう。諸事情で二回戦は離脱してしまって申し訳ない。しかし、決勝戦は二回戦の分も頑張るつもりだ。……みんな、絶対に勝とう！」
『おーっ！』
　みんなが拳を突き上げる。
　やっぱり高遠はこういうのが似合っている。
　あいつは仕切るのが好きだし得意だし。高遠にしかできないだろうな。
　それにみんな、高遠だからだろうけど素直だ。完全に一つになっている感じだ。
『まもなく綱引き決勝を開始します。選手は所定の位置について下さい』
　よしっ！
　俺は気合いを入れて綱の場所に向かう。
「絶対優勝するぞ！」
『おーっ！』
　否が応にも盛り上がる。
「グリーン・ツー！　オー！」
『ファイッ！』
「オー！」
『ファイッ！』
　俺の声に続きみんなも声を張り上げる。
　これで心が一つになる。
　疲れなんてどこかにいってしまったかのようだ。
　疲れなんて感じている暇がないのかもしれないな。
　なぜなら、俺たちは勝つ事しか頭にないんだから。
　みんなの目に闘志が感じられる。
　そうさ、絶対に勝つんだからな。
「セット！」
　いよいよだ……。
　俺たちは外側を向いて綱を握る。無意識に力が入ってしまう。
「まだ力を入れないで下さい……」
　審判が全員に言う。
　チ、チチン♪　チ、チチン♪
　ゆっくりと鐘が鳴り始める。
　チチチン♪　チチチン♪
　と、徐々に早くなっていく。

今までとは比べものにならないくらい緊張する。
ゴクリと唾を飲み込みたいのだがカラカラだ。
「ゴー！」
開始の合図だ。
チチチンチチチンチチチンチチチン♪
『そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　……！』
みんなが一斉に外に向かって走り出す。
絶対勝つんだ！
「みんな、引っけぇっ！」
『ぅおぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！』
俺たちは全力で引く。
『そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　……！』
前に向かって足を進める。
『そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　……！』
負けられない。
絶対に負けないじゃないんだ、絶対に勝つんだ！
『そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　……！』
「ひっけぇぇぇぇぇっ！」
高遠が叫ぶ。
『ぅおぉぉぉっ！』
みんなが答える。
『そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！
そーりゃ！　……！』
「がんばれー！」
「絶対勝てーっ！」
応援席からもげき檄が飛ぶ。
そんな事されちゃ、応えないわけにもいかないじゃんか。
『そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　……！』
その応援が俺たちの力になる。
さらに力を込める。
重い一歩を踏み出す。
一歩でも前に進む。
『そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　……！』
「もう少しだーっ！」
高遠が声を張り上げる。
『そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　……！』
応援団も一緒になって声を出す。

『そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　……！』
　観戦している生徒たちも一緒になって声を出す。
　なんだか、見事なまでに学園全体が一つになってるよな……。
『そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　……！』
　選手、応援団、観戦者……みんなの声が一つになる。
　イエロー・ワンも、俺たちグリーン・ツーもそれぞれの声援を受けて火事場の馬鹿力の如く綱を引く。
　そう、綱を引っ張るというただそれだけの行為なのだ。
　その行為に俺たちは今のこの瞬間を……俺たちの全てを出し切ろうとしている。
　絶対に勝つ！
　誰もがそれだけを考えている。
『そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　……！』
　一歩。
　相手よりも一歩。
　たった一歩でいい。
　前へ。
　一歩でも前へ。
　重い。
　重い一歩。
　鉛でも引いているかのよう。
　足が地面に釘付けされているかのよう。
　思いは一つ。
　一歩でも前へ。
　重心を前に。
　――ずざっ！
　わずかに引き戻される。
　くそっ！　負けるもんか！
　――ずざっ！
　砂が滑る。
　力を入れれば入れるほど滑る。
　ちくしょう。ここで負けるわけにはいかないんだよ！
　負けてたまるか！
　勝つんだ！
　ぅおりゃぁぁぁっ！
『そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　……！』
　綱を握る手が痛い……。
　でも、それはみんな同じだ。

『そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　……！』
　声を合わせると心もひとつになっているような気がする。
　いや、ひとつだ！
『そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　……！』
　もう少し……。
　もう少し……。
　もう少し……。
『そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　……！』
　ああ、なんだかぼぅっとしてきた……。
　もうちょっと……。
　もうちょっとでいいんだ……。
『そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　……！』
「ぅをををををををっ！」
　残った力を全部振り絞る。
　このまま倒れても、そんなの知るか！
　負けるよりはマシだ！
『そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　……！』
「らすとぉぉぉぉぉっ！」
　高遠が叫ぶ。
『そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　そーりゃ！　……！』
　それに答えるようにみんなも叫ぶ。
　そして、最後の力を一気に出し切る！
　バサッ！　バサッ！
　大きな旗が振られる。
　どうやら勝敗が決したらしい。
　チ、チチン♪　チ、チチン♪
　ゆっくりとした鐘の音。
　それを耳にしながら、俺たちはその場に崩れる。
　勝敗は決した。
　終わった……。
　終わったんだ。
　どっちが勝ったのか、そんな事を確認しているような気力は誰にもない。
　応援団ですらその場に座り込んでしまっている。
　観戦していた生徒たちも興奮が一気に冷めたように放心している有り様だ。
　俺も……ちょっと……。
「孝志！」
　高遠……か……。

「おい、しっかりしろ……」
　悪い、ちょっと休むわ。

「う、ううん……」
　……ん？　ここは……？
　白い天井……ああ、保健室か……多分。
　俺……気絶しちまったんだな。おそらく。
　あれ？　手……温もりを感じる。誰だろ……っ！
「ち、愛藤さん……」
　そこにいたのは愛藤さんだった。うわっ、びっくりした……。……あぁ……心臓のドキドキが止まらない。
「よかった……目、覚めた……」
「どうだ、そろそろ起きたか？」
　そこへ高遠がやってきた。慌てて愛藤さんが手を放す。
「大丈夫……？」
　樹梨もいるようだ。
「綱引きで力尽きるなんて……やれやれですね」
　水城さんもいる。
「ほんまやな。まあ、あれはええ勝負やったからな……。しゃーないゆーたらしゃーないけどな」
　侑浩も。
「悪い。心配かけて……」
「おれたちに礼はいらないさ。まあ、お前をここまで運んだ礼くらいなら承るがな」
「ほんまや。それくらいの礼はもろとくわ」
「そうね、この莫迦たちにお礼なんてもったいないわ。お礼なら、ずっと付き添っていてくれた彼女に言わないと」
「え、あたしは……そんな……」
　樹梨に肩を叩かれて頬を染める愛藤さん。
「そうなんだ……ありがとう」
「え……あ、うん」
「みんなも、ありがとう」
「気にするな」
「そういうこっちゃ」
「別になにもしてないし」
「そうですね」
　高遠……。侑浩……。樹梨……。水城さん……。ホント、ありがとう。
　もちろん、愛藤さんも。

……はぁ。なんだかんだで俺の周りっていいヤツばっかなのかもな。案外、恵まれているのかも。
マイナスとプラス。
マイナスに感じていてもどこかでプラスになっている、か……。
〝人間の幸・不幸は釣り合っている。今を幸せと思うならいつか不幸になるだろう。今を不幸と感じるのならいつか幸福が訪れるだろう。問題は、その時にそれを感じる事ができるかという事だ〟
誠司さんの言葉。
それを感じる事……。
はい、俺は今幸せを感じています。
でも……これから不幸になるって事……だよな？
それって……どうなんだろう。
「さて、わたしたちはお邪魔ですし。退散しましょうか。じゃあ、菜々、頑張ってね」
「そうね。私たちはそろそろ帰るわ」
「そうするか。正直おれは疲れている。早く帰って惰眠を貪りたい」
「そうやな。オレかて最後のリレーでクタクタや……」
おのおの各々はそう言うと、保健室を出ていった。
「あ、あのさ……」
「なに？」
「もしかして、とっくに終わってる？」
愛藤さんはコクリと頷いた。
「今……何時？」
「夕方の六時……かな」
「……遅くまでゴメン。……えっと……ありがとう」
「そんな……。でも、大丈夫そうでよかった」

ちなみに、あの綱引きは俺たちグリーン・ツーの勝利だったらしい。
俺は気を失って高遠と侑浩に保健室に運ばれたわけだ。
ちなみに、体育祭は……黄の優勝だったそうだ。
なんでもリレーで圧勝したらしい。
とにかく、色んな意味で思い出深いものになったな……。

「というわけで、決定な」
「おい、というわけでって……しかも勝手になに言って……」
「馬鹿が！　物語は突然に始まるんだぞ。そう、それは恋も同じ……」
　と、どこか遠くを見つめる高遠。
「まあ、ええやないか」
「侑浩まで……」
「べつにいいんじゃない？　高遠にしてはいい考えだと思うわよ」
「樹梨までかよ……」
「わたしも賛成です。悪くないと思いますから」
「水城さんまで……」
「あ、あたしも……」
　なっ……。
「というわけで、全員賛成というわけだ。孝志、反対なんてしないよな」
「あ、ああ……」
　なんなんだ、これは……。

★　★　★

　昼休み、こんな経緯で決定してしまった夏祭り。
　確かに悪くはない。どちらかといえば歓迎だろう。
　なのにどうしてだろうか……素直に歓迎できない俺がどこかにいる。
「楽しみだな、孝志よ」
「ああ、そうだな……」
　生返事をしてしまう。
　俺は高遠と一緒に帰っていた。愛藤さんと水城さん、そして樹梨は用事があるとかで先に帰ってしまった。なので、仕方なく俺は高遠と一緒に帰っている次第だ。
「……どうした、その〝心ここに在らず〟って感じは。おれと一緒に帰るのがそんなに不満なのか！　確かに、愛しの彼女と一緒に帰れないのは残念だろう。しかし……仕方あるまいて」
「いや……そんなわけでもないんだけどな」
「もしかして、夏祭りは反対なのか？　しかし、反対する理由がおれにはわからない。二人きりで行きたかったとか？　それなら悪い事をした。しかし、向こうでバラバラに行動すればいいだろう」
「そうだな」
　本当に心ここに在らず状態だな……。
「……お前、変だぞ？」

「そうか？」
　そう言いつつも、自分でも変かもしれないとは思っている。
「悩み事でもあるのか？　おれでよければ相談にのるぞ」
　いや……それは遠慮したいな……。
「ああ、大丈夫だ。じゃあ、な」
「そうか。まあ、おれでよければいつでも相談にのってやる」
「サンキュな」
　まあ、この心遣いは嬉しい。それだけは有り難く思う。
　が、きっとそんな事はこの先ないだろうな……。
　俺は高遠と別れて椎崎さんの家に行く事にした。誠司さんになら相談できるし。

★　★　★

　誠司さんの家の前に立ち、見上げる。
　どうしようか……。
　ここまで来て考えてしまう。
　ここに来てなにをしようというのだろうか……。なにをするのだろうか……。
「あら、孝志君じゃない」
　そんな事を考えながら突っ立っていると、亜依さんに声を掛けられた。どこかに出掛けていたのだろう。
「あ、こ、こんにちは」
「こんにちは」
　にっこりと笑顔で返してくれる。
「どうしたの、孝志君。誠司さんになにか用なの？　……それとも、またあの人の意地悪でなにかされてるとか……もう、誠司さんは……」
　と、いつもがいつもなだけに、亜依さんもそういう想像をしてしまうようだ。まるで子どもをいさ
諫める母親そのものだ。
「あ、いえ、そういうのじゃないです。ただ考え事をしていて……」
「考え事？　よければ相談にのるわよ」
「ありがとうございます」
「ちなみに、恋愛関係ならあの人に相談するのはやめた方がいいわよ」
「えっ？」
　やっぱり女性はするどい……。それとも、男が鈍感なだけなのか？
「あの人、ああ見えてそういうのは不器用だから……。参考にならないと思うけど」
　そうなのか……。そうだったのか……。
「そうなんですか……。でも、そんな風に言われている誠司さんだって、亜依さんみたいな素敵

な人と……」
「孝志君、褒めたってなにも出ないわよ。まあ、あがりなさいよ。相談ならあたしが聞いてあげるから」
「は、はい……」
　なんだかなし崩しに相談しなければならないような状態になった。

「……なるほどね……」
　俺は今思っている事を正直に話した。
「やっぱり、こんなのってダメですよね」
「まあ、ダメかどうかはともかくとして、孝志君って誠司さんに似てると思う」
「えっ？　そうですか？」
「あの人もね、こういうのは不器用なの。でも違うのは、誠司さんは自分の気持ちの正直だったって事。ただ、あの人は素直すぎて軟派に思えたんだけどね。それでも、好きだなって気持ちがあるのがわかったの。ある時、ふとそう感じるものなの」
　自分の気持ちに正直……か。なんだか痛いな……。
「好きになろうと思っても、本当に好きにはなれないと思うな。そういう感情って自然なものだと思うから。……人ってね、そういう時期があると思うの。大切な人を必要とする時期とそうでない時期。だから、無理に人を好きにならなくてもいいと思う。その時期が来れば、自然と人を愛せるようになると思うから」
　好きになる時期か……。そういうものなのかな……。
　確かに今までそういう事ってなかったけど、別になんとも思わなかった。別に好きな人なんかいないし……そのくらいだった。
　周りが彼女などの話をしていても、俺は関係ないや、で終わらせていた。羨ましいとかは思わなかった。
　正直、どうでもいい事だな、としか思っていなかった。
　亜依さんの言葉を借りれば、俺はそういう時期じゃなかったんだろう。
　でも、今はそういう事を考えてしまう。今はそういう時期なのだろうか？
「もし今に無理があると思うなら、それは孝志君がそういう時期じゃないっていうだけ。運命の人はその子かも知れないけど、今はその時じゃないんだと思うな。それは、別に相手に失礼なわけじゃないの……って、ごめんなさいね、なんだか偉そうな事ばっかり……」
「いえ、そんな事……。すごく参考になりました」
「本当に？　でもね、今のって、あの人の書いたものにあった言葉なの」
　えっ？
「知っているでしょうけど、あの人って小説だけじゃなくて、こういう……なんていうのかな、論文……でもないな、エッセイというか、あの人が考えている事を文章にしただけっていうのかな……でも、なんだかそういうものも書いてるでしょ。まあ、それは、その一節なの」
　確かに、そういうものを書いているという事は知っているし、少しだけ読ませてもらった事も

ある。だけど、内容まではさすがに覚えていない。
「さて、本題なんだけど、孝志君は、その愛藤さんって人の事、どう思ってるの？」
「どう、ですか……？」
　なんだか、率直すぎて逆に理解するのに時間が掛かった。
「そう。……一応、お付き合いしてるんでしょ？　それは愛藤さんの事が好きだから？　それとも同情？　学園のアイドルだから？　彼女がいるんだって自慢したかったから？　……どうして付き合ってるの？」
「それは……」
　どうして付き合ってるのだろうか？　最初は、驚きがいっぱいでなにも考えられなかった。だからＯＫした。
　勢いだったのだろうか？
　それとも、心のどこかで付き合えるなら誰でもよかった、なんてものがあったのだろうか？
　自分でもサッパリわからない。
「……それで悩んでいるみたいね。じゃあ、これは宿題。明日また今日と同じ時間に来てちょうだい。その時、返事を聞かせて、ね。今日の明日って急がせるみたいで悪いけど、時には背水の陣というか、切羽詰まった感じもいいと思うの」
　亜依さんはそこで一度言葉を切って俺をじっと見る。
「慌てなくてもいいけど、少し急いだ方がいいと思うな」
「……はい。わかりました」
「それがハッキリとすれば、今孝志君の中にあるモヤモヤがなくなるから」

★　★　★

　自分の部屋のベッドに寝そべり、亜依さんの言葉を反芻する。
「自分の気持ち、か……」
　自分の事なのに全然わからない。まるでそこだけ別の世界にあるようで、見る事も触れる事もできない。
　俺はどうして愛藤さんと付き合っているのだろうか？　いや、そもそもこういうのは付き合っているというのだろうか？
　なんだか、友達として付き合っているようにしか見えないのではないだろうか？
　そこに恋愛感情というものがあるのだろうか？　ただの友情なのだろうか？
　彼氏彼女って、よくわからない。
　街中には数多くのカップルがいる。その人たちは、どうしてああいう風にできるのだろうか？
　どうして、ああも自然にできるのだろうか？
　それが……どうして俺にはできないのだろうか……。
　亜依さんから出された宿題。俺は愛藤さんの事をどう思っているのだろうか……。
　嫌いではないという事は断言できる。嫌いなら一緒にいたりなんてしない。

じゃあ、好きなのだろうか？　確かにどちらかと言われればそうなる。
その好きはどういう好きなのか？　友達として？　恋人として？
……わからない。
それが自分の中でハッキリとしない。
今まで恋愛経験なんてなかった俺には全く未知の事すぎる。
そういえば、告白されたその日、高遠にその事を言ってなにか言われたな……。
なるほど、俺はあの時から全然成長していないんだ……。
このままじゃ、愛藤さんに悪い。なによりも失礼だ。向こうは本当の気持ちを俺に告げてくれた。なのに……なのに俺は、まだ本当の気持ちを言っていない。なによりも気付いていない。
ゴメン……。もう少しだけ待って欲しい。絶対に自分の気持ちに気付いてみせるから。
今はそう謝るしかできない。
ホント、自分が情けないと思う。
でも、情けないのならそれなりにでも、答えを出さなければいけないだろう。
ずっと深夜まで考えていたが、気付けば眠っていたようで、窓から光が射し込んでいた。
結局どうなんだろう？
答えが出たような、出ないような、出ないような……結局、出ていない。
「なんだかな……」
仰向けになったまま髪を掻き上げる。そして、じっと天井を見る。
情けないな……。

★　★　★

「どうした、孝志？」
「あ、ああ、高遠か。なんでもない」
「はぁ？　なんでもなくはないだろ？　どうしたんだ、そんなぼぅっとして……」
「そうか？」
「そうだぞ。全然お前らしくないぞ」
俺らしくない、か……。そうかもしれないな。今までこんなに考えた事なんて、悩んだ事なんてなかったもんな……。
蜘蛛の巣でも張ってるのかな、俺の脳には……。
「大丈夫？　気分でも悪いの？」
と、樹梨にも心配されている。
「もしかして、夏祭りが楽しみで眠れなかったとか？」
侑浩の言葉は冗談なのか本気なのかよくわからない。
「そんなわけないだろ。夏祭りは少し先じゃんかよ」
「そうやな。そんなんで眠られへんて、そりゃおかしいわな」
「そうそう」

と、楽しそうにしている。いつもなら楽しいのだろうが、今はそれどころじゃない。
亜依さんに出された宿題をなんとかしないとな……。でないと、これから先、なにもできないような気がする。
〝人生とは悩むために存在するものであり、悩む事を愚かだと思ってはいけない。それは、生きている証なのだから〟
えっ？　なんだ？
突然、思い浮かんだ言葉。どこかで聞いた……いや、読んだ言葉だ。どこで？
誠司さんだ。誠司さんが書いた本にあった言葉だ。
「そうか！　それでいいんだ！」
今まで何度となく読んだ。だから、ほとんど暗記してしまっている。完全でなくても、所々印象に残った文章は覚えている。
そして、もう一つの言葉も思い出した。
〝今いる状況に流される事も悪くない。その中で自分さえ見失わなければ。もしかすると、その中にこそ真意があるかもしれない〟
「どうしたんだ、孝志。本当に大丈夫か？」
突然叫んだ事に驚いたのか、みんなが俺の方を見ている。
「ああ、大丈夫だ。……そうだよ、そうなんだよ」
心のモヤモヤが晴れたような気がする。

★　★　★

放課後、さっそく椎崎家に向かった。昨日よりは少し早いが、問題ないだろう。
――ピンポーン！
と、インターフォンを鳴らす。
『はい、どちら様でしょうか？』
亜依さんの声だ。
それにしても、どこかホッとしている自分に気付く。
それだけ、誠司さんの場合は疲れるのか……と、改めて感じてしまう。
「孝志です」
『いらっしゃい。あがってちょうだい』
「はい」
俺は門を開け家の中に入る。宿題は解けたんだ。もう大丈夫。
「おじゃまします」
「いらっしゃい」
亜依さんが玄関で待っていた。
「その様子だと、宿題は解けたみたいね」
「はい」

　俺は満面の笑みだったと思う。
「よかった」
「亜依さんと誠司さんのお蔭です」
「あの人の？」
　亜依さんは意外そうな顔をした。
「はい。誠司さんの本の言葉を思い出したんです。そのお蔭で……」
「なるほど……。あの人って、微妙なところで人に影響を与えるのね。あたしの言葉もあの人から借りたようなものだし。なんだかな……。ちょっと悔しいな」
　と、少女そのままといった感じだった。きっと、心はずっと出会った時のままなのだろう。亜依さんも誠司さんも。
「自分の気持ちがわかったのなら、彼女に対してどうすればいいのかわかるわね？」
「はい。今までと変わらず、同じように……でも、そこには確かな気持ちを込めて」
　それが俺が見つけた答えだった。
　今までと別に態度を変える必要なんてない。彼女だからって特別視するわけじゃない。ただ、今までと一緒で構わない。
　だけど、その中に大好きだっていう気持ちを込めればいいんだ。その想いがあればそれでいいんだ。迷っていたら、相手も不安になってしまう。だから、もうそんな思いはさせない。そうすればいいんだ。
　これが、俺なりに考えた事だ。
「それが孝志君の答えならそれでいいと思う。正解は一つじゃないし、自分で自分の本当の気持ちに気付く事が大切なんだから。だから、それでいいと思う」
「……ありがとうございます」
　完全に心のもや靄が晴れた今なら、今までと違うと思う。
「ありがとうございました」
　もう一度お礼を言う。
「そんなにお礼を言ってもらわなくていいわよ。あたしはただきっかけを与えただけ。その事に気付いたのは孝志君自身だし、手助けをしたのはあの人の言葉。あたしはなにもしていないような感じじゃない？」
「そんな事ないですよ……。だって、どんな事でも最初の一歩がなければなにも始まりませんから。その最初が一番大切なんですよ。だから、お礼はきちんと言わせて下さい」
「そう……まあ、孝志君が納得してくれればいいんだけどね」
　俺はその後も何度もお礼を言って家に帰った。

ーードンドン！
という、腹に響くような和太鼓の音が響いている。それに重なるようにして笛の音やなにかの弦楽器の音が聞こえる。
結局、俺も夏祭りに参加する事にした。俺が出した答えからすれば当然の結果だ。
「なあ、女子たちって遅いと思わんか？」
「侑浩、そんな事を言ってはいけない。女の子というものは、なにかと時間が掛かるのだ。それに、これが一番大事なのだが、今はまだ待ち合わせの二十分前だ」
「マジでか？　おい、オレは確かにこの時間に待ち合わせやって……あれ嘘か？」
「嘘とは人聞きの悪い……。おれたちが遅れてはいけないだろ？　かといって、待ち合わせ時間ギリギリに来るなぞ常識外れもいいとこだ。現にお前はその待ち合わせ時間ギリギリに来ただろうが」
「当たり前やろ。待ち合わせ時間より早く来る必要があるかっちゅうねん！　遅れてへんねんからええやないか」
「それがいかんというのだ。少し前から来て待っているという事が大事なのだ。まあ、それは追々わかればいい事さ」
と、こんな調子で俺は退屈せずにその高遠が仕組んだ待ち時間のズレを過ごしていた。
まさかこんな事まで仕組んでいたとは思ってもいなかった。待ち合わせにしては少し早いから、なにかあるだろうとは思っていたが、こういう事だとはな……。長年こいつといるが、未だにサッパリわからない謎の存在だ。
とにかく、そんな事をしている間に他の三人もやってきた。本来の待ち合わせ時間よりも五分ほど早い。普通はこのくらいでいいようにも思えるが……高遠に言わせれば違うのだろう。
「お待たせ。待った？」
と、樹梨がお決まりの台詞を言う。
「イヤ、別にお前を待っていたわけじゃない。おれは学園の……」
ーースパン！
「……てぇ～」
高遠が言い終わる前に樹梨のいつものアレが炸裂した。
「お前、なんで今日も……」
「あんたがいるからに決まってるでしょ」
「マジかよ……」
高遠は頭を抱えたままうずくまる。愛藤さんはそんな二人を心配そうに見ている。まあ、どう対処すればいいのかわからないのだろう。こういう状況での正しい行動は〝無視する事〟だ。関わらない方がいい。
「こんばんは、愛藤さん」

　どうしてもそっちを気にしてしまう愛藤さんに声を掛ける。
「あ、こんばんは。もしかして待った？」
「いいや。そんな事はないさ」
「そうですよね。こういう場合のお決まりといえば、今来たところだよ、というのが王道ですよね。現実的に考えればそんな事はあるはずないのですが。実際は三十分くらい前から待っていたというのが本当でしょうか。……まあ、これはこういう場合によくあるパターンの一つで、彼が本当にそんな事をしたかどうかはわかりませんが」
　明らかにわかってる目で水城さんが俺を見る。
「ま、まあいいじゃない。それにしても可愛いね、その浴衣」
　愛藤さんは可愛いイルカが描かれた浴衣を着ていた。赤い帯もなんだか可愛い。
「わたしはリアル金魚の方がいいと言ったんですけど、菜々がどうしてもと……」
　リアル金魚？　どんな絵柄だ？
「彩、それはちょっと恥ずかしいよ……」
「そうかな？　わたしはいいと思うけど……」
「じゃあ、彩が着ればいいじゃない」
「わたしは、こういう落ち着いたものの方がいいから」
　そういう水城さんは紺色の無地の浴衣に白い帯。なんだか落ち着いているというか、なんというか……形容しがたいものがある。
「ねえ、室田君。彩の浴衣ってなんだか落ち着きすぎてない？」
「……あ、ああ。もうちょっと明るくてもいいんじゃないか？」
「明るくですか……あれくらいに？」
　そう言って水城さんが見たのは樹梨だった。
　樹梨はピンク系のパステルカラーを基調とした浴衣にクリーム色の帯を締めている。
「まあ、あれはあれでいいんじゃない？」
　悪くはないとは思うが……というよりも、むしろ明るくていいんじゃないだろうか。
　ちなみに、俺たち男どもは全員普段着である。雰囲気もなにもあったものじゃない。
「室田さんはそんなに他の女の子を見ていないで、菜々を見てあげて下さい」
　どうやら魅入ってしまっていたのだろうか、水城さんが耳打ちする。
「あ、そうだな。……でも、俺は愛藤さんの浴衣が一番いいと思うけどな。……その、可愛いし、涼しげだし……よく似合ってるよ」
　なんだか水城さんに促されるように言った気もしなくはないが、本心である。
「おーい！　花火大会まで自由行動にしないか？」
「そうですね。それがいいと思います」
　高遠の提案に水城さんが賛成する。
「というわけで、開始時間の十分前にここに集合な。ちょっとばっかし、穴場を知ってるからさ」
「わかった」

　穴場というのが気になるが、とりあえず了承の返事をする。
「じゃあ、お二人はどうぞご自由に」
　そう言った水城さんを始め、みんなに追い出されるように俺と愛藤さんは歩き出さざるを得なくなった。
「なんだろうな、みんな……」
　ふと呟いてしまった一言。ハッとして愛藤さんを見ると、少し淋しそうな表情をしていた。
　やってしまった……。と、後悔しても言ってしまったものはしょうがない。
「あのさ、なにか食べたいものとかある？」
　ふるふる。
「じゃあ、なにかしない？　輪投げとか金魚すくいとか……」
　ふるふる。
「じゃあ、少し休もうか」
　ふるふる。
　え？　……なにかを食べるわけでもなく、なにかをするでもなく、休憩するでもないって……なに？　なにをすればいいの？
「もう少し、一緒に歩こう」
　困っている俺に愛藤さんがポツリと言った。
「あ、うん。そうだね」
　その言葉に従うように、俺と愛藤さんは並んで歩いていた。
　歩いていると、時々お互いの手が触れる。そのまま手を繋ごうとは思うのだが、どうしてだか恥ずかしい。
　そんな状態のまま、俺たちは歩き続けていた。
　気が付けば、祭囃子もどこか遠くに感じるような場所にまで来てしまった。
「あ、会場から結構離れちゃったんだ……。愛藤さん、戻ろうか」
　そう言って戻ろうとすると、なにかに引っかかったような感触がして立ち止まる。見ると、愛藤さんが俺のシャツの裾を引っ張っていた。
「ごめんなさい。もう少しここにいて」
「あ、ああ。別にいいけど……」
　俺たちは近くにあったベンチに腰を下ろす。ほとんどの人が祭の会場にいるのだろうか、少し離れると誰の姿もない。
「星が綺麗だね……」
　俺は空を見上げて呟く。澄み切った空気のお蔭だろうか、星がハッキリと見える。
　時折吹いてくる風も心地いい。
「ごめんなさい」
　そんな風に乗って愛藤さんの言葉が聞こえた。
「え？」
「ごめんなさい。室田君も、お祭り楽しみたかったよね」

　愛藤さんは申し訳なさそうに俯いてしまう。
「……」
「ごめんなさい。あたし、太鼓の音とか苦手なの」
　震えるような、か細い声。なんとか振り絞ったという感じがした。
「じゃあ、どうして……」
「……」
「ごめん。変な事訊いちゃって。……まあ、俺も太鼓の音ってそんなに好きじゃないしさ。なんだか、響いてきて自分が壊されそうな感じがして怖いっていうか……」
「そうなんだ」
　愛藤さんが顔を上げ俺を見る。
「ごめんなさい。あたし、昔ね、心臓が弱かったの。……あ、今はそんな事ないんだよ。みんなと変わらない。でも……昔そうだったからかな、大きな音とか響く音ってなんだか苦手で……」
　一瞬、過去の記憶がフラッシュバックした。
　ドクン！
　心臓が大きく高鳴るのがわかった。
　なんだろう、この感じは……。忘れてしまっていた忘れちゃいけない記憶……。
　ドクン！
『孝ちゃん、どうしたの？』
「室田君、どうしたの？」
　愛藤さんの声に、ハッと現実に引き戻される。
「あ、ああ。なんでもない。ごめん」
　なんでもなくない。どうして忘れていたんだろう。大切な友達の事なのに……。
　だけど、今は……。
「じゃあ、もしかして打ち上げ花火も苦手？」
「……できれば、避けたいかも」
「そっか……」
　そう言って俺は立ち上がる。
　自分を置いて行ってしまうと思ったのだろうか、愛藤さんが淋しそうな目で俺を見る。
「じゃあ、二人だけの花火大会しようか」
「え……？」
　突然の事に驚いたようだった。
「ほら、そうと決まれば行こう」
「でも、みんなは……」
「いいって。どうとでも勝手に解釈するんじゃない、高遠がいるし」
「勝手にって……」
　まあ、高遠の事だから駆け落ちとかなんとか言うんだろうけど。そんなの、どうでもいいさ。

★　★　★

俺たちは運良く開いていた雑貨屋で花火セットとライターを購入した。雑貨屋の店主にこれから花火をするのかと訊かれたので答えたら、バケツを貸してくれた。
俺たちはお礼を言うと、近くの公園に向かった。
普段の夜なら子ども連れが多く来るのだろうけど、今日は花火大会だ。そんな日にわざわざ公園で花火をしようなんて誰も考えない。案の定、誰もいなかった。
バケツに水をくんで準備を整える。
「じゃあ、始めようか、俺たち二人だけの花火大会」
「うん」
俺はライターで花火セットの中に入っていた蝋燭に火を点けた。
――パンパンッ！
と、遠くから花火の音がするが、ここからは全く見えない。
「あっちも始まったみたいだね」
「うん。でも、みんな捜していないといいけど……」
「多分それはないと思うけど……きっと、いつもみたいに俺たちの事待ってなかったりするんじゃない？」
「きっと、そうだよね」
「そうだって。俺たちも楽しもうよ」
そう言って、俺たちは次々に手持ち花火に火を点ける。
――パシュッ！
という音と共に綺麗な色の炎が吹き出る。
「綺麗だね」
「うん、とっても」
花火越しに見る愛藤さんの表情は、光のせいもあってか、とっても可愛かった。
「ねえ、菜々ちゃん、次はどれにしようか」
「えっと……え？」
愛藤さんの手が止まる。
「どうしたの？」
「ううん。今あたしの事〝菜々ちゃん〟って……」
そういえば、勢いで言っちゃったかもしれない。
「あ、ごめん。なんだか無意識にっていうか、勢いっていうか……」
「ううん。別にイヤとかじゃないの。なんだか嬉しくて……。あたしも孝志君って呼んでいいかな？」
少し恥ずかしそうに言う。
「も、もちろんだよ」
「よかった。じゃあ、これからはあたしの事、菜々ちゃんって呼んで」

　ニッコリとした笑みを向けられる。
「う、うん。わかったよ愛藤さん」
　菜々ちゃんは、ぷくっと可愛く頬を膨らませる。
「わかってない。菜々ちゃんでしょ、室田君」
「菜々ちゃんこそ……」
　あはは、と二人で笑いあう。
　なんだか、なんでもない事のはずなのに、とても楽しかった。
　ほとんどの花火を終えてしまい、もう線香花火しかない。
「やっぱり、最後は線香花火だよね」
「うん」
　すっかり小さくなってしまった蝋燭を見つめる。
「なんだか、もうすぐ終わりだなんて淋しいね」
「そうだね。でもさ、夏休みもまたこうして二人でさ」
「うん。……あ、袋のそこにまだなにかあるみたい」
「え？」
　言われて見ると、そこには黒い塊が五つほど入っていた。花火セットの袋ではなく、雑貨屋の袋に入っていたというのが不思議だ。もしかして、おまけで入れてくれたのだろうか？
「なに、それ」
　俺はじっくりとその平らな円柱状の塊を見る。
「……もしかして、これって……」
　思い切ってそれに火を点けてみる事にした。
　――シュゥゥゥッ！
　と、ほんの少しだけ白い煙が上がる。
「え？　なに？」
　菜々ちゃんは少し怯えているようだ。
　煙がおさまると今度は黒い塊からニョキニョキとなにかが伸びてきた。
「やっぱり……」
　思った通りだった。
「大丈夫だよ、怖くないから」
「ねえ、なんなの、それ」
　菜々ちゃんはまだ少し怯えているようで、背中の後ろに隠れるようにしている。
「これはヘビ花火だよ。大丈夫だって、この黒いものが出てくるだけで、音もないから」
　まあ、これも花火の一種なのだが、音も光もないという、本当に花火と分類していいのか多少疑問がある代物だ。っていうか、こんなの真っ暗な夜にしたってしょうがないだろうに。こういうものは、昼間に遊ぶものじゃないか？　雑貨屋の意図がよくわからない。
「ヘビ花火ってこういうものなんだ……。初めて見るよ……」
　菜々ちゃんは興味深そうにそれを見ている。ただ、灯りが今にも消えそうな蝋燭だけというの

がなんとも淋しい。
　残りの四つは後日という事で、花火セットに入っていた小さな袋にしまった。
　ヘビが出尽くした頃、蝋燭の火も消えてしまった。
「とにかく、最後の締めって事でさ、線香花火しようよ」
「うん、そうだね」
　俺たちは残った線香花火を名残惜しく終えると、ゴミを雑貨屋の袋に詰めた。
　そして、バケツを返しに雑貨屋に寄ると、ゴミもついでに処分してくれるという事だったので、お礼を言って（もちろん、ヘビ花火の事も）菜々ちゃんを送っていく事になった。
　蛇足だが、雑貨屋の店主はヘビ花火が好きらしく、いくつかの種類を揃えているのだそうだ。そんなに種類があるのかは知らないが、とにかくそうらしい。好きになったきっかけも話してくれたのだが、どうも高遠が好きそうな内容だったので、俺には今ひとつ理解できなかった。

　菜々ちゃんまでの家の道、俺は思いきって手を繋ごうと思った。
　だけど、どうしても恥ずかしいというか、なんというか……思い切りが出来ずにいた。
「どうしたの？」
「え、あ、ああ、うん」
　なんだか、しどろもどろになる。どうすればいいのかサッパリで頭の中が真っ白になる。
「あのさ……菜々ちゃんに紹介したい人がいるんだ」
「え？」
　驚きの声。
「いや、別に俺の親とかそういうんじゃなくて……なんていうのかな、親代わりというか兄さんと姉さんっていうか、なんかそんな感じの人なんだ。うん、俺の命の恩人でもある」
　ホント、なんて言っていいのかわからない。
「……」
「で、その人にちゃんと紹介したいんだ」
「……わかった」
　ホッとした……。ドキドキが止まらない。もう、思い切って勢いだ。
「それとさ……俺、菜々ちゃんの事、好きだ」
「……ぇ？」
　想像もできない言葉に、どうしたの？　という顔をしている。
「ごめん。正直言うとさ、最初の時、菜々ちゃんの事全然知らなくて……だから、なんとなくで返事しちゃったんだ――」
　菜々ちゃんは悲しそうに俯く。
「――だけど、今は違う！　俺は本当に菜々ちゃんの事が好きなんだ。だから、改めて俺から告白。……ダメかな？」
「……」
　長い沈黙の後……、

　ギュッと手を握ってきた。
　俺はそれを握り返した。
「……あたしの気持ちは変わってないよ。……でもね、不安だったんだ。なんだか無理しているような感じがして。でも、今言ってくれたから、だから、もういい」
「ごめん。本当にごめん」
「謝らないでいいよ、ね」
　そう言って笑う菜々ちゃんの目には涙が光っていた。
「ごめん」
「だから、謝らないでいいってば」
　なんだか不思議な恋愛だな……。順番がバラバラというか、滅茶苦茶というか……。
　でも、これで俺たちは本当に始まったって感じだな。
「ねぇ、孝志君」
「なに？」
「孝志君が紹介したい人って、どんな人なの？」
　どんな人か……。
「言葉では説明しにくいかな。変な人って感じ……なんだけど、違うような……」
「そうなんだ。なんだか楽しみ」
　ニッコリと微笑む。
「それでさ、明日なにか用事ある？」
「ううん、別にないけど」
「じゃあ、早速明日行ってもいいかな」
「うん……あ、あたしの家ここだから」
　気が付けば菜々ちゃんの家の前まで来ていた。
「うん。また明日」
　名残惜しいけど仕方ない。
「じゃあ、また明日。おやすみなさい」
「うん。おやすみ」

　ベッドに横になる。そして、左腕で目を覆うようにする。
　菜々ちゃんも、か……。
　ずっと昔、俺がまだ小さかった頃だった。
　どうして思い出せなかったんだろう……。忘れる事はないって思っていたのに……。それほどまでに時間っていうのは残酷なのか……。
『たかちゃん……』
　ふと、そんな声が聞こえた気がした。
　そんなはずはない、と首を振る。
　なぜなら彼女は……。

★　★　★

今日はなにして遊ぼうかな……。
毎日が楽しい。
小学校には友達もいっぱいいるし。
先生は優しいし。
勉強も楽しい。
運動も楽しい。
給食は美味しい。
学校も楽しいけど、みんなと遊ぶ方がもっと楽しい。
しょうちゃんや、いんちゃんや、つかさにいちゃんたちと遊ぶ方が好き。
「たかちゃん」
「いんちゃん！」
と、笑顔で駆けていく。
「しょうちゃん！　つかさにいちゃん！」
小学校に入学したばかりの頃、俺たちはずっと四人で遊んでいた。
テレビゲームなんかはあまりせず、外で遊ぶ事の方が多かった。
それこそ、かくれんぼとか、中当てとか、おにごっこなんかばかりしていた。
たまたまそういう広場が近くにあった事と、道路も見通しがよく、それでいて車があまり通らなかった事もあるだろう。毎日、俺たちは遊んでいた。
いんちゃん――上神谷泉水は、俺の幼なじみで一つ年上のお姉ちゃん的存在だ。
つかさにいちゃん――寺田司も幼なじみでいんちゃんと同学年。面倒見のいいお兄ちゃんだ。
しょうちゃん――樟田正一は、俺と同い年。でも、性格は当然ながら全然違うわけで、俺よりもかなり活発な性格だった。
一人っ子なのでお姉ちゃんとかお兄ちゃんとかよくわからなかったけど、この中で遊んでいる時だけは兄弟のような感じだった。
近い年代の一人っ子同士で遊んでいたから、自然とそうなったのかもしれない。擬似的な兄姉を二人に求めていたのかも知れない。
そんな風に小さい頃は、一緒に遊んでいた俺たちだったけど、学年が上になるにつれ、一緒に遊ぶという事が少なくなった。
やっぱり、同じクラスの友達と遊ぶ事が多くなってしまう。
学校で会っても、違う学年だとなんだかぎこちなくなってしまう。
自然と疎遠になってしまった。
そういうものだと思う。いつかは自然と別々に行動するようになる。
そんな俺たちが、久しぶりに集まったのが……いんちゃんの葬儀だった。

　彼女は昔から心臓が弱くて、それでも明るく元気だった。いつも優しく笑ってくれて、いつも元気をくれた。
　なのに……。
　信じられなかった。
　信じたくなかった。
　だいたい、久しぶりにみんなで顔を合わせるのがこんな場だなんて……。
　暗い顔の司兄ちゃん。司兄ちゃんはいんちゃんの事が好きだったんだと思う。なんだかそんな気がする。
　しょうちゃんも落ち込んでいる。
　もちろん、俺も。
　この中で笑顔なのは、写真の中のいんちゃんだけだった。
　みんながみんな悲しんでいた。
　疎遠になっても、どこかで一緒にいると思ってた。だから淋しくなかった。そう思おうとしていた。
　だけど……こうして現実に欠けてしまった。この穴は絶対に埋まらない。埋めようがない。
〝悲しい〟
　そんな一言ですませられないよ。
　でも、俺には他に言葉がなかった。
　気持ちは溢れてくるのに言葉がない。
　頭の中が真っ白になって考えられない。
　言葉の代わりに涙が溢れてくる。
〝涙は哀しみを忘れるために流れる〟
　本当だ。忘れようとしているのかもしれない。
　なかった事にしようとしているのかもしれない。
　これは現実じゃないんだ、夢なんだって……。
　でも、これは現実で、幼なじみのお姉さんがいなくなって……。
　忘れたくなんてないのに、涙が止まらなかった。

「いんちゃん……」
　その名前を呟くだけで涙が出てきた。
　もう、絶対に忘れない。
　もう、絶対に繰り返さない。
　固く誓う。
　涙を堪える。
　大切な人がいなくなるのはもうイヤだから……。
　大切な人の事を忘れたくなんてないから……。

★　★　★

　翌日、予想通りの展開になった。
「おい、孝志。二人して駆け落ちとはどういう事だ！」
　教室に着くなりこれだ。周りの迷惑とか考えた方が……っていうか、一応は秘密になってるわけだし（ほとんど公認なのだが）、あまり騒がれると困る。
「わかった。ちゃんと説明するから、こっちへ来い」
　高遠の腕を掴む。
「お前……昨日も同じ手口で……いまいち興味のないフリをして……結局はそうなのか。結局はみんな同じなんだな……」
「わかった。わかったから、とりあえず来いって」
　と、なんとか教室から高遠を連れ出す。
　そこで登校してきた樹梨に会った。
「……あんたは……やっぱりそんな事してるの……」
　ーースパン！
　と、とりあえずイッパツ決まった。
「……ってぇな」
「あんたね、どうせまた騒いでたんでしょ。ったく……それよりも室田君、昨日は楽しめた？」
　って、突然だな……。
「ま、まあ。楽しかったよ」
「そうなんだ。そうならいいんだ」
　樹梨はニッコリと笑って教室に入っていく。
「孝志、結局昨日はなにをやらかしたんだ？」
「なにもしてないよ」
「なに？　あんな事やこんな事を、もう口に出して言えないような事を草葉の蔭でいそしんでいたんじゃ……」
　ーースパン！
「どうしてあんたはそんな事しか考えられないの！」
　カバンを置いてすぐに戻ってきた樹梨がもうイッパツ。
「あんまりパンパン叩くなよ……」
　頭を押さえながら抗議する高遠。
「あんたがそうされるような事してるんでしょ」
「興味あるだろ。親友と学園のアイドルだぞ。お前だって興味あるだろ？」
　樹梨が一瞬黙る。
　おいおい、樹梨もなのか……？
「そりゃまあ、友達なわけだし、気にならないなんて事はないわよ。でもね、訊くような事でもないでしょ。人の恋路に余計な詮索は不要なの」

「そうですよ。あまり勘ぐったり、からかっていると友達なくしますよ」
　と、通り掛かった水城さんが参加してきた。その後ろには菜々ちゃんがいる。
「おはよう、菜々ちゃん」
「おはよう、孝志君」
　俺たちは何気ない朝の挨拶を交わす。
　そのやりとりに、その場にいた三人が固まる。
「孝志、正直に言え！　昨日はなにをしたんだ」
「そうね、ちょっと気になるわね」
「菜々、正直に答えなさい。昨日はなにをしたの」
　俺は高遠と樹梨に、菜々ちゃんは水城さんに迫られる。
「な、なんだよ急に」
「なんだよじゃねぇ！」
「そうそう。呼び方が変わってるのはなにかがあった証拠」
「なにがあったのか説明してもらう権利はあると思うけど」
「ちょっと、彩……」
　俺たちは廊下の隅に追いつめられていく。
　おいおい、そんなにまでする事なのか……？
　と、逃げる場所がなくなってきた。もう後がない。
「わかった。わかったからちょっと離れてくれないか」
「やっと喋る気になったか」
　高遠はともかくとして、あとの二人がここまでするとは意外だった。
「昨日はさ、祭を抜け出して……」
「祭を抜け出してどこに行っていたの？」
　樹梨が距離を詰める。
「は、離れろって」
「もしかして、菜々……」
「彩？　なにを想像してるの？　ねぇ、みんなおかしいよ」
「おかしい？　わたしは菜々の事を心配してるんじゃないの」
「そうそう、生は禁物だぞ」
　……高遠のその言葉、アイツの思考に会わせて考えると……。
「ちょっと待て！　みんながどんな想像をしているかは知らないが、あの時俺たちは抜け出して、二人で花火をだな……」
「火遊び？　私、室田君ならそんな軽率な事しないと思っていたのに……。結局、室田君も他の男と一緒なんだ。っていうか、高遠と大差ないんだ……」
　なんだか、高遠の言葉に影響されてなのか、そっちの方向に進んでいる。
「ちょっと待てって！」
「あたしと孝志君は一緒に公園で……」

「菜々、公園で……そんな……菜々が……」
　おいおい、水城さんまで？
　みんな妄想の世界で勝手に展開させているようだ。こっちの話を自分たちの妄想に都合いいように解釈している。
　――キーンコーン！　キーンコーン！　キーン……！
　チャイムだ！
　救われた。朝のＳＨＲが始まる。
「ほら、もうすぐ朝のＳＨＲだぞ。教室に戻ろうぜ」
「そうそう。戻りましょ」
　俺と菜々ちゃんに促されて、三人は残念そうに教室に戻っていった。なんだか、話が聞けなくて残念というよりも、どういう妄想をしていたのかはわからないが、その妄想でなにか残念な事を想像したような、そんな感じだった。
「なんだか、休み時間が怖いな……。彩に責められそう」
「同感。こっちは高遠と樹梨だからな……下手をすれば侑浩も参加してくる」
　俺と菜々ちゃんは、この時点で既に疲れきっていた。
「とりあえず、なんとか無事に過ごそう」
「うん」
「それと、今日の放課後……」
「わかってる。楽しみなんだ」
「じゃあ、また」
「またね」
　俺たちも自分たちの教室に向かった。
　休み時間になるたびに、俺たちはそれぞれ責められた。結局、侑浩も加わって俺は三人からという最悪の状況になってしまった。
　ったく！

　そんな地獄を抜け出すように、授業終了のチャイムが鳴ると一目散に校門まで逃げた。
　危険だと思ったので、菜々ちゃんにも前もって言っておいて正解だった。
　しばらくすると、菜々ちゃんも息急き切って走ってきた。
「ごめんなさい。待った？」
「いいや、俺も今なんとか逃げてきたんだけど……菜々ちゃんの方は大丈夫だった？」
「……うん、なんとか。あたしはまだ彩だけだから……でも、孝志君は大変だったんじゃない？」
　菜々ちゃんは肩で息をしながら答える。
「ちょっと休んでから行こうか」
「ううん、ゆっくりでも歩こう。また問い詰められたら大変だから」
「わかった」
　そうして俺たちはゆっくりと歩き出した。ただ、菜々ちゃんの事が少し心配だった。今は大丈夫だと言っていたけど、こんなに走って……いや、大丈夫なのだろう。体育でも走ったりはするし。そういう事にしておこう。それでいいんだ。
「そうだ。昨日はさ、変な人って言ったけどさ、この人なんだ、実は」
　会話がなくゆっくり歩いていたので、なんとか会話をしようと俺はカバンの中から文庫本を取り出した。
「この本？　『君が永遠を望むから』？」
　他には『しあわせはーと』という絵本も書いていたりする。絵は違うけど。本当になんでも書いているように思える。
「そう。それを書いた人なんだ。それはその人のデビュー作。あとはこれとか」
　そう言って、プラスチックケースを取り出す。
「『秋茜』？」
　それは、亜依さんが手掛けたＣＤだ。他にも『風生まれる場所』という名曲を作った人でもある。
「聞いた事ない？」
「ううん、ある。あるけど……本当に？」
「あ、ちなみに唄ってる人じゃないよ」
「あ、そうなんだ……」
　と、少しがっかりする。
「その作詞作曲をした人なんだ」
「佐伯吏凪さん？」
　菜々ちゃんは歌詞カードを見ながら呟く。
「それはその人のペンネームみたいなものなんだけどさ、とにかくその人なんだ」

「……そうなんだ……」
　少し微妙な表情をする。まあ、普通なら作詞家や作曲家にそれほど興味は持たないだろう、歌手ほどには。だとすれば当然の反応なのだろうか。
「とにかくさ、行こうよ。とってもいい人たちだから」
　なんだか雰囲気が悪くなりそうなので、少し足早に椎崎さんの家に向かう。
　そのお蔭か、思ったよりも早く着いた。
　俺は迷わずインターフォンを押した……直後に後悔した。
　しまった、今日もアレがあるのだろうか？　だったらまずいな……。なにせ、今日は菜々ちゃんもいるし、ネタも考えてないし……。
『はい、どちら様ですか？』
　助かった……。一気に力が抜け、思わず尻餅をつきそうになった。
「亜依さん、俺です」
『あ、孝志君。どうぞ、入ってきて』
「はい」
　そう言うと、家の中に入っていく。まるで自分の家のようだ。
「お邪魔します……」
「邪魔するなら帰ってもらおうか」
　……くっ。ここで待っていたんですね、誠司さん。玄関にいるとは……。しかも、久しぶりに言われたよ、その台詞。完全に油断していた……。
「亜依がインターフォンに出るから……せっかくの楽しみを奪われたからな。どうだ、久しぶりに言われた感想は」
「……最悪な気分です」
「とにかく、だ。今日はどうしたんだ？　……ん？　そちらさんは？」
　俺の後ろにいた菜々ちゃんに目を向ける。菜々ちゃんはポカンとした表情をしている。
　そんな会話をしていると、亜依さんもやってきた。
「誠司さん、あんまり孝志君を虐めないで下さいよ……って、あら？　そちらの女の子は……もしかして……ちゃんと伝えたのね、自分の気持ち」
　と、にこにこして俺を見る。
「はぁ、まあ……」
　自分の意思でここに来たくせに、なんだか居づらい空気だ。帰りたくなってくる。
「とにかく、あがって」
　亜依さんに促され、俺たちはリビングへと向かった。

「なるほどな」
　俺が菜々ちゃんを紹介すると、誠司さんが大きく頷いた。
「それにしても、可愛い彼女だな」
「は、はぁ……」

　と、どうしていいのかわからない、菜々ちゃん。
「まあ、そういう事になったんで、親というか兄姉としてお世話になっている二人に紹介しておこうと思ってですね……」
「孝志も律儀だな……。えっと、椎崎誠司です、よろしく」
「妻の亜依です。よろしくね、愛藤さん」
「は、はい。よろしくお願いします」
　と、そこへ……、
「たかしにーちゃんだ！」
　唯依ちゃんがやってきた。
「あれ？　きょうはおねーちゃんもいるー！」
　と、菜々ちゃんにハシッとしがみつく。
「こら唯依……ごめんなさいね」
「いえ、子どもは嫌いじゃないですから。ねぇ、唯依ちゃんっていうの？」
　菜々ちゃんはしゃがみ込んで唯依ちゃんと目線の高さを合わせる。
「うん」
　唯依ちゃんは笑顔で頷く。
「お姉ちゃんはね、菜々っていうの。よろしくね」
「ななねーちゃん？　うん。いっしょにあそぼー」
　そう言われて、菜々ちゃんは俺たちの方を見る。
「よければ遊んであげてくれる」
「はい」
　そう言うと、菜々ちゃんと唯依ちゃんは部屋を出ていった。
「そういえば、誠也は？」
「ああ、誠也なら昼寝してる」
「そうなんですか……」
「なんだ、その質問は。本題はなんだ？」
「本題もなにも、今日は菜々ちゃんを二人に紹介しておこうと思っただけです」
「まあ、それならそれでいいけどな。そうだ、一つだけ言っておこう。若いうちは色々あるとは思うんだ。だけどな、お前が隣にいる間だけでも、彼女を泣かせるなよ。それだけは肝に銘じておけ」
「……はい」
　そうだよな。そうだよ。
「それとだな、菜々って呼び捨ての方がよくないか？」
　はぁ……？
「いやな、俺は亜依と初めて会った時からだな……」
「誠司さん！」
　亜依さんが誠司さんをたしなめる。

「誠司さんみたいなのが変わってるんです。普通は孝志君たちみたいな感じよね？」
「そうか？　呼び捨ての方がいいと思うけどな……」
　と、じゃれているのかよくわからないが、とりあえず惚気られている。
「初対面でいきなり馴れ馴れしく呼び捨てなんて、おかしいと思うでしょ？」
　と、訊かれる。
「そうか？　確かにそうかも知れないけど、早く親密になりたくてだな……」
　どうやら話を聞くには、誠司さんは亜依さんと初めて会った時から、亜依さんを呼び捨てにしていたという事らしい。俺にはとうていできない。
「まあ、いきなりとはいかなくてもさ、そのうちそうなるんじゃないのか、自然とさ」
「そうですよ。それが普通です」
「俺はどうにも普通っていうのが苦手で……」
「あなたはもう少し普通にして下さい」
　二人とも、いつまでも若いな……と、感心してしまう。

★　★　★

　結局、二人に色々とアドバイスらしきものをされ、菜々ちゃんはすっかり唯依ちゃんと仲良しになり、俺たちは椎崎さんの家をあとにした。
「椎崎さんって面白い人だね」
　クスクスと笑いながら言う。
「まあ、変わってる人ではあるけどね。大人かと思えば子どもっていうか……」
　っていうか、子どもか？
「それに、とっても仲のいい夫婦だね」
「確かに。喧嘩したとか聞いた事ないな……なんだか、ずっと恋人って感じがする」
「ホントだね……。あたしたちもああなれるのかな」
「えっ……？」
　その発言に思わず顔が熱くなった。
「あ、えっとね……はは っ。なに言ってるんだろうね、あたし」
「ずっと、一緒に楽しくいられればいいね」
　そんな二人を風が撫でる。
「気持ちいいね」
　菜々ちゃんは両手を大きく広げる。
　そのままその場でクルリと回る。
「あたし、風になれるかな？」
「風？」
　突然でわからなかった。
「そう。あたし、風になりたいんだ」

　そう言って空を見上げる。
「どうして？」
「あのね、風になってどこまでも飛んでいきたいんだ」
「どこまでも……？」
そう、どこまでも。誰かの心を吹き抜けていくような……そんな風になりたいんだ」
　ずっと遠くを見るような目をしている。
「それって、誰かに夢を与えたいとか、そんな感じ？」
「少し違うかな……」
　よくわからない。抽象的すぎる。
「自分でもよくわからないんだけど、ふとした瞬間に心を吹き抜けるって感じかな」
「……ふぅん」
　いや、全然わからない。とりあえず頷いておく。
「あ、着いちゃった。じゃあ、明日ね」
「うん、また明日」

「風、か……」
　菜々ちゃんと別れたあと、俺は何度か呟いた。

　夏休みの間、俺たちは何度か椎崎さんの家に遊びに行き、その度に冷やかされた。

　シフォンに呼び出された。
　それが一時間前の事だ。

「もしもし」
『孝志、すまないな、電話なんかして』
　どうやら、俺が電話が嫌いだという事を気遣ってくれているようだ。
　実際、よほどの事か緊急の場合以外はメールだ。普段は意地悪なんだけど、ちゃんと気遣ってくれる。
「あ、誠司さんですか。いいえ、別にいいですよ」
『突然で悪いんだが、今日の夜はなにか予定あるか？』
「いいえ、別にないですけど」
『そうか。じゃあ、一時間後に喫茶店シフォンに来てくれ。場所はわかるか？』
「はい。わかりますけど……どうしたんですか？」
『いや、まあ、なんだ。いいから来てくれないか』
「わかりました」

　という顛末で呼び出されたわけなんだけど……。サッパリ理由がわからない。
　少し戸惑いながらも喫茶店のドアを開ける。
　カランカランという音で中にいた客が俺の方を向いた。誠司さんだ。
「悪いな、こんな時間に呼び出して」
　カウンターに座っていた誠司さんは立ち上がり俺の方を向いた。
「いえ、それはいいんですけど……」
　それはいいのだが……誠司さんの横には菜々ちゃんがいた。どうしてだろう？　菜々ちゃんも俺のように呼び出されたのだろうか？　それとも、たまたまバイトが終わったから……？　とにかく、よくわからない組み合わせだ。
　そんな事を考えていると、背後でカランカランと音がした。振り返ると、
「ごめんなさい、遅くなっちゃった。って、なんとか間に合ったみたいね」
　と、亜依さんもやって来た。
「ああ。孝志も今来たところだ」
「そう、よかった」
　それを聞いて亜依さんは本当に安心したようだった。
　それにしても、別々に来るなんて珍しいな。この二人はすごく仲のいい夫婦なのに……。きっと仕事だったのだろう。まあ、常に一緒というわけでもないし、当然か。
「じゃあ、行きますか」
　そう言って誠司さんが席を立った。

「あ、あの……でも……」
　どうしてだか菜々ちゃんは戸惑っている。そんな菜々ちゃんを見て、
「大丈夫よ。そうでしょ、椎崎さん」
　女将さんが椎崎さんに確認するように言う。ちなみに、ここのマスターは女店主なので女将さんと呼ばれている。なので、俺もそう呼んでいる。
「ええ。ちゃんとわかってますよ、種村さん。法に触れるような事はしませんから」
　法に触れる事？　いったい……？
「もししようとしても、あたしが止めますから安心して下さい、響子さん」
　と、ニコリと笑う亜依さん。
「じゃあ、お任せしますわ。亜依さんがいるなら大丈夫でしょうし、なにかしようとしてもあの人が赦さないでしょうけど」
　と、女将さんはクスクスと笑う。
「そうですね。イッパツで逮捕されちゃいますよ」
　誠司さんも同じように笑う。
　なんだろう……完全に蚊帳の外じゃないか、俺たち。……っていうか、俺だけ？
「そういうわけだから、菜々ちゃんも安心していいわよ」
「は、はい……」
　亜依さんに言われて、状況が理解できていないだろうが、菜々ちゃんはとりあえず頷く。
　どうも、椎崎さん夫妻はここの常連のようだ。この人たちならそれほど通わなくてもこのくらいはしそうだが、本当に通っているのだろう。
「というわけで、種村さんの許可ももらったし、下に行こうか」
　し、下……？　なんの事だ？
「あ、あの……下って？」
　この喫茶店に下なんてあったのか？　ここは一階。下という事は地下？　でも、喫茶店に地下なんて……。
「ああ、孝志は知らないか。まあ、当然なんだけどな。この下にな、もうひとつのシフォンがあるんだ。どうやら、菜々ちゃんは知っているみたいだけどな。そりゃ、ここでバイトしてりゃ知ってて当然だけどな」
　俺は菜々ちゃんを見る。菜々ちゃんはコクンと頷いた。
　そりゃ、バイトしていれば知っているだろうけど、今までそんな話を聞いた事はない。たかとお高遠は知っているのだろうか？　いや、きっと知らないだろう。でもな……あいつなら知っていそうな気もする。
「この下には、ＢＡＲシフォンがあるんだ」
　そう言って、隅にある扉に手を掛けた。ここに扉がある事は当然知っていた。だけど、これは店の奥に通じるものだと無意識のうちに思っていた。
「ＢＡＲって、あのお酒とかを飲む……？」
　一瞬わからなかったので訊く。

「そうなの。ご主人の新一さんが下のＢＡＲを、奥さんの響子さんが喫茶店を経営してるの。新一さんもたまに喫茶店を手伝っているみたいだけど。孝志くんは見た事ない？　ちなみに、新一さんは元刑事さんなの」
「そ、そうなんですか」
　亜依さんの説明を聞いてもちっとも実感が湧かない。
　確かに男性がいるのは見た事がある。きっと、女将さんの旦那さんなんだろうなとは思っていたけど……まさか、地下にＢＡＲがあって……しかも、元刑事？　一度に色々とありすぎて整理できない。
「ともかく行こうか」

　階段を降りると、そこはドラマなんかに出てくるようなＢＡＲだった。
「いらっしゃい」
「こんばんは」
「おっ、菜々ちゃんもいるのか」
　菜々ちゃんはペコリとお辞儀する。喫茶店でバイトしてるんだから、知っているのだろう。
「椎崎さん、今日はどうしたんですか？　確か、菜々ちゃんは未成年でしょ。こんな所に連れてきて……」
　やっぱり誠司さんは常連のようだ。
「逮捕ですか？　でも、酒場に未成年が来てはいけないって事は……いけないんですけど。要は、アルコールを飲まなければいいわけでしょ」
　誠司さんは悪戯を思いついた子どものような表情で言う。
「だけど、ここはカクテルバーですよ……って、なるほどね。わかりました」
　マスターの元刑事さんは肩をすくめた。それを見て、誠司さんは勝ち誇ったような笑みを浮かべる。
「そういう事。じゃあ、二人には……プッシーフットを孝志に、フロリダ・カクテルを菜々ちゃんに」
　誠司さんは俺たちの飲み物を勝手に注文した。まあ、そうじゃないとどんなものがあるのかサッパリだけど。普通、未成年ってこういうとこ来ないよな……。なんだか緊張する。
「わかりました。で、お二人はなにを？」
　そう言いながら、誠司さんが勝手に注文したものを作り始める。
「そうだな……」
「あの……俺たちお酒は……」
　誠司さんはなにを考えているのかわからない。だから、思い切って率直に訊いてみた。
「大丈夫だって。さっき俺が頼んだのはノンアルコールカクテルだ。それに、元刑事の新一さんが未成年にそんなもの出すわけないだろ」
　ノンアルコールカクテル？　カクテルってお酒じゃないのか？
　あとで教えてもらったのだが、カクテルとはお酒とお酒、お酒と果汁などを混ぜ合わせたも

ので、要はミックスドリンクだという事だ。つまり、誠司さんが注文したものは、ミックスジュースだったというわけだ。
「で、俺は……ハイ・ライフを頼みます」
「わかりました。それで、亜依さんは？」
「そうですね……ブルー・トリップをいただこうかしら」
「わかりました」
　そう言いながら、シェーカーに卵黄を入れている。どんなものができるんだ？　っていうか、誰の注文のものを作ってるんだろう？
「そういえば、どうして俺たちをここへ？」
「まあ、大人な気分でゆっくりと語りたいと思ってさ。なかなかいいもんだろ、こういうのも」
「そうですけど……なんだか落ち着きませんね」
　本当に落ち着かない。本来なら落ち着ける場所なのだろうけど。
　なんだか静かすぎる。かといって、静かなＢＧＭが流れているから無音ではない。本当に大人の空間というか……そんな感じだ。
「そうだな。俺も最初は全然ダメだったな……。でも、マスターの新一さんのお蔭でそうでもないかな」
「なに言ってるんですか。椎崎さんがこの店を作ったようなものじゃないですか」
　さっき卵黄を入れたシェーカーにオレンジ色の液体と濁った感じの白っぽい液体を入れた。
「そうだっけか？」
「そうですよ。どうしようか悩んでる時に、喫茶店に来ていた椎崎さんがどういうコネか知りませんけど、いいとこを紹介してくれたんじゃないですか。もう、頭が上がらないし、足を向けて寝られないですよ」
「そんな事ないでしょう」
「でも、そうですよ。神崎建設、神崎インテリア、神崎酒造……その他諸々全部、神崎グループが関わってますもんね。なんだか、グループの末端って感じですよ」
　マスターは苦笑いを浮かべながら、シェークされたものをグラスに注ぐ。オレンジ色をしている。
「確かにそうですね。設計や内装、お酒関係の仕入れまで全部あそこなんですよね」
　亜依さんも、そう言えばそうね、といった感じで頷く。
「いいじゃないですか。世界に名だたる神崎グループが総力を挙げて格安で色々と提供してるんだから」
「今でも不思議ですよ。どこで知り合ったんですか？」
　今度はさっきと同じくオレンジ色の液体と濁った白っぽい液体を入れ、さらに白い粉を入れた。
「ん？　まあ、かれこれ十年ほど経つかな。ちょっとあってな」
「なにしたんですか？」
　元刑事としてなにか感じたのだろうか、それともただの興味なのだろうか、目の色が少し変わ

ったように感じた。
「人助けだよ」
「本当なんですか、亜依さん」
　その言葉が信じられないようで、マスターは亜依さんに確認する。
「これが本当なの、信じられないでしょうけど。その時、今の会長のりおな璃織魚さんと知り合ったの
」
　亜依さんはクスクスと笑う。その横では誠司さんが一言多いってとか言っている。
　そんな会話をしているうちに次のものができていたようで、マスターはシェークしたものをグラスに注ぐ。今度は黄色っぽい。
「すごいですね。……と、彼にはプッシーフットで、菜々ちゃんにはフロリダ・カクテルだったね。どっちもノンアルコールだから、安心して飲むといい。言ってみればミックスジュースだな」
　と、俺の前にオレンジがかった色のカクテルが、菜々ちゃんの前には黄色っぽい色のカクテルが置かれた。
「は、はい……いただきます」
　俺は恐る恐る口を付けた。ミックスジュースとか言われても、シェーカーでシェークして、カクテルグラスに入れられればノンアルコールでもその雰囲気で酔ってしまいそうだ。
「どんな理由にせよ、椎崎さんに出会ってよかったですよ。もし出会っていなかったら、この店はなかったでしょうね」
　今度はウォッカをシェーカーに入れ、そこに二種類の白っぽい液体を入れ、卵白を入れた。
「大袈裟すぎないですか？」
「いや、本当ですって。資金だけでもかなり助かってますからね」
「でも、俺も紹介しただけですから、神崎璃織魚さんに。いい金蔓がありますよって」
「椎崎さん。ここはもっと大人がお酒を嗜む場所ですからね。子どもっぽい事はなしにしてくださいよ。はい、ハイ・ライフです」
　と、誠司さんの前にクリーム色をしたグラスを置く。
「そういえば、誠司さんはよく来るんですか？」
「あぁ、そうだな。原稿が煮詰まった時とか、終わった時とか、上の喫茶店によく来るよ。下へは気分転換とくだらないお喋りに時々」
「そうなんですか……」
　そんな話をしている間に、亜依さんが注文したものを作り始めた。
　シェーカーにテキーラを入れ、青い液体と少しなので何色かはわからないものを入れ、濁った白っぽい液体を入れてシェークしている。
「菜々ちゃん、どう？」
　亜依さんが菜々ちゃんに声を掛ける。
「え？　あ……なんだか不思議な空間ですね」

「そうね。あたしも最初はビックリしたわ。大人になったんだなって思ったものよ」
「そうですね」
「ブルー・トリップです」
「ありがとうございます」
　亜依さんの前に青いカクテルが入ったグラスが置かれた。
「あの人もあたしも普段は全然お酒を飲まないんだけどね、ここでだけ飲むの。で、菜々ちゃんのカクテルはどう？」
「美味しいです。柑橘系の……オレンジジュースというか、グレープフルーツジュースみたいな感じがします」
「そのカクテルはね、オレンジジュースとレモンジュースをシェークしたものなんだ。まあ、ちょっと砂糖なんかも入ってるけどね」
　と、誠司さんが説明する。
「いらっしゃい……」
　その時、お客さんが入ってきた。マスターはその客を見て固まってしまった。
　俺もその客を見るが、別に普通のおじさんだった。
「小林さん……小林刑事ですよね」
　マスターの顔が弛む。
「ああそうだ。ちなみに、今呼び捨てにされたのかな？」
「いいえ、そんな事ないですよ。お久しぶりです」
「元気そうだな。八年ぶりくらいか」
「そうですね。どうしたんですか？」
「いやな、八年ぶりにこっちに戻ってきたんだが、お前が退職してバーテンダーなんてやってるって聞いてな。それで、いっちょ行こうかと思ってな」
　カウンターに座りながら俺たちを見る。
「ありがとうございます。それで、ご注文は？　たいていのものならできますよ」
　刑事さんは一瞬考えて、
「そうだな……ニコラシカでももらおうか」
「わかりました」
　刑事さんがこっちを見る。なんだろう？
「それにしても、お前の店じゃ、未成年に酒を出すのか？」
「ああ、あれはノンアルコールカクテルです。だいたい、元刑事ですよ。そんな事しませんよ」
　そう言いながら、小さなグラスに入れられた琥珀色の液体を出す。その上にはレモンと白い粉が乗っている。誠司さんが言うには、琥珀色の液体はブランデーで、白い粉は砂糖なのだそうだ。
「それもそうか。おっと、気分を害されたなら申し訳ない」
　その刑事さんが俺たちの方を向いて頭を下げた。
　そう詫びると、砂糖をレモンで挟み、それを口に頬張り噛み締め、そのまま一気にブランデー

を飲んだ。
「いいえ。小林圭士警部。いや、もしかしたら昇進されて役職が変わってますか？」
　誠司さんが突然そんな事を言い出した。
「いいや、警部だ。それにしても、あんたどこかで会った事があるのか？」
「ええ。十年ほど前に一度だけ。その時こういうものをもらいました」
　そう言って、財布から名刺を取り出す。そこには、黄色くて丸いキャラクターの絵が描かれていた。
「十年前ね……悪いが思い出せないな」
「いいえ、結構ですよ。……神崎グループの社員だった倉沢俊昭さんに関する事件です」
「なにっ！」
　その言葉を聞いて刑事さんの目の色が変わった。
「あの事件の関係者だと？」
　それは、誠司さんに掴みかかろうかというくらいの勢いだった。
「無関係ではないですね。覚えていませんか？　彼が事故を起こして病院に運ばれた時……」
「……ちょっと待ってくれ、今思い出すからな」
　そう言って頭を抱える。
「……そうだ。……確か倉沢が子どもを轢きそうになって……そういや、その時通報したのが……」
　刑事さんは椎崎さんの顔を見る。
「ええ、俺です。あ、厳密には俺じゃなかったかもしれませんけど。そして、その時の子どもが彼なんですよ」
「そうなのか。なるほど……あの時の……」
　と、今度は俺をジロジロと見る。
　どうも警察関係の人の視線は好きになれない。全てを見透かそうとしているようで、変な感じがする。
　そうなんだ……あの時の事故の……。
　俺はよく覚えていないが、あの時に……。
　なんだか不思議な感じだな。まさか、こんな場所でこんな事って……。
「そうか、ちょうどいい。あんたに訊きたい事がある」
「なんですか？」
「あの時から倉沢の行方がわからないんだ。それこそ、フッと消えてしまったかのように、病院からいなくなってしまった。もし知っていたら教えてはもらえないだろうか」
　刑事の問いに誠司さんは、
「申し訳ありません。倉沢さんは消えてしまったみたいです」
「……なるほど、わからないか。神崎グループも会長が交代してしまってな、どうにもわからないんだ」
「そうですね。彼女は知らないでしょう。というよりも、報されていないと思いますよ」

「それはどういう事かね？」
「そのままの意味ですよ。現在の会長である神崎璃織魚さんにはその事は報されていないだろうと、ね」
「君は神崎の会長を知っているのかね？」
「まあ、その十年前の一件でちょっと」
「なるほど……。しかし、どのみち手掛かりにはならないようだな」
「残念ですが」
「なるほどな。本当に迷宮入りしてしまうな、このままじゃ」
「きっと、当人たちの間ではケリがついていますよ」
「だとしてもだ。警察としては困る」
「しかし、直接的に事件となる事はなかった。孝志を轢きかけた事を除けば。違いますか？」
「……」
　誠司さんの言葉に刑事さんは言葉を返さなかった。
「確かに警察としてはそうもいかないでしょうけど。しかし、当人がいないんですから。藻音もいないわけですし」
「……やはり、あんたはなにかを知っているんでしょう」
「……」
　今度は誠司さんが黙った。
「あの事故だけに関与しているとは思えない。よくよく考えれば倉沢が所持していた紙にもあんたの名前が書かれていたはずだ」
「素晴らしい記憶力で。確かにそれ以降も関与しました。図らずもですが」
「ならば聞かせてもらいたいな。その権利はあるんじゃないかね？」
「そうですね。全くないわけじゃないでしょう。しかし、言ってしまえば無関係なんです、警察は。これは、今はなき村の問題ですから。それに、夢物語に過ぎません。とうてい信じられるものじゃないですよ。ただ、これだけは断言できます。あの事件は終わったんですよ。八年前に」
「八年前？　もしかして、あの異常な事件が……なにか関係あるのか？」
　異常な事件……？　うっすらとだが覚えている。
　確か、常識じゃ考えられないような、それこそファンタジーのような事件が立て続けに起こったんだ。
　しかし、それもいつの間にか終わっていた。
　ニュースなんかを見ても、謎の事件として報道されていただけで、よくわからない内容ばかりだった。
　結局、最終的にも謎のまま終わってしまったのだ。
　誰も事件の真相を知らないはずなのだ。
　だけど……。
　椎崎さんは知っている？

　いや、ただ知っているだけのはずがない。関わっていたのだろうか。
　そんな感じがする。
「そうです。あの事件が終わった時、十年前の事件も終わったんです。あれは十年前の亡霊でしたから。ですから、終わったんですよ、全て」
　関係してるんだ。だけど、確信は持てない。
　そうでなくても、世間よりも真相を知っているんだ。なにか、誰も知らないような事を……。
　だけど……そんな事、とてもじゃないけど訊けない。そんな雰囲気じゃない。
「……そうなのか……。なるほど……」
　警部さんは力無く俯いてしまった。そして、
「終わったのか……」
　と、残念そうに呟いた。
「小林さん、これは奢りです」
　そう言って、マスターがカラフルなグラスを警部さんの前に置いた。それは、六層に綺麗に分かれた……本当に芸術のようなものだった。
「プース・カフェか……」
　警部さんがそれを見て言った。
　へぇ〜……プース・カフェっていうのか……本当に綺麗だな……。なんだか飲むのが勿体ない。
「ええ。どうぞ」
「ありがとな」
　そう言って、警部さんはゆっくりとストローを差し込んだ。
　俺たちは静かにそれを見ていた。
「それにしても、小林さんと椎崎さんが知り合いだったとは……驚きですね」
　俺も驚きだ。誠司さんなら、警察に一人や二人くらい知り合いがいてもおかしくないだろうとは思っていたけど……まさか本当にいたなんて。
　それにしても、今日は色々とありすぎる。
　こんな場所に来るし、あの時の……十年前の話も……。
「だが、全て知らないところで解決しているのか……まったく、警察ってのは無力なのかね」
「そんな事はないですよ。ただ、今回の事件が異常だった、それだけです」
「どうやら、思わぬ事を知ってしまったみたいだ。今日はこれで帰らせてもらうよ」
　そう言うと、警部さんは店を出ていった。
「誠司さん、あの刑事さんは？」
　亜依さんが訊く。
「ああ、昔あの鍵の件の前にあった孝志の事故の時に会ったんだ」
「そうですか……。それに、あの八年前の事件にも？」
「それは初耳だった。だけど、どうやらそうみたいだな」
　二人は深刻そうな顔をして話を続ける。

「だけど、詩稀以外の人間には理解できない事が多すぎた」
「そうですね。あの刑事さんには申し訳ない事をしてしまいましたね」
「そうだな」
　俺にもサッパリわからない。
「正直、俺たちもよくわかってなかったのかもしれないな」
「そうですね……」
「全てを知っていたのは、璃織魚さんだけなのかもしれない。それとも、彼女も全部はわかっていないのかもな……」
　八年前の事は、よくは覚えていない。なにせ、十歳やそこらの事だ。
　その時はその事件に無関係だったし……。覚えている方が変かも。
「まあ、その事は終わった事だし。スッキリと忘れようか。第一、そんな昔話をするためにここに来たわけじゃないしな」
　そういえばそうだった。どうして俺はここに呼ばれたのだろう？
「悪いな、なんだか変な展開になってしまった……。というわけで、だ。二人ともあちらへどうぞ」
　そう言って、壁際のソファを指す。
「あちらでごゆっくり大人の時間をご堪能下さい」
　はぁ？
「もう、誠司さんったら……ごめんなさいね、二人とも」
「悪くはないだろ」
「そうかもしれませんけど……」
　と、亜依さんは呆れた声で言う。
「まあ、せっかくこうして付き合い始めたわけだしな。ゆっくりと大人の空間で語り合うのもいいだろうと思ってな」
「あの……もしかして、それだけですか？」
「そうだ」
　即答された。
「こんな事しても仕方ないとは言ったんですけどね……誠司さんはほら、言っても聞かない人だから……」
「そういうわけだ。まあ、俺は亜依と二人で楽しみたかったしな。ついでにお二人もどうかと思ったわけさ」
　誠司さんはニヤリと笑う。
「ついでに、この店の売り上げに貢献して上げようと思ってな」
「それはどうも」
　と、マスターが会釈する。
　なんとまあ……こんな事で今日は呼ばれたってわけか……。
　特に用もないのに家に行っている事の逆か……。

っていうかさ、高校生にこれはないと思うのだが……。
高校生でこういう場所に来て呑むなんて有り得ないわけだし。
でも、誠司さんが関わると当然の事のように思えてしまうのはどういう事だろう？
「というわけだから、二人はあちらで楽しんでくれたまへ」
そう言って、俺たちはカウンターから追いやられる。
「まあ……せっかくだから……」
「うん……」
と、俺たちは照れながらも移動する事になった。
俺たちは並んでソファに腰掛ける。
「……」
「……」
しばらくは無言の時間が流れる。
どうしていいのかわからないのだ。
こんな場所に来た事もないし……突然だったし……自分としては、あんな話も聞いてしまったし……。
「ねぇ、八年前って……？」
唐突に訊かれた。
「え、あ……それは、ニュースでも騒がれたじゃない。覚えてない？」
菜々ちゃんは首を振った。
「ごめんなさい。あまり覚えてなくて……」
まあ、そうだろう。俺も覚えていると言えるほどじゃない。
「俺もあんまり覚えてないんだけど……ほら、なんか変な事件が続いたじゃない。建物が急に崩れたり……道路が滅茶苦茶になったり……きっと、その事だと思うよ」
「そう言われればそんな事もあったような……。その事件にあの人たちも関わっていたのかな？」
「どうだろう……？」
正直、俺にはわからない。
でも、あの人なら関わっていてもおかしくないと思う。それに、それっぽい事も言っていたし。
「でも、そうかもしれない。でも、椎崎さんたちは怖い人じゃないから……」
「それはわかってる。すごく優しい人だってわかる」
本当にわからない。
というよりも、あの人たちの事をあまりよく知らない。
ただの作家さんってわけでもないようだし。
なにせ、あの神崎グループの会長と知り合いだなんて……。
でも、変かもしれないけど普通だし……。
単純な人なんていないとは思うけど、あの人は難解すぎる。

「これ、美味しいね」
「あ、うん」
　まあ、そんな事を考えても仕方ないし、今はこの空間を楽しもう。っていうか、なんだか馴れないから妙に緊張しちゃうんだけど……。

「ななねーちゃん、あそぼ、あそぼ」
　と、菜々ちゃんは唯依ちゃんに手を引っ張られていく。
　菜々ちゃんも楽しそうにしているし、まあいいか。
　俺は児童公園のベンチに座る。砂場や他の遊具で大勢の子どもが遊んでいる。それに溶け込むように菜々ちゃんたちも遊んでいる。
　まあ、それはいい。それよりも初めて知ったのだが、この公園は土竜公園というらしい。名前なんて気にした事なかったからな……。公園だ、くらいにしか思ってなかったし、普通は会話でも公園としか言わないからな……。ちなみに、名前は土竜だが、土竜の遊具は一つもない。
　閑話休題。
　と、何故俺たちがこうしているのかといえば……。
　それは、たまたま誠司さんの家に遊びに行った事が始まりだった。
「というわけで、俺と亜依はちょっと仕事があるから唯依の事よろしくな」
「ごめんね、孝志君、菜々ちゃん」
　と、そんな感じの一言でこうなってしまっている。
　別にイヤではない。
　どうせ予定もなかったし。
　こうして遊んでいるのも悪くない。
　砂場でキャッキャと遊んでいる唯依ちゃんを見ているだけで楽しい。
　と、唯依ちゃんがこっちに向かって走ってくる。
「唯依ちゃん、どうしたの？」
「のどかわいた～」
　と、笑顔で言われる。
「というわけだから、あたしちょっとジュース買ってくるね」
　あ、俺が……と言う前に菜々ちゃんは行ってしまった。
「じゃあ、ここに座って待ってようか」
「うん」
　と、唯依ちゃんはちょこんとベンチに座る。
　確かに今日はいい天気だし、あれだけ遊べば喉も渇くよな……。
「おお、孝志じゃ……って、誰だその女の子は。お前は一人っ子のはずではなかったか」
　と、偶然にもというか不幸にも高遠と会ってしまった。
　どうしてこいつが……。なんだか暴走の予感がする。
「この子は、唯依ちゃんといって……」
　言い訳めいた言い方だな……。
「この犯罪者めが。愛藤さんという彼女がありながら、このような幼子に手を出すとは、見損なったぞ。いや、ある意味その気持ちもわからぬではないが、お前は贅沢すぎる」

　予感的中。案の定、高遠は暴走しだした。こうなると止められない。
　そんな熱く語っている高遠を見て、
「ねえ、たかしにーちゃん、このひとどうしたの？」
　と、唯依ちゃんが不思議そうな顔で俺を見る。
「ああ、このお莫迦なお兄ちゃんはね……」
　と、俺が説明しようとしているのを妨げ、高遠はさらに熱くなる。
「お前、お兄ちゃんと呼ばせているのか。もう、確信犯決定だな。世の〈お兄ちゃんと呼ばれたい症候群〉の方々に恨まれるぞ。お前、このままでは命が危ない」
「わけがわからんぞ。だいたいなんだ、そのお兄ちゃんと……なんたらとかいうヤツは」
「〈お兄ちゃんと呼ばれたい症候群〉はな、二十一世紀初頭……今から数える事約十年ほど前に日本に蔓延した病だ。この影響を受け、妹ゲーなるジャンルが確立された。そして、この〈お兄ちゃんと呼ばれたい症候群〉の方々はそれにのめり込んでいったのだ」
　って、結局ゲームなのか。
　そして、自分でも病って言ってるし。
「さらには、大勢の妹たちが登場するゲームもある。これはアニメ化までされ、全国に妹旋風を巻き起こしたのだ。そう、これぞ妹の金字塔！」
　熱く語る高遠。もう、俺にツッコむ気力はない。好きなだけ語ってくれ。
「でだ。その方々たちからすれば、貴様は贅沢すぎる。学園のアイドルを彼女にし、さらにこのような幼子にお兄ちゃんと呼ばれている。これ以上の贅沢があるだろうか」
「だからだな。この子は知り合いの子どもで……」
「お前……それはいかんぞ。今からその子を手込めにしておいて、十年後を楽しみにするなど男の風上にもおけんな。孝志、それは立派な犯罪だ。たとえ合意の上であろうとも、十三歳未満を相手にそのような行為をすると強姦罪が成立してしまう。それが若気の至りの恐ろしさというものなのだ。ラヴラヴな時期はいいかもしれぬが、いざ険悪な状態になった時、それを訴えられでもすれば敗訴はほぼ確実。だが、幸いな事にこの事を知っているヤツなど皆無に近い。それが救いでもあるな」
「っていうか、勝手な想像をするな。俺は、知り合いの人に頼まれて一緒に遊んでいるだけだ。それに、俺だってそれくらい知ってる」
「さすがだ、孝志。やはりお前は知っていたか。知っているとは思っていたが、さすがだ。ならば尚更。お前は……」
　高遠がなにかを言おうとした時だった。
「ゴメン、待ったかな？」
　と、菜々ちゃんが走ってきた。
「ななねーちゃん」
　と、唯依ちゃんは喜ぶが、
「愛藤さん……」
　高遠は愕然とする。

「どうしたの？」
　それを見て、菜々ちゃんは不思議そうな顔をする。
「ああ、高遠が一人で熱く語ってたんだ。気にしなくていいよ、いつもの事だから」
「おい、愛藤さんも一緒だったのか」
　と、肩に手を回して顔を近づけてくる。
「それがどうした。っていうか、あまり顔を近づけるな。暑苦しい」
「愛藤さんも合意の上だったとは……っていうか、知り合いって本当だったのか」
「嘘だと思ってたのか」
「冗談かと……」
　どう考えてそうなるんだ？　いや、こいつの場合は当然の結果か。
「これでわかっただろ。じゃあ、俺たちは行くからな」
「お、おい、孝志……」
「さあ、行こう」
　と、俺は唯依ちゃんの手を握って歩き出した。
「おい、孝志……」
　後ろの方で高遠がわめわめ喚いているが、無視する事に決めた。
「ねえ、後ろの方で丹羽嶋君がなにか言ってるけど……」
「気にしないでいいよ。さあ、行こう」
「う、うん」
　一瞬考えたようだが、菜々ちゃんも高遠の性格はわかっているのですぐに納得する。
　菜々ちゃんが俺の手を指を絡めるように握ってきた。でも、俺は恥ずかしくて握り返せなかった。
　夜ならそうでもないんだろうけど、昼間から……というのは少し恥ずかしい。
「ねえ、このままでもいいよ」
　菜々ちゃんが優しく言ってくれた。でも、その笑顔が淋しげだ。
　なんだろうな……やっぱり恥ずかしい。
　菜々ちゃんのその言葉は、そんな俺の気持ちをわかってくれたからだろうか？
　よくわからない。
　意識しなければ大丈夫なんだろうな、きっと。
　でも、俺は意識してしまうから……。
「たかしにーちゃん、ななねーちゃん」
　唯依ちゃんが笑顔で見上げてくる。
「どうしたの、唯依ちゃん」
　菜々ちゃんが答える。
「ゆいがまんなかー」
　ちょっと頬を膨らませる。ぷくぅって。
　あ、そうか……。俺は唯依ちゃんと手を繋いでいて、菜々ちゃんとも繋いでいるわけだから、

俺が真ん中になってしまってるのか。
「そ、そうだね。ごめんね」
　ニコリと、少し恥ずかしそうに笑うと、菜々ちゃんは唯依ちゃんの隣に行き、その小さな手を握る。
「えへぇ」
　と、唯依ちゃんは本当に嬉しそうに笑ってくれた。
「楽しい？」
「うん」
　俺が訊くと、ニッコリと頷いてくれた。
　ごめんね、菜々ちゃん……。
　心の中で謝る事しかできなかった。

★　★　★

　その日、俺はなにもする事がなく一人でブラブラと歩いていた。菜々ちゃんはバイトなので一緒ではない。誠司さんには今日は無理と言われている。
　さて、なにをするか……。
「暇だな……」
　と、そんな事を思いながら歩いていると、どういうわけか必ずこいつがやってくる。
「よう、孝志！」
　疲れる……。でもまあ、暇つぶしにはなるか。
「なんだ、高遠」
「暇そうだな」
　その通り。
「まあな」
　はぁ……。
「確かに暇だけど……。それはお前もだろ？」
「そうでもないぞ。おれはこれからのイベントに向けて試行錯誤を繰り返している」
　イベント……？
「イベントってなんだ？」
「まあ、楽しみにしているがいい」
　と、俺の肩を叩く。
「ちょっと待て。またなにか悪巧みしてるのか？」
　恐ろしく不安になる。
「またとは失礼な……」
「まただろうが。何度すれば気が済む」
「楽しい事は何度しても楽しい。つまり、それはある意味無限ループ。夢幻の世界のようではな

いか。
まさに青春とは夢幻」
　高遠はキマッたという風に自己陶酔している。
　なんだかいい事を言っているような気がしなくもないが……気のせいと思っておこう。
「とにかく、イベント開催が決定した段階で連絡させてもらう。首を長くして待っていてくれたまへ」
　どうやら覚悟しなければいけないようだ。
　もう開催は決定しているようだし。
　ほとんど構想は出来上がっているんだろう。あとは、詳細をどうするかとか妙な演出をどうするかとか……そんなとこだろう。
「じゃあな、また電話するよ」
「あ、ああ……」
　高遠の言葉に言葉を濁す。
「なんだよ、孝志。まだ電話が苦手なのか？」
「あ、ああ……」
　その通りだ。俺は電話が苦手だ。
　理由はいくつかあるが、最も大きいのが相手の顔が見えない事だ。最近では相手の顔が見れるようになりはしたが、やはり目の前とモニターでは違う。
「お前くらいじゃないのか、携帯持ってないの」
「そうだろうな」
　確かに俺くらいだろう。
　事実、普及率は日本人一人に一台の割合になっている。もちろん、持っていない人もいるが、一人で何台も持っている人もいるので実際は一人当たり一・二台くらいになるんじゃないだろうか。
　それに反して、公衆電話が極端に減った。昔、公衆電話が設置されていた場所は、そのまま公衆端末へと変わっていった。
「まだ、お前が持つには値しないのか？」
「まあな」
「お前の基準ってキビシイよな」
「そうでもないさ。ちゃんとした電話が欲しいだけだって」
「今だって、ちゃんとしてると思うけどな……」
「どこがだ？」
「だってさ、便利じゃん。コレ一台でなんでもできるしさ」
「確かに便利だろうな。でもさ、それって電話だろ？　そのくせ、電話ができないってのはおかしくないか？　だから、俺は持たないんだ。まあ、電話も嫌いだしな」
「そうか。まあ、毎度毎度同じ様な問答してもしょうがないか。じゃあな、お前のアドレスにメールでも送っとくよ」

「悪いな」
「じゃあな」
「ああ」
　そう言って、俺は高遠と別れた。
　そう、高遠が言う通り、携帯電話は一般的な日本人から見れば便利になっただろう。携帯電話でなんでも出来るようになった。
　形は昔、俺が小学生だった頃とたいして変わってないが、機能は格段に増えたと思う。
　今では、携帯でテレビも見れるし、ラジオも聴ける。そして、チップに録音すれば音楽も聴ける。それに、ゲームだって充実していると思う。
　さらにはクレジットカードと同じ機能もある。財布にも身分証明書にもなってしまっている。
　だが、肝心な機能が欠落していると感じる。昔と変わらない機能が一つだけある。それは電話機能だ。電話のくせに電話が出来ないのだ。
　昔も今も、電話が繋がらない場所がある。諸外国の携帯電話は、日本と違って電話機能に重点をおいている。なので、他の機能に関しては乏しいが、世界のどこにいても電話が繋がるという電話として当たり前の機能が備わっている。ただ、例外として、日本では繋がらないが。でも、これが当然なのだと思う。
　どうして、みんなはこんなガラクタを持つんだろうな。所詮はオモチャだよな……。
　そう考えてしまう事が多い。
　どうも俺は、写真を撮ったり、それを送る機能はいらないと思えてならない。それを職業としている人には重要な機能だと思うが、一般人が必要とするものだろうか？　写真を撮って、一般人はなにをするというのか？　結局は遊ぶのだろう。ワイワイと騒ぐのだろう。その為だけに使うなんて、なんてハイテクなオモチャなのだろう。どうしても、オモチャという単語が頭から離れない。
　そして、こんなオモチャで満足している日本人の感覚が信じられない。もちろん、全員を否定するわけではない。今の機能を使いこなしている人もいるし、きちんと使っている人もいる。
　もちろん、電話機能の無能さに憂う人もいる。しかし、そんな一握りの人以外は、オモチャとしてしか扱っていないように感じる。
　それが、俺から必須アイテムとさえ言われる携帯電話を遠ざける、充分な理由だ。
　つまり、電話という名称ながら、それは電話としては機能していない。むしろ、電話が付属のようになってしまっている。
　それに、なんだかずっと監視されているような気がして仕方ない。なんだか機械にいいように振り回されているような……。
　携帯端末という名称なら素直に受け入れられたのかも。
　そんな事を考えていると、自然と喫茶店シフォンに足が向いていた。

　――カランカラン♪
「いらっしゃいませ」

　そう言って迎えてくれたのは菜々ちゃんだった。
「孝志君……」
　と、突然の来客に少し驚いているようだ。
「やあ」
　と、笑顔で挨拶して空いていたカウンター席に向かう。
「女将さん、こんにちは」
　と、挨拶をして、
「……えっと……アイスコーヒーお願いします」
「れい冷コーね。ちょっと待っててね」
　と、ニッコリと笑顔を返される。
　っていうか、冷コーって……。
「ねぇ、どうしたの？」
　と、菜々ちゃんが顔を寄せて訊いてくる。
「別になにもないけど」
　本当になにもないんだからしょうがない。強いて理由をつくるとすれば菜々ちゃんに会いたかったという事なんだけど。
「……そう」
　と、少し残念そうな菜々ちゃん。
「はい、お待たせ」
「ありがとうございます」
　俺はアイスコーヒーのグラスを受け取る。
「愛藤さん、そんなの彼の照れに決まってるじゃない。そんな淋しそうな顔しないの」
　と、言い残してなにやらバックに行く。
「女将さん……」
　菜々ちゃんは女将さんの背中に声を掛ける。
　女将さん……残された俺たちのこの空気はどうなるんでしょうか？
　なんだか照れたような妙な空気が支配している。
「あ、あたしは仕事中だから」
　と、菜々ちゃんは慌てたようにトレイを持ってフロアを見るが、それほどお客さんがいる時間ではないのでオーダーなども特にない。それぞれが楽しく談笑している。
　結果、手持ち無沙汰になってしまった菜々ちゃんはカウンターに立っているしかない。
「急に来てごめん。なんとなく菜々ちゃんに会いたくなったんだ」
　と、そんな菜々ちゃんに話し掛ける。
「……うん。別にイヤじゃないから……。ちょっといきなりでビックリしただけだから」
　と、頬を染めながらグラスを磨いている。
「うん……」
　うわぁ……なんだかすごく恥ずかしい沈黙だな……。

　これはこれでなんだか照れる。
「すみません、お会計お願いします」
　と、テーブル席に座っていたカップルが菜々ちゃんを呼び立ち上がるとレジに歩き出す。
「はい」
　と、慌てて菜々ちゃんはレジに向かう。
　仕事中だもんな……。やっぱり邪魔しちゃ悪いよな。
　そう感じた俺は、アイスコーヒーを飲み干すとそのままレジに歩いていく。
「ごちそうさま」
「あ、うん。ありがとうございました」
　俺はお金を払うと店を出た。
　外に出ると、むわっとした熱気が襲う。
　暑さのピークは去ったとはいえ、それでもまだまだ暑い。
　残暑とはいうが、暑いものは暑い。
　充分に熱せられたアスファルトからの熱がきつい。
　まだまだ暑いよな……。
　なんかこう、涼しくなるような事はないものかね……。
　あっ……明日はバイトか……暑いな……。

★　★　★

「いらっしゃいませ！」
　オーライ！　オーライ！　と、車を誘導する。
「オッケーです」
　と、運転席のドアを開け地面に膝をつく。今では少ないが、俺がバイトしている所は昔からこうだ。客と目線を合わせろという事らしい。まあ、高い場所から言われると確かにいい気分じゃないけど。
「レギュラー満タンでよろしいでしょうか？　……はい、ありがとうございます。窓はどうしましょうか……」
　窓は拭かなくていいという返事だった。
「ありがとうございます」
　と、メンバーカードを受け取りドアを閉める。
「レギュラー満タン、スマイル入ります」
「ありがとうございます」
　と、他のメンバーから声が返ってくる。これも昔からだ。あ、ちなみに、スマイルというのは窓拭きなしという意味だ。
　ポスにメンバーカードを通し、自分の番号とポンプ番号を入れる。
　そして、給油口のキャップを開けノズルを差し込む。

「七番ＯＫ！　メーターＯＫ！　アースＯＫ！」
　と、トリガーを引いてストッパーに掛ける。
「ストッパーＯＫ！」
「ＯＫ！」
　と、返事があるのもやっぱり昔から。
　あとは満タンになるまで待つだけだ。
　ちなみに俺は走り屋というわけではない。そもそも車の免許はまだ持っていない。取得できる年齢まであと二年と二ヶ月ほどある。道交法の改正がなければあと二ヶ月ほどなんだけど。
　三年くらい前だったか……その時の改正で取得年齢が高くなってしまった。若者の無謀運転による事故を防ぐため……らしい。原付の取得可能年齢も同じように上がった。俺は持っていないが、高遠はもうすぐ取れる年齢になるな……。まあ、どうでもいいが。
　余談ついでだが、昔はなんだかんだあったようだが、今でも結局の所ガソリン車が主流だ。
　なかには天然ガス車もあったりするけど、それでもやっぱりガソリンのようだ。数は少ないけど電気車も稀に見掛ける。電気車専用の充電スタンドもあったりする。
　さすがにうちのスタンドでは天然ガス車までは対応できないが、一台だけ電気車用の充電スタンドがある。ほとんど飾りみたいなものだけど。
　そういえば、セルフスタンドも昔は結構流行ったというか、それなりにあったようだけど、やっぱり店員が入れる方に落ち着いている。
　セルフでも結局店員が見ていないといけないわけで……全く無人にできないならさほど違いはないというわけだ。
　お客も手が汚れる……なんかで敬遠される。
　まあ、電気の方はセルフが主流だけど。
　閑話休題。
　ストッパーが外れて給油が止まる。ノズルの先端までくると自動的にそうなる。ここからは手動で少しずつ入れていく。
　ギリギリまで入れてキャップをし、給油口を閉める。
「キャップＯＫ！　ロックＯＫ！」
「ＯＫ！」
　と、出てきた伝票を持っていき精算を済ませる。
　それにしても暑い……。
　ポタポタと汗が落ちるので肩口で拭う。
　出口まで誘導し、歩道の手前で停止を掛ける。
　歩道に誰もいない事を確認して車道の手前まで行く。
　歩道を含めた左右の確認をして出発の合図を出す。車道に出ると危険なので歩道で。
「ありがとうございました、お気をつけて」
　去りゆく車に言う。
　一台送り出した時、ちょうど別のお客も終わったようで、

「もう一台お願いします！」
　と、先輩の山本さんに声を掛けられた。
「はい！」
　と、返事をしもう一台送り出す。
「ありがとうございました、お気をつけて」
　そして、元いた場所に戻る。
　手前に二台ある給油機の間でタオルをたたむ。
　パンパンと糸くずを払い、雑談をしながらたたんでいく。お客がいない時しかできない作業でもある。
「そういや、室田さ。そろそろ彼女でもできたか？」
　と、突然社員の木村さんが言い出す。
「な、なんですか、急に……」
「おっ、その反応はいるのか……」
　と、社員の久保さんも追随するかのように加わる。
「へぇ……ついに室田君にも彼女が……大切にしてあげなさいよ」
「山本さんまで……」
　みんなして……俺はそういうキャラなのか……？
「しっかし……室田に彼女か……どんな子だ？　可愛いのか？」
「木村っち、目がいやらしいって……」
　山本さんがじとっとした目を向ける。
「そりゃ気になるだろ。もうしたのか？」
　……。
　木村さん暴走開始。
「そんな事は訊く事でもないでしょうが……で、どうなの？」
　なんだかんだ言いながら、山本さんも結局気になるのね……。
「まあ、正直気になるよな」
　と、久保さんも参戦し、結果三人に追求される事になった。
「……そんな事してませんよ……。まだ付き合い始めたばっかりですし……」
　こう詰め寄られるとどうしようもない。
「なるほど……でも、時間なんて関係ないだろ。その日の内に……な」
「そうですよね」
　と、木村さんと久保さんがしきりに頷く。
「でも、彼女がいるのは認めるのね……。よかったじゃない、室田君」
「は、はぁ……」
　頷くしかなかった。
　っていうか、今になって思ったのだが、絶対に最初のあれからして冗談だったんだよな……。なのに、俺は馬鹿正直に……莫迦だ。

「頑張りなさいよ。せいぜい振られないようにね」
　と、山本さんが肩を叩く。
「というわけで、その彼女の友達とか紹介してくれよ」
　と、これは久保さん。
「それいいな。みんなで合コンか……」
　木村さんも笑みを浮かべる。
「ほれ、そこはそんな事ばっかり……。ほれ、お客さん来るわよ」
　と、入口の方を見るとウインカーを出した車がやって来た。
「いらっしゃいませ！」
　と、久保さんが接客に走る。
「仲良くね」
　山本さんが小声で言う。
「はい」
　なんだかんだで心配してくれてるのかな……。まあ、いいオモチャになっているような気がしなくもないけど。
「よう、孝志！」
　と、そこに自転車で高遠がやってきた。
「なんだよ。今バイト中なんだけど」
　迷惑そうに言う。
「まあ、細かい事は気にするな」
「気にするなって……お前が言う事か？」
「そういう事を気にするな。例のイベントが決定したぞ。明日の夜決行だ」
　……明日？
　しかも、夜？
「ちょっと待て。そんな急に……」
「なんだよ。なんか用事でもあるのか？」
「そういうわけじゃないけど……」
　まあ、確かになにかあるわけじゃない。バイトも明日は休みだ。
「ならいいじゃないか。いつものメンバーにはこれから伝えに行くがな。おそらくほぼ大丈夫だろう。オレにはその確信がある！　つうわけで、明日の夜に校門前だ！　遅れるな！　じゃあな！」
　と、それだけを言うと手を振って颯爽と去っていった。
　嵐のようなヤツだな……。
　って、これで既に決定なんだよな……。
　どうしよう……。
　っていうか、夜に集合って、結局何時なんだよ……。
　……ったく。

結局、高遠に連絡しないといけないのかよ……。
無駄な労力だな……。
全部きちんと伝えていってくれよな……。

　さて、翌日。
　俺たちいつものメンバーは夜八時の学園にやって来ていた。
　菜々ちゃんももちろんいる。
「ねぇ、これからなにが始まるの……？」
　と、不安そうな瞳が向けられる。
「いや、それが俺もなにも聞かされてなくて……」
　内容を全く説明されないまま俺たちはここにいる。
「なあ、オレらはなんでこんなとこにおるんやろな」
　もっともな疑問だ、侑浩。
　どうして俺たちはこうも律儀に付き合っているのだろうか。拒否してもよかったような気がしなくもない。
「けど、なんやナイトのスクールってグッドなフィールやな……」
「なにがいい感じなんだよ」
「ほれ、こう……なんつうかな。その辺のホラーハウスなんてメじゃないっていうかよ。ナチュラルなホラーがあるっていうか……」
　確かにそうかもな。
　だいたい、夜の学園なんて普通は来ないからな……。確かに不気味といえばそうだし、天然のお化け屋敷なんだろうけど……。
　それはともかく、どうして無駄に英語を使おうとしているんだ？　そこが気になる。
「というわけで、コーレーの《呪いの書籍の謎を暴けっ》を開催する」
　高遠が胸を張って言う。
　高遠のヤツ、なんだか大きなリュックを持っている。いったいなにが入ってるんだ？　すごく気になる。が、今はそれよりも気になる事が。
「ちょっと待て。初めてじゃないか」
「甘いな……。孝志よ、お前は常識というものが欠けている。常識の欠落だ」
「それはお前だろう」
　即答で返す。
　高遠に常識があるとは到底信じがたい。まあ、たまに異様な知識をもっていたりするわけだけど……。全体的にみればかなり非常識だ。
「じゃあ、お前の常識力を試す問題を出す」
「ああ、やってやる」
　高遠に常識を試されるのは少々屈辱的だが、ここで退くわけにはいかない。
「よかろう。おれは、コーレーと言った。カタカナだ。というわけで、コレを漢字に直すとどういう字になるのかというのが問題だ」
　まあ、文字にしないとわからない事だが……。っていうか簡単だな、そんなの。

「一、恒なる例え。二、高い齢。三、霊を降ろす。さあ、答えは？」
　どれだって言われてもな……一つしかないだろう。
「一の恒なる例えだろ？」
「不正解だ！」
　なんだと？
「どういう事だよ。じゃあ、答えはなんなんだよ」
「正解は四の霊と交わる……だ」
「ちょっと待て。四番なんてなかったじゃないか」
「だから甘いと言うんだ。おれは三択などとは言っていない。むしろ、常識力を試すと言ってやっただろう」
　確かに三択とは言ってなかったが……。そんなのありか？
「常識力を試す検定はな、四択なのだ。という事は、つまり四つの中から選ぶのが常識というわけだ」
　なんつー理屈だ。屁理屈以外のなにものでもないだろ、それ。
「けどな、四つ目の回答が提示されてなかったじゃないか」
「甘いっ！　まるでサトウキビに蜂蜜を塗ってさらに上白糖をかけたものを丸かじりしたもののように甘いっ！」
　うわ、なんだか聞いているだけで胸がムカムカしそうだ。甘ったるそうだな……。
「ーー四つ目が提示されていないなどというのは言い訳にもなっていない！　三つの回答を提示された場合、四つ目を考えて答える事こそ真理！　つまりは常識じゃないか！　それをまるで理解していないお前は甘すぎるのだ！　どうしておれが漢字を使わず、カタカナを使用したかを考えてもみろっ。普通でないからこそではないだろうか。だいたい、一番最初に提示されたさも当然のようなものを答えるなど笑止千万っ！　へそで茶が湧くわっ！　だいたい、初めてだという事くらいおれだってわかっている。それくらいわからぬおれではない！　しかも、呪いの書籍と言っておるのだから、霊関係だと思うのが自明の理。それをカチンコチンの頭で真面目くさって考えるのがいかんというのだ。そんな事を言っていると、くだらん懐かしのギャグが思い浮かんでしまったではないか。これもおまえの責任。言わせてもらうぞ。……そんないかんお前を見ているのは全くもって遺憾だ。はぁ、言ってしまったではないかっ！　真夏だというのに猛吹雪が……。まったく、全てはお前の責任だっ！　お前がもう少し話のできるヤツならよかったのだが……まあ、その真面目さがお前の長所でもあるからして、それはいかんともしがたいのだがなっ！　本当に遺憾だ！　……って、また言ってしまったではないか！　まことにいかん。これは遺憾だ！」
　高遠は、頭を抱えて藻掻き苦しむ。
　それにしても……なんだか、ねじ曲げられているようだが……。
　つうか、なんだか莫迦にされているような気がしてたまらない。
「というわけで、交霊の行事を始める」
　悩んだのも束の間、復活した高遠が意気揚々と話を続ける。

「お前のお蔭で無駄な時間を過ごしてしまったが、これ以上は時間を無駄にはできんのでな。さっさとやってしまおう」
　無駄な時間って……。高遠のこの企画の方がよほど無駄だ。
　っていうか、こいつは無駄じゃない企画を考えた事があるのか？
　まあ、それはいまさらか。
　さて、ここまで話をして全く動じていないのが樹梨と水城さんだ。まあ、水城さんの場合はどんな時でも動じないような気がするけど。
　樹梨が憤慨していないという事は、もしかして……この計画は樹梨も……？　マジかよ。
　ついにやって来ましたってとこだな。デンパ企画。
　樹梨って、普段はかなりまともで常識的なんだけどな……。唐突にこういう事を提案したりするんだよな……。
　二葉樹梨侮りがたし。
　それに……水城さんは水城さんでこういうの好きそうだよな。なんとなくのイメージだけど。
　これって逃げ場がないんじゃ……。
　普段は高遠の暴走を止める樹梨が参加する気満々だとすると、誰も止める事ができない。
　これはもう諦めるしかないようだ。
「孝志君……」
　菜々ちゃんが不安そうな目を向けてくる。
　俺はゆっくりと首を振った。
「諦めて覚悟を決めよう」
「……うん」
　と、菜々ちゃんも納得せざるを得ない状況だという事がわかったらしい。
「ちょっと待ちぃや」
　と、侑浩が言った。
　おっ、これは侑浩がストッパーになるのか？　ちょっとだけ期待するぞ。
「なんだ、侑浩」
「なんなんや、その呪いのなんとかっていうんは」
　……期待した俺が間違いだった。
　それは確かに気になるところだが、それよりもなんとか中止の方向にもっていきたい。
「それはこれから説明する。お前はフライングをしなくていい！」
「……なんや、その言い方は」
「これから樹梨が説明する。黙って聞いていればいい」
　と、樹梨が一歩前に出る。
「今回は参加してくれてありがとうね。さて、早速だけど今回の目的は呪いの書籍。その名の通り呪われているの――」
　……それ、当たり前。
「――詳しい装丁なんかはわからないんだけど、代々口伝で受け継がれているの」

「受け継がれてるって……誰にやねん？　少なくともオレは初耳やで」
　侑浩の疑問はもっともだ。俺も聞いた事がない。
「それはね、代々図書委員長にのみ伝わっているの」
　なるほど……。そういえば樹梨は図書委員長だったな。
　……いや、納得しそうになってしまった。
　樹梨が図書委員長というのはこの際どうでもいい。
　問題はその口伝だ。
「実はわたしも噂では聞いた事があるんです」
　そう言ったのは水城さんだった。
「ちょい待ち。さっき図書委員長だけに……言うたやんけ。それをなんで知っとんや？」
「風の噂です」
　端的に即答。
「さよけ」
　言葉なく引き下がる侑浩。
「続けてもいいかしら？」
「どうぞ」
　侑浩は敗北した顔をしている。
　侑浩、お前は間違っていない。むしろ的確だったぞ。
　ただ、相手が上回っていたというだけだ。
　そんな事を気にする事もなく樹梨は話を続ける。
「その呪いの本なんだけど、口伝ではどんな願いでも叶えてくれる……といわれているの」
「それのどこが呪いやねん！　どっちかゆうたら魔法の本……いや、幸福の本ちゃうんか？」
「黙れ！　話を最後まで聞け！」
　侑浩の的確なツッコミはまたしても高遠に阻まれた。
「続けるわよ。……どんな願いでも叶えてくれるそうなのね。でも、その願いを叶えるために誰かを犠牲にしなくちゃいけないといわれているの。つまり、誰かの不幸を糧に自分が幸せになる……そういう事ね」
「それって、人間社会そのものやんけ！」
　おおっ、今日の侑浩は冴えてるな……。ちょっとツッコミがシュールだが。
　誰かの不幸の上にある幸福、か……。
「そうですね。確かにそうです」
　と、水城さんも同意する。
「それは私も同感ね。本当にそう思うわ。だからこそ呪いの書籍なんて呼ばれてるんじゃないかしら？」
　確かにそうかも。
　見返りもなく願い事を叶えてくれるのなら、そんな呼ばれ方をするはずがない。まあ、その願い事を叶えるというのが、人を堕落させてしまうという事とイコールだとすればそう呼ばれても

不思議じゃないけど。
「つうわけで、それを探し出そうというのが今回の企画だ！　理解できたかね、諸君！」
　と、夜の学園の前で大声を出す高遠。
　ーースパン！
　案の定炸裂。
「あんたはちょっと静かにしなさい。見つかるでしょうが」
「……ごめん」
　と、やけに素直に謝る。
「でもさ、それって……」
「さて、それでは忍び込むぞ！」
　俺が言い終わる前に高遠が言い放った。
　やっぱり忍び込むのか！
「それと、これは余談だけどーー」
　そう前置きして、
「ーーこれも噂でしかないんだけど、読むと死ぬって云われている本もあるそうよ」
　そう言い残して樹梨は普通に学園の敷地内に入っていった。
　それに続いて高遠と水城さんも普通に入っていった。
　……えっと……。
　なんだか取り残されるかたちになってしまった俺たち。
　樹梨の一言が妙に怖く感じるのは俺だけだろうか。
「ねぇ……本当に行くの？」
　と、菜々ちゃんが不安そうに俺を見る。
「えっと……」
　俺は救いを求めるように侑浩を見る。
「え？　なんや？」
　と、いきなり見つめられ狼狽える。
「オ、オレに訊くんか？　……ちょっと待てや。そんなん無理やって」
「……だろうな。俺も困る」
「なら見るなや」
「悪い」
　……と、沈黙してしまう。
　その間にも先に行った三人は図書館の方に歩いていく。
　我が汐嶺学園は、通常の校舎とは別の建物として図書館がある。
　高遠が言うには、校舎には防犯装置があるが図書館にはないそうだ。まあ、忍び込むヤツなんていないからだろう、というわけだ。そのお蔭で俺たちが今回忍び込める、と。
「おい、お前たちなにをしている！」
　と、先に行っていた高遠が走って戻ってきて催促する。

「ああ……なんだかな……」
「まさか怖いなどとほざくんじゃないだろうな！」
「怖いっていうか……学園に忍び込むというのが気が引けるというか……」
　まあ、怖いってのもあるけどさ。
　夜の学園って怖いよ、やっぱり。
「優等生ぶるんじゃない！　夜の学園こそロマン。あはーんなタイムを過ごす場所！」
　――スパン！
「黙りなさい。声大きい」
　樹梨も走って戻ってくる。
「……悪い」
　高遠は頭を押さえながらその場にうずくまった。
「まあ、学園に忍び込むのは気が引けるというのもわかるけど……。せっかく最後の夏休みなんだし、冒険しようよ」
　と、樹梨が力説する。
「そうだぞ。あはーんな……」
　――スパン！
「あんたは黙る」
「……はい」
「まあ、この莫迦の言う事は気にしないで。夜の学園探検としゃれ込みましょうよ」
　いや……そう明るく言われてもな……。
　俺は菜々ちゃんを見る。
　菜々ちゃんも俺を見ている。
　視線だけでの相談。
　どうする？
　どうしようか？
「まあ、学園に忍び込むっちゅうんは悪かぁないと思うんやけど、なんかな……。オレ、ホラー映画とかは嫌いやないけど、リアルホラーはどうかと思うしな……」
「腰抜けが」
　そう言った侑浩に高遠が言い放つ。
「なんやと？」
「腰抜けが、と言ったんだ。聞こえなかったか？」
　挑発するように……っていうか、挑発してるよ。
「もう一遍ゆーてみー。しばくぞ」
「何度でも言ってやる。怖くて学園には入れないんだろ、この腰抜け」
　高遠はにやりと笑う。
　侑浩は怒りが頂点に達しようとしている。
　おいおい、ここでもめ事は勘弁だぜ。

「わかった。そこまで言うなら行ったろうやないか。こんなもん、ちぃっとも怖ないわ」
　と、スタスタと学園内に入っていく。
「さて、あとはお前たちだけだが……」
　高遠はしてやったりという顔をしている。
　やっぱりわざとか。
「わかったよ、行けばいいんだろ、行けば」
「ようやくわかったか。ヘタレと言われないようにしないとな」
　そう言うと高遠は意気揚々と歩き出す。
　仕方ない……。
「行こうか」
「……うん」
　菜々ちゃんはまだ不安そうにしているが、ここは行くしかないだろう。
「ほら、大丈夫だって。俺がずっと一緒にいるから」
「……うん」
　と、少しだけ笑顔を見せてくれる。
「急げ！　見つかってしまうぞ」
　前の方から高遠の小さな叫び声が聞こえる。
「わかったよ」
　と、小さく叫んで答える。
「しょうがないな……」
　ぼやきながら足を早める。
　どうしてこうなるかな……。
　まあ、夜の学園探検なんて滅多にするものじゃないけどさ……。その目的が呪いの書籍を探す事なんて……。
　高遠の考える事は……いや、今回は樹梨だったか……。まあ、とにかくわからん。

★　★　★

　なんだかんだで俺たちは図書館の前までやってきた。
「で、どうやって中に入るんだ？」
　警報装置はないとはいっても、鍵は掛けているだろう。まさか、窓ガラスを割って侵入するわけじゃなし。
「それなら問題ないわ。鍵ならここにあるから」
　と、ポケットから鍵を取り出す樹梨。
「……あっさりだね」
　菜々ちゃんが呟く。
「なんでそんなん持っとんねん」

「莫迦か、お前は。樹梨は図書委員長だ。持っていて不思議はあるまい」
　侑浩の疑問は高遠に即答された。
　まあ、そうなのかもしれないけど……当然なのか？　正論のようなそうでないような……。
「持ってるものは持ってるの。さぁ入るわよ」
　と、樹梨は鍵を開ける。
　ーーカチャリ！
　と、その音が不気味に響く。
「さすがに夜だと響きますね」
　と、水城さんは淡々と感想を述べる。
　どうしてそんなに落ち着いてるんだ？　さっきのはちょっと怖かったぞ。菜々ちゃんも俺の腕にしがみついてるし。
「入りましょうか」
「そうですね」
　と、何事もないかのように普通に入っていく樹梨と水城さん。
　この二人……すごい。
「さて、おれたちも入ろうか。な、腰抜け」
　高遠は侑浩を見る。
「腰抜けちゃうゆーとるやろーが。訂正せーや」
「なら入れよ」
「わかっとるっちゅうに」
　高遠にいいように挑発される侑浩。
「ほれ、お前たちも」
　今度は俺たちを見る。
「わかったよ。……入ろう、菜々ちゃん」
「……うん」
　と、俺たちも中に入る。
　中にはもう一つ扉がある。どうやらそれは施錠されていないらしく引いたら開いた。
　誰もいないカウンターは不気味だな……。つうか、誰もいない図書館って……怖い。
　思わず反射的に電灯のスイッチに手を伸ばそうと……って、どこにあるか知らないし、俺。
「じゃあ、これを配るぞ！」
　と、高遠がリュックを下ろし、中のものを取り出した。
「……懐中電灯！」
　と、右手を高々と挙げて、なにやらポーズを決め大袈裟に取り出す。
「なにやっとんの、お前」
　侑浩はそんな高遠を冷ややかな目で見る。
「誰かツッコめよ。なあ……」

　ツッコミが欲しかったのか？
「どうツッコミ入れろっちゅうねん！」
　侑浩の言い分は正しい。もっともだ。どうすればこいつは満足するんだ？
「どうって……それはお前が考えろよ」
　無茶苦茶論理炸裂。
「……そうやな……」
　と、何故か侑浩は真剣に腕を組んで考え始める。
「おいおい、そんなマジにツッコミを考えなくても……」
「ちょっと静かにしてぇや。やっぱツッコミを求められればツッコまなあかんやろ。これは会話の基本や。そう、会話の基本はボケとツッコミなんやからな」
　……そうですかい。
　仕方ないので放っておく事にした。
　そんな二人を後目に、樹梨は高遠のリュックから懐中電灯を取り出し配っている。俺も受け取る。
「さあ、探索しましょう」
「ちょっと待てよ」
「なによ、室田君。今さらやめようとか言うつもりなの？」
「違うって。その本はどんなものかわからないんだろ？」
「そうよ」
　即答。
「じゃあ、どうやって探すんだよ」
「普段この図書館にない本。それが目的の本よ。だから、普段図書館にない変な本を探すの」
　……はぁ？
「あのさ、普段ここにない本って言われても、そんなのわからないんだが」
「そう？　私はわかるけど」
　そりゃ樹梨はわかるかも知れないけどさ。
「わたしもわかります」
　と、水城さんまで。
「安心しろ！」
　と、侑浩のツッコミ待ちをしていた高遠が嬉々とした表情でリュックを持ってきた。
「侑浩、今度こそツッコミを頼むぞ」
　などと念押しする。しかし、当の侑浩はなにやら考え事をしているようだ。と、
「……そうや！」
　突然大声を出す侑浩。
「お前、ウルトラな人にでもなるつもりか！」
　……えっと、突然どうしたんだ？
「侑浩！　お前は……今になってさっきのツッコミかよ！　……まあいい。ありだ。そのツ

ッコミはありだ」
「そうやろ、そうやろ。オレが考えに考えたツッコミやさかいな」
「しかしだ。タイミングに問題ありだ」
「なんやて？」
「タイミングをわかっていない。おれはこれから次の事をしようとしていたのに、どうしてそれを邪魔するようにツッコミをするんだ？　それはツッコミとして問題ありだろう」
　それよりも、高遠と侑浩の二人でボケとツッコミが成立する会話をしようとするのがそもそもの間違いじゃないだろうか。かといって、俺はツッコミとして参加したくない。もちろんボケもお断りだ。
　それはさておき。
「でもや、今のはええツッコミやと思うんやけどな……」
「質の良い悪いじゃない！　タイミングを間違えれば、どんな素晴らしいものでもダメダメになってしまう」
　真剣な表情で語り続ける高遠。
　こんな事、真剣に語るようなものか？
「た、確かにそうや……オレはなんつー事をしてもーたんやろ。オレはツッコミとして最低な事を……って、オレも本来はボケやんけ！」
「おおっ！　今のはよかったぞ。なかなかのノリツッコミだ」
「そうか？　ほんまによかったか？」
　と、何故か抱き合って喜ぶ二人。そんなに健闘を称えなくても……。
「真剣に語る事こそボケなのだ。それを真に受けてしまうのは愚の骨頂。それをボケと見抜きノリツッコミで返すという……今のはよかったぞ」
「褒められると照れるやんけ」
「いやいや、謙遜するな。今のをもし孝志がしていたらきっと真に受けていただろうーー」
　ご名答。
「ーーそれは大変面白くない。せっかく投げたのに無視されたようなものだ」
「確かにな。孝志やったらそうかもしれんな」
　はいはい、それは悪かったね。
「しかしだーー」
　高遠は侑浩を睨むような目で見る。
「ーーさっき、おれがボケようとしたのを邪魔した事は事実」
「悪かったって」
「そう。ならばそれを態度で示してもらおうじゃないか」
「態度で示すってどうないするんや？」
「的確にツッコんでくれ」
「よっしゃ。まかせとき」
　がっしりと手を組む二人。

　夜の学園という怖さが消し飛んでしまったぞ。
　まあ、その点に関してはよかったのかな……。
　――スパン！
　と、何故かスリッパが炸裂した。
　高遠は頭を押さえつつ振り返る。そこには当然ながら樹梨がいる。
「なにをする」
「なに、じゃないわよ……。さっさとアレを配りなさいよ。さっきからくだらない事ばかり話して……。全然進まないじゃない」
　と、どうやらご立腹の様子。
「わかってる。これから出そうとしていたんじゃないか。出鼻をくじかれた」
「余計な事はいいから」
「はいはい……」
　樹梨に急かされて渋々といった面持ちの高遠だったが、一瞬だけ無表情になったかと思うとすぐに嬉々とした表情に戻る。
「では、気を取り直して……。そう思ってこれを用意しておいた。準備は万全だ――」
　そう言って、改めてリュックに手を突っ込んだ。
「――これだ！　携帯端末～！」
　と、仰々しく言って取り出したのは携帯端末だった。
「お前は猫型のロボットか！」
　と、普通にツッコミを入れる侑浩。
　っていうか、そのツッコミはいいのか？　さっきのもそうだったけどさ……。
「よしっ！　なかなかだ。まあ、当たり前すぎるのが難点だが……まあいいだろう」
「褒められたのか微妙やな……」
「褒めたぞ」
「そうか？　まあええ」
　と、納得する侑浩。
　こんなのでいいのか？　まあ、当人たちが納得してるならいいけどさ。
「さて、ここまでが長かったような気がしなくもないが、これがあればお前の言った問題も解決だ！」
　と、それを突き出してきた。
「携帯端末で解決？　どういう事だ？」
「はっはっはっ！　この携帯端末にはこの図書館にある書籍の全てのタイトルデータがある」
「まさか、それで検索してなければ……」
「おっと、そんな無駄な労力をおれがさせると思うか？　テクノロジーはもっと活用せねば。この端末にこのスキャンスティックを差し込む。そしてそれぞれの本についているコードを読みとれば自動照会してくれる」
「ハイテクノロジーやんけ」

「当然だ。おれに手抜かりはない！」
「だけどさ、そんな情報をどうしたんだ？」
　と、そんな俺の疑問に答えたのは樹梨だった。
「そんなの簡単よ。図書館のデータをそのまま移植すればいいだけじゃない」
　……それって、情報の漏洩じゃないか？
「そういうわけだ。樹梨の協力のお蔭で完成したシステムだ」
　いやぁ……そんな誇らしげにされても……。問題じゃないか？
「樹梨、図書室のデータをこいつに渡して大丈夫なのか？」
「別に構わないと思うけど」
　即答された。
「でもさ……」
「別にこいつは悪用するような事もないし。他に使い道のないデータだし。改竄するような事も絶対にしないから大丈夫でしょーー」
　それは高遠を信用しているという事だろうか。
　確かに高遠は一見莫迦な事をしているが、悪事は働かない。法に触れそうな事もするが、罪になるような事はしていない……はずだ。
　……まあ、常識がないように思えてきちんとわかっているヤツだし。そこは信用してもいいだろう。
「ーーそれに、これが便利だって提案したのは私だし」
　樹梨が提案したのか……。
「そう提案されたので、おれがまとめたというわけだ。これで今回の企画もスムーズに進行するだろう」
「確かにな。すごいよ、お前は」
「そんなに褒めるな。天狗さんになってしまうじゃないか」
　こいつの行動力には感服する。
「それより早く始めませんか？」
　水城さんが淡々と言う。
「確かにそうだ。無駄に時間を過ごしていたようだ。早くしよう」
　と、高遠は手早く携帯端末を配り始める。
「使用法は簡単。電源を入れるだけだ。今回の企画専用仕様だからな。コードは新たに読み込めばいい。ボタンなどは押す必要はない。データにないコードのみ音が鳴る。以上だ。他に質問は？」
「特にあらへんな」
「なら早速作業に取り掛かろう！」
　というわけで、俺たちは呪いの書籍なるものの探索を始めた。

　探索し始めて一時間ほどが経った。時計を見ると二十一時半少し過ぎだ。意外と集中していたようだ。時間が経つのが早い。
　もちろん、今のところ呪いの書籍なるものは見つかっていない。
　六人でしているとはいえ、この図書館はかなりの蔵書数がある。
　しかも三階建てという、普通の図書館と変わらないように思う。
　一冊一冊調べるという単調な作業は集中するとそうでもないのだが、こうして時計を見たり休憩してしまうと致命的だ。一気に疲れを感じてしまう。
「見つかったか？」
　誰ともなしに声を掛ける。
　本来ならそれぞれが別の階を探せばいいのだろうが、夜の学園という事もあり、みんな同じ階を探している。
　現に少し離れた所からは、樹梨たちの会話が聞こえる。
　なんだか前期末テストの勉強を一緒にしようかとかいう話のようだ。
　……って、前期末テストか……休み明けにこれはきついよな……。
　勉強もせずにこんな事してていいのかな……。
「見つからへんな……。高遠はどうや？」
　侑浩が答えてくれたようだ。
「ダメだ。全然見つからない。樹梨の方はどうだ？」
「ダメみたい」
「見つかりませんね」
「見つかってません」
　樹梨、水城さん、菜々ちゃんが返事をする。
　なるほど……誰も見つかっていない、と。
　そりゃそうか。
　見つかっていれば大騒ぎだろうしな。
　と、そんな事を思いながらコードを読みとった時、
　――ピピピッ！　ピピピッ！
「おわっ！」
　思わず尻餅をついてしまった。
「誰だ？　今の音は誰の端末だ？」
　高遠の声がする。
「俺だ」
「孝志か！　おい、樹梨！」
「わかってる」

と、ものの数秒で高遠と樹梨がやってきた。
「どれ？　どれに反応したの？」
樹梨が顔を近づけて訊いてくる。
「あ、こ、これ……」
ちょっと鬼気迫るものがあって怖い。
震えながらその本を指す。
「この本ね……」
俺を突き飛ばすようにして樹梨は本棚に食らいつくかの勢いで向かう。
「おい、目的のものか？」
そんな高遠に首を振って返す。
「違うわ」
「だが、反応したんだろ？」
「確かにそうね。でも違う」
「どうしてわかるんだ？」
俺も疑問に思って訊く。これに反応したという事は、そういう事じゃないのか？
「これね、昨日納本されたヤツなのよ。だから、データに入ってないってわけ」
「なるほど……流石に昨日今日のデータ更新はしていなかった……。完璧ではなかったようだ」
「別にあんたが悪いわけじゃないわ。私がきちんとデータ更新を伝えていなかっただけ」
と、樹梨は本当に残念そうに落胆する。
こうも落胆されるとなんだか悪い事をしてしまったような気にさえなる。
「で、他に最近納本されたものは？」
「全部で十冊くらいしかなかったと思うから……うん、確かそれだけだったはず」
「なるほど……しかし、今の状況では流石のおれもデータ更新は出来ないな……」
「そうね。でも、納本されたものは全部覚えてるから、とりあえず反応したら駆けつけるわ」
「それしかないようだな」
と、今回はスカというわけのようだ。
見つかっていれば終わっていたという気持ちと、そういうものが実在していなくてよかったという気持ちが一緒になっている。
さてと。気を取り直して続きを探すか。
それから何回かあちこちで反応があったが、それは全部さっき樹梨が言っていた本だった。

★　★　★

さらに一時間半が経過し、もう二十三時を過ぎている。
一階は既に調べ終え、今は二階に来ている。
それも大半が終わる頃だ。
「おい、そろそろ終わりにしないか？」

　たまたま近くにいた高遠に声を掛ける。
　疲れてきたのもあるし、遅くまで女の子を……なぁ？
「なに、もうそんな時間なのか」
　と、初めて気付いたようで時計を見る。
「なるほど……そろそろ日が変わってしまうのか……。なるほど、朝帰りか。モーニング・コーヒーをご一緒に、か……」
　と、一人で黄昏ている。
　――スパン！
　と、樹梨がそれを聞きつけてスリッパが炸裂。なあ、地獄耳？
「誰があんたとモーニング・コーヒーを一緒に飲むって言ったの？」
「ちょっと待て。それは自意識過剰だ！　誰も樹梨となんて一言も……」
　高遠は頭を押さえながら抗議する。
「あんたはそんな事ばっかり考えてないで、さっさと探しなさいよ」
「樹梨……ちょっと待てって」
　俺はなおもスリッパで叩こうとした樹梨を止める。
「ちょっと、室田君もなにするのよ」
　と、その矛先が俺に向けられる。怖い。
「樹梨、もうすぐ二十四時だぜ。そろそろ帰らないか？」
「……大丈夫よ。この企画は三十時までは続けるつもりだから」
　……はぃ？
　今なんと仰いました？
　三十時？
「確かに樹梨はてっぺんを過ぎても続けると言っていたな……」
　と、高遠がふむふむと頷く。
「ちょっと待て。そんなの聞いてないぞ」
「ああ、言ってないからな――」
　なんて即答しやがる。
「――というか、言い忘れてた」
　あんですとーっ！
「二葉さん……本気なのかな？」
　騒ぎを聞きつけて菜々ちゃんが歩いてくる。
「本気だと思うぞ」
「……だよね」
　と、大きなため息を吐く俺たち。
「でもどうしよう……ある程度は遅くなるかもとは言ってあるけど、朝になるなんて……言ってないよ」
　俺は別に時間はいいのだが、やっぱり菜々ちゃんは……な。

「菜々なら大丈夫。わたしが親に電話してあるから」
「えっ？」
　水城さんの言葉に驚く菜々ちゃん。
「だから朝まででも大丈夫。わたしと一緒にいるって伝えてあるから」
　いわゆる、友達の家に泊まるから……か？　まあ、泊まるとは言ってないかもしれないが、現に一緒にいるので嘘にはならない。
「……そう……なんだ」
　と、唖然とする菜々ちゃん。
「というわけで、彼女の時間の問題はなくなった。おれは最初から問題ない。孝志もそうだろ？」
「あ、ああ」
　あんな母親にわざわざ断る必要はない。
「侑浩はどうだ？」
「まあ、オレも別にかまへんけどよ……」
「もちろん樹梨は問題ない。水城さんも企画者の一人、当然ながら問題ない。もちろんおれは言うまでもない。つまり、これで時間の問題はなくなった。つまり、続行決定というわけだ」
　なにやらこれで朝までが決定したらしい。
　ホントかよ、もう……。
　そうとわかると、途端に疲れを感じて大きく伸びをする。
「にしても、朝までとはな……まさか翌日になるとは思ってなかったわ」
　と、侑浩も大きく伸びをする。
「翌日じゃないわよ。三十時って言ったでしょ？　つまり、同じ日の内なのよ」
「屁理屈やんけ」
「同じ日なの」
　樹梨はキッと侑浩を睨む。
「わ、わかったって……」
　侑浩はその眼力にあっさりと降伏してしまう。
「それでいいの」
　と、それだけ言うと再び書籍探しに戻る。
「では、わたしも」
「あ、彩……」
　水城さんを追うように菜々ちゃんも戻っていく。
「まじで続くんやな……」
「そうみたいだな」
　俺たちは頑張ろうとお互いに言って続きに戻った。

★　★　★

　てっぺんをとうに越え、既に外は白み始めている。
　既に三階部分もほとんど調べ終えてしまっている。それでもまだ探しているという事でもわかるとおりまだ見つかっていない。
　樹梨は、残り少なくなってきた探索場所に少し焦りを感じているようだ。イライラしているような、そんな空気をまと纏っている。
「樹梨……バックの書庫は調べないのか？」
　自分が担当していた範囲を終えた高遠が樹梨に進言する。
「そうね。そういえばまだだったわね」
　樹梨も今気付いたようだ。
「その情報はこれには入ってなかったはずだよな」
　高遠は携帯端末を指す。
　樹梨は残念そうな顔で頷いた。
「貸し出しされない本だからね……」
「つまり、書庫の本がわかるのはお前だけのはずだ」
「そうなるわね」
「というわけで、ここはおれに任せて、お前はそっちを探せよ」
「……高遠……」
「ここまで探したんだ。見つからないというのもそれはそれで仕方ないが、探し残しは気になるだろう」
「そうね。じゃあ、ここは任せるわ」
　そう言うと、樹梨は書庫へと走っていった。
「ったく……」
　高遠はそんな樹梨を見て笑みを浮かべた。
　まあ、なんだかんだでこの二人は……。
　それにしても、俺たちも徹夜でなにをしてるんだか……。いい加減眠くなってきた。
「ふぁぁぁっ」
　ついつい大きな欠伸をしてしまう。
「どうした孝志」
「どうしたもこうしたもないって。お前は眠くないのか？」
　と、高遠に訊く。
「当然だ。こんなワクワクする事をしている最中に退屈や眠気を感じるなど……ふぁぁぁっ」
　と、大きな欠伸をする。
「……おい、お前もじゃないか」
「これはお前のせいだ。お前が話し掛けるからついつい気を抜いてしまったのだ。集中して楽しんでいればこういう事はないのだ」
　それは八つ当たりか？

「悪かったよ。ったく……なんだかんだで夜も明けちゃったし……」
　俺は窓から射し込む朝の光に目を細める。懐中電灯の明かりでずっと作業をしていたので眩しく感じる。
「もう朝なんだね」
　そう言って菜々ちゃんが寄ってくる。
「うん。徹夜しちゃったね……。まさかこんな時間までするとは思ってなかったよ」
「あたしも。ホントはね、肝試しかなにかだと思ってたの。それが呪いの書籍探しでしょ。ビックリしちゃった」
「俺も。いきなり本を探すなんて……それが呪われてる本だろ。普通は考えないと思うんだけど、それを実行するのがあいつなんだよな……」
　と、高遠を見る。高遠は樹梨が担当していた箇所を探している。ホントよくやるよ。
「でも、こういうのも悪くないね」
「そう？　俺は眠くて……」
　と、大きな欠伸。
「それはあたしも……」
　と、菜々ちゃんも欠伸をする。もちろん手で隠しているけど。
「さて、もうすぐ全部終わりそうだし……」
「うん。もうちょっとだもんね」
「あともうひと頑張りか」
　大きく伸びをしてから頬を叩いて眠気を覚ます。
「おい、くっちゃべってないで探せ！」
　高遠の叱責。
「わかってるよ」
「はぁい」
　と、俺たちは笑顔で返事をして、それぞれの場所を探し始めた。

　それから三十分くらい経った頃だろうか、やっと全部の棚を調べ終えた。
「長かった……」
　と、俺は椅子の背もたれにもたれ掛かる。油断するとそのまま眠ってしまいそうだ。
　樹梨だけはまだ書庫を調べている。その手伝いに高遠も書庫に向かった。
「ほんまに疲れたわ……」
　と、侑浩が向かいの椅子に倒れ込むように座る。
「お疲れ様」
「ほんまご苦労さんや。オレかてまさかこんな事夜通しでするとは思ってへんかったからな……」
「まったくだ」
　なんだかんだと文句を言いはしたが、結局最後までしてしまった。

まあ、こんな事ができるのも今だけだし、そう考えればこれも悪くないのかもと思う。
「あとは二葉さんが探している書庫だけね」
水城さんも終わったらしく椅子に腰掛ける。
「本当にあるのかな……ねえ、孝志君」
「どうだろう？」
水城さんと一緒にやってきた菜々ちゃんは、俺の隣に座る。
俺たち四人は一仕事終えた爽快感を楽しんでいた……のだが！
「おい、逃げるぞ！」
と、慌てた様子で高遠が走ってきた。
「どうしたんだよ！」
「警備員に見つかった。逃げるぞ！」
そう言うやいなや、高遠は入口……とは逆の裏口に向かって走りだした。
「……えっと……マジ？」
俺たちはわけがわからない。ただ互いの顔を見るだけだ。
えっと……警備員に見つかったとか言ってたな……。という事は、捕まるのはやばい！
「オレたちも逃げるで！」
「そうですね」
水城さんはどこか冷静だ。まあ、彼女の場合はいつもか。
「逃げよう、菜々ちゃん」
「うん」
オレは菜々ちゃんの手を取り走り出す。
朝陽が眩しい。
でも、なんだかそれが楽しかった。

あ、結局目的のものは見つからなかった。

　ブーーーーーーーーーーーーーーーーッ！
　開演のブザーが鳴る。
　やっとここまできたのか……。
　というわけで、ついに本番だ。
　俺は舞台の正面に位置するスポットライトのスイッチに手を掛けた。そして、タイミングを待つ。
　まだ終わっていないので安心は出来ないが……多分大丈夫だろう。というか、大丈夫であって欲しい。

★　★　★

「というわけで、今年の文化祭は五組と合同で演劇をする事に決定しました！」
　と、四組（まあ、俺たちのクラスなんだが）の委員長の粟原舵が教卓に立ち、手をかざして高々と宣言した。
　……マジか。
　毎年、舞台は人気があって使用に関しては争奪戦が行われているらしいが……それを、今年は二クラス合同という事で獲得確率を上げたのだろう。まあ、どのみち三年生に優先権があるわけだが。
　その言葉にクラスの男子が嬉々とした表情を浮かべているのはどうしてだ？
「なるほど、今年は演劇か……これはおれ様、高遠の出番だな」
　と、こいつも妙にウキウキしている。
「ところで、演目はなんなの？」
　と、樹梨が質問する。
「よくぞ訊いてくれた！　演目は……」
　と、妙にタメをつくって、
「決まっていない！」
　と、恍惚とした顔で言う。
　いや、なにに酔いしれているんだ？　っていうか、ダメじゃん、それ。
　それ以前に、普通のヤツはいないのか？　高遠しかり、こんなのばっかりか？
　それは今さら言ってもどうしようもないんだけど……。
「ただ、それぞれのクラスからシナリオ係を選出し、合同で考える事になっている。ちなみに、オリジナルでいこうという事は決定済みだ。既出はいかん、いかんぞ！　面白味に欠けるからな！」
　いやぁ……そんなのを熱く宣言されましても……。
　っていうか、オリジナルなのか。

「じゃあ、私が立候補するわ」
　クラスの視線が、そう言った樹梨に集中する。少し不安そうだ。だが、他に適任者もいないだろう。高遠が担当しないだけでも充分だ。
「他に立候補者は？」
　粟原がクラスを見回す。
「おれ様が立候補する！」
　と、高遠が立ち上がる。やはりな。だが、俺の希望としては辞退して欲しいところだ。
「他には？」
　……だが、誰も立候補しない。
「立候補者がいなければこれで決定するけど、いいか？」
　誰も異論を言わない。
「じゃあ、うちのクラスはこの二人に決定！　じゃあ、丹羽嶋と二葉さん、よろしく」
　と、決定してしまった。
　最悪だ。
　さて、これでなにも起こらないなんて誰が思うだろうか。
　トラブルお騒がせで有名な高遠と、ちょっとデンパで有名な（まあ、実際はそれほどでもないんだけど）樹梨のコンビだ。
　これでなにか起こらない方がおかしい。
「というわけで、他の係も決めたいところなのだが、今回はシナリオがないのでここまで。丹羽嶋と二葉さんは、五組の担当者と打ち合わせをして演目を決めて欲しい。早急に！」
　と、ゼロからの（なんだかマイナスのような気もするが）文化祭はスタートした。
　余談だが、どうしてクラスの男子が喜んだのかが判明した。そういや、五組は菜々ちゃんのクラスだったんだよな。

★　★　★

　さて、早速放課後に打ち合わせがあるらしい。何故か俺も強制的に付き合わされている。そんな役になった覚えはないのだが……どうしてだ？
「まあ、気にするな。おれたちは三人でセットだ」
　肩に手を回してくる高遠。
「納得できない」
「ごめんなさいね。なんだか委員長にもそう勧められて……」
　粟原め……決定しておきながらやっぱり不安なのか。俺はこいつのお目付役なのか？　っていうか、そう認識されてるのか。不本意だ。
　というわけで、打ち合わせ会場となった我がクラスで五組の担当者を待っている。
「さて、五組が来る前にどんなものにするか決めておこうか」
「おい、高遠。それは揃ってから決めるんだろーが」

「まあ、おれ様が望むものとしてはだな……」
「お待たせしました」
　と、そこに五組の代表者がやってきた。ナイスタイミングだ。
　高遠は勢いを殺がれて残念そうに舌打ちした。
　が、それも一瞬だった。
　何故ならそこにいたのは……。
「菜々ちゃん……」
　そう、菜々ちゃんだった。その横には水城さんもいる。
「ごめんなさい、遅くなって……って……」
　と、頭を下げて次に顔を上げて固まる。向こうもまさかと思っただろう。
「なるほど、この面子か……。いい舞台になりそうな予感だ」
　と、何故か目を輝かせる高遠。
「この面子ですか……。不思議な因縁ですね」
　と、水城さんが呟く。
　ああ、本当だ。っていうか、なにかあるのか？
「あ、でも……あたしは彩の付き添いなだけで……」
「いいじゃない。彼氏もいるわけだし」
「そ、そうだけど……」
　と、あたふたとしている。
「まあ、俺もこの二人の付き添いなんだよね、実は」
「そういう事だ！」
　と、何故か高遠が胸を張って言う。
「でも、せっかくだし、この五人で決めない？」
「そうですね」
　と、樹梨の提案に即答する水城さん。
「ちょっと待って……」
　これ以上巻き込まれるのはごめんだ。
「待てない。既に決定された事だ。孝志よ、素晴らしい舞台にしような」
　どうやら拒否権はないらしい。
「そういう事だから、菜々も」
「う、うん……」
　と、水城さんに言われて頷く。
　俺たちってどうもこういう役回りのようだ。
「というわけで、どういうストーリーにするか決めようではないか。まあ、おれとしては、萌え萌えな……」
　――スパン！
　案の定スリッパが炸裂する。

「あんたは黙ってなさい。……で、水城さんはなにか案はある？」
「そうですね……」
　樹梨に話を振られて考え込む。
「ほら、二人もボケッとしてないで」
　と、俺たちも意見を求められる。
　まあ、ここにいるいじょうは参加しないといけないのだろう。っていうか、俺たちがまともな案を出さないとどうなるかわかったものじゃない。
「魔術ものなんてどうでしょう」
　と、水城さんが発言した。
「魔術ね……」
　その意見を受けて樹梨が考え込む。
「魔女っ娘萌えだな」
　――スパン！　スパン！
「うぐっ」
　黙っている方がいいと思うぞ、高遠。
「そうね、いいかも。で、もちろん魔術って黒魔術の事よね？」
「当然です」
　えっ？　そこは即答するところなんですか？　っていうか、当然なんですか？
「ねぇ、やっぱり彩と二葉さんって似てない？」
　菜々ちゃんが耳打ちしてくる。
「似てる」
　同じオーラが出ているような気がする。
　危険な香りがする……。
「でも、それを舞台で演じるっていうのは難しいわね……」
「ええ。どうしましょうか」
「そうね……魔術書が女の子になって……っていうのは既出だし……」
「難しいですね」
　なんかもう、魔術……黒魔術っていうのは決定事項なんだな。
「せっかく二クラス合同なんだから役者も大勢いるし……大掛かりな事もできそうだし」
「ええ」
「だから、魔女っ娘学園なんてどうだ！」
　――スパン！
　復活早々、再び沈黙する。
　いやぁ……後頭部にきれいに決まったね……。
「でも、それもいいかもしれませんね」
「水城さん？」
「いえ、魔女っ娘はどうでもいいとして、魔法学校というのは」

「でも、それってよくあるじゃない」
「確かにそうですね」
　う〜ん、と唸りながら悩む二人。
　っていうか、その魔術から離れようよ。
「ねぇ、二人で考えない？」
　と、菜々ちゃんが提案してきた。もちろん小声で。まあ、普通に喋っても今のこの状況じゃ気付かれないだろうけど。
「そうだね」
　この二人に任せておけない。この場にいるのもなにかの運命。天の啓示に違いない。クラスを不幸にしないために神が遣わした使者なのかもしれない。
　あぁ……なんだかすごく妄想ファンタジー。
　少し（かなり？）毒されてます、俺。
「ねぇ、吸血鬼ものなんてどう？」
「いいですね。中世の魔物関係のお話は興味津々ですから」
「でしょ？」
　と、相変わらず二人は盛り上がっている。どうもそっち系から離れていないようだけど。
　どうにも終わりそうにない。そして、進みそうにもない。
　このままでは、ただの雑談で終わってしまいそうだ。
「あの……さ。俺たち帰らせてもらうわ」
「ちょっと、室田君ちゃんと考えてよ」
　立ち上がろうとしたところ、樹梨が非難の言葉を投げかける。
「明日までになにか考えてくるから。……っていうか、俺たち係じゃないし」
「菜々、彼って意外と無責任だったのね」
　と、今度は水城さんにまで責められる。
「……でも、孝志君の言い分ももっともだし……」
　菜々ちゃんは俺をフォローしてくれるが、すぐに水城さんが、
「なるほど、彼氏の肩を持つわけね。親友よりも」
　うわっ！　その言い方は卑怯だ。
「彩、ごめん」
　……なんだか、俺が悪いみたいだ。俺のせいで親友を裏切らせてしまったみたいだ。なんだか罪悪感。
「と、それは冗談だから気にしないで。親友のラヴを邪魔したりしないから」
「……」
　本当に涙を浮かべていた菜々ちゃんは沈黙した。
「ちょっと……非道いよ、彩……」
「ごゆっくりどうぞ」
「ちゃんと考えてきてね」

　と、俺たちは水城さんと樹梨に見送られて帰る事にした。

「さて、これからちょっと誠司さんの家に行こうと思うんだけど……」
「やっぱりね。孝志君の事だからそうだと思った」
　まあ、困った時の誠司さん頼み。
　こういうのを職業としているわけだし、なにか考えてくれるかもしれない。少なくとも、あのまま不毛な時間を過ごすよりはよっぽどいい。
　というわけで、誠司さんの家まで来たわけだが……ここからが問題だ。
　――ピンポーン！
　インターフォンを押す。
『はぁい』
　この声は唯依ちゃんだ。
　という事は、なにかネタをしないと……。
「宇宙警察の者ですが、椎崎誠司さんはおられますか？」
　まあ、ベタだが仕方ない。こんなのしか思いつかなかった。
　と、視線の端にポカンとしている菜々ちゃんが見えた。あぁ……そういえばこういうのってなかったっけか。
『たかしにーちゃんがきたよー』
　インターフォン越しに唯依ちゃんの元気な声が聞こえる。しばらくして、
『はいってこい、だって』
　明るく誠司さんが言ったように言ってくれる唯依ちゃん。
「さて入ろうか……」
　と、その前に。
「あの……ちょっと説明してなかったかもしれないけど、誠司さんってなにかネタをしないと入れてくれないんだ、俺の場合だけだけど。それで、ああいう風に……してるんだ」
　と、説明してみるものの、改めて自分って変な事してるよな、と思う。
「……そうなんだ……」
　ちょっと呆れている菜々ちゃんと一緒に、とりあえず上がらせてもらう事にした。
　そして、そのまま誠司さんの書斎に向かう。
　コンコンとノックをし、ドアを開ける。
「おじゃ……うぷっ」
　慌てて菜々ちゃんの口を手で塞ぐ。
「誠司さん、こんにちは」
「よぉ、今日はなんの用だ？　というか、先に彼女の口を押さえている手を放してやれ」
　ほわっ！
　慌てて菜々ちゃんの口を押さえている手を放す。
「こんにちは、おじゃ……うぷっ」

　また言いそうになったので慌てて押さえる。
「孝志……説明もなくそれはまずいだろ」
「だから、誠司さんがあんな事を言うから……」
　そう言いつつ、菜々ちゃんの口を押さえている手を放す。そしてすぐに、
「こんにちは、だけでいいから。それ以上は言わない方がいいよ」
「あ……うん」
　その言葉に菜々ちゃんは〝?〟を浮かべる。
「まあ、そういう事だ。よく来たね菜々ちゃん」
　と、満面の笑みで言う。
　そして、俺の方にはきつい視線が。
　いぢめたかったんですか？　まあ、そんな事はさせませんが。
　でも、これじゃ菜々ちゃんの疑問は解決しないわけで……仕方ない。
「菜々ちゃん、君が言おうとしていた事を言うとね、こうなるんだよ」
　と、前置きして、
「お邪魔します」
　誠司さんはニヤリと笑って、
「邪魔するなら帰れ」
「じゃまするならかえれー！」
　と、いつの間にかいた唯依ちゃんにも言われる。
「……と、こうなるの」
　菜々ちゃんはまたポカンとしている。
　そうでしょうとも、そうでしょうとも。普通はそうなるんですよ。でも、俺はこれに慣れてしまったわけですよ。慣れって怖いね……。
「まあ、そんな事はどうでもいい。で、今日はなんの用だ？　幸いな事に多少余裕があるから付き合ってやれるが」
　と言いつつ、手はずっとキーを叩き続けている。俺からすれば忙しそうだ。
「今日はですね、ちょっと相談がありまして……」
「もしかして……認知はしてやれよ」
　……をいっ！
「違いますよ！」
　って、菜々ちゃんは赤くなってるし。
「今度の文化祭で演劇をする事になったので、その相談です」
「はぁ？　演劇？　……って、もうそんな時期なんだな」
　ちなみに、誠司さんは俺たちの先輩にあたる。偉大な先輩だ。
「そんな時期になりまして、俺たちは演劇をする事になったんですけど、演目はオリジナルでいこうという事になりまして、そのシナリオを考えないといけないんです」
「なるほど、孝志がそのシナリオ担当になったわけか」

「違います」
　即答。
「はぁ？　じゃあ、菜々ちゃんか？」
「違います」
　即答。
「はぁ？　サッパリわからんぞ。担当者じゃないお前たちがなんの用だ？　せめて担当者を連れてこいよ」
　ごもっともである。
「まあ、本当ならそうしたいんですけど……っていうか、俺たちは本当は担当じゃないんですけど、なんだか巻き込まれてしまいまして……」
「俺たち？　菜々ちゃんもなのか？」
「……はい」
　と、菜々ちゃん。
「本来の担当者だと破綻してしまいそうなので、俺たちがなんとかしようと思いまして……」
「それで、俺の所に来た、と」
「そういう事になります」
「つまりは、俺にシナリオを書けという事か？」
「えっと……それはそれで有り難いんですけど、誠司さんは忙しいでしょうし……」
「わかってるじゃないか！」
「そこで、なにかアイデアというか助言をいただけないかと……」
「アドバイス……ね。まあいいけどな」
　よかった……。まあ、誠司さんはこういう事が好きだし、協力してくれると信じていました。
　これで、まともなものになりそうだ……。
「有り難う御座います」
　俺たちは礼を言う。
「で、なにか決定した事はあるのか？」
「決定したわけじゃないんですけど……」
　俺は二クラス合同で演じる事、樹梨たちが盛り上がっていた内容を伝えた。
　それを聞いた誠司さんはなにやらしきりに頷いていた。
「なるほどね……魔物、魔術……それに、役者も大量に使える……」
「いや、魔術とかは別になくてもいいんですけどね」
「そうだな……魔物……悪魔とかその他を全てそういう事にしておいてだな、その魔物が天使を滅ぼすために人間と一緒に闘うっていうのはどうよ！」
　……はぃ？
「あの……魔物と人間が一緒に闘うんですか？」
「そうだ。これだと役者も大量に使えるし、魔物や魔術も問題ない。それに、ファンタジー要素もある」

「あのですね……普通は逆じゃないですか？」
　魔物と人間が……？　普通は天使と人間が魔物を……だよな？
「そこがいいんだろうが。一般のイメージによって決められた……そう、固定観念で物事を考えてはいけない。どんな事柄にも〝正・魔〟〝善・悪〟はない。という小難しい事を語ってもいいのだが、なんとなくイメージを裏切る感じでいいじゃないか。それに、その魔術だのを提案しているくらいそっちが好きなんだったら、この方がいいだろう」
「でも……」
　菜々ちゃんがなにか言おうとしたが、誠司さんがそれを許さない。
「だいたい、天使に綺麗なイメージを持ちすぎている。まあ、俺が実際に会った天使は、確かにのほほんとしてぽやぽやだったがな。でもまあ、残虐的な天使がいてもいいじゃないか。物語の中にくらいはな」
　なるほど……。
　……って、サラリとなにかすごい事を言わなかったか？　天使に会った？　なにを言ってるんだ？
「まあ、天使といえば撲殺だったり削殺だったり……そういうイメージがあったりするわけだし」
　ないですよ、そんなイメージは。
　菜々ちゃんが、どうする？　という目で俺を見る。
　まあ、他に案がないいじょう、これもひとつとして考えよう。他になにも案がなければこれでもいいだろう。と、少しこの話に惹き込まれている俺がいる。
　そして翌日、この案は可決された。

★　★　★

　今までのイメージの崩壊が意外にうけて……というよりも、みんなこういうのが好きだったのか？　とにかく作業はノリノリで進んでいた。クラスがこんなにひとつになるなんて……しかも二クラスが。驚きだ。ただ単に好きなだけなのか、騒ぐのが。
　決定してからすぐ、樹梨と水城さんがシナリオを書き上げた。これが予想に反してデンパがなかった。と、そんな予想をしていたなんて知れたら大変な事になるが。
　そんなこんなで、俺は照明をする事にした。舞台に立つなんて恥ずかしいので、裏方で充分だ。ちなみに、菜々ちゃんは衣装を担当する事になったらしい。是非ともヒロインに、と皆に推薦されたのだが、それを断ったそうだ。俺も菜々ちゃんの演技をする姿が見たかったが……。
　まあ、照明の仕事は本番までないようなものなので、基本的には背景の手伝いをしている。もちろん、照明係の打ち合わせもしているけど。
　背景や衣装や小道具などの製作は我が四組で作業する事になり、五組では演技の練習をしている。なので時折、隣のクラスから奇声が聞こえたりもする。もちろん、高遠だ。彼はシナリオ係という肩書きを利用して演出をする事になった。頼むから台無しにしないでくれよ……。俺は

祈る事しかできない。
　とまあ、そんな事も重要ではあるのだが……どうもこの舞台は全てが秘密にされているらしい。もちろん、俺たちは知っているのだが、他のクラスには口外無用だという事だ。家族にすら秘密にしろという徹底ぶりだ。
　なにをそこまで秘密にしなければいけないのかはわからなかったが、とりあえずそれに従っている。
　なんと、舞台の演目ですら秘密だという事で嘘の情報を流しているのだ。文化祭のパンフレットには『怪盗サンタクロース参上！』というタイトルになっている。そういえば、俺たちは正式な演目のタイトルを知らされていない。内容はみんなで決定したあれなのだが……。まあ、別にいっか。
　そのカムフラージュ用にと、それっぽい小道具まで作っていたりもする。
　をいをい、たかが文化祭にそこまでする必要があるのか？
　……だが、実のところそんなものじゃなかったんだ。実際の計画は俺の予想を遙かに超えていた。それは想像を絶するものだった。っていうか、文化祭だよ、これ。演劇コンクールじゃないんだよ。それなのに、どうしてここまでできるのか……。マジバカ万歳ですか？
　それよりも……さっきから菜々ちゃんの姿が見えない。いつもなら近くで衣装を作っているのだが……。買い出しかなにかかな。
　それに、心なしか人数が少ないように思える。二クラスで製作しているはずなのに、どうも一クラスの半分くらいしかいない。
　もちろんキャストはそれ以上にいるのだが、事前練習はほとんどないエキストラ状態らしいし、まだ練習も始まったばかりだ。
　全く……なにを考えているのか……。まあ、高遠たちの事だ、普通じゃないだろうとは思うんだけど。
「よう、調子はどうだ？」
　顔を上げると、そこには委員長の粟原がいた。ちなみに彼は総監修をしている。肩書き上は。
「まあ、そこそこだな。つうかだな、どうして俺たちは関係のないサンタクロースの背景を描いてるんだ？」
「それは気にしちゃいかんな……。木の葉を隠すなら森の中。森がなければ森を作ればいい。つまり、演劇の小道具を隠すなら演劇の小道具の中。その本物を隠すために偽物は必要になる、というわけだ」
　……理屈としては正しいかもしれないが……なんだか間違ってないか？
「今回の舞台は、学園の歴史に残るものになるだろう！　そう、我々は伝説となるのだ！　レジェンドだよ、レジェンド！　後世にまで語り継がれる永遠の住人となるのだよっ！」
　……永遠の住人？
　変かも知れない……いや、変わっているかもしれないとは感じていたが、まさかここまでとは。
　本当にこのクラスにはまともなヤツはいないのか？　目立つのがこういうヤツばかりで、表舞

台には出てこないだけなのだろうけど……と、そう信じたい。
　それよりもなによりも、俺の周りに普通の人はいないのか？
　賑やかかもしれないし退屈もしないだろうけど、精神的疲労がすごい事になりそうな気がする。
「わかったから、お前も作業しろよ」
「そうだな。では、そうさせてもらうよ」
　と、それだけを言い残し粟原は教室を出ていった。
　おいおい、どこに行く？
　あっという間に姿を消した。
　それからしばらく作業をして、陽も暮れてきたので解散という事になった。そして、菜々ちゃんは帰ってこなかった。

「ところでさ、昨日はどこにいたの？」
　翌日、俺は菜々ちゃんに訊いてみた。
「あ……うん、ちょっと彩と……」
　歯切れの悪い返事だ。
「水城さんと？　そういえば、樹梨もいなかったみたいだけど？　五組には高遠しかいなかったし」
　そうなのだ。五組にいるのかもと思って行ってみると、そこには数人のキャストと高遠しかいなかった。しかも、カムフラージュのサンタの練習をしていたのだ。
　高遠に樹梨たちの事を訊いても、『ノーコメント』というコメントが返ってくるばかりだった。
　謎は深まるばかりのようだ。
　そんな日が続いた。
　俺たちはカムフラージュ用のサンタのセットを作り、隣の五組ではさも文化祭の舞台の練習をしています的な練習が高遠の指揮下で行われている。そして、その練習中、俺は菜々ちゃんをはじめ、樹梨や水城さんの姿を一度も見ていないのだ。
　どこで怪しい練習をしているのやら……。
　そんなこんなであっという間に時は経った。
　そして、リハーサル。
　衣装などは着ずに、立ち位置などを確認するために行われる。放課後に行われるため、他の生徒の観覧は自由。
　他のクラスがそうであるように、俺たちのリハーサルも何人かは観に来ている。たいていは本番を楽しみに、という事で観に来ないのだが、やはり一部はこうしているのだ。
　そんな中始まったリハーサルだが、どこかおかしい。
　そう、おかしいはずなのだ。
　舞台にいるのは、カムフラージュ用の『怪盗サンタクロース参上！』のキャストの面々。もち

ろん、本番では極秘裏の方にも出演する。
　そこには樹梨たちの姿はない。菜々ちゃんもいない。
　俺たち照明は、本番同様にライトを当てるのだが、その指示台本は本物の台本なのだ。つまりは、極秘裏に進行している方のものなのだ。
　つまり、ライトと舞台上での演技が合うはずもなく……はずもなく……合ってるし！
　どうして？
「おい、孝志！　ぼぅっとせずに台本通りにしてくれないと困るじゃないか！」
　と、黄色いメガホンで俺の名前を呼ぶ高遠。
「すまん」
「すまんじゃないぞ！　このシーンをもう一回！」
「みんな、ごめん」
　大声でみんなに謝る。
　と、こんな感じに進行していく。
　なんだか、本当はどうなんだかよくわからなくなってきた。
　とにかく、みんなの迷惑にならないように集中しないと。
「ここで、三機の照明で舞台全体を照らしてくれ」
　高遠の指示が飛ぶ。
「そう、もっと拡散させて淡く全体を照らす感じで」
　きちんと指示をしているのだが……本当はこれを演じるんじゃないんだよな。みんなはどう思ってるんだろう？
「照明！　本番はこの時間をキッチリと計れよ。一斉に消すんだぞ。でないと、この舞台は成功しない！　どれか一機でも点いていると、舞台はおじゃんだ。せっかくの演出が台無しになってしまう。それだけ重要なんだ」
　と、熱い指示が出される。
　一生懸命なのは認めるし、俺だって成功させたい。
　まあ、高遠のこういう事に関する情熱は今に始まった事じゃないしな。こういうイベントではこれでもかというくらい盛り上がるヤツだ。
　この後、この一番重要だという箇所を徹底的に練習させられた。

　ブーーーーーーーーーーーーーーーーッ！
　開演のブザーが鳴る。
　やっとここまできたのか……。
　というわけで、ついに本番だ。
　俺は舞台の正面に位置するスポットライトのスイッチに手を掛けた。そして、タイミングを待つ。
　まだ終わっていないので安心は出来ないが……多分大丈夫だろう。というか、大丈夫であって欲しい。
　と、そこに高遠がやってきた。しかも、なにか機械を持っている。
　プロジェクター……？
　プロジェクターなんてどう使うんだ？　っていうか、そんな話聞いてないぞ。
「おい、高遠……」
「黙れ、孝志。グダグダ言うんじゃない。もうすぐ本番なのだ。細かい事は気にせず、己の仕事を全うすればいいのだ」
「いや、まあ……そうだけど……」
　と、どうしてもプロジェクターが気になって見てしまう。
「君たち照明は、台本の指示通りにしていればいい」
　高遠はそう言うだけ言って、黙々とプロジェクターのセッティング作業を続ける。
　まあ、これ以上はなにを言っても無駄だろう。とにかく今は舞台の成功のために……。
　オレはスポットライトのスイッチに手を掛ける。
『ただいまより、三年四組、三年五組合同の演劇【人間と悪魔と天使の哀歌】を上演します』
　これは樹梨だな……。
　っていうか、そんなタイトルの劇だったのか。初耳だ。台本にはタイトルとかなにも書かれてないからな……。
　タイミングのセリフだけが渡されている。
　っていうか、一言で片付けてしまえば滅茶苦茶な指示台本だ。
　樹梨の放送後、ゆっくりと舞台の幕が上がる。
　そこには、もちろんリハーサルで使用したセットなどはない。本物のセットがそこにある。雲の上をイメージしたセットだ。
『かつて、人々は神を崇めその御使いである天使を敬った』
　このナレーションは水城さんか……。
『しかし、神は次第に傲慢になっていった。人々を見守る仕事を放棄し始めたのだ。それに怒った人間は神への信仰を捨て、悪魔と契約を交わした』
　そして舞台が明るくなり、セットが街中のものへと変わる。
　そこで演じられるのは人間と魔族が仲良く暮らすシーン。

　俺たち照明は、タイミングを逃さないように劇に集中しながら、台本に集中しながら、それぞれの位置のスポットライトを操作する。……ってこれ、かなり大変じゃないか！
　と、ここで文句を言ってもしょうがない。大変なのは俺だけというわけでもないし。俺だけ我が儘を言うのは気が引ける。
　とにかく劇は進行していく。
「よし、そろそろだ」
　と、高遠がプロジェクターに手を乗せる。
「さあ、おれたちの劇に驚くがいい！　観衆が驚嘆する未来が見える！」
　と、なにやら一人で盛り上がっている。
　高遠が盛り上がっている→なにかを企んでいる→手遅れだ。
「さて、ここからが照明の最も大切な箇所だ。リハの時の事を忘れるな」
「わかってるよ」
　リハーサルの時に散々練習させられたんだ。ここで失敗するとあとでなにを言われるかわかったものじゃない。
　もちろんそれだけじゃない。ここが最も大切だと言われれば、劇を成功させるためにも頑張るというものだ。
　舞台上では、天使たちを滅ぼすために、魔族と人間が手を取り合って攻めている。天使たちは必死に応戦するものの、魔族と人間の圧倒的な力に後退を余儀なくされている。
　そこに大きな羽根の天使が登場した。黒い羽根だ。
　……って、あれってもしかして……。
「我はエリュス。我々に闘う意思はない。即刻退き返すよい」
　間違いない。菜々ちゃんだ！
　いつの間にキャスティングされたんだ？
「おい、高遠……」
「黙れ。言いたい事はわからないでもないが、今は作業に集中しろ」
「……わかったよ」
　俺は高遠に言われるまま舞台全体を照明で照らしていた。
　と、側にいるのでわかるのだが、プロジェクターのスイッチが入れられている。つまり……舞台を見ると映像がうっすらと見える。だが、スポットライトの光のせいでほとんど見えない。
　なるほど……このためか。
　って、そもそもプロジェクターでなにをする気なんだ？
　舞台上では、菜々ちゃん演じるエリュスの前に大きな鎌を持った死神のグエナイザが立ちふさがる。そのグエナイザは今回の指導者である。ちなみに演じているのは粟原である。
「なるほど……お前があの高名な黒翼の熾天使エリュスか……。黒翼族でありながら、最高位の熾天使にまでなったという……光栄な事だーー」
　粟原……おっと、グエナイザが高笑いする。
「ーーだが、こちらとしてもお前たち天使を滅ぼすのが目的でな。このまま退き下がるわけには

いかないんだよ」
「なるほど……ならば、ここで止めるしかないようね」
　そう言って、エリュスはグエナイザの鎌に負けないほどの武器を取りだした。
「ようやくその気になったのか……」
　グエナイザは笑みを浮かべる。
「仕方ありません。この天地の鉾でお相手いたしましょう」
　エリュスはその天地の鉾を構える。
「こちらはもとよりそのつもりだ。この灰神の鎌がお前を切り裂きたいと唸っている」
　互いが構える。まさに一触即発といったところか。
「さあ、もうすぐだ。孝志、抜かるなよ！」
　そうだった。もうすぐ例の箇所だ。途端に緊張してきた。
「グエナイザ、参る！」
「いざ！」
　死神と熾天使が駆け寄る。
　と、ここでライトを消す！
　同時に舞台上の明かりも消えた。
　――シュルルルッ！
　ん？　なんだ？
　舞台を隠すかのように白い布が下ろされる。
　なっ！
　そこには映像が……。プロジェクターはこのためなのか！
「うわっ！」
　と、生徒全員がこぼしたような気がする。
　スクリーンには死神と熾天使が互いの武器を交えているシーンが映されていた。
　なに、これ。ワイヤーアクション？　つうか、ＣＧ処理されてるし！
　っていうか、いつの間にこんなものを製作していたんだよ。
『さすがだな、エリュス』
『あなたこそ』
　離れて間をとる二人。
　あの……これって学園祭の演劇ですよね？　学校内だけで上演されているわけですよ。演劇の関係者の方でも来られているのですか？
　なんて疑問に思ったが、それよりもその映像に見とれてしまっていた。
　これを人々はこう言った。
〝マジバカ〟
　と。
　俺は完全にポカンとしていた。
　それにしても、すごい出来だ。本物の映画を観ているかのようだ。

「おい、高遠……」
「なんだ？」
「こんなの誰が作ったんだ？」
「ああ、これか……水城っちだ」
　水城さん……？
　すごいな……彼女が処理したのか。
「ちなみに、スタジオの手配は粟原だ。そして、これを提案したのは樹梨だったりする。かなり悔しいが、おれは今回は負けてしまった」
　と、補足説明までしてくれた。
「まあ、確かにお前たちじゃなきゃ思いつかない事かもしれないな……。かなりの人数がいなかったから何処に行ってるのかと思ってたけど……なるほどな。っていうか、いつの間に菜々ちゃんまで参加してたんだよ」
「ああ、それは水城っちの提案だ。やはり学園のアイドルには出演してもらわないと」
　高遠の発案でなかった事に驚きを隠せない。絶対にこいつの進言だと思っていた。
　しかし……裏ではこいつが入れ知恵したのでは、とも思う。やはり菜々ちゃんを説得するのは水城さんの協力は不可欠だろうし。
　しかし……すごい映像だ。
　スクリーンでは、エリュスとグエナイザの武器が何度もぶつかり、光を散らしている。
　完全に文化祭の枠を超越したものになってしまっている気がしなくもない。
　そんな事も思うのだが、正直真剣に観てしまっている。いや、本当にすごいんだって。
　スクリーンはそろそろクライマックスを迎えようとしている。エリュスが追いつめられているのだ。
『ここまでだ』
　グエナイザはエリュスに鎌を突きつける。
『……』
　エリュスは悔しそうにグエナイザを見る。
『……これが我々の道なのか……』
『己の力に慢心し、護るべき義務を放棄した罪は赦されるものではない。傲慢な行いは裁きを受けねばならない』
『……』
　グエナイザの言葉にエリュスはなにも言わない。ただ、その瞳には憂いがあった。
『その罪、その存在の消滅をもって償え！』
　グエナイザは躊躇う事なく鎌を振り下ろした。
　……って、おいおい。普通こういう場面って躊躇して、相手が改心して……ってそんな進行じゃないのか？　それは、俺の思い込み？
　そんな俺の考えを余所に、グエナイザの鎌はエリュスを切り裂いた。
　途端、エリュスの身体から紅い霧が噴き出す。

　そして、エリュスの身体は消えた。なんだか切ない。
　どこからか野郎の泣き声が聞こえたような気がするが、聞こえなかったという事にしておこう。
　話を演劇に戻そう。
　今まで舞台を隠していた白い布がとさりと落ちる。
　舞台は赤い光で染められている。火事なんかのシーンのようだ。
　舞台の中心には大きな鎌を持った粟原……もとい、グエナイザが立っている。菜々ちゃんの姿はない。
　熾天使であるエリュスが敗れた事で、他の天使は動揺している。
「これでお終いだな」
　グエナイザは灰神の鎌を薙ぐように振り下ろした。
　ーーーーッ！
　と、その線上にいた天使たちが、まるで蝋燭の火を吹き消すかのように揺らぐと、その姿を消した。
「終わったな……」
　そこに立っていたのは、グエナイザをはじめとする魔族たちと人間たちだけだった。
　ゆっくりとしたＢＧＭとともに幕が下り始める。
「すごかったな……」
　発案はしたものの、どういうものになったかなど詳しい事は全く知らなかったので
すごく新鮮だった。まるっきり観客気分だ。
「孝志、この程度で感動していてはいかん！　これからが本番ではないか！」
「これから……？」
　終わったんじゃないのか？
　ん？
　そういえば、プロジェクターの電源は切られていない。
　そして、緞帳には白い布が……。まさか……。
「なっ……！」
　言葉が出なかった。
　そこには、ＣＧでキラキラと装飾された菜々ちゃんが飛んでいた。その姿はまさに天使だ。
　しかも、それを背景に文字が流れていく。よく見ると出演者の名前だ。
「高遠……これって……」
「ふふん！　あのまま我が学園のアイドルを殺したままにしておくはずがないだろう。そんな非難囂々な事をするわけにはいかない。ならば……ＰＶだよ、ＰＶ。そんな素晴らしい
映像をバックにスタッフロール！　これでパーペキだ」
　自己満だ……かなりの自己満だ……。
　でも……確かにいい。それは認める。
　あ、原案が俺と菜々ちゃんになってる。しかも、原案協力に誠司さんの名前もあるし……。徹

底してるな……。
　脚本は高遠に樹梨に水城さん……。脚本協力に粟原の名前もある。演出もこの面子だし……。
　他のスタッフの名前が次々に流れていく。
　で、なんだ、これはっ！
「おい、高遠。この〝カムフラージュ・ユニット〟ってなんだ？」
「そのままの意味だ。カムフラージュ用のあれを製作した者たちだ。あれも一応これの一部だからな。名を連ねて当然だ」
　……納得できるような、できないような……なんだか微妙な気持ちだ。
　クレジットはどんどん流れていく。知ってる名前が次々と……って、それは当然か。
　やがて総監修が……粟原か、やっぱ。それと……仁科詩織……って誰？　聞けば、どうも五組の委員長らしい。
　でもって監督の名前が……。樹梨と水城さんか……。
　総監督は――やっぱり高遠なんだな。ヤツらしいといえばそれまでか。
　とにかく、無事に終わったようだ。ちゃんと（Ｃ）まで……まるで映画並だ。つうか、まんま映画だろ、これ。ショートムービーというのか、こういうのは？
　高遠はプロジェクターのスイッチを切る。体育館に明るさが戻ってくる。
　……そして、観客からは盛大な拍手が。スタンディング・オベーションだし！
　うをぉぉぉぉぉぉぉっ！　という声が響く。
　確かにすごかったとは思うが……つうか、これは文化祭の光景じゃない。普通は有り得ないだろ、これは。
「我が生涯に一片の後悔もないっ！」
　それを受けた高遠は、天を指し高々と叫ぶ。
　その言葉に観衆が振り向き、さらに大きな歓声が……っていうか、このノリはなに？
　とにかく、これは成功したと言う事でいいのか？　いいとしよう。

　年末が近付き街中が忙しそうにしている。
　その前にお祭り騒ぎだ、とでもいわんばかりに、街中が電飾で彩られている。
　そんな中を一人で歩いていると、妙に虚しさを感じてしまう。
　だが、今年は一人じゃない。菜々ちゃんがいる。
　コートのポケットに手を入れる。そこには、細長い箱が入っている。
　さて、家に帰ろうか。
　それにしても寒いな……。クリスマスの頃には雪でも降りそうだな……。
　なんて空を見上げて思う。
　やがて人通りも少なくなってくると、急に静かになる。
「静かだなっ……！」
「雪かき分け～♪」
　と、突然どこからか歌声が聞こえてきた。
「ソリに乗り込み
　おれらは行く　いつも笑顔で
　ベルに合わせ　心踊る
　今夜も楽しく　ソリで歌う
　鈴が鳴る　鈴が鳴る　いつも鈴が鳴る
　ソリで走るのは　なんて楽しいんだ！　ひゃっほー！
　鈴が鳴る　鈴が鳴る　いつも鈴が鳴る
　ソリで走るのは　なんて楽しいんだ！　♪」
　と、一通り唄うとその人物は俺の前で立ち止まる。
「おい、高遠」
　冷たい目で高遠を見る。
「よう、孝志じゃないか！　どうしたんだ、こんな所で」
　しかし、高遠はそんな事はお構いなしで、いたって普通だ。
「それはこっちの質問だ。お前はいったいなにをしているんだ？」
「なにって、聞こえていたろ？　唄っていたのさ」
　ああ、聞こえていた。しかも、楽しそうにスキップまでしていたからな。イヤでも目につく。
「なんだ、あの歌は」
「知らないのか？　あのソリ遊びの歌として有名な『ジングルベル』だ。まあ、詞は高遠オリジナル訳で、曲もTAKATOH Remix.だがな」
　はぁ～……と、ため息を吐かざるを得ない。
「まあ、この季節はなにかと唄いたくなるだろ？　気にするな」
　気にするなというのが無理のような気がする。
「ところで、イヴはデートか？」

　突然の質問だな……。まあ、こいつも気になるのだろうか？
「いや、お前の期待に添えなくて悪いが、イヴもクリスマスもバイトなんだ。休めなくてさ」
　年末は結構忙しいので、あまり休みたいとは言えないのが正直なところだ。
　木村さんたちは……というか特に山本さんが『休まなくてもいいの？』と言ってくれたのだが、なんだか申し訳ないような気になって断ってしまった。素直に休んでおけばよかったかも。ちょっと後悔。
「なるほど……それは残念だな。吹き曝しの中、頑張ってくれたまへ！」
　吹き曝しって……まあ、屋外だからそうなるのかもしれないけどさ、もうちょっとなんていうか、表現の仕方ってものがあると思う。まあ、それを高遠に求めるのもどうかと思うが。
「それにしても、この季節のスタンドって大変だな」
「そうだな。手がかじかんで大変だな。手袋なんかはもちろんできないからな。防寒だって、限度ってものがあるからな」
　中にセーターなんかを着るのはいいが、着すぎると動けなくなってしまう。
　冬場はピットが最高だ。あそこはまだ温かい。オイル交換なんてあるなら最高だ。温かくてホッとする。
　逆に洗車は地獄だ。機械洗車ならまだいいのだが、手洗いなんてのは言っちゃ悪いが最悪だ。店員に対する嫌がらせとしか思えない時もある。
　それに、雪が降るような気温になる夜は最悪だ。真冬なんか、交代で暖まりに中に入らないと凍死してしまいそうになる。
「おれには到底耐えられそうもない」
「夏は夏で暑くて死にそうだしな。脱水症状になりそうになるからな」
　風が吹けばまだマシなのだが、総合的に判断していいとは言えない。二リットルのペットボトルなんてすぐに飲み干してしまう。それだけじゃ全然足りない。まだ屋根があるので日陰ができるのが救いだが、それでも暑いものは暑い。
「酷だな……」
「まあな」
　なんだか、上辺だけの同情って感じがするが、この際どうでもいい。
「とにかく、それなりのクリスマス楽しめよ。じゃあな」
　手を振って、
「二日ほど前だけど　ソリに乗る時～♪」
　と、スキップをしつつ、続きを唄いながら去っていった。
　なんだったんだ？　わけがわからない。まあ、あいつの行動に理由を求めるのもどうかと思うが。
　それにしても、相変わらず元気なヤツだ……。

★　★　★

街は明日のクリスマス・イヴを目の前に大賑わいとなっている。ショッピングセンターでは、こぞってクリスマスセールをしているし、デパートでも年末最終処分大バーゲンなど銘打っている。
人がゴミゴミと集まっている。冬期休暇となった学生たちも大勢いるので、なおの事だ。
そんな人混みの中で、俺は映画館の前で菜々ちゃんを待っていた。
映画館の前には大きな樅の木があって、電飾などで飾られている。俺はベツレヘムの星をじっと見上げる。
普通なら土曜日の二十四日からなのだが、クリスマスという事で、今日から公開される『運命は突然で』というタイトルの映画がある。原題は知らない。もちろん、それを観るつもりだ。
もうチケットは購入してある。今回はちょっと奮発して、プレミアスクリーンでの鑑賞になる。そのくらいの贅沢はいいだろう。
この映画は、ニューヨークを舞台にしたラヴストーリーらしい。らしい、というのも、トレーラーを観た事がないのだ。テレビや新聞で少し見ただけ。
なので、詳しい内容はよくわからない。
でも、それなりに話題になっているので、大丈夫だとは思う。まあ、期待されていて大コケした作品は数えきれないくらいあるわけだけど……。
本当ならイヴの明日がいいのだが、俺のバイトの都合で今日しかなかったのが少し残念だ。
菜々ちゃんは、仕方ないね、と承諾してくれたが、その時の淋しそうな顔が頭から離れない。
だから、今日は俺たちだけのイヴイヴを楽しもうと思う。
その時、人混みの中から、菜々ちゃんの姿が見えた。菜々ちゃんは小走りにやってくる。
「お待たせ」
はぁはぁと白い息を吐きながら、笑顔でそう言った。
「待たせちゃったね」
「そんな事ないよ」
映画が始まるまで、まだ一時間ほどある。
「ねぇ、どこか座れる所ないかな？」
キョロキョロと辺りを見回すが、残念ながらそれらしい場所は見当たらない。
「どうしたの？」
「えっと……」
「疲れているなら、中で休もうか？」
「あ、ううん。そんなんじゃないの」
そう言って、大事そうに持っている紙袋に視線を落とす。
「あ、あそこ……ねぇ、あそこに座ろう」
そう言って、菜々ちゃんは俺の手を引いて歩き出した。
そこは人通りのない非常階段だった。どうも、色気のない場所だ。
まあ、高遠風に考えれば色気ムンムンの場所って事になるのだろうけど。って、だんだんアイツに侵食されてきてるよな……。

「あのね、これ作ったの」
　そう言って、菜々ちゃんは紙袋からラップに包まれたパンケーキを取り出した。
「これ、菜々ちゃんの手作り？」
「……うん。ちょっと見た目は地味だけど……」
　俯いて恥ずかしそうに言う。確かに、デコレーションはされていないから地味といえば地味だ。ただ焼きましたという感があるのは否めない。それでも、俺にとっては最高のものだ。
「今食べてもいいのかな？」
「……いいよ」
　俺は少しちぎって、それを口に運ぶ。
　んぐんぐと咀嚼する。
　ほんのりとした甘みが口の中に広がる。それは、甘みが自己主張するようなものではなく、自然にふんわりと甘いという感じだった。
「ねえ、美味しくないかな？」
　菜々ちゃんは俺が無言で食べていたので心配そうな顔をしている。
「あ、ごめん。あんまり美味しかったから集中しちゃって……」
「お世辞とかは別にいいよ。本当の事を言って」
「だから、本当だって。すごく美味しいんだから。お世辞とかじゃなくて、本当に！　今まで食べた事がないくらい」
「本当？」
　まだ心配そうな顔をしている。
「俺は嘘はつかないよ。特に大好きな人にはね」
「よかった……」
　やっと菜々ちゃんは笑顔になった。今まで心配で緊張していたようだ。
　うん、やっぱり菜々ちゃんは笑顔が一番いい。
「あ、そうだ」
　俺も渡すものがあったんだった。
　ポケットから細長い包みを取り出す。
「はい、これ」
「なに？　開けてみてもいい？」
　俺は無言で頷く。
　カサカサという音とともに包装紙が綺麗に剥がされていく。そして、その中からは箱が姿を現す。
「なんだろう……」
　菜々ちゃんは目を輝かせて箱を開ける。
「……えっ？」
　それを見て、菜々ちゃんは固まった。
「こんなの、本当にもらっていいの？」

　そこに入っていたもの――ピンクシルバーの十字架がキラキラとしているネックレスを手に持って訊いてくる。
「メリー・クリスマス」
「え、でも……こんな高価なもの……」
「大丈夫だって。見た目ほど高価じゃないから。だいたい、俺のバイト代の範囲だから、そんなものになっちゃうけどね」
　といえば普通は謙遜になるのだろうが、俺の場合は事実だ。値段を告げるのが申し訳ないくらいだ。だいたい、一万円にも満たない代物なのだから。
「……ありがとう。……ねえ、付けてもいいかな？」
「もちろん」
　菜々ちゃんはそのネックレスを付ける。
「どうかな？」
　思った通り、
「可愛いよ」
「ありがとう。……あれ？　なに、この紙」
　菜々ちゃんは箱に入れられていた紙を広げる。
　それは、俺が誠司さんにそそのかされて書いた、顔から火が出る恥ずかしいポエムだ。まあ、今の俺なら普通にできそうだ。っていうか、もう勢いだ。

　　貴女の言葉は風となり　僕の心を吹き抜ける
　　時にそれは向かい風となり　僕の行く手を遮り　僕の心を傷つける
　　時にそれは追い風となり　僕に道を指し示し　僕の心を勇気づける
　　それは全て君の風　それは全て君の優しさ
　　君の風に包まれて　君の優しさに包まれて　僕も風になる

「これって、孝志君が書いたの？」
「あ、まあね。なんだか夜中に書くラブレターみたいで、すごく恥ずかしいんだけどさ」
　というか、本当に夜に書いた。こんな文章、夜じゃないと書けない。夜の魔力を借りないとね。
「ううん、とってもいいよ。あたし好きだな」
「そう、よかった。ありがとう」
　なんだかとても心が温かくなった。誠司さんにそそのかされて書いたという事は、俺の心の中だけにしまっておこう。
「ねぇ、少し時間もあるし、少し歩かない？」
「そうだね」
　俺たちは手を繋ぐと、近くを目的もなしに歩く事にした。こういう目的もなくただブラブラと歩くのも悪くない。それが大好きな人と一緒なら最高だろう。

「ねぇ、あの詩って、椎崎さんに言われたんじゃないの？」
　ピンポーン！
「……あ、それはさ……」
「やっぱりそうなんだ」
　菜々ちゃんは悪戯を見つけた子どものように笑顔で言う。
「ばれた？」
「この事だったんだ……」
「ん？」
　この事？
「この前ね、亜依さんに偶然会ったの。そうしたら、椎崎さんが孝志君になにか入れ知恵しているみたいって言ってたから。どんな事をするのかちょっと楽しみだったんだ」
　と、舌をペロッと出す。
「……そうなんだけどさ。誠司さんに菜々ちゃんにプレゼントをするなら、お前にしかない言葉を一緒に贈ってみろ、って言われて……」
　バツが悪いな……。ポリポリと頭を掻く。
「嬉しいよ、本当に。一生懸命書いてくれたんでしょ？」
「まあ、ね」
「アリガト」
　と、頬に熱を感じる。
「……」
「……」
「……」
「ほら、そろそろ始まる時間じゃない？」
　微妙な沈黙を破り、菜々ちゃんは俺の手を引く。
「あ、うん」
　なんだか、さっきので気が抜けてしまった感じだ。あんな不意打ち……。
　席に座っても、さっきの事が頭から離れない。嬉しいハプニングというか、なんというか……突然だったので驚かずにはいられなかったというか……。
　そうやって悶々としていると、劇場が薄暗くなりトレーラーが始まった。
　お決まりのように飲料メーカーのＣＭから始まる。
　今は映画に集中しよう。
　来春公開予定の映画のトレーラーが中心に流れる。その中に見覚えのあるタイトルがあった。
『戀』
　これって……。そうだ、誠司さんの本と同じタイトルだ。
　あっ、やっぱりそうだ。原作者は誠司さんだ。しかも、音楽は佐伯吏凪になってる……って、あの人たちなにも言ってなかったけどな……。
　それに、誠司さんたちはゲームも作っていたような……そんな時間……いや、誠司さんは原作

だから特にないのか。でも、亜依さんは……忙しい人たちだな……。
　もしかして、秘密にしていたのか？　いや、あの人ならあり得る。いきなり発表して俺を驚かそうと……絶対にそうだ。っていうか、既に驚かされた。まあ、この本を書いたって言われた時もビックリしたものだ。
　なんせ、あの誠司さんがこんなロマンスものを平然と書くなんて……。いわゆる大正浪漫というような、明治から大正にかけての恋愛物語だ。これなら実写で映画化されても問題ないだろう。というか、どんな風になるのか、普通に観てみたい。きっと年配の人も多くなるだろう。
　もちろん製作会社としては若者も狙っているようで、キャストには若者に人気のある人たちも多くいる。
　かといって、名前だけのアイドルなんかは起用されていない。演技力に定評がある人たちばかりだ。きっと、誠司さんが許さなかったのだろう。あの人は、そういう事には一切妥協も譲歩もしないからな……。
　まあ、無意味にアイドルを起用してそのファンを劇場に呼ぼうとするようなものは、たいてい失敗すると思う。ストーリーがいくらよくても、演技で台無しにするなんて事になってしまう。
　と、そんな事を考えてしまっている。……なんだか、これのお蔭で平静に戻れたような気がする。そういう意味では感謝しなければいけないのか？
　とにかく、普通に映画を鑑賞できそうだ。よかった。
　やがて、十分少しのトレーラーが終わり、本編が始まった。いつもこの瞬間はドキドキする。これからどんな物語が始まり、そして終わるのか……。
　雪化粧をしたニューヨークの街並みから始まる。道路に沿うようにカメラが移動していく。
　しばらく進むと、カメラが空の方に向けられる。空からは雪が舞い落ちてくる。
　なんだか、よくあるようなシーン展開だな……。
　だが、最初の登場人物が出てくるまでのシーンなんてこんなものだろう、とどこか割り切ってしまう自分がいる。
　登場した主人公は編集者で、忙しそうに働いていて恋をする暇もない、というような設定のようだ。確かに、この状況に恋の匂いはしない。
　やがて、なにかの受賞パーティーで運命の出会いをし、そのまま恋に落ちていく……と、そういう映画だった。
　王道というか、純粋というか、お約束というか、とりあえず無難な映画だった。こういうものの中には、途中でムカムカとしてくるものがあるが、これはそんな事はなかった。その点ではよかったのではないだろうか。
　それにしても、こういう季節に大好きな人とこういうものを観るというのは、なんだか特別な時間でいいなと思った。

　二時間と少しの映画が終わり、映画館を出る。
　外に出ると急に寒い。俺は思わずコートの襟を立てる。
「寒くない？」

「うん、大丈夫」
　俺たちは特に目的もなくブラブラとする。これ以外は別に計画を立てていなかったから、なんだか手持ち無沙汰な時間だ。でも、俺は菜々ちゃんと一緒にいられるだけで、それだけでいい。なんだか幸せだ。
　それからしばらく歩きながら話をし、菜々ちゃんを家に送っていった。

　もうすぐ一年が終わろうとしている。
　思い返せば、今年は色々な事があったな……。
　初めて恋というものをし、彼女が出来た。これ以上の事はなかったと思う。そのお蔭で色々な事を経験した。
　このままずっとこうしていられるといいな……。
　そんな願いを込めて、俺と菜々ちゃんはとある山頂で行われる年越しイベントに行く事にした。遊園地もあるので、朝まで遊ぶのもいいだろう。ただ、山の上にあるという事で、寒いだろうけど。でもそこは、冬は寒いものだと割り切るしかない。
　最寄り駅からは一時間と少しで着けるはずだ。まあ、イベントも前に座って見ようと思わなければ、ギリギリに到着しても大丈夫だろう。
　というか、バイトが忙しくて早めに行く事ができなかったというのが正直なところだ。
　新年を綺麗にした車で迎えたいのだろう、晦日と大晦日は洗車が多い。お蔭様で休む暇もないくらいだ。っていうか、自分の車くらい自分で綺麗にしろ、と思うのは、いくらそれを商売にしていても思ってしまう。しかも、いつもは外だけの洗車の人でも、こういう時は中も綺麗に、となるので、余計に時間が掛かる。さらには、ワックス掛けなんてのも頼まれれば、時間がいくらあっても足りない。
　さらにはオイル交換もしようという人もいて、ただでさえ人手が足りないのに、さらに忙しくなってしまう。なのでピットだけでは到底できないので、普通の場所でジャッキで車体を上げてオイル交換をしたりしなければならない。
　それらの作業をいつもよりも早く、かといって質を落とさずにするのだから大変だ。機械洗車だけなら自動だから、どれだけ有り難いか……と、それを待つ列ができてしまうのは、それはそれで大変だったりする。かといって、免許のない俺は運転なんてできない。なので、拭きあげ作業に徹する。
　もちろん、その間も給油のお客さんが来る。もう、誰かがそれに専念するしかない。と、そんな間にも洗車待ちは増えていく。
　いくらいつもよりも早めに閉店するとはいえ、こうも忙しくては休めるはずもない。あっという間に時間は過ぎていく。本当ならスタンドのみんなで忘年会をするのだが、今回はパスさせてもらった。みんなには冷やかされもしたけど。
　やっぱり、大切な人と過ごしたい。
　が、待ち合わせ時間ギリギリだ。疲れているところを走らなければならないというのは辛いものがある。
「ゴメン。待った？」
　待ち合わせ場所に着くと、菜々ちゃんは既に待っていた。
「ううん。大丈夫」

笑顔で迎えてくれるのが有り難い。でも、罪悪感。
ごめん、と謝りながらも電車の時間があるので、とりあえず電車に乗る。
数駅電車に揺られ、地下鉄に乗り換え、また乗り換えてようやく目的地の近くの駅に到着する。
ここからさらにケーブルカーで山頂に向かう。
ケーブルカー乗り場は思ったほど混雑していない。きっと、イベントをいい場所で見ようと、みんな先に行っているのだろう。
時計を見ると、イベントが始まる少し前だ。山頂に着く頃に始まってしまう。ええい、早く到着しろと心の中で何度も念じる。が、もちろん早く着くはずもなく、ケーブルカーはゆっくりとした速さで上っていく。
途中でケーブルカーの乗り換えがあった。またケーブルカーはゆっくりと……。
やがて到着する。駅を出れば目の前だ。ここは入園無料なので、そのままゲートをくぐり抜ける。
と、入口近くに広場があり、そこに人が集まっている。
「すごい人だな……」
少し坂になっている芝生の広場は、人で埋まっていた。ステージでは楽しそうに出演者たちがお喋りをしている。会場の人もそれにツッコミを入れたり、笑ったりと早くも盛り上がっている。
「いっぱいだね……」
「うん。もっと早くに来た方がよかったかな、ゴメンね」
「そんな事ないよ。別に前で見なくても平気だよ。ここでも充分に見えるし、楽しいよ」
笑顔でそう言い、
「寒いけど」
と、付け加えた。
「確かに寒いね」
持ってきた使い捨てカイロをゴシゴシとさせる。温かい……。そのまま菜々ちゃんの手に重ねる。菜々ちゃんは無言で俺を見る。
「ありがとう。温かいね……」
時折、ステージの後ろにあるジェットコースターの音で聞こえづらくなる瞬間があるが、それはそれでいい。こういう場所ならではだろう。
イベントは進み、出演者のミニライヴなんかもあり、会場はさらに盛り上がっていく。そして、ラジオ番組の公開録音へとプログラムは進んでいく。番組中にカウントダウンを行うのだ。ただ、これが放送されるのは新年が明けて最初の通常番組が放送される週なのだが……。
そしてカウントダウン。二〇一一年に別れを告げ、二〇一二年を迎えるまであと少し。と、スピーカーから時報が流れる。
残り一分。六十からカウントダウンが始まった。
五十九、五十八、五十七……。

三十三、三十二、三十一……。
十七、十六、十五……。
五、四、三、二、一……。
「新年あけましておめでとう！」
と、全員で叫ぶ。前回は英語だったので、今回は日本語という事らしい。
「明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします」
と、菜々ちゃんに言われて慌てて、
「おめでとうございます。えっと、こちらこそよろしく」
と言うと、菜々ちゃんはクスクスと笑う。なんだか恥ずかしいな……。でも、幸せだ。
俺たちはイベント会場の側にある物販スペースに行く事にした。イベントの最中なので人はいない。その間にどんな商品があるのかを見てみる。出演者のＣＤや番組の関連商品など、本当に様々だ。残念ながら出演者についてはよくわからないので、商品は買わないが、こういうものは見ているだけでも楽しい。
物販を一通り見ると、またステージが見える場所に移動した。
ステージの上ではコタツを囲んでなにかしている。よく見ると、焼き肉をしているようだ。
おいおい、どういう番組なんだよ、と心の中でツッコミを入れる。
そんな番組公録も終わり、再び出演者のミニライヴになった。
俺たちはどちらからともなくそこを離れ、乗り物がある方へと歩いていった。
一番近くにあったペダルを漕いでレールの上を進むという乗り物に乗る事にした。これはちょうど広場を上から見る事ができる。
ミニライヴを上から見るというのもなんだか不思議なものだ。よく知らない人だけど、すごくいい歌だと思う。どうやら、先程の物販スペースでもＣＤを販売しているらしい。買おうかなと思う。それにしても、こういうイベントに来ると、ついつい買いたくなってしまうのはどうしてだろう。なんだか、不思議な魔力があるように思える。
俺たちはそれから明け方まで遊園地で遊び、初日の出を見て家に帰った。

★　★　★

二日、俺たちは初詣に行く約束をした。元旦にもイベント帰りにケーブルカーを途中下車して初詣をしたのだが、もう一度日を改めて行こうという事になったのだ。
あの時はバイトの後で疲れていたし、それでさらに遊んだしでクタクタだった。
ちなみに、明日は高遠たちと初詣に行く事になっている。みんなと会うのもなんだか久しぶりだ。って、今年は三が日ずっと初詣か……。
とにかく、今日は菜々ちゃんと二人だ。人混みの中というのは億劫だが、それも菜々ちゃんと一緒だと思えばどうという事はない。
そういえば、初夢って見なかったな……。憶えていないだけか？
窓の外が明るい。冬のしんと透き通った色だ。

そういえば、今日は十時に菜々ちゃんと待ち合わせをしている。
十時……？
俺は慌てて時計を見る。
げっ、十時十分前じゃん！
微睡んでいる場合じゃない！
俺は慌てて飛び起きる。
どうしよう、どうしよう！
とりあえず、慌てて着替える。そして、歯を磨いて顔を洗って……ああっ！　間に合わない。
できるだけ早く身支度を整えると、俺は待ち合わせ場所へと全力疾走する。
ったく、どうして寝坊してしまったんだか……。自分が怨めしい。今まで寝坊なんてなかったのに……。しかも、新年早々ってのはどういう事だ？
新しい年に初めて寝過ごすとは……なんだかすごい始まりだな。
っていうか、縁起悪くないか？　あまり縁起を担ぐ方じゃないけど、これはなんというか……まずい気がする。
とにかく急ごう。
俺は息が続く限り走り続ける。寝起きでいきなり全力疾走っていうのはきついな……それでも、菜々ちゃんを待たせる方が心が痛い。だから、全力でなんとしても、できるだけ早く着かないと！
待ち合わせの場所に近付いてくると、妙に賑わっている。新年だからなにかしているのだろうか？　公園の下の階段が待ち合わせ場所だ。なにかしているようには思えない。
だったらなんだ？　なにかあったのか？
――ドクン！
イヤな予感がした。
人だかりに近付いていく。
「……はい、救急車をお願いします。……怪我をしているのは、それぞれの車を運転していた運転手と、それに巻き込まれた女の子です。……はい。……はい。……運転手は意識があるみたいですが、女の子は……はい。……いえ、脈と呼吸はあります。……はい。意識はないみたいです。……頭を打っているようなので、私ではなんとも……。
……はい、お願いします。……はい。私は通りがかっただけなので……はい。望月皐月といいます。……はい、電話番号は携帯でもいいんでしょうか。……はい、わかりました。番号は……」
そんな声が聞こえる。俺は人混みをかき分ける。
その言葉の中の女の子というのが気になる。
もしかしたら……。
違うかも知れない。
でも……。

　俺は人混みをかき分けて進んでいく。
「……それと、警察にはまだ連絡していないので、そちらからお願いしてもいいですか？　……はい。……わかりました。それでは、お願いします」
　ようやく人混みを抜ける。
　すると、そこには着物を着た女の子が横たわっていた。頭からは血が流れている。
　その傍らに二十代半ばくらいの女の人がいた。腕に付けた携帯電話でどこかに連絡をとっている。さっきの声はこの人だったのだろう。
　……いや、今はそんな事どうでもいい。問題なのは……。
「……菜々……ちゃん……」
　俺は着物の女の子に歩み寄る。
「菜々……っ！」
　それは間違いなく菜々ちゃんだった。髪を結わえて化粧をしているようだが、間違えるはずがない。菜々ちゃんだ。
　わけがわからない。
　頭の中が真っ白だ。
　どうなったんだよ。
　どうなっちゃうんだよ。
「菜々……っ！」
　俺が菜々ちゃんを抱きかかえようとすると、
「動かしちゃダメ！」
　強い言葉で動けなかった。
　見ると、さっきの女の人だった。
「君、この子の知り合い？」
「……はい」
　そう言った声は震えていた。
「そう……。動かしちゃダメ。頭を打っているようだから、絶対に」
　今度はさと諭すような、優しい声だった。
「安心して……とは言えないけど、呼吸も脈もあるから大丈夫だとは思うわ」
　俺は菜々ちゃんの手をギュッと握った。
「そうね。今はそうしてあげていて」
　女の人はコクンと頷いた。
　なにもできないのか……。なにもしてやれないのか……。虚しさでいっぱいだった。
　どのくらいだろうか、俺には何時間にも感じられたが、きっと数分だろう。サイレンの音が聞こえてきた。
「ここで待っててね。私が誘導してくるから」
　女の人は人混みをかき分け、サイレンの方に走っていく。
　相変わらず人混みは絶えない。しかも、なにもしようとはしない。ただ見ているだけなのだ。

　この人たちにとって、これは非日常で、面白い余興で、興味本位でしかない。そこに人の命が消えるか否かだという認識はない。事故を起こした人たちよりも、この人たちに苛つく。
　なにもしないくせに、そこにいる。邪魔でしかない。誠司さんもこんな気持ちだったのかな。
　騒ぎを聞きつけて、さらに人は増えていく。そして、上辺だけの同情で可哀相だのなんだのと言う。
　そんな傍観者たちが赦せない。
　事故を、人の命を、ただの話のネタとしかみていない連中に腹が立った。
「どいてください！」
　さっきの女の人が救急隊員を連れて戻ってきた。
「どいて下さい！　なにもせずに見ているだけなら邪魔です！　どいてください！」
　女の人は周囲に言う。
「もしもこの女の子が助からなかったら、あなたたちのせいですよ！　どいてください！」
　……すごい。
　野次馬の連中が少しずつ離れていく。それでもまだ残っているが、わずかに減った。
「見せ物じゃないんです！　人の命がかかっているんですよ！　他人事じゃないんですよ！　道をあけて下さい！」
　野次馬たちは帰らないものの、道だけはあける。
「菜々ちゃん……」
　菜々ちゃんが担架に乗せられ運ばれていく。
「君は彼女と一緒に行きなさい」
「あの……あなたは……？」
「私はここに残って現場検証に付き合うわ。あの野次馬どもじゃ役に立たないだろうし。目撃者だしね。あとで病院の方にも行くから」
「わかりました」
　すごい人だ。
　俺は菜々ちゃんと一緒の救急車に乗り込んだ。

病院へ到着して、菜々ちゃんは処置室に運ばれていった。
　俺になにができるのか。
　なにもできやしない。
　代わってあげたいくらいだってのに。
　できる事を考えに考えた結果、菜々ちゃんの家に電話をする事だけだった。
　この事を伝えなければならない。
　しかし、菜々ちゃんの両親は不在だった。留守番電話に切り替わったので、メッセージだけ残しておいた。
　菜々ちゃんからちらりと聞いてはいたが、留守にしている事が多いんだそうだ。
　俺のとこは、俺にほとんど無関心でいようとしている。それが逆に関心があるって事なんだろうけど、俺は母親に嫌われてるからな。
　それと一緒にするわけじゃないけど、俺も菜々ちゃんも親には優しくされていない気がする。
　それから、一応、誠司さんにも連絡をしておいた。俺だけじゃ、なにかあった時なにもできない。入院の手続きとか無理だ。
　親はあてにならないし、菜々ちゃんの親もそうだ。
　なら、迷惑を掛けちゃうけど、頼れるのは誠司さんしかいない。
　電話には亜依さんが出た。
　電話をして状況を言うと、とりあえずこっちに来てくれるそうだ。
「ありがとうございます」
　電話口でそう言った時、心の底から安心した。
　それが終わると、結局なにもできずに座っているしかない。
　考える事は菜々ちゃんの事だけだ。他になにがある。
　ただ、椅子に座っている時間だけが流れていく。
　このまま、永遠にこんな事をしてるんじゃないかって錯覚に陥る。
　そうしてると、刑事がやって来て、事故の事を色々と聞かれた。でも、俺はなにも知らないに等しいので、答えられる事なんてほとんどなかった。
　答えられたのは、菜々ちゃんの名前や連絡先くらいのものだ。
　その時の刑事さんの対応がバカで、冷静になれたので刑事さんには感謝している。

　少しだけ冷静になったところで、なにも好転したわけじゃない。
　それからしばらくして、現場で色々としてくれた人がやって来た。まさか、本当に病院まで来てくれるなんて思ってなかったから驚いたってのは、相手に失礼だろうか。
　望月皐月さんというその人は、色々と事故の事を教えてくれた。
　待ち合わせ場所にいた菜々ちゃんに向かって、車が突っ込んでいった事。
　それから、声を掛けたが返事がなかった事。
　そして、俺が来てからの事。
　俺たちがここに向かってからの事。
　ちなみに、運転していた人は、軽傷らしく別の病院で手当を受けているそうだ。
　ここにしなかったのは、被害者を考慮しての事だろうか。どうでもいい。
　でも、もし同じ病院なら、俺はそこへ殴り込んで行ってるだろう。
　巻き込まれただけの菜々ちゃんがこんな状況なのに、当の本人は軽傷なんて赦せるはずがない。
　お前がこうなってりゃよかったんだ。
　なるほど、それを考えれば別の病院にして正解だったんだろうな。
　教えてくれと言っても、教えてくれないだろうし。
　そんなの、後でなんとでもしてやるさ。

とにかく今は、菜々ちゃんだけだ。
「彼女の両親には連絡したんですか？」
望月さんが気遣うように訊いてくる。
「はい。でも、留守電で……。携帯の番号は知らないので、とりあえずメッセージだけ残しました」
「そう……ですか。しばらくは、彼女の両親は来ないんですね。だったら、もうしばらくいますね」
「でも、迷惑じゃないですか？」
「目撃者という関係者として、首を突っ込んじゃいけませんか？　あなたが迷惑なら、席を外しますけど」
俺は首を振る。
「いいえ。むしろいてくれてホッとしてます。正直、俺だけだったらなにもできないですから。あの時、現場に望月さんがいなかったら、どうなってたか……」
「別に、普通に対応しただけなんですけどね」
「その普通がありがたかったです。ありがとうございます」
望月さんに向かって頭を下げる。
望月さんは笑顔を向けてくれた。
「きっと助かるわよ」
「……はい……」
嬉しかった。涙が出てきた。
だけど、この涙は悲しさの涙じゃない。悔し涙だ。
寝坊した自分が、遅れた自分が、菜々ちゃんになにもしてあげられない自分が……悔しくて悔しくて仕方ない。

それからしばらくして、誠司さんと亜依さんが来てくれた。
駆けつけてくれた時、俺は全身の力が抜けて、張りつめていた糸が切れたような気がした。
「椎崎さんに、亜依さん……」
と、望月さんは思わぬ人物の登場だったようで、驚いていた。俺は俺で、二人と知り合いだった事に驚いていた。どうやら仕事仲間らしい。
「望月さんが色々としてくれたんですね。ありがとうございます」
亜依さんがお礼を言う。
「そんな……。ただ、その現場にいたってだけですし」
「でも、その当たり前ができないヤツが多いんだよな。な、孝志」
誠司さんが俺を見る。
俺がなにもできなかったのを見透かしてるわけじゃなく、俺が小さい頃、誠司さんと知り合ったきっかけになった出来事の事を言ってるんだとわかっていても、実際になにもできなかった俺にすれば、責められているように聞こえてしまう。
「とにかく、彼女の両親は来てないのか？」
誠司さんが周囲を見回しながら訊く。
「どうやら留守みたいですよ。彼が留守電に入れてるそうですけど」
「ったく……。しょうがないな、ホント」
誠司さんは完全に呆れていた。
「まあ、どうせ、菜々ちゃんが目覚めるまでここにいるつもりだし、構わないんだけど」
「やっぱり、そうでしたか……」
亜依さんが呆れた風に言うが、初めからわかっていたのだろう。
「わかってたくせに。でなきゃ、唯依と誠也を預けてきたりしないだろ」
「あれは、仕事もあったのでお願いしたんです」
「そういう事にしておくよ」
亜依さんは、もぅ～と頬を膨らませる。

「あの……ご夫婦の仲がいいのはわかってるんでいいんですけど、私もここにいていいですか？　迷惑なら帰りますけど、誰かさんと違って仕事はひと段落してますし」
　誠司さんは胸を押さえて苦しそうにする。
「あたしたちは、望月さんがそうしたいなら……と、あたしたちに決める権限なんてないわね。孝志くんはどう？」
「俺は……いてくれるならありがたいです。正直、俺だけじゃなにもできないし。誠司さんたちがいてくれれば、それだけで……」
　本当に、頼りになる人たちだと思う。こんな大人になりたいと思える。
　なんだか楽しそうで。時には子どもみたいにはしゃげて。でも、きちんとするべき事はきちんとして。こういうのが大人なのかな。
「とまあ、孝志のお許しも出た事だし、皐月ちゃんは堂々と看護師さんたちと医者を視姦できるわけだ」
「椎崎さん、なんですかその言い方」
「誠司さん、それは彼女に失礼ですよ。これからの参考にするためじゃないですか」
「もう、亜依さんまで……」
　三人の笑いに、俺もつられて笑ってしまう。
　わざとこうしてふざけてくれるのはありがたい。少しでも気が紛れる。
「これ以上、騒ぐと追い出されちまいそうだし、静かにしてようか」
「そうですね」
　通り掛かった看護師さんに睨まれたので、静かにしている事にする。

　それから、ほとんど無言の時間が過ぎていった。
　どのくらいの時間が経ったのか、全然わからない。ここからじゃ外は見えないし、時計を見ればイライラするのがわかってるので誰も確認しない。
　気持ちではもう何週間もここにいるみたいだ。
　誰もなにも口にしない。しないというよりもできない。
　時間が止まってしまってるんじゃないかと錯覚さえしてしまう。
　だが、その時間もようやく終わった。
　処置室のドアが開いて、中からストレッチャーに乗せられた菜々ちゃんが出てきた。
「ご家族の方ですか？」
　一緒に出てきた女医さんが誠司さんを見て言った。
　まあ、どうせ俺はそういう対象じゃないだろうけどな。
「いいえ、違います」
　その答えは意外だったのか、他にそれらしい人がいないか誠司さん越しに捜す。
「彼女に家には連絡をしているのですが、どうも不在のようで……」
「そうですか……」
　仕方ないと判断したのか、ストレッチャーをどこかへ移動させる。
　ストレッチャーに寝ている菜々ちゃんを見ようと思ったけど、ちらりと包帯が見えたので、それは諦めた。
　別に血が怖いわけじゃない。ただ、菜々ちゃんがそんな姿を見られたくないだろうと、俺が勝手に思っただけだ。
　血が怖いわけじゃないのは確かだけど、さっきのは言い訳なのは間違いない。
　俺が犯してしまった過ちを見たくないだけなんだ。
　俺が遅刻した結果を見てしまうと、もう俺は俺でいられなくなる。そんな勝手な事で、俺は菜々ちゃんを見れずにいる。
　結局、自分がかわいいんだ。俺も。
　菜々ちゃんは、そのまま集中治療室へ運ばれていった。
「ご家族ではないようですが、ご関係者のようですしお伝えしましょう」
　女医さんが、じっと誠司さんを見る。
「直接命にかかわるような事はないと思われます。しかし、意識が戻りません。こればかりは、どうしようもないんです」
　女医さんは悔しそうな顔で言う。手を尽くしてもどうにもならない事だってある。
「どのくらいで目覚めるでしょうか？」
　誠司さんの問いに女医さんは首を振る。
「それはわかりません。明日かもしれませんし、一週間後かもしれませんし、三年後かもしれません」
　そんな……。そんなのって……。
「でも、目覚めるんですよね」
「……」
　俺の質問に女医さんはなにも言わなかった。
「……なんとも言えません」
　ただ、それでもそれだけを言う。結局、答えがないって事だ。
「じゃあ、このままって事も……」
「可能性がないわけではありません」
　女医さんはそれだけを言うと、どこかへ歩いていった。

「孝志。ちょっと外の空気吸ってくるか？」

「それがいいと思うわ。菜々ちゃんの目が覚めたら、教えるから。ね」
　誠司さんと亜依さんに言われ、俺は頷いて、力なく廊下を歩き、外を目指す。
　リノリウムの床がペタペタと音を立てる。
　病院だから当たり前だけど、薬の臭いがプンプンする。それに、静かすぎる。
　それから、どこをどう歩いたのかわからないけど、気が付くと中庭のような所にいた。
　ぼけっと景色を見る。緑が綺麗だ。
　病院なんて場所だと、これが憩いになるんだろうな。もっとも、現代社会じゃどの立場だってそうだろうけど。
　近くにあったベンチに座る。
　ああ、寒い。
　はぁっと白い息を吐く。
　空を見ると、もう暗くなっていた。
　待ち合わせは昼頃だったから、結構な時間が経ったんだな。もっとも、この時季は日暮れが早いから、まだそんな時間じゃないかもしれないけど、それでもそれなりに経ってるわけだ。
「とりあえず、命だけは無事でよかった……」
　目覚めていないけど、まだ可能性はある。
　別に脳死状態でもないみたいだ。ただ、意識だけが戻らない……そんな感じらしい。
　こんなのってないだろ。
　せっかく、これから新しい一年だってのに。
　それにしても、彼女の両親はまだ来ない。なにしてるんだろう。こんな時に仕事だろうか。
　でも、俺は無力だ。
　それ以前に、俺は疫病神なのかな……。
　ため息を吐く。
　その時、隣に誰かが座る気配がしたので隣を見ると、そこにには望月皐月さんが座っていた。
「寒いわね」
「ありがとうございます」
　俺がそう言うと、望月さんは首を傾げる。
「なんのお礼かな？」
　そういえばなんだろう？　自然と出てきたので考えてなかった。
　でも、色々とある。
　救急車を呼んでくれた事。
　病院で付き添ってくれた事。
　こうして、ここに来てくれた事。
　どれだけ感謝してもしきれない。
「色々とです」
「そっか」
　望月さんは空を見上げて呟いた。それ以上、望月さんはなにも言わなかった。
　そのまま、無言の時間が過ぎる。
　ちょっと重苦しい感じもするけど、なにを話せばいいのかわからない。
　デートで無言になってしまった気まずさにどこか似ている。
「俺って疫病神なんですかね」
　なんとはなしに口から出た。
「あの事故は、あなたのせいじゃないでしょ」
「どうでしょうね。もしかしたら、俺が死神なのかもしれません」
　地面に視線を落とす。
「自分を責めるのはやめなさい」
「そんなつもりでもないんですけど……事実かもしれないなって。以前にもあるんですよ、大切な人を亡くした事が」

「……」
　望月さんは言葉を失った。さすがに衝撃的だったのだろうか。
「別に恋人ってわけじゃないですよ。小さい頃から一緒に遊んでいた、俺にとってはお姉ちゃんみたいな人だったんです」
　別に聞きたくないかもしれないけど、ぽつりぽつりと話す。自分の中でも、あまり思い出さないようにしていた事でもある。ただ、忘れたりは絶対にしない。
「泉水ちゃんっていうんですけど、近所でずっと……幼稚園に入る前からずっと遊んでいたんです。一つ年上で、ホントに仲良くしてくれて、姉弟みたいだったんです。本当の家族以上に家族だったんです」
　ダメだ。思い出すだけで涙が出てくる。
　なのに、どうして話すんだろう。
　別に訊かれたわけじゃないし、話す必要なんてないような事なのに。むしろ、こんな話をされて、望月さんが困るだけだってわかってるのに。
　それでも話すのは、話さないと俺が壊れてしまうからだろう。
　話して少しでも楽になろうとしてるんだ。
　人に俺の重荷を勝手に背負わせてる。
　きっと、望月さんもそれはわかってる。わかった上で聞いてくれてる。
　ありがとうございます、と何度も心の中でお礼を言う。
「泉水ちゃんが中学に入って一年が経った頃で、俺も中学生になろうとしていた頃でした。昔から心臓が悪かったらしいんです。子どもだった俺は、そんな事全然知らなくて……。俺からすれば、突然いなくなってしまったようでした」
　あれは衝撃的だった。
　昨日まで普通だったのに、フッといなくなってしまったんだ。
「その時、命ってこんなに簡単なんだって思いました。子どもだった俺は、お通夜や葬式に出席さえしませんでした。まともに、お別れなんてできなかったんです」
　ポタポタと涙が地面に落ちる。
「そう……でも、それこそ、あなたのせいじゃないじゃない」
　ずっと聞いてくれていた望月さんがそう言い放つ。
　正直、グサリと心に刺さった。
　でも、確かにそうなんだろう。
　泉水ちゃんの死を、俺のせいにするのは自意識過剰なのか、俺の自己満足なのか。
　勝手に責任を感じて、暗い過去を背負っているのがカッコイイとでも思っているのか、第三者からすればそんなものだろう。
「そんなの、背負い込む必要ないわよ。責任を感じるなんて、おこがましい」
「……」
　その通りだと思う。
「ほら、過去は過去。今は今。今は、彼女の無事を祈ってあげなさいって。それに、過去に重ねて、勝手に彼女を殺したりしないの。彼女は無事に目覚める。違う？」
　その通りだと思う。
　俺はなにを考えていたんだろう。
　俺が暗くなってどうするんだよ。明るく、目覚めるのを待つのが道理だろう。
「すみませんでした」
「それにしても、若いっていいな……」
　望月さんは遠い目をして言う。
　俺からすれば、そんなに歳が変わらないような気がするのだが、大人ってそんなに違うものなのかな……。きっと、五歳ほどしか違わないと思うんだけどな……。
　そんな、場違いな事を考える。
「ちょっと、語ったらすっきりしました。黙って聞いてくれて、ありがとうございました」

「まあ、気持ちの捌け口になったんなら、一緒にいた甲斐があったかな」
「ありがとうございました。そろそろ、菜々ちゃんの所に戻ります」
「そうね。もしかしたら、目が覚めてるかもしれないしね」
「だといいです」
　無理矢理に笑顔を作る。
　ずっと暗い気持ちになっていて、周囲を気にする余裕がなかったけど、こうしてスッキリして立ち上がると、急に寒さを感じるようになった。
　ブルッと震えてしまう。
「寒いわね……早く中に入りましょう」
　俺は望月さんと一緒に菜々ちゃんの所に戻った。

集中治療室に戻ると、見知らぬ大人がいた。誠司さんと亜依さんの姿はない。
「お前かっ！」
もしかして、と思うと同時に、胸ぐらを掴まれた。
「お前が娘を！」
そのまま壁に叩きつけられる。
ガツンと目の奥で星が散った。
それから、何度も壁に叩きつけられる。その都度、なにか叫ばれてるけど、もう全然わからない。
何度目かわからなくなった頃、ふと手を離された。
「もう、その辺にしといてくれませんか」
ズルリと床に座り込む。
誰だろう……。
ぼんやりとした視界で確認できたのは、誠司さんの姿だった。
（ああ、来てくれたんだ……）

椎崎誠司が声を聞きつけて、集中治療室の前にやって来ると、室田孝志が誰かに壁に叩きつけられていた。
見た瞬間、それが誰なのかは想像できた。
それにしても……する事が尋常ではない。
誠司は駆け寄ると、その手を掴んだ。
「もう、その辺にしといてくれませんか」
口調は穏やかだが、目は殺気混じりだ。
孝志を掴んでいた相手は、ゆっくりと力を抜いて孝志を離す。
このまま続けるようなら、誠司は容赦なく相手を叩きのめしていただろう。
孝志は力なく床に崩れた。
「大丈夫か」
誠司は掴んでいた手を離して、孝志の背中を支える。
気を失っているのかわからないが、呼吸はしているので大丈夫だろう。
「ったく……する事が大人げないな」
誠司は孝志を支えたまま呟く。
「お前は誰なんだ」
誠司は相手を見上げて答える。
「俺はこいつの保護者のようなものですよ」
「家族じゃないのか」
「家族じゃないですけど、こいつの本当の家族よりは家族だと思ってますよ」
そう答えられて、相手は少し困惑していた。
「こいつの親はどうしたんだ。人の娘をこんな目に遭わせて、どうして詫びの一つも言いに来ないんだ」
誠司は、やれやれとため息を吐く。
「自分の娘が事故に遭ったってのに、連絡してからここに来るまで、えらく時間が掛かってますね」
相手はグッと息をのんだ。
「こっちは仕事だったんだ。携帯に連絡があれば直行したが、自宅では無理だろう」
「こんな日にまで仕事ですか」
誠司は嫌味ったらしく呟く。
「正月だろうが、仕事はあるんだよ。君にはわからないかもしれないがね」
「そうですね。俺みたいな若造にはわからないのかもしれませんね。あなたと違って、仕事中だろうと、こいつからの

連絡で駆けつけた俺には、仕事に夢中のあんたの気持ちはわからないし、わかりたくもない」
「あなた、菜々は大丈夫？」
　そこへ、菜々の母親が入ってきた。
　母親は、そこにいる見知らぬ二人に戸惑いながらも、菜々の様子を訊く。
「ねぇ、あなた……」
「ああ、菜々はとにかくは無事みたいだ。ただ、意識が戻らないらしい」
「どうしてこんな事に……」
　母親はハンカチを取り出して目元を拭う。
（ああ、白々しい）
　誠司は、その様子を見て絶望的なものを感じた。
「お早い到着ですね」
　誠司はわざと喧嘩をふっかけるように呟いた。
「この人たちは？」
　父親は、ああ、と母親に説明する。
「菜々の彼氏とかいうガキと、その保護者だそうだ」
「菜々の彼氏？」
　その様子を見て、やっぱりか……と誠司は思った。
「ちょっと、あの子に彼氏なんていたの？」
「お前も知らなかったのか」
　父親はその事に驚いていた。
「誠司さん、彼女のご両親は来られた？」
　亜依と皐月がやって来て、目の前の光景を見て息をのんだ。
　皐月はただ戸惑っているだけだが、亜依はだいたいの経緯を察する。
「望月さん、孝志君をお願いします」
「わ、わかりました」
　誠司は、困惑気味の皐月に孝志を預ける。
「ちょっと大変かもしれないけど、ロビーか……外にでも連れていってもらえますか」
　誠司は孝志を渡しながら頼む。
「わかりました」
　皐月は孝志の腕を、自分の肩にまわして立ち上がる。
「お二人は……」
「ちょっと、こちらさんと話があるんでね」
「あたしがいないと、きっと暴走しそうだから。あたしも、場合によっては難しいけど」
「……わかりました」
　皐月は、どこかこの場にいてはいけないものを感じて、孝志を支えて歩き出す。
「亜依、すまないけど……」
「誠司さんに任せます。けど、あたしだって限界はありますから」
「頼もしいよ」
　誠司は周囲を見る。
「ここだと迷惑になるでしょうから、どこか空いてそうな部屋で、ゆっくりとお話しましょうか」
「いいだろう」
　誠司はそれを聞いて、手近な部屋のドアを開ける。
　そこは空き部屋のようだったので、そこを使う事にした。
　勝手に入って勝手に明かりを点ける。
　普段なら亜依がやんわりと注意するような事だが、この状況では彼女も同じ気持ちだった。
「さて、改めて自己紹介だけしておきましょうか……と、その前にお座りになったらどうですか」

見舞い客用だろうか、折りたたみの椅子が二脚あったので、それを二人に勧める。
二人は、それに従い座る。誠司と亜依は、立ったままだ。
「では、俺は椎崎誠司といいます。室田孝志の保護者のようなものです。こっちは、妻の亜依です」
亜依はペコリと頭を下げる。
「こちらはする必要もないだろうが、あの子の親だ」
「でしょうね」
その小馬鹿にするような言い方にムッとしているのが、誠司と亜依にはわかったが、あえて誠司が言ったのを亜依はわかっているので、予想通りの反応に笑いそうになってしまう。
「まず最初に言っておきますが、あいつの両親は来ませんよ。連絡すらしてませんし、する必要もないですからね。もっとも、あいつの親も、どこかのお宅と同じで、子どもに関してはあまりにも無関心なもので」
誠司は薄ら笑いを浮かべながら言う。
「あんた、かなり失礼だな。人に対するものの言い方を知らないのか」
菜々の父親は誠司の態度に憤慨するが、誠司は全く動じない。それどころか余裕の表情だ。
「あんたら、子どもはいるのか？」
「ええ、娘と息子が一人ずつ」
亜依がそれに答える。
「だったらわかるだろう。自分の娘が、どこかの男のせいであんな事になったんだぞ。親が謝罪に来るものだろうが」
誠司と亜依は視線を交わす。
「そうですね……そんなものですかね」
「最近の若いもんは、そんな常識もないのか」
「あなたに常識云々を言われたくないですね」
「その言い方が非常識じゃないか」
なおも怒りを露わにする相手に、誠司は冷静にどうするか考える。
「最近の……というか、ろくでもない親ってのはどの時代にもいるんですよね。なんでも自分が正しいと思いこんでるのがね」
相手が息をのむ。
「自分の子どもがこういう事になれば、あんたらにもわかる。自分の子どもが傷つけられて、黙っていられる親なんていない」
やれやれと誠司はため息を吐く。その答えに、亜依も残念そうにため息を吐いた。
「ところで、あなたたちはどのくらい彼女を事をご存じなんでしょうか」
今度は亜依が質問する。
「自分の娘だ。なんでも知っている」
「その割には、付き合っている人がいる事は知らなかったようですけど？」
その言い方に、亜依がかなりご立腹なのを誠司は感じ取る。これは、しばらく亜依に任せた方がいいと判断して、心の中でバトンタッチと呟く。
「それは……そういう話をあの子がしなかったからだ。親に隠れて、こそこそと……」
「別に、親に承諾を得てするような事でもないですよね。好きな人と一緒にいたいと思うのは、年齢なんて関係ないですよ」
誠司から同じ事を言われたら言い返せていただろうが、それを亜依から言われるとなにも言い返せない。
「家で、きちんと会話をされてますか？」
「当たり前だ。毎日、朝に話している」
「どんな事を？」
亜依が間髪入れずに訊く。
「行ってくるとか、行ってらっしゃいとかだな……」
父親は口ごもりながら言う。
亜依はそれを聞いて、わかりやすく大きくため息を吐く。

「そんなの会話じゃないでしょう。朝はそれだけ、夜は遅くに帰ってきて、一緒に夕食を食べる事なんてないんでしょう」

「それは、仕事が忙しいから。あの子だってわかってくれてるわ」
　父親だけでは分が悪いと思ったのか、ようやく母親が口を開く。一人ではだんだん押されてきていたところに、援軍が現れて父親も安堵する。
　しかし、その程度で誠司と亜依をどうこうできるはずもない。
「仕事が忙しいなんて、とんでもない言い訳ですね。あたしもこの人も仕事をしていますが、きちんと食事は家族そろって摂るようにしています。その時に、今日はなにをしたか話すように心がけています」
「そりゃね、うちだって昔はそうしていた頃があったわ。でもね、あの子も大きくなって、仕事も忙しくなってきたら、仕方ないのよ。あなたたちは若いからまだわからないの。これから、同じようになるわ」
　母親は少しヒステリック気味になってきていた。それでも亜依は手を弛めない。
「それは、それぞれの家庭の事情とでも言えば終わる事でしょうね。でも、結局は言い訳ですよね。彼女ときちんと会話をしたのはいつですか？　学校の話とかしないんですか？」
　亜依は父親の方を見る。
「そういうのは、こいつに任せてある」
　父親は俯いたまま呟く。どうやら、反論する気力もなくなってきているようだ。
　ついにその言葉を言ってしまったなと、誠司と亜依は思った。その言葉は、最後の砦のようなものだ。それを言ってしまえば、完全に放棄したようなものだ。
　話の矛先を向けられた母親はといえば、目を泳がせながら答える。
「……半年くらい前に、進路について話をしてるわ。忙しかったから、あまりできてなかったかもしれないけど」
「進路の三者面談がそのくらいの時期にありますからね……そりゃ、話もするでしょうね」
　誠司が呟く。
「あ、俺ＯＢなんで行事の時期はわかってるんですよ。そうでなくても、あいつと……最近じゃ、彼女ともそういう話とか、色々としてましたんで」
　と、付け加える。
「あたしたちの方が、色々と会話をしてるみたいですね。あなたたちは、彼女の得意料理がなにか知ってますか？　文化祭でなにをしたのか知ってますか？　体育祭がいつだったか知ってますか？　……なんて、知るはずもないでしょうね。彼女に付き合っている男の子がいる事も知らないくらいですから」
　菜々の両親は言葉を失った。
「少しくらい、会話が少なくなったからどうだっていうのよ。こっちはね、家族のために、娘のために働いてるの。それのどこがいけないの」
　母親の声は、もうヤケクソといった風だった。それは、本人が一番よくわかっているだろう。
「そのせいで、彼女が淋しい思いをしたとしても……なんて、こんな定型句は必要ないですね。そんな事を言うのもバカバカしいですから」
　亜依はフッと笑う。それを見て、母親は頭に血が上るが、それは亜依が狙うところだ。徹底的にやりこめようと思っていた。
（なんだか、誠司さんの暴走を止めるつもりでいたけど、あたしが結構暴走してるかも）
　ちらりと誠司を見るが、誠司は腕を組んで静かに見守っているだけだ。
　ただ、亜依にはそこから、誠司が言いたい事を全部自分に言われてしまって、淋しそうにしている事がありありとわかっていた。
「あなたたちはなんなの。余所の家の娘が事故に遭ったのを楽しんでるわけ？　そもそも、あなたたちは部外者じゃないの？　それとも、あの彼氏とかいう子の親の代わりに謝罪でもするの？」
　分が悪くなったと判断したのか、話題を変えてきた。
「今までの話を理解されてないんでしょうか？　あたしたちだって、菜々ちゃんの事を哀しんでいるんです。むしろ、あなたたちよりも長く身近にいたんですから。それに、彼はこの事故に関係ありません。それをどうして責めるんですか。どうして、責任どうこうなんて言えるんですか」

冷静でない相手に、正論を言っても仕方がない。だが、今はそれを言うしかない。むしろ、正論で畳みかけて、相手がどういう反応をするのかを観察していた。
「自分の娘が大事だというなら、もっと一緒にいてあげればよかったんですよ。目が覚めたら、傍にいてあげて下さいね」
そう言うと、誠司の方を見て頷く。
誠司も頷き返して、部屋を出ていく。
「早く目覚めるといいですね」
亜依はそう言い残して、誠司に続いて部屋を出た。
出る時に両親を見ると、二人とも力尽きたように俯いていた。

「ごめんなさい、ちょっとやりすぎたかも」
部屋を出て少し廊下を歩いたところで亜依が言った。少し、反省しているような表情だったが、後悔は感じられない。
「別にいいんじゃないか。俺が言おうと思っていた事を全部言われたから、俺はかなり淋しかったけどな。物足りないから、もっと言ってやってもよかったんだけど、あそこまでダウンされるとな……」
そうですね、と亜依は頷く。
「さすがに、精神崩壊するくらいまで言うつもりはないし、これで孝志が殴られた仕返しはできたかな……ってな」
誠司は子どものように無邪気に笑う。
「そうですね。これで、少しは冷静になってくれれば、あそこまで熱くさせた甲斐があるんですけど……」
「でも、そのせいで恨まれたりしてな」
「別に誠司さんも構わないんでしょ？」
「当然」
二人は、勝ち誇ったように笑う。実際、二人は完全に菜々の両親を叩きのめした。
「少しは反省して、家族の時間を作ってくれるといいんですけどね……」
「それもそうだけど、俺たちも同じ轍を踏まないようにしないとな」
「そうですね……」
亜依は少し遠い目をする。
「あれってね、本当に淋しいんですよ。あたしは、もう一人のお母さんがいたから……」
小さい頃から本当の両親が不在だった亜依にとって、叔母が育ての親だった。もっとも、成長するまでは本当の親だと思っていた。だが、真実を聞かされてから少しの間は、思い耽っていた時期があった。
しかし、不在だった理由を知っている今は、恨み言なんてあるはずもない。
それに、今は一緒に暮らしていられるのだから、それでいいと思っていた。
「まあな。でも、俺たちがあの二人にとって、そういう存在になれたら、それが少しは救いかもしれないけどな」
誠司にしても、両親には恵まれているとはいえる状況ではなかった。音信不通なので、今はどうしているのかすらわからないし、誠司自身がそういう親を見限っているので、淋しくない……と強がりも含まれているが、その存在を消してしまっている。
だからこそ、今のこの家族を大切にしたいと思っている。
孝志と知り合ったのも運命だったのだろう。
それぞれ、淋しさを抱えている者同士が集まっているのだから。
「それにしても、孝志のやつは大丈夫かな……」
「望月さんが一緒ですから、大丈夫だと思いますよ」
「いや、怪我とかじゃなくて、これからだよ」
「これから……？」
亜依は首を傾げる。
「これから、あいつは自分を責め続けるぞ。皐月さんと話をして、多少は復活してたかもしれないけど、菜々ちゃんの

両親にああいう事をされたわけだからな……」
「そうですね……」
　亜依も誠司に言われて、それが心配になる。
「目覚めるのをただ待つのって、想像以上にきついんだぞ」
　誠司のその言葉には重みがあった。
「ごめんなさい」
　亜依は思い当たる節があるので、自然とその言葉が口を出た。
　世界規模で謎の眠り病が発生し、亜依も眠りについてしまった事があった。
　その事件は、管理世界の異変が原因で、それを解決したのが誠司だ。
「おいおい、別に責めちゃいないしさ、あれだって事故みたいなもんだったじゃないか」
「そうですけど……」
「でも、あれはまだする事があったからよかったんだ。だけど、今回のあいつは待つしかない。さすがに俺も医者じゃないから、なんの助言もできない。できたところで、原因は不明だし、完全に菜々ちゃん次第だ。こればっかりは、もうどうしようもないだろう」
　亜依はただ黙っているいるしかなかった。自分にはその気持ちは本当にはわからない。待たせてしまった方にも、申し訳なさがあるのだが、それを誠司がわからないのと同じで、本当にはそれぞれの立場でしかわからないだろう。
　それと同じで、自分の娘が事故に遭って目覚めない親の気持ちも、二人には想像するしかできない。だからこそ、あれだけ言い放てたわけだが。
「それにしても、皐月さんはどこへ孝志を連れていったんだか……」
「そうですね。どこでしょう」
　ロビーの方まで歩いてきたが、二人の姿は見当たらない。
「もしかして、どこかの病室に連れ込んで、ベッドで……」
「誠司さん」
　くだらない想像をする誠司を窘めるように言う。
「冗談だって」
「わかってますけど、そういうの、どうかと思いますよ」
「ごめんなさい」
　誠司は素直に謝る。
「どのみち、皐月さんに任せておこう」
「そうですね。望月さんなら、じっくりと話を聞いて、受け止めてくれるでしょうし」
「俺たちだと、逆に素直になれないかもしれないしな」
「そうですね」
　誠司と亜依は、そのままロビーの椅子に腰掛けた。
　ロビーは、夜間診療に訪れた人たちがいるので、決して静かというわけでもない。
　そのお蔭で、二人がロビーにいても不審に思われるような事はない。
「ちょっと喉が乾いたかな」
　そう言って立ち上がり、誠司は近くにあった紙パックのジュースの自動販売機で、イチゴ・オレを二つ買って戻ってくる。
「はい」
　誠司はそれを亜依に渡す。亜依は、なにを買ったのかわからなかったので、渡されたそれを見て目を丸くする。
「ありがとうございます……って、どうしてこういうセレクトなんですか？」
　おそらくコーヒーかお茶か、もしくは果汁系だと思っていたので、予想外のものに一瞬言葉を失った。
「まあ、頭も使ったし、糖分は必要かな、と。まあ、俺が飲みたかっただけだし」
「もう……それなら、あたしにもなにが飲みたいか訊いて下さいよ」
　そう言いながらも、亜依はストローを挿して飲み始める。
「なんだかんだで、ベストチョイスだったと思うけど？」

「偶然です」
　亜依は、少し頬を赤らめて、それでも美味しそうにそれを飲む。
　それを見て、誠司もストローを挿して飲む。
「うん、甘くて美味しい」
　疲れた脳にまで糖分が行き渡るようだ……などと思いながら、誠司はそれを一気に飲み干した。

皐月は、孝志を膝枕して、またあのベンチに座っていた。ロビーだと人がいるので、できるだけ人が少ない場所を選ぼうとすると、ここになってしまった。
初めて来た病院で、どこになにがあるのかわからなかったので仕方ないだろう。
日が暮れてしまって、寒さがいっそう厳しくなっているが、そこは目を瞑ってもらおう。
「それにしても、やっぱり修羅場になっちゃうか……」
勝手な親が増えてる昨今、自分がこういう場面に出会すとまでは思っていなかったものの、よくある事だとは思っていた。
「彼も大変だね。きっとあれが、彼女の両親と初対面だったんだろうけど、第一印象最悪かもね」
皐月は孝志の顔を見てため息を吐く。
「これから先、舅と姑問題が大変だね……」
完全に他人事なので楽観視できるが、いざ自分となると恐怖でしかない。
「でも、うちの親だったら……ああ、同じかも。意外と大変かもな……」
比較的自由にさせてもらっていて、今もこういう仕事なのを認めているが、内心ではどう思っているのかわからない。基本的に普通の会社で働いてもらいたいと思っているに違いない。
「私の場合は、こういう仕事だし、絶対に良くは思ってないだろうし」
真面目で一昔前の考えの両親なので、絵の仕事をしたいと言った時に喧嘩になっていて、皐月は家を飛び出したようになっている。
それでも、絵を描きたいという気持ちが強く、現在に至る。
親はもちろん知っているが、果たしてどの程度まで内容を知っているのか、それは彼女も定かではない。
「もしかしたら、画家と思ってるかもしれないしな……」
ああいう親を見た後という事もあってか、自分の両親についてどうしても考えてしまう。
「ゲームのイラストで、年齢制限があるようなものも描いてるなんて、卒倒するかもね……」
それが容易に想像できるだけに、実際もそうなんだろうと思う。
「それにしても、よく眠ってるな……」
眠っている顔を覗き込む。
「でも、あれは仕方ないかな」
思い出しても、ショッキングな光景だった。
「今日は、人生でショッキングな出来事が多いかも。すごい新年」
不謹慎かもしれないが、少し胸躍らせていた。
年明け早々、事故の現場に出会し、さらにはその家族との修羅場に遭遇した。なかなかある事ではない。
新年がこんな始まりの今年は、どんな事が待っているのか。波乱に満ちていなければいいな……と思う。
「それにしても、椎崎さんたち大丈夫なのかな……」
仕事では穏やかな雰囲気なので、ああいう修羅場での想像ができない。
「亜依さんもいるし、大丈夫だろうけど……」
（目撃者ってだけで、あまり関係ないから、私に彼を任せた……ってわけでもないよね。これはこれで大事だろうし）
それでも、彼女の家族とのやり合いに巻き込みたくなかったのは事実だろう。あの様子では、目撃者で通報者でもある皐月にまで飛び火してしまうかもしれなかった。もしそうなっても、誠司は収拾する自信はあったが、孝志の事を考えれば、席を外させるべきだと判断した。
「さすがに、取っ組み合いの喧嘩……なんてしてないわよね……」
そんな事を考えていると、もぞもぞと膝の上の孝志が動いた。
（お目覚めかな？）
そう思って覗き込むと、孝志が目を開けた。
「……っ！」
思わぬ事だったのか、孝志がビクンと跳ねるように驚いたのがわかって、皐月はなんだか可笑しかった。

「お目覚めみたいね」
　目をパチクリさせている孝志に、優しく微笑みかける。
「あ、俺……」
　もぞもぞと頭を動かして周囲を確認し、ようやく自分の状況を把握する。
「あ、すみません」
　孝志は慌てて体を起こす。
「別にいいのに」
　皐月は意地悪そうに笑う。あたふたと慌てている様子が滑稽で、もう少し見ていたくなる。
「あれ？　どうしてここに……？」
　さすがに現状を把握できないようだ。
「まあ、それはゆっくり話しましょう。ちょっと、ここで待っててね」
　そう言うと、困惑している孝志を残して、皐月は建物の中に入っていった。
　残された孝志は、寒空の下、ベンチに座って夜空を見上げた。
「俺、どうしたんだっけ」
　孝志はゆっくりと記憶を辿っていく。
　夕方にここで皐月と話をした……というか、話を聞いてもらった事。
　そして、菜々の所へ向かって……。
「そうだ。俺、菜々ちゃんの親に……」
　それを思い出した瞬間、不意に後頭部が痛みだした。
（思い切り叩きつけれたんだっけ）
　胸ぐらを掴まれ、壁に叩きつけられたのだから、痛まないはずがない。
　孝志は後頭部を押さえながら、それからの事を思い出そうとするが、なにも思い出せない。
「ちゃんと待ってたみたいね」
　そこへ皐月が戻っていた。
「はい。これで少し温まろう」
　と、孝志に缶コーヒーを渡す。
「ありがとうございます」
　受け取った孝志だが、思いの外熱く、落としそうになってしまった。
「熱いから気を付けてね」
「それは先に……って、わざとですか？」
　文句を言う孝志だが、皐月を見ているとなんとなくそう感じた。
「椎崎さんと親しいみたいだから、こういうノリかなって思ったんだけど」
「……類はなんとかですか」
「お互い様かもしれないわね」
　ですね……と、不本意に思いながらも頷きながら、缶コーヒーを手の中で遊ばせて暖をとる。
「ありがとうございます」
　そんな孝志の言葉に、皐月は座りながら首を傾げる。
「ん？　なにかな？」
「色々とです。きっと、お世話になったろうし、これもそうですし」
　缶コーヒーを少し持ち上げる。
「たいした事じゃないからいいわよ。そんなに気を遣わなくていいから。こういう時だし、甘えるだけ甘えたらいいじゃないかな。これを借りだと思うなら、私はそれを椎崎さんに返してもらうつもりだから。もっとも、あの人はそんな事を全然考えないと思うから、任せておけばいいんじゃないの？」
　皐月は孝志が考えそうな事を、先手を打って言う。
「そうかもしれませんけど、やっぱり俺……。昔からずっとなんで……」
「あの人たちが、家族だと思ってるんなら、家族で貸し借りなんてないでしょう。あなたはそうじゃないの？」

　そう言われて孝志は考え込んでしまう。
「俺は、家族って正直わからないんです。誠司さんたちが家族だって思ってくれてるのは知ってますし、俺も家族だと思っています。少なくとも本当の親よりは、そういう関係ですし。でも、本当の家族が家族っぽくなかったからかもしれないですけど、家族ってよくわからないんです」
　皐月は、なるほど……と頷く。
「私はまだあの人たちと一緒に仕事してから、何年も経ってるわけじゃないから、プライベートな事とかそんなに知らないけど、椎崎さんも同じような感じだと思うんだよね。女の勘ってやつだけど」
　それを聞いて孝志は、やっぱり女の勘は侮れないと思う。
　誠司も孝志と似たり寄ったりの家庭環境だったのは孝志も承知している。だが、それは今言う事でもないので、孝志は無言のままだった。
「とにかく、あの二人に任せておけばいいんじゃないかな」
　孝志は、そうですねと頷く。
「それはそれとして、俺はどうしてここに……？」
「そういえば、その説明はまだだったわね」
　皐月は、自分が知っている限りの事を孝志に順序立てて話す。
　最初から見ていたわけではないので、そこは孝志の記憶している事に頼るしかないし、誠司に訊くしかない。
　それでも、孝志の疑問を解消するには充分だった。
「そうだったんですか……」
「椎崎さんなら大丈夫だと思うし、あなたはここにいなさいね」
　今にも立ち上がって、現場に向かいそうな孝志を強い眼差しで制する。
「あなたが行くと、火に油を注ぐようなものよ」
　まさにそうしようとしていた孝志だったが、それを振り切ってまで行く事はできなかった。
「コーヒーでも飲んで、落ち着きなさいって」
　孝志は、はいと頷いてプルタブを開ける。
　少し冷めてしまっているが、まだ温かいコーヒーを口に含む。
　コクリと飲むと、体が冷えきっていたので、コーヒーの道順が手に取るようにわかる。
　それと同時に、唯一冷えていなかった頭が、冷静になっていく。
「うん、おいしい」
　皐月もプルタブを開けてコーヒーを飲む。
「椎崎さんなら、ここでお汁粉とかそういうのを買ってくるんでしょうけど、さすがにそれはできなかったな……」
　そんな皐月の呟きに、孝志は笑顔になる。
「確かに、誠司さんならするかもしれませんね……っていうか、絶対にするでしょうね。コーンスープとかもありそうですけど、お汁粉が一番可能性が高いかも」
「やっぱり、そう思うんだ。私より昔から知ってる君が言うんなら、そうなんでしょうね……。なんとなく、あの人のやりそうな事が、最近になってようやくわかってきたかも。亜依さんもなかなか大変ね」
「亜依さんは、かなり包容力がありますから」
「それはあるかもね。あの人じゃないと、相手は無理かもしれないわね。私だったら、無理だな……。仕事仲間でいいやってなる」
「誠司さんに気があったんですか？」
「そういうわけじゃないわよ。……って、そんな事言うか」
　皐月はグリグリと肘で孝志をつつく。
「でも、そんな風に言えるんなら、もう大丈夫かもね」
　しばらく二人で夜空を見上げながら缶コーヒーを飲んだ。
「そろそろ戻ります」
　そう言って孝志が立ち上がる。
「私もそろそろ中に入りたいかも」

皐月も腕を擦りながら立ち上がる。
（もう大丈夫だよね……）
どうなっているのかわからないが、さすがに大丈夫だろうというくらいの時間は経っている。
本来なら事前に連絡をとりたいが、病院内なので携帯の電源を切っている。
皐月は孝志と一緒に菜々のいる場所に向かった。

夜間診療待ちの人が多いのか、ロビーはごった返しているというほどではないが、人が多かった。夜の病院は閑散としているというイメージがあったので、孝志には不思議な光景だった。
ロビーを抜けて集中治療室を目指す。
ロビーとは違い、廊下の方には誰もいない。まるで壁で仕切られているみたいに、くっきりと分かれている。
誰もいない廊下に、二人の足音と息遣いだけが響く。あまりに静かすぎるので、会話をするのは憚られてしまうので、自然と黙ってしまう。
その静かさが仇となったのか、まだ菜々の両親がいる事に気付かなかった。
「あっ……」
と、皐月は後悔した。
誠司たちがなんとか話をしていると思うが、さすがにどうなるかわからない。
できるなら、今日は鉢合わせさせない方がよかった事に違いはない。
孝志の姿を見た菜々の両親は、思わず息をのんだ。それは、孝志と皐月にもわかった。
「……」
「……」
無言がその場を支配する。
とてつもなく重い沈黙だ。
「君の保護者とかいうあの若者たちに言われたよ。親失格だとね」
沈黙を破ったのは菜々の父親だった。
「だが、それでもやはり気持ちは収まらない」
そこで一度言葉を切る。
「君の顔は見たくもない。ここに来ないでくれ。わたしたちの前に現れないでくれ」
激しさはないが、ゆっくりと、それでいてはっきりと言われたその言葉は、傍にいた皐月にも突き刺さる。しかし、孝志はその比ではなかった。
孝志は、すみませんでしたと深々と頭を下げて、そのまま走っていった。
「ちょっと……」
皐月は、すぐに孝志を追いかけようか迷ってしまった。
そっとしておくべきなのかもしれないという思いもあったが、どうすればいいのかわからなかった。
「彼は、あの若者やあなたと、いびつな関係の保護者ばかりなんですね」
それは、誠司に言い負かされた報復だったのだろうか、それとも単なる負け惜しみなのか、それは皐月には判断できなかったが、聞かなかった事にする事はできなかった。
「私は、彼とは今日が初対面ですけど、彼は純粋ないい子だっていう事はわかります。それに、彼の保護者をしているあの人たちは、あなたたちよりは大人だと思います」
皐月は足を震わせながら言う。緊張の余り、震えが止まらない。心臓がバクバクと跳ねているのがわかる。
こんなに緊張したのはいつ以来だろうか。親に今の仕事に就きたいと言った時以来かもしれない。
「言い負かされた事を、勝てるとわかっている相手に八つ当たりなんて、大人のする事じゃないと思います」
それでも、皐月は言わずにはいられなかった。ここで黙っているのも一つだっただろうが、そこまで気持ちを押し込める真似は、とてもではないができなかった。
（まだまだ大人の対応っていうのは無理なのかな……）
誠司たちがどう言ったのかはわからないが、とてもそういう風に対処できない。
「娘をこんな目に遭わされた親の気持ちなんて、あなたにはまだまだわからないんだよ」
そう言う言葉には力がなかった。
押さえきれない気持ちはあっても、それを吐き出すだけの力はもう残っていないのだろう。それだけ、誠司たちの言葉が効いているようだ。
「私には確かにそういう経験がないのでわかりません。でも、これだけは言えます。彼にはなんの責任もない。大切な

人を心配しているだけです。それは、あなたたちとなにか違いますか？」
　その言葉に二人は顔を伏せた。
　気持ちのどこかではわかっていたのだろう。だが、それでも突然現れた娘の彼氏という存在を悪者にしたいという親心もあった。
「もう、理屈じゃないんだ」
「私は目撃者です。だからこそ言えるんです」
　皐月は今まで黙っていた関係性を言う。皐月を巻き込まないようにと誠司は思っていたようだが、ここまで関わって無関係な立場にいるわけにはいかない。
（毒を喰らわば……ってね）
「あなたが……じゃあ、あなたが……」
　それを聞いた母親が顔色を変えた。
「あなたが、菜々の事を連絡して……」
　おそらく警察に、通報者が目撃者である事などを聞いていたのだろう。さすがに誰なのかまでは教えていなかったので、それが皐月である事はわからなかったようだ。
「どうしたんだ？」
　菜々の父親が母親に訊く。
「この人が、菜々が事故に遭った時、救急車を呼んでくれたんですよ」
「……そうだったのか」
　それを知った父親の顔も変わった。
「それは失礼な事を……」
「いいえ。そういう気持ちは結構です」
　これ以上は話す価値もない。
　そう思った皐月は、そのまま孝志が走っていった方に向かって歩きだした。
　その後ろでは、二人が深々と頭を下げていたが、皐月がそれを見る事はなかった。

「なんなの、あれ」
　廊下を歩きながら、豹変した態度に苛立ちを隠せなかった。
　皐月が通報者だと知った瞬間の態度は、面白いものがあった。人はあそこまで態度を一変できるのか。
　そういう点では貴重な経験だったが、今はそれどころではない。
「彼はどこまで行ったかな……」
　せっかく立ち直りかけては、彼女の親に叩きのめされて……その繰り返しだ。さすがに、もう立ち直れないかもしれない。このまま、責任を感じたまま、ずっと過ごす事になるのかもしれない。
　そう思うと、皐月も心苦しくなってくる。
（あの子の性格だと、彼女が目覚めても今回の事はずっと負い目に感じるだろうし、もうどうしようもないのかな……）
　今日初めて会った皐月でも、孝志の性格はだいたいわかってきた。どう展開しても、孝志は罪の意識を持ったままなのはわかる。それが、少し軽くなるかという違いだけで、本質は変わらない。
「厄介だな……」
　運命というものを恨むしかない。こんな人生を決めた神様という存在を怨むしかない。
（もっと平穏で幸せな生活を送ってほしいな……ああいう子には）
　しかし、いくらそう思っても、既に過ぎてしまった事だけにどうしようもできない。
（私には、彼を支えるなんて事は無理だろうし。これは、椎崎さん夫妻にお任せするしかないかな）
　ずっと彼の保護者をしてきたという二人なら、少しは支えてあげる事もできるだろう。
　ずっと一緒だったからこそ遠慮してしまうような部分があるようなら、そこは自分が支えてあげればいいだけの事だ。

　これもなにかの縁だろう。
　皐月にしても、菜々の様子は気になるところだ。
「関わったわけだし、最後まで付き合ってみたいかな……」
　歩き続けていると、ロビーまで来てしまった。
（彼はどこにいるのかな……）
　病院は広いので、どこかに行かれたら探すのは困難になる。ましてや夜だ。入院病棟は廊下には誰もおらず、まるでホラーハウスのようだ。
「ロビーにいてくれたらいいんだけど……。もしかして、またあのベンチかな……」
　そう思って外へ向かおうとすると、ロビーに見知った顔を見つけた。
「椎崎さんに亜依さん」
　皐月は二人に近付いていく。
「どうしたんですか、一人で」
「孝志はどうなったんだ？」
　そう言われて言葉に詰まる。
「それなんですけど……」
　皐月はあれからの事を掻い摘んで二人に話す。
「すみません」
　最後に謝る。
「不運としか言いようがないよな、これって」
「確かにそうですね。まさか鉢合わせになって、まだそういう事を言うなんて……」
「正直なところ、気持ちがわからないわけでもないだよな。俺たちだって親なわけだし」
「そうですね。でも、ああ言うしかなかったんですよね」
「まあ、わかるのは心配する気持ちだけだがな。普段の態度に関しては、理解したくもない」
「同感です」
　そんな会話を聞いていると、この二人は親なんだな……と思わされる。仕事中とは表情が全然違うのだ。
「ともかく、孝志だな。それに、今日はこれ以上ここにいてもしょうがないだろうし。いったん帰った方がいいだろうし」
「そうですね。見つけたら一緒に帰りましょうか」
「うちに一泊決定だな」
「そうですね」
　そう言うと、二人は立ち上がる。
「望月さん、今日はありがとうございました。あとは、あたしたちで探しますから」
「いいえ、私も最後まで……」
「気持ちはありがたいけど、これ以上は……。皐月さんの気持ちもわかるんだけど、ここは俺たちに任せてくれないかな」
「……」
　仕事では見た事もない表情をされると、皐月にはなにも言えなかった。
　これは家族の問題だから、家族じゃない人は関わらないでくれ……二人の事を知らなければそう思っていたかもしれない。
「わかりました。でも、目撃者であり通報者である私に、後日きちんと報告してくださいよ」
「わかってる」
　誠司は優しく微笑む。
（ああ、こんな顔もするんだ……）
　初めて見た親の顔に、亜依がどうして誠司に惹かれたのかがわかった気がした。
「じゃあ、探すか」
「そうですね」

皐月は後ろ髪を引かれる思いだったが、そのまま帰宅した。

孝志を探し始めた二人だったが、意外とすぐに孝志を見つける事ができた。
「ホント、定番だな……」
孝志は病院の屋上にいた。
「っていうか、鍵が開いてるってのは大丈夫なのか？」
フェンスで囲まれているので落下の心配はないだろうが、それでも施錠されていないのは問題だろう。
（誰かがわざと開けていたか……かな）
しかし、それはどうでもよかった。
こういう時はどこへ向かうか考えた結果、真っ先に思い浮かんだのがこの場所だった。
帰ったわけではないだろうし、院内にいるとも思えない。他の可能性としては外のどこかしかないと思ったのだが、まさか最初で見つかるとは……。
冷たい風が容赦なく突き刺さる。
さすがに雪は降っていないが、今にも降り出しそうだ。
そんな屋上で、孝志はフェンスに背を預け、頭を膝の間に埋めて座り込んでいた。
誠司と亜依は、ゆっくりと孝志に近付き、そっと両隣に腰を下ろす。二人はなにも口にせず、ただ黙って座っていた。
どれくらい無言の時間が流れただろうか。
声を掛ける事さえできない時間が流れていく。
「くちゅん」
亜依のくしゃみを合図に、誠司が孝志の肩を叩く。
「そろそろ帰るぞ。今日はうちに泊まってけ」
孝志がわずかに頷く。
「早くしないと、亜依が風邪をひいちゃうし」
「さすがに寒いからお願いできるかな」
亜依は腕をさすりながら立ち上がる。
「……」
孝志はぼんやりとした視線で前を見る。
「ほれ、帰ろう」
誠司は孝志の腕をひいて立ち上がらせる。
孝志の目は虚ろで、支えていないと立っていられないような状態なので、誠司は肩に手を回す。
「じゃあ、帰るか」
「そうですね」
これ以上は、孝志もどうにもならないだろうと判断して、無理矢理にでも連れて帰る事にした。
できれば菜々の両親に出会う事は避けたかったので、少しだけ遠回りをして玄関に向かう。
「ホント、こいつも入院した方がいいんじゃないか」
「誠司さん」
冗談だとわかっているものの、時と場合があるでしょうと誠司を諌める。
「でも、孝志君も大変ね」
「菜々ちゃんが目覚めてくれればいいんだけどな」
「大丈夫ですよ、こんなに想われてるんですから」
「だよな」
そんな会話も、孝志の耳には届いていない。視線も定まらず、まるで魂が抜けてしまったかのようだった。
肝試し気分もありつつ、誰もいない廊下を歩いて、ようやく玄関に到着する。
ロビーは、さすがに人もまばらになっている。それでもまだちらほらと待っている人がいるのを見て、病院も大変

だな……と思う。
　ロビーを通って玄関を出ると、冷たい風が一気に流れ込んでくる。
　屋上にいたので寒さは大丈夫かと思っていたが、温かい院内を通った事で、体が温まっていたらしい。
　寒さに体を震わせながら外に出ると、そこには皐月が立っていた。
「望月さん……」
「ごめんなさい。帰ろうと思って、途中まで行ったんですけど、やっぱり気になっちゃって……勝手に待ってました」
　三人を見るなり言い訳のように言って頭を下げる。
「皐月さん、ありがとう」
　誠司は珍しく真面目にお礼を言う。
「望月さん、ありがとうございます。でも、風邪をひいてしまいますから……よければ、一緒に来ませんか？」
「いえ、そこまでは……」
「いいから一緒に来ればいいって。どうせ、最後まで関わるつもりなんだろうし」
「誠司さんもこう言ってますし、一緒に来ませんか？」
「……ありがとうございます」
　皐月はここで断っても、気になってしまうだけだと思い、一緒に行く事にした。
「早い決断に感謝するよ。これ以上、ここで押し問答なんてしてたら、確実に正月は風邪で寝込んで終わっちまうからな」
「お言葉に甘えてお世話になります」
　皐月を加えた四人は、寒さに震えながら椎崎家へ帰っていった。

　ベッドの中でもぞもぞと体を動かす。
　なんだか体がだるい。
　所々、痛む箇所もあるけど、一番痛いのはやっぱり……。
「ちくしょう」
　どれだけ自分を罵っても足りない。
　なにもできないなんて……。
　菜々ちゃん……。
　今でも目を閉じると浮かんでくる。
　痛々しいあの姿は、もう見ていられない。でも、目を背けちゃいけない。
　あれは俺のせいだ。俺が遅れさえしなかったら。
　だから、菜々ちゃんの親が言っていた事は正しい。
　誠司さんたちは、俺のせいじゃないって言ってくれるけど、やっぱり俺のせいなんだ。
　だから、俺はあの時、どれだけ殴られてもいいと思っていた。それくらいじゃ、罪は消えないけど、それで少しでも楽になるなら、気が晴らせるなら、俺はどうなったっていいと思っていた。むしろ、代わってあげたいくらいだ。
　でも、結局なにもできなかった。
　みんなに助けられた。
　色々と話を聞いて慰めてもらった。
　それで、少しでも罪を忘れちゃうなんて、俺って最悪だ。
　誠司さんもわかってるんだろうな……。
　俺はこの十字架を一生背負っていくつもりだ。たとえ目覚めてもそれは変わらない。
　わかっていてくれるってだけでも、免罪符みたいに楽にさせてくれてるんだろう。
　誠司さんがいなかったら、俺はこんな事を考える事すらできずに、精神が壊れてしまっていただろう。
　やっぱり、あの人はすごい。
　それに、今回は望月さんにもお世話になりっぱなしだった。あの人にも頭が上がらないな。
　俺って、色々な人に支えられてるんだ。改めて思わされた。
　なにもできないんだ。
　でも、今回はそれじゃダメだ。
　俺はなんとしても、なにを捨ててでも菜々ちゃんのためにしたい。なにができるかまだわからないけど。
　時計を見てベッドから降りる。
　今日も菜々ちゃんの所に行かないと。もしかしたら起きてるかもしれないし。
　結構な頻度で泊まっているので、ここにも着替えが置いてある。むしろ、別宅みたいになっている。ここだって、客間だけど半分くらい、俺の部屋みたいなものだ。
　適当な服に着替えて、リビングに向かう。この時間ならみんなそこにいるだろう。

「おはようございます」
　リビングに行くと、案の定全員がいた。望月さんは……もう帰ったのだろう。姿が見えない。
「おはよう」
「おはよう、孝志君」
「おはよう、たかしにーちゃん」
「おあおう」
　みんなに一斉に挨拶される。
　なんだか家族の一員って感じがして嬉しい。
「朝ご飯、すぐに用意するわね」

そう言って亜依さんがキッチンへ向かう。
「あ、俺は……」
「いいから食え。残す事は赦さん」
早く病院に行きたかったけど、これを断る事はできない。断ったら次になにをされるかわからない。
「ありがとうございます」
しばらく待っていると、ご飯と出汁巻き玉子、納豆と漬け物が並べられた。
「いただきます」
手を合わせて食べ始める。
うん、うまい。
やっぱり、手作りっていいな……。
自分で作るのもいいんだけど、こうして誰かに作ってもらったのって格別だ。自分の分だけだと適当だけど、これには食べてもらいたいという気持ちが籠もってる。
「おいしいです」
「ありがとう」
思ったより空腹だったみたいで、おいしいのも手伝って、箸がすすむすすむ。
あっという間にたいらげてしまった。
「ごちそうさまでした」
「はい、お粗末様でした」
手を合わせて、食器を台所まで持っていこうとして、そのままでいいわよ、と言われたので、すみませんと席を立つ。
早く病院に行かないと。
「どこ行くんだ？」
玄関に向かおうとすると、誠司さんに呼び止められた。
「病院です」
決まってるじゃないか。
「だろうな……。ダメだ」
わかってたんじゃないか……って、ダメ？
「誠司さん、どうしてですか？　俺がどこ行ったっていいじゃないですか」
行動を制限されるなんてどうして？　確かにお世話になってるし、保護者みたいなものだけど、そこまで……。
「今回ばかりは……っていうかな、今日はお前を病院に行かせるわけにはいかない」
「どうしてですか？　菜々ちゃんの親がいるからですか？」
「ああ、そういう理由もあったか。すまん、それは気にしてなかった。まあ、それも理由にするわ」
親の事じゃない？　じゃあ、なんだ？
「じゃあ、なんですか？」
「お前、今すぐ洗面所に行って鏡を見てこい。自分の顔をじっくりとな」
「……わかりました」
よくわからないけど、渋々洗面所に向かう。
どのみち、歯を磨かないとだったし、いいけどさ。
それにしてもなんなんだ？　自分の顔を見ろって……。
鏡の前に立って、言われた通りに鏡を見る。
「……」
最悪だな、これ。
鏡を見て理由がわかった。
ヒドい顔をしてる。
腫れ上がってるとかじゃないけど、死人みたいだ。
「ははは っ」

　覇気なんて全然ない。生きてるなんて不思議な顔をしてる。
　最悪な顔だ。
　俺の今の気持ちがそのまま顔に出てる。
「そんな顔で、彼女の前に行くなんて、無謀にもほどがあるだろ？」
　リビングの方から誠司さんの声がする。
　俺は鏡の前で頷いた。
「……最悪だ」
　とりあえず歯を磨いて、顔を洗う。
　冷たい水でバシャバシャと洗うが、引き締まるような感じはない。むしろ、冷たさを感じられない。
「ホント、最低だな」
　タオルで顔を拭いてリビングに戻る。
「戻ったか」
「誠司さん、すみませんでした」
　誠司さんにたてついた事を謝る。
「別に謝られるような事をされたおぼえはないが？」
「俺、誠司さんの言葉に……」
「ああ、あれは俺の言い方も言い方だと思うし、お前の気持ちもわからんでもないから、あれでいいんだって」
「それでも……」
「まあ、それはそれとして、そんな顔で彼女に会いに行けるのか？　目覚めてる彼女の前に、そんな顔で行ってみろ、逆に心配させるだけだぞ。そんな状態のお前を病院には行かせられない」
「はい……」
　確かにこんな顔で会いに行けない。行ったら、心配させちゃうのは俺にもわかる。
「行きたいって気持ちはよくわかる。だけど、今日は我慢しろ。彼女の親も今日くらいはいるかもしれないし、そうなったらまた難癖つけてくるぞ、あれは」
「そうですね……。孝志君、つらいと思うけど、今日は誠司さんの言うように、やめておいた方がいいと思うわ。今日も泊まっていっていいから、この子たちと遊んでくれないかしら？」
「それがいいな。その死人面をこいつらの元気で、無理矢理にでも復活させろ。唯依、誠也、今日は孝志がなんでもしてくれるから、思い切り遊んでもらえ」
　誠司さんは唯依ちゃんと誠也くんに言うと、二人は大はしゃぎする。
「頑張れよ」
「……はい」
　これはなかなか大変そうだ。手加減は……してもらえそうにない。
　でも、その方が色々と考えなくてすむ……と、誠司さんも考えてるんだろうな。
「ほれ、突進だ！」
　誠司さんのその声に、二人は早速、俺に向かって突進してきた。それも、全速力で。
　子どもだからって侮れない。
「うっ……」
　全力で受け止めないと怪我をする。
「じゃあ、任せたぞ」
「はい、誠司さんはお仕事ですよ」
「……わかってます」
　亜依さんに言われて、誠司さんは肩を落としながらも、仕事部屋に向かった。
「孝志君、少しの間、二人の相手をお願いね」
「わかりました」
　さあ、頑張らないと。
　気合いを入れようとしていると、再び突進されてよろけてしまう。

「今だっ」
唯依ちゃんが、ここぞとばかりに体当たり。俺は堪えきれずに尻餅をついてしまった。
やばい……と思ったが遅かった。
きゃははっ、と笑いながら、二人が乗ってくる。
手加減なんてもちろんあるはずもない。
腹筋に力を入れてなんとかしようとしても、俺の腹筋じゃ無理だ。
「うげっ」
何度も何度も乗られて、体はボロボロになっていく。
心も体もボロボロだ。
なんか、このまま再起不能になりそうだ。

　唯依ちゃんと誠也くんの相手をどのくらいしたかわからない。
　いったん、昼食時に解放されたが、食べ終わったらすぐに再開された。
　これにはマジで吐きそうになってしまった。
　そんな地獄のような時間がどれくらい経っただろうか、さすがに遊び疲れたのか、夕方頃に二人とも眠ってしまった。
「あらら……中途半端な時間に昼寝だな」
「可哀想だけど、無理矢理起こさないとダメかしらね」
　と、二人が話しているが、俺も意識が朦朧としてきていた。
「孝志、どうだった？」
「……疲れました」
「だろうな」
　見てりゃわかる、と誠司さんは笑う。
「でも、だいぶ顔はマシになってきたぞ。明日はお肌つるつるじゃないのか？」
「誠司さん、もちもち卵肌じゃありません？」
「おお、そうかもしれないな」
　どっちがいい？　と、訊いてくる。
「どっちでもいいです」
　もう、クタクタだった。子どもの相手ほど疲れる事はない。二人とも、毎日のようにこんな事してるんだよな。
「今日は、普段あまり相手してやれなかったから、その鬱憤が全力でお前に向かっていって発散できたろうし、しばらくは大丈夫かな」
「ホントにありがとうね、孝志君。これで、しばらくあの子たちもおとなしくなってくれるかしらね」
「ガス抜きにはなったろうけど、まだまだ全力でくるだろうしな……その時はまた頼むわ」
「今日の夕ご飯は、あっさりがいい？　それともがっつりがいい？　孝志君のリクエストのものにするわよ」
「……お任せします」
　この家族のパワフルさについていけない。
　もうダメだ……。
　そのまま、ダウンしてしまった。

「あらら……眠っちゃったわね」
「さすがに荒療治だったかな」
「でも、元気にはなったんじゃないかしら」

「今は……な。でも、こいつの性格からすると、まだまだ落ち込むだろうな」
「そうでしょうね」
「その時は、もうなにもしてやれないかもしれないけどな。あとはこいつが自分で乗り越えるしかない」
「菜々ちゃんは大丈夫かしらね？」
「どうだろうな。怪我もたいした事ないみたいだし、他に異常はないらしいしな……」
「だからこそ、難しいかもしれませんね」
「孝志の眠り姫は、王子様のキスで目覚めるのかね……」
「あたしは、王子様のキスで目覚めましたよ」
「……」
「どうしたんですか？」
「恥ずかしい事を言うなよな」
「最初に王子様のキスとか言ったのは誠司さんですよ」
「すみませんでした」
「はい、よろしい。でも、菜々ちゃん、早く目覚めるといいわね」
「ああ」

　夕食の時間に、無理矢理叩き起こされた。
　食事は家族一緒にをモットーにしているので、毎回こうだ。
　一緒に起こされた唯依ちゃんと誠也くんは、まだ眠いようでぐずっているけど、それでも目の前の食事に機嫌を直した。
「お肉っ！」
「おにく」
　目の前にはホットプレートではなく、炭で焼くロースターが置かれている。炭はもちろん備長炭だ。
　家の中でもできるように、煙が出にくくなっているものらしい。
「ガッツリ食え」
「うわぁい」
「おにく」
「野菜もちゃんと食べてね」
「おにく」
「誠也、ピーマンも食べるのよ」
「ぴーまん、いや。おにく」
　誠也くんは、亜依さんの言葉を完全に無視しているようだ。
「ピーマン食べない子には、お肉はあげません」

　亜依さんは強硬手段で、誠也くんのお皿にピーマンを入れる。
「……おにく」
　ちょっと元気がなくなる。
「誠也、ちゃんと食べないとメッだよ」
　唯依ちゃんもお姉ちゃんらしく注意する。やっぱり、女の子ってこういう感じなんだろうな……。
「孝志もどんどん食えよ。食いまくって、明日は病院行きだ」
　そう言いながら、誠司さんが次々に焼けた肉を入れてくる。
「スタミナスタミナ」
　さらに、焼いたニンニクも大量投入される。
「食え食え」
　あっという間に皿は山盛りになる。
「たかしにーちゃんだけ、お肉ずるい」
「おにく」
　唯依ちゃんと誠也くんが羨ましそうに見てくる。
「元気のない孝志に、腹一杯食ってもらって、元気になってもらわないとな。元気になったら、また遊んでもらえるぞ」
「……それなら、お肉あげる」
「うん」
「いい子ね。でも、お肉はまだまだいっぱいあるからね」
「わぁい」
「おにく」
「というわけで、ひたすら食え。食いまくって、臭い息で嫌われろ」
　……このニンニクはそういう意味ですか。
「残さないで食べてね」
　亜依さんも共犯らしい。ものすごい笑顔で言われると、断れない。焼いたニンニクは、全部俺の皿に盛られている。
　……こうなりゃ自棄だ。
　ひたすら皿に入れられたものを消費していく。
　肉ニンニクニンニク肉肉肉ニンニクニンニク肉ニンニク肉肉ニンニク肉ニンニク……肉。
　食べている間にも、わんこそばのように肉が次々に入れられる。
「焦げる前に食ってくれ」
　……勘弁してください。
　そう言う間もなく、ひたすら食べていくしかなかった。

　げぷっ……と、お腹をさすりながらベッドに腰掛ける。
　本気で吐きそうになるまで食べさせられた。

「容赦なさすぎ……」
　ひたすら、肉とニンニクのコンボだった。
　他の野菜は皆無……。かなり厳しい夕食だった。スタミナがつくかどうかは別として、俺の胃袋は悲鳴を上げているだろう。
　はてさて、胃もたれせずにすむだろうか。
　頑張れよ、俺の胃袋。なんとか消化してくれ。
　自分のお腹に念を送る。
　と、そんな事をしてまったりしていると、ドアがノックされた。
「入っていいか？」
　誠司さんのようだ。
　もっとも、断る理由はない。
「はい、大丈夫です」
「そうか、自家発電とか……いや、そういう空気じゃなさそうだな」
　なにやらドアの向こうで言ってるけど、スルーしておこう。自重したというよりは、亜依さんになにか言われたか、睨まれでもしたんだろう。そうでないと、あの人はこういう冗談をやめない。
「入るぞ」
　そう言いつつ、ドアが開けられる。誠司さんの後ろには亜依さんの姿も見えるので、やっぱり亜依さんに叱られていたのだろう。
「どうしたんですか？」
　なんとなく、俺を励まそうとかそういうのだろうちうのは感じられる。
「ちょっと昔話でもしてやろうと思ってな」
「昔話……ですか？」
　なんだろう？　ちょっと、思わぬ展開かも。
「まあ、そのまま座ってていいぞ」
　そう言いつつ、誠司さんもベッドに腰を下ろす。
「昔々、あるところに……」
　いきなり話し始めた。しかも、本気で昔話？
「とてもカッコいい少年と、とても可愛い少女がおりました」
　そこは、おじいさんとおばあさんじゃないんだ。
「二人は運命の出会いをし、恋に落ちました。二人の恋は順調そのものでした。なにせ、彼女の両親公認だったからです」
　なんだろう、このリアルっぽい話は。
「しかし、そんな二人に事件が起きました。少女が眠り病に罹ってしまったのです」
「眠り病……ですか？」
　またファンタジーな……。
「ああ、眠り病だ。孝志は憶えてないかな……１０年くらい前なんだがな」

「誠司さんと出会った頃ですか？」
「ああ、そんなもんだな」
「さすがに、小学校低学年じゃ無理かもしれないです」
「お前、俺との衝撃的な出会いを忘れたのか？」
「いえ、あれは憶えてますよ。自分が関わってますから」
　慌ててしまう。ここで憶えてないとか、嘘でも言ったらどうなるかわかったもんじゃない。
「それならよし。で、その頃に眠り病というのが、流行したんだ。それも世界中でな」
　そうなんですか、と頷く。
　残念ながら憶えてない。そんな大事件ならニュースとかでもしてただろうけど、人の噂もなんとやらで、すぐに別のニュースで、昔の事は忘れられていく。忘れないのは、当事者だけだ。
「少女もその中の一人として眠ってしまった。残念ながら原因は不明。少年はその報せを受けて少女の元に駆けつけたが、なにもできない自分に愕然とするだけだった。少年はただ、眠っている少女を見ているしかできなかった。その寝顔も可愛い少女をな」
　なんか、一言余計じゃないかな……。そのせいか、シリアスに感じないんだけど。
「少年は原因を突き止めようとした。……といっても、一人ではなにもできない。そりゃそうだろう。世界中の医者がなんとかしようとしてるのに、医学の知識もない少年がなにかできるはずがない。わかるはずがないんだ」
　その道のプロが試行錯誤しているのに、素人がいきなり答えを見つけられるはずなんてない。
「それでも少年は諦めなかった。大事な少女のために、なにがなんでもと躍起になった。いやはや、周囲に迷惑と心配を掛けまくった」
　きっと、鬼気迫るものがあったんだろう。
「少年は、ついに手掛かりを見つけた。それは、ある種の専門家にしかわからないものだった。医学とは異なるものだったんだ。医者がなんとかしようとしても、無理な分野だったんだ。知っていたとしても、手も足も出ないものだったんだ」
「なんだったんですか？」
「世界の異変」
「……はっ？」
　あまりの事に耳を疑った。
「だから、世界の異変だったんだ。正確には、世界を管理する世界の異変だったかな」
　ますますわからなくなってきた。荒唐無稽という言葉がピッタリだ。
「あの……」
　いや、元々フィクションだろうし……いや、この人なら……。
「原因はわかった。わかったらその対処法を探すわけだ。少年は神様の秘書の力を借りて、対処法を探し始めた」
　神様？　神様の秘書？
　どこまでファンタジーな……。それにしても、神様の秘書って変な感じだな。
「神様の秘書も忙しいから、ほとんどを少年が探した。だが、その方がよかった。必死になって

、落ち込んだりしてる暇がなくなるからだ。とにかく、あらゆる文献を調べた。調べて調べて調べまくった。しかし、手掛かりは見つけられなかった。そんな簡単に見つかるわけじゃない」
　誠司さんは、どことなく淋しそうな目をしている。
「神様の秘書の協力もあって、なんとかヒントらしきものを見つける事ができた。しかし、そこからがまた困難な道のりだった」
　だんだん続きが気になってきた。
「解決方法だが、途中までは準備されていたんだ。だが、その先が重要だった。全く解読できないような、理解できないような内容だったので、神様の秘書と一緒に理解しようと努力した」
「でも、途中まではできていたんですよね？」
「確かにそれは助かったんだが、それがあるために、まずそれがどういうものなのかを
りかいしなければならなかった。それを活用しなければ解決できないからな。最初から独自の方法で理論だけを利用する事ができないんだ」
　なるほど。それはそれで大変かもしれない。
「ようやく理解できたら、今度はひたすら実行するのみだ。具体的にはプログラミングだったんだが、それが難しかった。ひとつでも間違えば起動しない。プレッシャーと不安で押し潰されそうになった」
　プログラミングか……。想像するだけで頭が痛くなりそうだ。
「それでも、少年はやるしかなかった。他の誰にも任せられないし、そもそもできない事だった」
「プログラミングのプロとか……いなかったんですか？」
「いなかったんだ。普通のプログラムならできるんだろうが、それは特殊なもので、世界中を捜しても適任者は見つからなかっただろうな。強いて挙げれば、その少年と神様の秘書くらいだった」
　それはまた、すごいプログラムなんだな。
「二人はひたすら作成し続けた。その間も、眠り病の被害者は増えていく。しかし、少年にはそんな事はどうでもよかった」
「どうでも……ですか？」
「ああ、どうでもよかったんだ。大事なのは、大切な少女を目覚めさせる事だからな。少年にとって、他の人はついででしかなかったんだ」
「ついでって……」
　でも、その気持ちがわからなくもない。
　知らない人のために頑張れる人は少ない。知っている人のために、大切な人のために人というものは頑張るんだ。もしくは、自分のため。自分になんらかの利益がないと、人は動かない。それは、自己満足も含めて。
　だから、他人のために頑張らなかったからといって、責める事はできない。
「少年は少女のために頑張った。そして、ついにそれを完成させたんだ。完成させたそれは、早速起動された。神様の秘書の努力と、少年の少女に対する愛の結晶だ。それを起動させた少年は

ひたすら願った。成功してくれと。そして、その願いは天に届いた」
「成功したんですか？」
「眠り病の被害者は次々に目覚めていった。少年は、愛する少女の元に急いだ。少女の病室には、彼女の両親もいた」
　ゴクリと息をのむ。
「ベッドに眠る少女は、ゆっくりと目を開けた。そして、少年は自分がやり遂げた事を実感した」
「凄いですね、その物語」
　誠司さんの新作だろうか。きっと、俺を見て思いついたプロットだろう。
　過去にあった事件を元にした創作かな。
「凄いんだよな……その少年は。努力や結果もそうだし、少女への愛も凄かった。いやはや、やっぱり俺は素晴らしい」
「……？」
「今のは、過去にあった本当の話だ。もちろん、俺と亜依のな」
「……マジですか？」
「マジもマジだ」
「でも、世界がどうのって」
　そんなファンタジー、あり得ないだろう。
「事実は事実。脚色は……ほとんどないかな」
　ダメだダメだ。この人は小説家なんだ。嘘吐きのプロなんだ。全部を信じちゃいけない。
「孝志君、不本意かもしれないけど、さっきの誠司さんの話は本当よ」
　亜依さんが飲み物をお盆に乗せて持ってきた。
「まあ、信じられないだろうから、フィクションと思ってくれてもいいけどさ」
　誠司さんはお盆からグラスを取って飲む。どうやらオレンジジュースらしい。
　俺もグラスを手にして飲む。爽やかな酸味がおいしい。肉ばっかりだったから、柑橘系がなんだかものすごくおいしい。
「世界の異変とか、本当なんですか？」
　誠司さんは信じられないので、亜依さんを見て訊いた。
「どこまで信じるかは君次第。でも、現実は現実だから、目を背けちゃダメ」
　亜依さんがそう言うなら、これは本当なんだろう。なんだか、ファンタジーすぎて納得できない。
　神様の秘書っていうのが特に。神様の秘書がいるなら、神様もいるって事に……。秘書と一緒だったんなら、神様も知っているって事だよな。まあ、なにかの比喩みたいなものだろうけど。
「とにかく、俺は原因を見つけて対処できた。結果的にはだけどな。だから、お前も足掻けばいい。だが、今回の事は原因はわかってる。だから、お前ができる事はないってのもわかるな」
　誠司さんがまっすぐ俺を見る。

「できる事は、目覚めた彼女に、元気な顔を見せてやる事くらいかな」
「そうですね。目が覚めた時に、大事な人がやつれていたら……それは、イヤかな」
　亜依さんも笑顔で頷く。
「というわけで、俺と亜依の昔話だ。なんの参考にもならんかったか？」
「……なんだか、ファンタジーな感じで、まだよく……」
「そういう事があったって事だけでも、知っておいてちょうだい。さて、あの子たちも寝たわよ」
「そうか。まあ、孝志も今日は疲れただろう。ゆっくり休め」
「……はい」
　それだけ言って、ジュースを飲み干すと、誠司さんと亜依さんは部屋を出ていった。

　翌朝は、スッキリとした目覚めだった。
　眠る前は色々と考えてしまったが、いつの間にか眠っていたらしい。
　今日はどうだろう？
　まずは鏡を見るために洗面所に向かう。
「……まずまずかな」
　元気いっぱいというわけでもないけど、昨日よりはかなりマシな顔になっていると思う。これならなんとか大丈夫かな。
　心配で寝不足だった……くらいなら、心配されない言い訳になるかな。
　眠気を覚ますために冷水で顔を洗う。
　真冬は目が覚めていい。痛いくらいの冷水なら、イヤでも目が覚める。
　目を覚ましてからリビングに向かう。今日は許可が出るだろうか。
　緊張しながら行くと、
「おっ、よく眠れたみたいだな」
　新聞を読んでいた誠司さんが、顔を覗かせて挨拶する。
「おはようございます」
「あ、起きてきたのね」
　キッチンから亜依さんも顔を覗かせる。
「おはようございます」
「おはよう、たかしにーちゃん」
「おあおう」
　口元を黄色くした唯依ちゃんと誠也くんがやってきた。
「あ、こら、口を拭きなさい」
　慌てて亜依さんが二人の口元を拭く。
「朝から元気ですね」
「あいつらからそれを取ったら、なにが残るかな……。可愛さと理知さと……その他諸々残るな」
　誠司さんはしきりに頷いている。我が子の事だけど、これもある意味じゃ自画自賛だよな……。こういうのが親バカなんだよな。
「今日も、あっさりしたものの方がいいわね。といっても、誠司さんに用意したものと同じなんだけど」
　そう言って、朝食の準備をしてくれる。
「ありがとうございます」
　今日は素直にいただく事にする。
「今日は病院に行くんだろ？」
　突然、誠司さんが訊いてきた。

「はい、そのつもりです」
「そうか。まあ、なにもできないにしろ、傍にいてやれ。あの両親なら、今日は仕事とかでいないかもしれないし、いたらいたで、なんとかしてこい」
　どうやら許可が出たようだ。
　正月三が日も終わり、今日から仕事の企業も多いし、三が日中でも仕事をしていたあの両親なら、きっと仕事を始めてるだろう。むしろ、その方がいい。
「わかりました。いない事を願いながら行ってきます」
「お待たせ」
　そう言って、茶粥となにかフライのようなものを前に置いてくれた。
「ありがとうございます。いただきます」
　手を合わせて茶粥をすする。
　このフライのようなものはなんだろうと箸をのばすと、
「それはね、鰯に蓮根をすったものを乗せて、パン粉をつけて焼いたものなの」
　と、亜依さんが説明してくれた。
　鰯と蓮根か……。
　一口ほおばると、サクッと軽い衣の音と、シャキシャキした食感があった。揚げずに焼いてあるので、サクサクというか、カリカリというか、軽い感じでおいしい。蓮根も細かく刻んだものも入っているようで、歯ごたえもある。
「これ、すっごくおいしいです」
「ありがと。この前、テレビの料理コーナーでやってて、試しに作ってみたの」
　なるほど……。
　頷きながらもう一口。
　食べれば食べるほど食欲がわいてくる気さえする。
　茶粥もいいけど、これはがっつりとご飯をかきこむのもいいかもしれない。
　今日はこのままでいいけど、レシピを教えてもらって、今度自分でも作ってみよう。
　ちょっとラー油とか、なにか味が強いものをかけて、アレンジしてみるのもありかな……。
　そんな事を考えながら、茶粥をかきこむ。
「ごちそうさまでした。すごくおいしかったです」
「はい、お粗末様でした。ありがとう」
　食器を流し台まで運ぶ。
「じゃあ、身支度して早く行かないとね」
「はい」
　歯を磨いて、もう一度顔を洗って、出掛ける準備をする。
「今日は起きてるといいわね」
「はい」
「だが、期待しすぎるのもどうだろうな……」
「誠司さん」

　亜依さんがそんな誠司さんを窘める。
「いいですよ。俺も楽観しすぎない程度に行きます」
「まあ、その覚悟もいいけど、もうちょっと素直になった方がいいぞ」
「……はい」
　もちろん目覚めていてくれたら嬉しい。だけど、そうじゃない場合だってある。それなら、悪い方を前提にしている方がいい。
「また、あとであたしたちも行くわね」
「安心しろ。すぐには行かないから、起きてたらじっくりいちゃいちゃとてても大丈夫だぞ」
　誠司さんはわざとらしく下品に笑う。
「わかりました。せいぜいそうさせてもらいます」
「相手は怪我人だから、激しいのはやめとけよ」
「はいはい、わかりました」
「あらら、孝志君に流されちゃいましたね」
「面白くない。くだらん事はできるようにならんでいいのに」
　誠司さんがぼやいているが、それも聞き流して玄関に向かう。
「それじゃ、行ってきます」
「行ってらっしゃい」
　亜依さんに見送られて病院に向かう。

　病院に着くと、ロビーには診察待ちの人たちがいた。
　正月でも病人には関係ないんだよな。そういうのは年中無休だ。
　医者も看護師さんも大変だ。
　そんな大変な事を職業にしている事は凄いと思う。
　自分がこんな仕事を……は、全然考えられない。
　昔入院していてお世話になったから、自分も……なんてパターンが多いんだろうか。
　それがあったとしても、やっぱり自分には無理だな。
　来院者を横目に、入院患者面会受付に向かう。
　そこで入院患者の名前を告げる。
　どうやら菜々ちゃんは、集中治療室から一般病棟に移ったらしい。
　もしかしたら……と思う。
　教えてもらった病室に向かう足が自然と速くなる。病院内は走れないので、できるだけ早足で。
　到着した病室はどうやら個室のようだ。プレートには菜々ちゃんの名前がちゃんとある。
　ドアをノックする。
　……しかし、返事はない。
　寝てるのかな？
　もう一度ノックをする。

……やっぱり返事はない。
しょうがないよな。
誰にでもなく言い訳をしてスライド式のドアを開ける。
「菜々ちゃん、俺だけど……」
ドアの隙間から中を覗く。
他に面会に来ている人はいないみたいだ。つまり、彼女の両親はいない。
とりあえず安心した。
「入るよ」
ゆっくりと、忍び込むみたいに中に入る。
窓からは陽が射し込んでいる。
少しだけ窓が開いているようで、白いカーテンが揺れていた。
「菜々ちゃん」
もし眠っていたらと、自然と小声になる。
ベッドを見ると、菜々ちゃんが眠っていた。
顔にも巻き付けられた包帯が痛々しい。もしかしたら、こんな姿を見られたくないと思うかもしれない。
でも、どうしても見てしまう。
これが事故の……。
それを目の当たりにすると、どうしても現実を突きつけられてしまう。
（俺のせいなんだよな……）
菜々ちゃんの手を握る。
温かい。
この温かさが救いだ。
「ねぇ、起きてよ」
起きてくれ。
目を開けてくれ。
目を覚まして、遅れた俺を罵ってくれ。
こんな目に遭わせた俺を怒ってくれ。
菜々ちゃん……。
こんな風に眠ったままってのは、こんなにきついんだな。
そういえば、昨日も誠司さんが昔話を話してくれたっけ。どこまで本当なのかわからないけど、亜依さんが眠ったままになったのは本当なんだろうな。亜依さんもそうだって言ってたし。
でも、亜依さんもたまに悪ノリする時もあるからな……。
俺にもなにかできる事は……ないよな。
誠司さんの場合は原因不明だったけど、俺の場合は原因は不明でも、事故の影響だってわかってる。
だったら、本職である医者ができないのに、医療の知識なんてない俺になにができる？

ただ医者を頼るだけだ。
そして、願うだけだ。
願うって誰にだろうな。
神様に？
神様はなにをしてくれる？
神様なら助けてくれるっていうなら、なんとかしてくれよ。
なにもしてくれない。
ぎゅっと握る手に力を込める。
ぎゅっぎゅっと何度も握る。
適当な知識だけど、刺激を与えたら目が覚めるような気がする。
適当な民間療法ですらないかもしれないものだけど、俺に思いつくのはこの程度だ。
他になにかあるなら教えてほしい。
菜々ちゃんの負担にならない程度に試してみたい。なにがなんでも目を覚ましてほしい。
ああ、誠司さんもこんな感じだったのかな。
原因が分かるまでは、がむしゃらになんでもしていたみたいだし。
眠ってるだけだってのに、こんなに待っているのは辛いんだな。
生きてるし、異常もない。ただ眠っているだけ。まあ、それが異常なんだけど。
握っている手に額を当てる。
（ねぇ、起きてよ……お願いだから、起きて。また、笑ってよ。菜々ちゃん）
直接念を込める。
もう、他になにも考えられない。
ただそれだけを考える。
「菜々ちゃん、今日はいい天気だよ。もう冬休みもあとちょっとになっちゃうしさ、早く初詣行かないとね」
あの日の約束を果たさないといけない。
初詣に行かないと。
一人で行ってもしょうがないんだ。一緒じゃないと意味がないんだ。

「もうすぐ卒業だし、受験ももうすぐなんだよ。一緒の大学に行けるか、俺わかんないけどさ、頑張って勉強してきたんだ。だから、絶対合格するんだって……早く勉強しないと、ずっと寝てたら忘れちゃうよ」

「今日さ、雪が降ったんだ。まだ積もるかわからないんだけど、朝から唯依ちゃんと誠也くんがはしゃいでさ、誠司さんも一緒になってはしゃいでるんだ。もう、亜依さんが子どもばっかりって笑っててさ、俺もつい笑ったら、誠司さんが怒ってきてさ。理不尽だと思わない？　ホントに子どもみたいだったんだ。まあ、あの人はたまにそういう時があるけど、言うと怒るんだよ。若いんだからはしゃげってさ。結局、みんなで空に手を挙げて、雪を掴まえようとしてさ、もう強

制的に参加だよ。近所の人たち、きっと笑ってたと思うよ」

「文化祭の事、憶えてる？　あれさ、もう想像の斜め上っていうかさ、俺たちがなんとかまとめようとしたけど、結局高遠たちがやっちゃってさ。もう、とにかくすごかったよね。絶対に忘れられないものになったよね。あの時さ、高遠がこっそり録画してたみたいでさ、あいつの家にあるんだよ。今度、あいつの家に押し掛けて見ようよ。恥ずかしいとか言わないでさ、みんなで見ようよ」

「図書館で本を探した事ってあったよね。真夜中に忍び込んで。今だから言えるんだけどさ、本当は夜の学校って怖かったんだよね。笑えるだろ。結構情けないんだ。カッコワルいって思われるかな。でも、終わってみたら楽しかったんだ。みんなで朝まで本を探してた……なんて、なんて時間の無駄遣いだよな。誠司さんがさ、青春ってのは時間の無駄遣いをそう呼ぶんだって言ってたんだ。ホントにそうだよね。あんな事で楽しめたんだよ。青春だったよね」

「一年の時に、本屋さんで偶然会った時は、全然菜々ちゃんだって知らなかったんだけど、それからもあの時の子は気になってたんだ。他の本も読んでるのかな……とか、一緒に語りたいな……とか。すっかり、忘れてたんだけど、菜々ちゃんだってわかって、あの時は嬉しかったんだ。もっと、色々と誠司さんの本について話したいよ。今書いてるのは見せてくれないんだけど、完成したら校正で読ませてもらえるから、目の前で感想を語っちゃおうよ。あの人、そういうのは結構恥ずかしいみたいで、ちょっと照れてるのが面白いんだ。もうすぐ書き終わるみたいだし、一緒に読もう。最初の読者になれるんだよ」

「明日からまた学校だよ。早く起きないと遅刻しちゃうよ。みんな受験勉強で手いっぱいらしいんだ。でも、高遠が勉強してるのって想像できないんだよね。あいつは、ああ見えて要領はいいし、なんだかんだで大丈夫だと思うんだ。それに、水城さんも同じ感じがするよね。なんでも知ってるっていうか、あの知識量はすごいよね。誠司さんにも負けないくらいじゃないかな。またみんなとさ、騒ごうよ。こんな事できるのって、今だけだって誠司さんも言ってたし。卒業したら、進路がバラバラだから集まりにくくなるって言われてるじゃない。だから、最後の思い出って
事でさ。なんか、高遠みたいな事言ってるね。でも、最後の数ヶ月は、今まで以上に思い出に残るものにしようよ」

　ただ話しかけるしかできなかった。
　とりとめもない事ばっかりだ。
　なんでこんな事してるんだろう。
　なにもできないんだから、これくらいしかできないんだから。
　毎日、毎日、ひたすら話しかけた。

学校が始まったら、誠司さんに無理矢理でも行けと言われたので、休み明けは普通に登校した。
ずっと、みんなに話そうかどうか迷っていた。
それは前日くらいからずっとだ。
学校へ着くまでも、ずっと迷ってた。
校門が見えてもまだ……。
でも、高遠の顔を見たら、みんなの顔を見たら、言わなきゃいけないなと思った。
隠す事じゃないし、みんなに辛い思いをさせるかもしれないし……なんて考えてたのがバカみたいだ。
みんな友達なんだよな。仲間なんだよな。そんな事考えちゃダメだよな。
ちゃんと言わないと。言ってからは、決めるのはみんなだ。
誰も重荷に思う事はない。それは断言できる。
みんなに集まってもらって、年明けからの事を全部話した。
さすがに衝撃的だったみたいだ。まあ、そうだろうな。
それでも、受け止めてくれた。まだ、実感はないだろうけど、わかってくれたと思う。
帰りに、みんなでお見舞いに行く事になって、みんなで病室に行った。
それでようやく、実感できたみたいだった。
菜々ちゃんは、みんなにこういう姿を見られたくないと思うかもしれないな……と、帰ってから思った。
ごめん。
それについて、俺を責めてくれていい。
なんで、寝顔をみんなに見せるのって、怒って欲しい。
結局、みんなで病室に行ったのは、それ一回きりだった。水城さんも、あまり顔を見せなかった。
薄情だって思うはずがない。
みんな、俺と菜々ちゃんだけにしてくれたってのはわかってる。
むしろ感謝してる。
そういえば、菜々ちゃんの両親にもあれ以来会ってない。
最初の頃は、もしかしたらいるんじゃないかって緊張してたけど、気付いたらそれも思わなくなっていた。
こっちは薄情だって思うけど、俺にすれば会わずにいられるならそれでよかった。
菜々ちゃんはまだ起きない。
もうすぐ菜々ちゃんの誕生日だ。
誕生日プレゼントを買いに行かないと。
今日は、早めに帰ってなにか探そう。
「今日は、ちょっと早く帰るけど、また明日も来るから」
菜々ちゃんに声を掛けてから病室を出る。

病室を出て、病院をあとにする。
どこがいいかな……。
なにがいいんだろう。
誰かに相談した方がいいかな……。
ふと亜依さんの顔が浮かんだ。
あの人は忙しいだろうし……。お願いしたら誠司さんには言わないでいてくれるだろうけど、なんとなく誠司さんが感づきそうだし、樹梨は高遠が関わってきそうだし、かといって水城さんもな……。
やっぱり、自分でなんとかするしかなさそうだ。
こういうのって、センスが大事だよな。
自分のために選んでくれたものならなんでもいいとかよく言うけど、やっぱりなんでもいいってわけでもないだろうし。
難しい。
結局、クリスマスプレゼントを買った店に行く事にした。二番煎じだろうとしょうがない。そこしか思いつかないんだから。
目的地が決まると、少し気が楽になった。
「いらっしゃいませ」
中に入ると声を掛けられる。
この店は、幅広いアクセサリーを取り扱っているし、オーダーもできる。インテリア小物も充実しているので、ないものがないんじゃないかという感じだ。
男性だけでも来店している人が多く、それこそ年代に関係なく訪れる店だ。
クリスマスの時は、ここでネックレスを買ったし、できればそれに合うものがいい。
なにかいいものはないかな……。
しかし、棚にはいいものがありすぎて迷ってしまう。
これだっていうのを決めずに、ここで探そうと思っていたので、ついつい目移りしてしまう。
確か前は、ピンクシルバーの十字架がモチーフのネックレスだったから、同じ色合いのものがいいよな。
ショーケースの中を覗き込む。
同じピンクシルバーのアクセサリーを見ていく。
ネックレスに、ピアスに、ブレスレットに、アンクレットにリングに……。ああ、多すぎる。
どれもこれもいい気がして決まらない。
菜々ちゃんならどれが似合うだろう……と考えても、どれも似合うだろうから難しい。彼氏の贔屓目なしでもそうだと思う。
仕方ないか。店員さんに訊いてみよう。
「すみません」
「はい、どうされましたか？」
女性の店員さんが答えてくれた。見た感じからしてセンスがよさそうだ。

「以前にここで、こんなデザインのピンクシルバーのネックレスを購入したんですけど」
　同じようなデザインのものを指す。
「はい、ありがとうございます」
「それで、これと合いそうなものを探してるんですけど……」
「そうですね……。同じくピンクシルバークロスのピアスやリングもございますよ」
　そう言って、ピアスとリングを見積もってくれる。
「あとは……こういったブレスレットタイプもございます」
　あっという間に同じデザインのものが用意された。やっぱり、こういう時は訊く方がいいね。
「ありがとうございます」
　並べられたものをじっくりと見ていく。
　ああ、確かにこれと同じデザインのネックレスだ。これならシリーズじゃないかもしれないけど、違和感なく付けてもらえるだろう。
「そうだな……」
　このどれかに決めるか。
　ピアスかリングかブレスレットか。
　どれがいいんだろう。
　ピアスは……菜々ちゃんはピアスの穴を開けてないないから使えないだろう。イヤリングタイプっていうのもどうかな……。なんとなく、菜々ちゃんはそういうのを付けない気がする。
　あとはリングかブレスレットか。
　リングは……なんか意味がありまくりじゃないか？
　なんだか恥ずかしいな。
　消去法っていうのがどうかと思うけど、ここはブレスレットが無難か。値段も手頃な感じだし、ブレスレットに決定かな。
「これにします」
「はい、ありがとうございます」
「プレゼント用にお願いします」
「はい、かしこまりました」
　店員さんは素早くブレスレットを包装してくれた。
「ありがとうございます」
　代金を支払って、包装されたそれを受け取る。
　これなら大丈夫だろう。

　そして当日、プレゼントを持って病室を訪れた。菜々ちゃんは相変わらずだ。まだ目を覚ましてくれない。そして、病室には他に誰もいない。
　いつものようにベッドの横の椅子に腰掛ける。
「菜々ちゃん、誕生日おめでとう」
　菜々ちゃんの手をぎゅっと握ってお祝いする。
「これ、プレゼントなんだ」
　菜々ちゃんに箱を見せる。
「なんだと思う？」
　そう言いながら包装を開けて、中身を取り出す。
「どうかな？　気に入ってくれるといいんだけど……」
　それを菜々ちゃんの右手首にはめる。
　似合ってる。
「綺麗だよ……」
　目頭が熱くなる。
　ねぇ……起きてよ。
　菜々ちゃんの顔をじっと見つめる。
　いつもの静かな寝顔だ。
　お願い……起きて。
　菜々ちゃんの唇に、自分のそれを重ねる。
　目を覚まして、お姫様……。
　だけど、なにも変わらない。
　物語のお姫様は王子様のキスで目を覚ますのに。
　俺が菜々ちゃんの王子様じゃないだけなのか……。
　起きないから奇跡っていうのに、今はずっと頼ってこなかった神様に頼ってでも奇跡を願っている。
　ねぇ、目を開けてよ。
　早く起きてよ。
　この前のネックレスと一緒にそれも着けて初詣に行こう。
「貴女の言葉は風となり、僕の心を吹き抜ける。時にそれは向かい風となり、僕の行く手を遮り、僕の心を傷つける。時にそれは追い風となり、僕に道を指し示し、僕の心を勇気づける。それは全て君の風。それは全て君の優しさ。君の風に包まれて、君の優しさに包まれて、僕も風になる」
　クリスマスに俺が贈った言葉。
　どれだけ願っても、奇跡というやつは起きてくれない。

　奇跡を願ってから、何度も何度も願ってからどのくらい経つだろうか。
　自分の中では時間の感覚がおかしくなってきている。カレンダーを見ると、一ヶ月近く経っている。なんだ、それなりに経ってるんだ。
　つまり、事故から一ヶ月半が経とうとしている。
　そういえば、街中が賑やかなはずだ。
　クラスでも女子が色々と盛り上がっていた。
　俺には関係ない。
　高遠とそんな事を毎年言ってた気がする。
　でも、今年もやっぱり関係ないみたいだ。
　いつも通りに、慣れた足取りで病室に向かう。
　毎日通いつめていると、だいたいの様子がわかるようになってきた。自分の部屋に向かうように、その部屋を目指す。
　いつものようにノックをしてからドアを開ける。
　いつからだろう……返事を待たなくなった。それに気付いた瞬間、自分を罵ってやりたくなる。
　でも、そんな事をしてもなにも変わらないだろう。
　いつものようにベッドに目をやると……。
「ん？」
　そこはいつもと違う光景だった。
　部屋を間違えたのか？
　慌ててドアのプレートを見る。
　間違いない。
　どの部屋も同じような内装だろうけど、ここは菜々ちゃんの病室だってわかる。
　でも、その本人がベッドにいない。
「もしかして……」
　もしかして、目が覚めて検査に行ってるんだろうか。
　よかった……目が覚めたんだ。
　でも、その期待は一瞬にして裏切られた。
　病室のドアの所に看護師さんがいて、こう告げた。
「愛藤菜々さんは、集中治療室に移されました」
「……」
　思考が止まった。
　そんな……。
　どういう事だ？
　いったいなにがあったんだ？
　看護師さんを払いのけて集中治療室に急ぐ。
　なにがあった？

どうなったんだよ。
看護師さんに訊けばよかったと思いながらも到着する。
しかし、中には入れない。外で待つだけだ。
ここからじゃ、中の詳細はわからない。
どうなったんだよ……。
なにもわからないまま、床に崩折れた。
どのくらいだろう。何時間経ったかわからない。
ずっと部屋の前にいても、なにもわからないままだ。
「大丈夫？」
さすがにずっといると心配されるらしい。看護師さんが声を掛けてきた。
「本当はご家族にだけなんだけど……」
そう前置きして、看護師さんが今の菜々ちゃんの状態を教えてくれた。
一言で説明するなら、容態が急変したという事らしい。
検査してみると、脳内に出血が確認されたそうだ。
処置を施して、今はここにいる……。
ちくしょう！　なんだよ、それ。
無性に怒りがこみ上げてきた。
だけど、どこにもぶつける場所はない。ちくしょう！
どうしてだよ。
どうして俺もなにも気付けなかった？
毎日、彼女を見てたじゃないか。それなのに、どうしてなにも気付いてあげられなかった？
俺は菜々ちゃんの彼氏だろ？　ずっと一緒にいたんだろ？　なのに……ちくしょう！
本当に無力だ。なにもできない。
なのに、こうしてここにいる。
俺になにができる？
教えてくれよ……。
なにができるのか、なにをしたらしいのか、誰か教えてくれよ。
……でも、そんなの誰も教えてくれない。
なにもできないまま、時間だけが無情に流れていく。
ちらりと見える窓の外は、陽が暮れて暗くなっている。
しかも、どうやら雪がちらついているらしい。
それでも、ここを動けないでいる。
ここを離れたら、全てが終わってしまいそうに思えた。
おそらく、面会時間は過ぎているはずだ。
普段なら、もう帰るように言われている頃じゃないだろうか。
さっきから看護師さんがちらちらこっちを見ている。でも、誰も帰るように言いに来ない。
それから、また数時間が経った。

なにも変化のない、なにもわからないままの時間。
それが、急に変わった。
中にいた看護師さんがどこかに連絡したら、慌てて医者が中に入っていった。
それからが慌ただしかった。
何人もの医者や看護師が行き来するようになった。
立ち上がって誰かに訊きたいけど、そんな余裕はない。それに、訊くのが怖かった。
なんとなく想像している事が現実だと思いたくなかった。
しかし、その慌ただしさもあっという間に終わった。
実際は……なんて関係ない。とにかくあっという間に終わってしまった。
そう、全てが――

なんでこんな事になったんだろう。
周囲には、制服を着たみんながいる。
大人たちは黒い服を着ている。
なんか、嗅ぎ慣れない変な臭いがする。
黒と白の幕があって、全体的に暗い感じがする。
ここはなんだろう。
本当はわかってるはずなのに、でないとここにいないはずなのに、考える事を拒否してるんだろうな。自分さえもわからない。
「大丈夫か？」
不意に高遠に肩を叩かれる。でも、反応できない。叩かれたとわかっても、返事をする事も、そっちを見る事もできない。
（ああ、高遠）
心の中で返事をしても、聞こえるはずはない。
「大丈夫なわけないでしょ、このバカ」
樹梨がスリッパで高遠を叩く。
「こんなとこにまで持ってきてるのかよ」
「……ほら、あっち行くわよ」
樹梨は高遠の腕を引っ張ってどこかへ行った。
同じクラスでここにいるのは……高遠たちくらいか。
出席したいと騒いだ連中がいたらしいけど、五組と許可された一部の生徒（俺と高遠と樹梨）、そして生徒会くらいしかここに来ていない。
そもそも、どうして出席したいなんて思うんだろう。こんなとこ、どうして来ないといけないんだ。
キリキリと胃が痛む。

吐きそうになる。もう、何度目だろう。
お腹をさすりながらふらふらと歩く。
どこに行くでもない。ただ、同じ場所をグルグルしてるだけだ。
出席してる女子たちは泣いてる。
ああ、なんか悲しい事があったんだな……。
男子でも泣いてるヤツがいる。
なんで泣いてるんだ？
歩いているのも疲れたので腰を下ろす。椅子なんてないから、そのまま地面に座る。
全身に力が入らない。このまま、寝そべってしまいそうになる。
このまま寝るわけにはいかない。寝てしまったら、これは夢じゃなくて現実だって事になる。
そう、これは夢なんだ。
夢でないとダメなんだ。
どのくらいこうしてたんだろう。
みんながどこかへ向かう。
どこに行くの？
立ち上がる気もおきない。
もう、ここにいるよ。
その列にいた高遠と樹里がこっちを見た気がするけど、そのまま歩いていった。
仲間外れかよ……。
でも、どうせ立てないからいいや。
五組のみんながいなくなると、残されたのは数人の大人たちだ。近所の人かな。どうでもいいんだけど。
その中に、見知った人がいた。
誠司さんだ。亜依さんもいる。
それに、望月さんまで……。
亜依さんはハンカチで目元を拭っている。
望月さんも、必死に堪えてるみたいだけど涙を浮かべている。
だから、なんでみんな泣いてるんだ？
「室田君……だったかしら？」
女の人が声を掛けてきた。
重い頭を動かして、声の主を見る。
そこには黒い服を着た女の人が立っていた。もっとも、ここには黒い服の人ばっかりだけど。
誰だっけ……。どこかで見た事があるのに。
えっと……。
ああ、そうだ。
菜々ちゃんの母親だ。
なにか用なのかな……。

　とりあえず顔だけを向ける。
「あの子に、最後のお別れをしてくれないかしら」
「……」
　最後のお別れ？
　なんだ、それ。
「あなたには色々と言ってしまった事があったけど、あの子が笑顔だったのは、最近ではあなたと一緒にいる時だけだったような気がするの。だから、あなたには、最後にきちんとあの子を見てあげて欲しいの」
　さっきからこの人はなにを言ってるんだろうか。
「すみません」
　すぐ近くで誠司さんの声がした。
「このたびは……」
「いえ、ありがとうございます。あなたたちにも、色々と言ってしまって、申し訳ありませんでした」
「ああ、こっちこそ、色々と……」
「いえ、あれはご指摘の通りだったと思います。ただ、あの時は、事故の事がショックで、どうしても……」
「はい……。それでですが、こいつは今回の事を受け入れられていないといいますか、茫然自失状態みたいなので、お気持ちはわかりますが、そっとしておいてやってくれませんか。心の整理ができたら……」
「……そうですね。でも、あの子の母親としてお願いするわ。最後に挨拶してあげて」
「できれば連れていきます」
「お願いします」
　菜々ちゃんの母親は離れていった。
「孝志、今行かないと後悔するぞ。どれだけ悔やんでも悔やみきれない傷になる。今が辛くても、行け」
「行く……？」
「ったく……しょうがないか」
　えっ？
　誠司さんに腕を掴まれた。そして、そのまま無理矢理立たされる。
「ほら、歩けって」
「孝志君、きちんと歩きなさい」
　亜依さんも来たみたいだ。
「なんだか、可哀想じゃないですか？」
「そんな事ないですよ。このまま、ここでなにもせずにいる方が、今傷つくよりも可哀想ですから。彼は、きちんと受け止めないといけないんです。本当に受け止められるまでどのくらい掛かるかわかりませんけど、今こうして会っておかないと、もう二度とそういう機会はないんです

から。たとえ厳しくても、こうしないといけないと思うんです」
「……そうですよね。いえ、わかりました」
「というわけで、俺たちも行こうか」
　誠司さんに引っ張られるようにして歩く。
　どこへ連れて行かれるんだろう。
　なんか、変な臭いが強くなってきている。
「今日はわざわざありがとうございます」
　どこかで聞いた男の人の声だ。もう、顔を上げる元気もない。ただ、誠司さんに引っ張られるので精一杯だ。
「彼は……」
「ここまで、心が壊れるまで、この現実を受け入れられてないんですよ」
「そうですか……。そこまで娘の事を……。なのに、あの時は……」
「もう、その事は誰も気にしちゃいけないんですよ。あれはあの場では仕方なかった。そうでしょう？」
「そうですね」
「最後にで結構ですので、彼女に挨拶させてもらえませんか？」
「ええ、もちろんです。妻もそう思っておりますので」
「ありがとうございます。……じゃあ、行こうか。孝志、受け入れるのに時間が掛かるのはしょうがない。だけど、今をしっかりと受け入れろ」
　誠司さんはまた俺を引っ張っていく。もう、立つ力もなくなってきていて、引きずられている。
「ほら、これで最後だ。しっかり見ておけ」
　誠司さんに頭を押さえられて、無理矢理それを見せられる。
「……」
　菜々ちゃん……？
　そこには、菜々ちゃんの寝顔があった。
　ちょっとお化粧をしてるみたいだ。
　綺麗だな……。
　こんなとこで寝てないで、早く起きようよ。
　また、話したいんだ。
　ねぇ、起きてよ。

　菜々ちゃんが風になってからどのくらい経ったんだろう。
　俺の中での時間は止まったままだ。
　心のどこかで、菜々ちゃんが起きるのを待っている。

Ｐｒｏｌｏｇｏ

凍りついてしまった思い出が温かい季節と共に溶け始める。

それはまるで、眠っていた姫君が目を覚ますように……。
生まれ変わる季節と共に目覚める。

俺たちはあの桜の木の下で出会った。
そして……あの桜の木の下で彼女は……。

ガラス玉を覗き込む。
世間ではビー玉と呼ばれているヤツだ。

粗悪なガラス玉。
規格から外れたガラス玉。
だから、Ｂ玉。

なにかの本で読んだけど、本来はラムネ玉というらしい。
ラムネの栓に使えないものをＢ玉と呼び、それで子どもたちが遊ぶようになって現在に至る。
まあ、そんな事はどうでもいいさ。

要は、俺もＢ玉だって事。
世間から外れたＢ玉。
粗悪な存在。

だからって、自分を卑下したりしない。
憐れみもしない。
そんな事こそ、どうだっていいんだから。

俺はここにいる……それだけでいいじゃないか。

【文誠】
「そう、俺は俺なんだから」

【声】
「って、なに言ってんのよ、お兄ちゃん」

【文誠】
「なぬっ！」

【ご立腹のご様子の妹】
「さっきから馬鹿な事言ってんじゃないの」

【大変ご立腹のご様子の妹】
「もう……わけのわからない知識をひけらかして……」

【呆れ返ってしまった妹】
「モノログってどうすんのよ……じゃなくってっ！」

【お急ぎのご様子の妹】
「早くしないと遅刻だよっ！」

【文誠】
「なぬぬっ！」

慌てて時計を見る。
マジだ。マジでやばい。

【文誠】
「急ぐぞ、忍」

【忍】
「待ってってば」

俺は非難めいた声を聞かずに、そのまま全力でダッシュした。

いつもこうだ。
どうしてだかこうだ。

時間に追われる毎日。

時間を気にする毎日。

時間が支配する毎日。

　世界は時間に支配されているとつくづくそう思う。

　それでも、この桜雪島は長閑な方だと思う。
　都会なんかと比べられないくらい長閑だと思う。
　だが、俺からすればたいして変わらない。

　この桜雪島は少し変わった島だ。いや、かなり変わっている。

　気候がおかしいわけではない。
　この島は雪が降る季節に桜が咲くのだ。まあ、桜の品種の関係なのだろうが、違和感がありすぎる。

　ポエマー（正しくはポエットとかいうツッコミはしないでくれ）なヤツらは情緒があるとかワビサビが云々言うが、住人からすれば変としか言いようがない。

　まあ、ずっと住んでいればこれが当たり前になるし、島とすればいい観光招致になるんだから万々歳なのかもしれないが。

【文誠】
「なあ」

【忍】
「なに、お兄ちゃん」

【文誠】
「なんでもない」

【忍】
「……あんまりふざけない方がいいかもよ。今、すっっっごく機嫌悪いから」

【文誠】
「……ごめんなさい」

　実際に顔は見ていないが雰囲気でわかる。

　背後にはメラメラと炎が……怖い怖い。

あまり想像しないでおこう。

君子危うきに近寄らずとも云うしな。
自らの死を早める事もあるまい。
俺は人生を平凡に生きたい。
平凡というか、とにかく命の心配をしないで生きていけるならそれでいい。
ともかく、命あっての物種とはよくいったものだ。
命を危険にさらすなんてまっぴらごめんだ。

さて、本当にそんな事にならないうちに、さっさと学校に急ぐか。

「ホント、王道だよな……」
高遠が呟く。
「あのな。人の家に来てまでそんな事するか？」
「今さらだろ？」
「そうだけどさ」
いつもの事だ。もう、いい加減にしてもらいたいものだ。
「ありきたりな設定だな」
俺がぼやくと、
「そこがいいんだろうが」
「そうやそうや」
と、侑浩も参加して、二人して俺を責める。まあ、定番に勝るものなしって気もするけど。
っていうか、どうしてそれだけの事でこうも責められるのか。なんだか理不尽な気がしてきた。
まあ、それも今さらだけど。
ずっとこんな風に過ごしていくのかな……。
それはそれでいいかもしれないけど……。
……いや、高遠と一緒にいるだけで普通に過ごせるはずもないか。
でも、それとは関係なしになにかが起こりそうな気がする。なんとなくだけど。
いい事だといいな……。

そして、俺の物語は始まる……。

Ｅｐｉｌｏｇｏ　２

　室田孝志はある墓の前に立っていた。周りには誰もいない。
「菜々……」
　その呟きがその場を支配する。
「今年もやってきたよ」
　孝志の頬を涙が伝う。
　それと同時に、雪が降り始める。それが、さらに音を無くしていく。
「そういや、あの日も雪が降ってたっけ……」
　孝志は当時の事を思い出す。
　それは、思い出したくもない出来事だった。その日、菜々が事故に遭った。そして、それが直接的な原因となり……他界した。

　――「あたし、風になれるかな？」

　――「風？」

　――「そう。あたし、風になりたいんだ」

　――「どうして？」

　――「あのね、風になってどこまでも飛んでいきたいんだ」

　――「どこまでも……？」

　――「そう、誰かの心を吹き抜けていくような」

「風、か……」
　そんな会話を思い出す。
　楽しかった思い出。
　一番輝いていた日々。
　そんな日々を振り返っていると、自然と思い出されてしまう。楽しかった日々の、今では悲しい贈り物。
「貴女の言葉は風となり　僕の心を吹き抜ける　時にそれは向かい風となり　僕の行く手を遮り　僕の心を傷つける　時にそれは追い風となり　僕に道を指し示し　僕の心を勇気づける　それ

は全て君の風　それは全て君の優しさ　君の風に包まれて　君の優しさに包まれて　僕も風となる」
　菜々に贈った詩を口ずさむ。それは、彼女への最後のプレゼントとなった。
　青春と俗に言われる時代。
　淡く切ない日々。
　様々な思い出。
　改めて思い出すと辛くなってくる。
　楽しかった日々とあの日の落差が激しすぎたから。
「あれから十年も経ったんだね」
　孝志は優しく墓石を撫でる。まるで頬を撫でるように優しく……。
「菜々は風になれたのかな？　……ううん、なった。菜々は風になったよ。だって、菜々は俺にとって風だったんだから。菜々の風は俺の中でずっと吹いているんだ。菜々との思い出を忘れない限り、ずっと……」
　涙が溢れて溢れて止まらない。
　出会いを思い出す。
　再会を思い出す。
　そして……。
　別れを思い出す。
　涙が止まらない。
　――ザクッ！
　その時、砂利を踏む音がした。
　その音で現実に戻る。
　孝志はゆっくりと振り向く。
「椎崎さん……」
　そこには、花束を持った椎崎誠司がいた。その隣には亜依もいる。
「遅くなってすまないね」
　そう言って誠司は墓の前にしゃがみ、線香に火を付ける。そして、手を合わせる。その横で亜依もしゃがんで手を合わせる。
「いいですよ。お二人とも忙しいでしょうし」
　二人が顔を上げるのを待って孝志が言う。
「それに、来ていただいただけで……」
　孝志は涙を堪えようとする。それを、誠司は的確に見抜く。
「泣きたい時は泣けばいいのさ。我慢する必要なんかない」
「……すみません」
　その言葉に甘えるように、孝志は涙を流す。それは悲しさもあったが、二人が来てくれた事への嬉しさもあった。
「もう、十年なのね」

ずっと黙っていた亜依が口を開く。その目には涙が浮かんでいる。
室田孝志と愛藤菜々は、二人からすれば弟・妹のようなものだ。
そんな妹のように思っていた菜々が、十年前の雪の日、あの事故をきっかけに菜々は帰らぬ人となった。亜依と誠司も悲しみを隠せない。
その時の事を思い出すと、孝志は自分を責めずにいられない。
その事故は、孝志が待ち合わせに遅れたために起こったようなものだった。もし遅れなければ菜々はその場にいなかったし、もちろん事故にも遭わなかった。
「菜々……ゴメン」
当時、何度も口にした言葉。
言っても言っても言い足りないくらい言った。
それでも孝志は、その言葉しか知らないかのように言い続けた。
「孝志くん、自分を責めちゃダメよ」
亜依が孝志の肩に手を添えて優しく言う。
当時もそうだった。
見ている方が心苦しくなってくる。それほどまでに孝志は自分を責めた。
「ありがとうございます」
孝志は涙がこぼれないように空を見上げた。それでも涙はこぼれる。
――ヒュゥ！
そんな涙を吹き飛ばすかのように風が吹いた。
「菜々……」
その風が菜々に思えた。菜々が泣かないでと言っているかのように思えた。
孝志は無理矢理笑顔を作る。そんな孝志を誠司と亜依は心配そうに、それでも優しく見つめる。
（そうさ、菜々は風になったんだ。そして、ずっと一緒にいる。そうだよな）
孝志は空を見上げた。
（菜々は風になって、俺の心の中で吹き続けているんだ）

心は晴れ。
風力は七。

Fino.

1

始まりはいつだっただろうか。

ふとそんな事を思う。
目の前にスクリーンでは派手なアクションが繰り広げられている。少し話題になった洋画だ。
だけど、客席にはほとんど誰もいない。いや、あたしともう一人――隣に座っている彼――室田孝志くんだけだ。
観たかったけどなかなか来れなかったこの映画。今日は上映最終日という事で、なんとか時間ができたので一人で観に来た。
それなのに、どうしてかこういう事になっている。
隣に座っている彼を知らないわけじゃない。チケットを買う時に自己紹介されたけど、その前から知っていた。彼は同じ学校に通っている。だけど、話した事はない。
そもそも、彼はあたしを知っているだろうか。もしかしたら知らないかもしれない。自己紹介した時もそんな雰囲気だった。その程度の関係だ。
それがこうして他に誰もお客さんのいない劇場で隣に座って、映画を観ているなんて今朝のあたしは想像していただろうか。
もちろんしていない。
別に隣に座るのはイヤじゃない。イヤなら移動している。他に誰もいないんだからどこに座ったって構わない。もしかしたら彼には不快な思いをさせるかもしれないけど。
観たかった映画のはずなのに、全然スクリーンに集中できない。
心臓はドキドキと高鳴っている。もしかしたら聞こえてしまっているかもしれない。そう思うと余計に高鳴る。
暗い場所でよかった。
きっと顔が真っ赤だろうから、見られなくてよかった。
そんな事ばかり考えてしまう。
ああ、どうしよう。
こんな事になるなら、もうちょっとお洒落してきたらよかったかな。一人だからってちょっと気楽すぎたかもしれない。
こんな事になるなら教えておいてよ。
だけど、こんな偶然を予知できるなんて無理だよね。
誰かが仕組んだわけでもないし。そもそも、あたしが今日ここに来たのだって、今朝になってから決めた事だから誰かが準備していたわけでもない。
でも、この偶然には感謝もしている。
少しでも接点ができたのは一歩前進かも。この一歩からもしかしたら進めないかもしれないけど。それでも、一歩でも前に進んだ。
ちょうど二年か……。
始まりを思い返す。
そう、始まりは冷たい風が強かった日だ。あの日がきっかけだった。

寒いな……。
思わずダッフルコートの襟をあわせる。お気に入りのえんじ色のマフラーをしていてもまだ寒い。
どうして学校の制服ってこんなに防寒性がないんだろう。そのくせ、中になにかを着るのは校則違反。羽織っていいのはカーディガンくらい。
普通なら学校指定のウインドブレーカーとかありそうなのに、うちの学校ではそういうものはない。その代わり、登下校時にはコートやジャンパーは派手でないものに限り自由。よくわからない。

　そういうわけで、お気に入りの山吹色のダッフルコートを着れる。
　それにしてもやっぱり寒い。
「失敗したかな……」
　あえてうちの学校の誰も受験しないような遠い学校を選んだ。みんなは連れ立って受験票をもらいに行っている。それが少し羨ましいように思えてきた。だって近いから。
　受験票だって郵送も選べたけど、やっぱりこういうのは直接もらいに行きたい。ついでといってはなんだけど、学校の雰囲気だって見たい。
　資料とか学校見学会とは違う、普段の様子を見るなんてなかなかできない。
　それにしても、学校までの道でまだ誰とも会っていない。こんな寒い日に外を出歩こうなんて考えないんだろう。
　早くもらって帰ろう。
　空を見ると晴れているのに、暖かさはない。

　結局、同じように受験票をもらいに来ている人には誰にも会わずに受験票を受け取る。なんだか淋しい。
　ここで会っても、お互いに入学できるとは限らないので友達になれるかもわからないけど、それでもなんとなく知り合っておくのもいい気がしたんだけどな……。
　そんな事を考えながら歩いていたせいで、目の前から歩いてきている人に気付かなかった。
「あっ」
　ドンとぶつかった時には時既に遅し。あたしは、もらったばかりの書類を地面にばらまいていた。
「ごめんなさい。すみません」
　ひたすら謝りながら、散らばった書類を集める。
「構わないわよ。こっちもぶつかるかもと予測しながら、対処しなかったし」
　えっ？　わかっていて？
　そして、その声でようやくぶつかった相手が女の子だと知った。
「だから、ごめんなさい」
　そう言って、彼女もしゃがんで拾うのを手伝ってくれる。
「あ、ごめんなさい」
「こういう時は、ありがとうじゃないの？　まあ、お詫びも含てだか、お礼なんていらないんだけど」
「あ、うん……」
　だいたい広い集めて顔を上げて、ぶつかった相手を見る。
　第一印象は、なんだかとっつきにくそうだな……だった。
　暗いというわけじゃないんだけど、周囲を寄せ付けない雰囲気がある。
　でも、それが可愛いと感じた。
　こんな子と友達になれたらいいな……。
「あんたもここを受けるの？」
　そんな風な事を考えていると、彼女が訊いてきた。
「あ、はい。あたし……」
「自己紹介はいいわ」
「えっ？」
　もしかしたら、これがきっかけで友達になれると思っていたので残念だ。
「だって、お互いに合格するかわからないでしょ？　まあ、大丈夫そうだけど、もし合格して通うようになってどこかで会ったら、その時に改めてしましょう」
「うん……」
　彼女はそれだけ言うと、拾ってくれた書類を渡して校舎の方に歩いていった。
　あたしは黙ってその姿を見ていた。
　いきなりぶつかっちゃったけど、これってもしかしたら運命の出会いかもしれない。
　なんて、少女マンガみたいな事を考えていた。

でも、いきなり受験票を落とすなんて、縁起良くないな……。
もう落とさないように、急いで鞄の中に入れる。
これでよし。
帰り道で、あたしと同じように受験票をもらいに来たらしい人たちと多くすれ違った。どうやら、ただ時間がずれていただけみたいだ。
少しだけあの子を待とうとも思ったけど、やっぱり合格してここの生徒として再会したい。
絶対に受かるぞ。

帰宅しても誰もいない。両親は仕事だ。
無人の家の中は寒い。
急いで部屋に向かうとエアコンを入れる。
すぐには暖まらないので、鞄を机に置いて階下の台所に向かう。
なにか温かいものを飲みたい。
とりあえず、冷蔵庫から牛乳を取り出す。そして、ミルクパンをコンロにセットして牛乳を温める。
レンジで温めると温度差ができるので、手間に思えてもこっちの方が断然いい。
弱火でゆっくりと温める。
こうしてゆっくりとかき混ぜていると落ち着く。
「温まるな……」
そうこうしていると、ちょうどいい温度になった頃なので、中身をマグカップに移す。
ほかほかになったマグカップを両手で持ちながら階段を上がっていく。
「う～ん、やっぱりまだだよね……」
さすがにまだ暖かくはなっていない。
とりあえず座ってマグカップに口を付ける。
「あつっ」
毎回こんな事をしてしまう。
息を吹きかけて冷ましてから、もう一度口を付ける。
「うん、おいしい」
ほっこりと体の芯から温まる感じがする。
ホットミルクを飲んで温まって、鞄から受験票などの書類が入っている封筒を取り出す。
「絶対ここに行こう」
封筒を見つめて改めて決意する。
少しくらい遠くてもいいじゃない。三年間毎日通うのは大変かもだけど、それでも楽しい学校生活の方がいい。
「よし、やるぞ」
指を組んで両手を挙げる。
一応、進路相談の先生には問題ないと言われてるけど、それでも実際どうなるかはわからない。ここで油断すれば合格できないかもしれない。
そんな事にならないために、最後の追い込みだ。

　それからあっという間に一週間が過ぎた。
　受験票を提出しないといけない。つまり、またこの寒い中、あそこに行かないといけない。
　もっとも、合格したら暑くても寒くても毎日行くんだけど。
　なんだかこの調子だと、毎日愚痴ってそうだな……。
　もしかしたらまたあの子に会えるかもしれない、そんな期待もありつつ学校に向かう。
　受験票をもらいに行く日にちは結構幅があったけど、出願は今日と明日だけなので混雑している。
「こんなに受験者がいるんだ……」
　事前に受験者情報は見ていても、実際にこうして見ると圧倒される。これだけライバルがいるんだ。
　絶対に受からないと。
「ううっ」
　それにしても寒い。しかも、今日は風が強いので余計にそう感じる。
　校舎内に入ると……まだ寒かった。そうだよね。出願者がずっと出入りしてるからドアは開いたままだし、元々暖房設備もないだろうし、風がなくなっただけマシになったくらい。
　願書を手にしながら、あの時の子を探す。
「いないかな……」
　また誰かとぶつからないように、その辺も慎重に。
　ゆっくりと歩きながら探してみても、なかなか見つからない。
「残念かも」
　もしかしたら、もう提出したのかもしれないし、まだ来ていないのかもしれない。それとも、明日に来るんだろうか。
　とにかく、会えなくて残念。
　合格して会おうって言ったんだから、受験しないなんてあり得ない。
　やっぱり、合格してからじゃないと無理なんだろうな……。
　少し残念な気持ちになりながら願書を提出する。
　これで後は本番にのぞむだけだ。
「よし、頑張るぞ」
　胸の前で拳を握る。

　校舎を出ると、風の強さに思わず髪を押さえる。
「さ～む～い～よ～」
　周囲でもみんな、寒い寒いと言っている。局地的な流行語だ。
　立春を過ぎても春はまだ遠い。
　春といえば、花粉症の友達が、来て欲しくないような事を言ってたっけ。
　あたしは花粉症じゃないからわからないけど、辛そうだもんね……。
　それでも、やっぱり春が来て欲しいな……。ぽかぽか陽気が気持ちいいから。
　ううっ、寒い。
　帰っていく人の流れにのるように学校を後にする。
　最後に振り返って、絶対ここに通うんだって誓う。
　その時、今までよりも強い風が吹き抜けた。
「あっ」
　その風で、マフラーが飛ばされてしまう。
　マフラーは風に乗ってひらひらと飛んでいく。
「なんでこんなに……」
　普段は飛ばないのに、なんで今日はこんなに飛んじゃうんだろう……。

風に飛ばされてしまった洗濯物を追いかける主婦みたいだ。まあ、似たり寄ったりだけど。
それにしても、なんでこんなに飛んじゃうの？
この前も願書を落としちゃったし、今日もマフラーが飛ばされちゃうし……なにかあるのかな。
あ、やっと落ちた。
いやいや、その言葉はここでは禁句だ禁句。ここじゃなくても、今のあたしたちには禁句だ。
とにかく、早く拾わないと。
人の波から外れたとはいえ、踏まれちゃうかもしれない。お気に入りだからそれはイヤだ。
寒い中走ると、少しポカポカしてくる。
やっと追いついた……と思って、マフラーを拾おうとすると、ひょいと先に拾われてしまった。
「あっ……」
別に盗まれるとか思ったわけじゃないのに、反射的に声が出た。
「これ、君のだよね」
拾ってくれた人があたしに差し出してくる。
「あ、ありがとうございます」
顔を上げてマフラーを受け取る。
よかった……親切そうな人だ。
「すごい風だよね……」
マフラーを拾ってくれた男の子が笑顔で言う。
「あ、はい……」
「君もここ受けるの？」
「はい、そうです」
「そうなんだ」
そう言って、彼は手に持っていた封筒を掲げる。それは、あたしも持っている受験票が入った封筒だった。どうやら彼も受験するらしい。
「ここってさ、俺が大好きな人が通っていた学校なんだ。だから、どうしても自分も通ってみたくて……。なんて、俺の事情なんてどうでもいいよね」
そう言って笑った顔は、幼く見えて可愛かった。
「お互い頑張ろうね」
そう言って封筒を振る。
「はい、頑張りましょう」
なんとかそう返すと、彼は笑顔で学校の方に歩いていった。
残されたあたしは、なんだか失敗だらけだな……と落ち込み気味。
願書は落とすし、マフラーは飛ばされるし、両方で同じ受験生の人に助けてもらっちゃうし……大丈夫かな、このままで。
でも、これで少なくとも二人と知り合え……てないよね。名前も知らないし。
合格したら、改めてお礼を言わないとだよね。ちゃんと顔は覚えてる。
よし、なにがなんでも合格しないと。

受験当日、やっぱりあたしは二人の姿を探していた。
他に知り合いがいないので、知っている人といえばその二人くらいだからだ。もっとも、向こうはあたしを覚えていないかもしれないけど。
しかし、それも試験が始まる前までだ。試験開始時間が迫ってくるとそれどころではない。
でも、ずっと探していたお蔭で、緊張せずに試験にのぞむ事ができた。
わからない問題もあったけど、そこそこできたと思う。どのくらいが合格ラインかはわからないけど、なんとかこれ

なら大丈夫って感じだ。
「終わった……」
　最後の試験が終わると、他の受験生も解放された気分になる。
　とにかくできる事はした。あとは結果を待つのみだ。
　なんとしても合格してここに行きたい。
　学校そのものにも魅力はあるけど、やっぱりあの二人と再会したい。
　二人はどうだったかな……。
　名前も知らない二人の事を考える。
　合格していますように。

　あたしの受験が終わっても、学校の授業はまだ残っている。しかし、基本的に復習がほとんどだ。もっとも、真剣に授業を受けているのは、まだ受験が終わっていない生徒くらいだ。
　この差は大きい。
　受験が終わったのにまだ学校に来ないといけないのが面倒で騒ごうとするグループと、これから受験で最後の追い込みをしていて神経が張りつめているグループだ。
　あたしは終わったグループだけど、できるだけ静かに真面目に授業を受けるようにしている。それはあたし以外にももちろんいる。
　真面目に受けているけど、頭ではずっとあの二人の事を考えている。
　合格してるよね。
　でも、これであたしだけ落ちていたら……それは考えないようにしよう。絶対に受かってる。
　同じクラスになれるといいな……。
　まだ見ぬ未来に思いを馳せて窓の外を見る。
　青空が広がっているけど、どこか寒そうだ。同じ空なのに、どうして季節によってイメージが違うんだろう。やっぱり、実際にその気温を感じているからかな。写真だけだとわからないし。
　そんな風に空を見ていると、周囲から「やっぱり画になるよね」とか「深窓の令嬢だよな」なんて声が聞こえてくる。
　ああ、イヤだイヤだ。
　耳を塞ぐとか、あからさますぎてできない。
　教室から出ていきたいくらいだ。
　実質、自習のようなものだけど、そこまではできない。
　できるのは、聞こえていないふりをするだけ。
　本当は集中しなくても聞こえてきてしまうのに、そうじゃないふりをするのは大変だ。
　せめて、授業が早く終わらないかな……。
　そんな事を考えながら、窓の外を眺める。
　あとどのくらいこんな生活が続くんだろう。
　卒業式までの日数を数える。
「はぁ～、もうちょっとか……」
　卒業テストが終われば出席日がないので気が楽だ。受験が終わったのに、まだ最後のテストが残っている。もっとも、卒業できないなんて事はないだろうし、この結果で入試に影響があるわけじゃないだろうし。そう考えれば気楽なテストだよね。なんの意味があるんだろうって考えちゃう。
　とにかく、早く違う環境で新しい生活を始めたい。

合格発表の日がやってきた。
合格発表は、学校に貼り出される。
最近では、合格不合格が明確に周囲にわかるとかなんとかで、個別に郵送したりする学校もあるみたいだけど、ここは貼り出す方だ。
合格者はそのまま入学に関する書類をもらって帰る事になっている。
やっぱり寒いよね。
それは、ここが特別ってわけじゃなくて、外に出ればどこでも一緒なんだけど。
今日もお気に入りの山吹色のダッフルコートとえんじ色のマフラー。今日はマフラーを飛ばされないようにしよう。もっとも、そんなに風は強くないけど。
同じように学校に向かっているみんなの表情はかたい。それはそうだよね、合格してるかどうか不安じゃない人なんていない。
これでこの先の人生が……なんて考えている子もいるんだろうな。
そこまでじゃないにしても、ここで躓いたらって考えると怖い。
校門を通って、合格発表が行われる場所に行くと、まだ貼り出されていなかった。
あれ？　どうしたんだろう？
そう思って時計を見ると、まだ少しだけ合格発表まで時間があった。気が急いていたのか、思ったより早く着いたみたいだ。
あたしみたいにみんな早く着いているのは、緊張しているからだろう。
あの二人はいるのかな……。
探してみようと思うけど、ちょっと難しそう。
こんなにいるんだってくらい多い。あたしたちの学年全員よりもずっと多い。四〇〇人くらい合格するけど、受験者数はもちろんそれよりも多いから、ここにどのくらいの人がいるのかもうわからない。この中から探すのは、諦めた方がよさそうだ。
合格してればまた会えるよね。
そのためには、まずあたしが合格しないと。
緊張したまま発表の時間を待つ。
ああ、早く発表してくれないかな……。
この緊張のドキドキがこれ以上続いたら、心臓が止まってしまいそうになる。早く解放されたい。
ああ、早く発表して。
きっと、みんなが同じ思いだろう。
祈るように手を組んで、その時を待つ。

どのくらい待っただろうか。
もう、一時間も二時間も待った気分。実際はほんの数分だろうけど。
校舎の方から大きな紙を持った先生たちがやって来る。そして、それを壁に貼っていく。
それと同時に歓声があがる。
ほとんどが歓声だ。みんな、合格してるのかな……と思って見ると、番号がいくつか飛んでいる。つまり、不合格だったという事だ。
よく見ると、歓声にかき消されるように泣いている子がいた。嬉し涙じゃなさそうだ。不合格だったんだろう。
あたしはどうだろう。他人の心配をしている場合じゃない。あたしの番号は……三七三番。
もっとも、これは最初が何故だか二〇〇番なので、真ん中くらいだ。
今発表されてるのは、二五〇番くらいまで。順次、紙が貼られて発表が進んでいく。
歓声と涙が繰り返されて、ようやく三〇〇番まで発表された。
もうすぐだ。

次の次の用紙かな……と思っていたら、次の用紙の最後の方が三八七番だった。
慌てて下から順に見ていく。
三八七、三八五、三八一、三八〇、三七九、三七八、三七五、三七三、三七二……。
ん？
「あった……」
その数字を見つけたときは、ぴょんと跳び上がってしまった。
「あった、あった」
周囲からどう思われてもいいや。
嬉しい。
これで、あたしは約束を果たしたんだ。
春からこの学校に通うんだ。
春から、あの二人と一緒の学校に通うんだ。
……って、まだ、あの二人が合格してるかはわからないんだった。
結構、番号が抜けてるから倍率は高かったんだろう。でも、大丈夫だよね、あの二人なら。なんの根拠もないけど。そう信じてる。

合格したと思ったら、急に力が抜けてきた。
「よかった～」
テンションが上がったり、力が抜けたりと忙しい。
でも、こんなのって初めてだから緊張してたし、全然どうなるかわからなかったから、終わったと思ったら本当に全部が終わった気分。
合格発表はまだ続いてるけど、もうあたしには関係ない出来事になってしまった。
「合格者の方は、入学説明会を行いますので、体育館の方へ移動して下さい。同伴されている保護者の方もご一緒にお願いします。合格された方は、入学説明会を行いますので……」
その声にぞろぞろと移動を始める。あたしは、まだ合格発表の紙の前にいた。
もう関係ないのに、まだここを動けなかった。
合格しているとわかっていても、何度も何度も目の前の紙を見てしまう。
最後まで発表が終わっているので、合格している人は次々に移動しているけど、合格していてもあたしみたいにまだここにいる人もいる。ただそれは、一人でじゃなくて、友達と一緒に喜んでいる人たちだ。あたしみたいに一人は珍しい。友達と来ている人がほとんどだし、親が来ている人も大勢いる。合格していれば保護者を含めての説明会があるって書いてあったっけ。
どうせ、うちは両親が仕事だから来れなかったんだけど。
「合格された方とその保護者の方は、入学説明会を行いますので、体育館の方へ移動して下さい。合格された方と保護者の方は……」
騒いでいた人たちも、体育館に移動していく。あたしもそろそろと思って体育館へ移動する。
体育館に入ると、ずらっとパイプ椅子が並べられていた。
「前の方から詰めて座っていって下さい」
そう案内されて、みんな思い思いに座っていく。どうも生徒と保護者が分けられているわけではないようで、だいたい隣に座っている。
元々、中学が一緒なのか、仲良く話している人たちもいる。
あたしはどこかに空いている席がないか探す。できれば真ん中とかは淋しいので避けたい。どこか端っこが空いてないかな……。
きょろきょろと見回して、二つ空いている席があったので、あたしは端の方へ、隣とは一つ席を空けて座る事にした。
説明会の書類は最初から椅子に置かれていたので、それを手にとって見ていく。
入学書類の提出期限や、入学金や授業料の支払方法、制服や体操服の申込書、採寸は別の日に行うらしい。そして、教科書の一覧とその金額、その他に必要となる物の種類とその金額、そして、入学式や制服採寸、教科書の受け渡しな

どの日程が書かれた紙などが入っている。
　中学に入学する時は親と一緒だったし、親がだいたい手続きしてくれたから楽だったけど、今回はほとんどを自分でしないといけない。
　きちんと説明を聞いておかないといけない。
　でも、他の人たちはだいたい親と一緒だから気楽なんだろうな……。
　説明会はまだ始まらないようなので、座ったままだけど周囲を見回す。もしかしたら、あの二人が見つかるかもしれないと思ったからだ。
　しかし、座ったままだとやっぱり見えない。かといって、立ち上がるのも憚られる。
　仕方なく手元にある書類に目を通していく。
　色々とあるんだな……。
　そういえば、この制服とももうすぐお別れなんだ。制服を摘みながら、ふとそんな当たり前の事に気付く。
　三年間だけの付き合いなんだよね。そしてまた今、新しい制服と三年間。
　他は……うわっ、なにこれ。
　教科書の種類を書いた書類を見て冗談かと思った。
　教科書の種類が多い。
　なに、これ。
　国語だけでもいっぱいあるし、数学も、社会も、英語も何種類もある。どれもワークとか問題集じゃなくて教科書なんだよね。どうしてこんなに色んな種類があるの？　こんなに授業で使うのかな……。
　でも、あるって事は使うんだよね。
　やっぱり、高校って中学とは全然違うんだ。
　改めて新しい世界に飛び込むんだって思い知らされる。
　そんな事を思っていると、説明会が始まった。
　あたしは、なにも聞き逃さないように真剣に耳を傾ける。そして、大事な事はきちんとメモする。
　まずは合格おめでとうという言葉からどの説明も始まる。
　手元の書類を見ながらの説明なので、確認していくのが主な感じだ。
　書類の書き方や提出日、制服採寸の日程などの確認が、それぞれの担当の先生から行われていく。
　基本的には読んでいるだけなので、一人でも特に問題なさそうだ。
　そして、最後に選択授業に関する説明があった。
　理科の選択と社会の選択と芸術科目の選択を事前に調査するというものだ。
　理科は、化学Ａと生物Ａというのは必須だけど、化学Ｂ、生物Ｂ、地学Ａが選択であるらしい。
　社会も、日本史Ａか世界史Ａが必須で、必須以外に日本史Ｂ、世界史Ｂ（ともにＡを選択しているもののみ）、政治経済が選択となっている。
　選択しなかったものは、二年三年でも選択できるので、大学受験に必要となればその時に履修する事もできるらしい。
　そして、芸術科目として、書道、美術、音楽のどれかを選択しないといけない。これは三年間連続で途中で変更はできないそうだ。
　総合科目として、選択しなければいけない授業があるみたいだ。これは、古文や漢文、英会話、数学Ｃ、時事などがある。
　もう、中学の頃には考えられない。
　こんなにいろんな授業があるんだ……。
　選択だから、きっと同じクラスでもバラバラなんだろう。ある程度、同じ選択の生徒を集めるだろうけど、これだけ選択肢があるとばらつくだろう。
　今までからすると全く想像できない。
　大学は自分で時間割を作るみたいな事を聞いた事があるけど、なんだかそれとあまり変わらないような気がする。
　それにしても、合格したらすぐに決めないといけないというのは大変だ。クラス分けに必要なんだと思うけど、こっちとすればなかなかそういう気分じゃない。せっかく受験勉強から解放されたと思ったら、次は大学受験に向けての勉

強が始まってしまう。
　人生は勉強だとはよく言ったものだと思う。延々と勉強をしている気がする。
　大人になったら勉強とかしなくていいんだろうな……。いいなぁ。宿題とかないなんて羨ましい。
　とにかく決めないといけないよね。説明会の終わりに記入した用紙を提出して帰らないといけない。
　まだ大学とか全然考えてないから、受験に必要な科目とか見当もつかない。
　周囲でも友達と相談しながら決めているようだ。自分の進路よりも、友達と一緒の方がきっといいんだろう。そうだよね、普通はそう決めるんだよね。
　高校からは文系と理系というのがあるらしいけど、あたしはきっと文系だろうと思う。数学や理科が苦手な訳じゃないけど、理系って科学者とか技術者みたいなイメージがあるから、そうじゃないなと自分で思う。
　だからって、英語が得意じゃないし、本を読むのは好きだけど、それと国語ができるのは別問題だし……。
　とりあえず理科は、化学と地学は計算が多いから、暗記でなんとかなりそうな生物Ｂにしておこう。
　社会は、日本史のＡとＢにしておこう。カタカナの名前って憶えにくいしややこしい。なんとかなん世なんて、こんがらがっちゃう。
　芸術科目は……美術にしておこう。書道は字が上手い人たちが多いだろうし、音楽は楽器が得意でもないし歌も恥ずかしい思い出しかない。絵が得意でもないけど、消去法でこうなってしまう。
　あとは総合科目だけど……なにがいいかな……。これは本当に色々とある。あ、これにしよう。リストの最後の方に調理栄養というのがあった。料理はそこそこできるし、勉強の息抜きにもなりそうだ。
　よし、これでなんとか授業は決まった。
　あの二人はどんな授業を選んだのかな……。一緒の授業があったらいいな……。
「選択科目を決められた方は、お帰りの際に用紙を入り口に設置しております箱に入れて帰って下さい。入学説明会はこれにて終了します。入学手続きの書類などのお忘れ物がないよう、ご確認されてからお帰り下さい。次回は、制服の採寸と教科書の販売がございますので、指定された日にちにお越し下さい。本日は合格、まことにおめでとうございました。春から楽しい学校生活が待っていますので、残りの中学生活を存分に楽しんで下さい。それではお疲れ様でした、記入を終えた方からお帰り下さって結構です」
　それを聞いて、数人が早速立ち上がって帰り始める。
　あたしももう帰ろうかな……と立ち上がると、体育館の反対側に見覚えのある人を見つけた。
「あっ」
　それは、願書を提出した時、マフラーを拾ってくれた人だった。
　合格したんだ……。よかった。これで、春から一緒の学校だ。
　声を掛けようと思ったけど、距離が遠いし、彼は一緒にいる女の人となにか話していたので、声を掛ける事ができなかった。
　春から三年間ここで過ごすんだから、お礼を言うのはまたいつでもできるだろう。
　それにしても、隣にいるのは誰だろう？
　お母さんにしては若すぎる。あたしたちとそんなに歳が離れているとは思えない。
　もしかしたらお姉さんだろうか。でも、なんだかそれも違う気がする。
「孝志くんは、選択授業はなにを選んだの？」
「日本史と生物で、あとは音楽と時事ですね」
「もしかして、あの人が選びそうなのを選んだんじゃない？」
「さすがにそこまでは……。でも、それもないとは言えないかもしれませんけど、自分でしたい事で選びましたから」
「そう、それならいいけど。あの人がいたらなにか言いそうだけどね」
「本当に、今日はわざわざ来ていただいてありがとうございました」
「いいのよ、別に。本当は、あの人が来たがってたけど、仕事がね……」
「ああ、そうですか。誠司さんならそうですよね」
　耳聡く声が聞こえる。なんだか楽しそうだ。話し方から、やっぱりお姉さんじゃないみたいだ。
　親戚の人とかかな？　さすがに近所の人って事はないだろうし。そんな人が入学説明会に出席するなんて聞いた事がない。

年上の恋人……なんて、もっとあり得ないよね。
それにしても、彼も日本史と生物を選んだんだ……。後は違うみたいだけど、もしかしたら同じクラスになれるかもしれない。違うクラスでも、その授業の時はいっしょになれるかもしれない。
そう考えるとわくわくしてくる。
もう一人の彼女はどうなっただろう。探してみるけど見つからなかった。でも、きっと受かってる。
一応、体育館を見回してみたけど、さすがに人が多いので見つけられなかった。
今日はもう帰ろう。
受験も終わったし、これで一安心だ。
あとは制服の採寸とかだね。
進学って色々と揃えたり大変だよね……。

制服の採寸日までにある行事があった。
中学校の卒業式。
幼稚園の卒園式はほとんど記憶にないから、実質二回目だ。
小学校の時は、基本的にほとんど同じ顔ぶれが同じ中学校に通う事になっていたので、場所が変わるだけみたいな感じだったけど、今回はみんなバラバラの学校なので、もう会わないって人もいるだろう。あたしは、あまり会いたくないけど。
あまり顔ぶれが変わらない小学校の卒業式でも、泣いている子は結構いた。あたしもちょっと涙が出てきた。
今回は、離ればなれになるグループが多いので、泣いている子たちが多かったように思う。
逆に、あたしは全く涙が出なかった。式の雰囲気にのまれて、ちょっとこみ上げるものはあったけど、新しい生活への希望がいっぱいで、むしろ嬉しかったくらい。
でも、この後が大変だった。
「愛藤（ちかふじ）さん、学校は違っちゃうけど、オレと付き合って下さい」
「ずっと好きでした。高校に行っても付き合って下さい」
「ずっと気になってたんだ。付き合ってくれないかな」
「学校は変わるけどさ、俺たち付き合わないか」
「愛藤、付き合おうぜ」
「愛藤さん、卒業しちゃうから言うけど、ずっと好きだったんだ」
「なあ、俺たち付き合っちゃおうぜ」
なんていうのが立て続けだった。
女子からは疎まれるし、あたしとしてはそれを含めて面倒だしで散々だった。
確かに羨ましいと思うかもしれないけど、あたしにとっては煩わしいだけだ。
こっちは全く知らないのに、向こうはあたしを知っている。なんだか気持ち悪い。
アイドルとかならそれも含めて仕事なんだろうけど、あたしはただの中学生だ。知らない人にまで色々と見られているのは、やっぱり気持ち悪い。
そもそも、卒業の記念にとか言って告白するなんて、相手に失礼だと思う。真剣さが全くない。
記念に告白ってなんだよって思う。
要は、フられても学校が違ってもう会わないからいいって事で、逃げ道でしかない。
もし、これで付き合うようになったとしても、絶対長続きしないと思う。
学校が違えばなかなか時間もあわないだろうし、行事や部活の関係ですれ違いだ。時間の遠距離恋愛になって、続くようには思えない。
それが続くのは、こんな記念なんかじゃなくて、本気で好きあっている場合だけだろう。
もし本気なら、こんな卒業式の時に告白なんてせずに、もっと前にしてるだろう。
受験があるから……なんてのも言い訳にしか思えない。
確かにデートとかは、勉強の邪魔に思うのかもしれないけど、あたしはいい息抜きになると思う。もっとも、毎日のように学校で会うんなら、休日にわざわざどこかに行かなくてもいいように思う。それなら確かに邪魔だ。
でも、お互いに刺激しあえて、勉強もはかどっていいように思うから、付き合うのは受験の邪魔とも言い切れないと思う。
あくまでも、そう思える相手の場合だけど。
そんな事ばっかり考えてるけど、あたし自身は恋愛経験ゼロ。
今まで確かに告白されたりしたけど、全部断ってきたし。でも、それはそれで他の女子から色々と言われる。
どうしてフっちゃうの？
もったいない。
いい気になって。

代われるものなら代わってあげるよと言いたい。
いつあたしがいい気になった？　迷惑そうに……っていうか、迷惑としか思ってないんだけど。
だからって、そんな事を言っても、火に油で余計にやっかまれてしまう。
はぁ……なんだか面倒だな。
男子だったらこんな風じゃないんだろうな、きっと。
男子だったら、お前告白されたんだって？　とか、羨ましいな……とか、断っても、お前なにもったいない事してんだよ、くらいで終わるだろう。
女子のように、付き合うようになっても断っても、どっちにしろ色々と陰で言われるような事はないはずだ。
やっぱり、女子社会って面倒だと思う。
おまけとして、ラブレターも大量にあった。
ああ、どうしよう。返事とか、書くべきだよね、やっぱり。
でも、どうするべきなわけ？　これって、やっぱり自己満足？　その辺も考えてほしいよね。どこに返事すればいいのかわからない。
これこそ自己満足だよね。
全然、本気が感じられない。
なんでこんな事するんだろう。
そんな事を口にしようものなら、また色々と言われるんだろうな……。
ホント、代わってあげたいくらいなのに。
このラブレターはどうしようかな……。
捨てるわけにもいかないし、持ってかえるしかないよね、やっぱり。持ってかえってからどう処分するかが悩みどころ。
これなら、直接告白してくれる方がマシ。その場で断れるから。その場で忘れてしまえるし。
あたしは告白してきた人を憶えてないけど、女子のみんなは色々とチェックしてて憶えてるのがすごいと思う。
この生活も今日で終わりで嬉しい。
できれば、高校ではおとなしく、静かに過ごしたい。
高校デビューするとか騒いでいるのを見ていると、楽しそうだなとは思うけど、あたしは逆になるんだろうね。
それをまたやいのやいの言うのは女子ならでは。ああ、イヤになってくる。
ドキドキした恋愛ってそういえばないな……。
もしかして、初恋がまだって遅いのかな。
やっぱり本当にドキドキしないと付き合えないよ。
きっと、高校だったらそういう出会いもあるかもだよね。

制服の採寸を終え、教科書も購入した。
この教科書が曲者で、重い重い。リストで見てるだけでも多いなって思ってたけど、実際に手にすると想像以上。しかも、重さがハンパじゃない。
今日も彼女に会えなかった。もしかしたら……と思ってたけど、無理だったのは残念だった。
時間枠があっただけなので、きっと違う時間帯に来ていたんだろう。
それにしても、やっぱり重い。
近い所ならいいけど、遠いんだよね……。大変だ。
何度か荷物を地面に置いて休憩しながら帰った。
冬なのに汗だくになってしまったので、すぐにシャワーを浴びる事にした。普通、こんなのってない。

暦では春といっても肌寒い。昔の暦だと、そろそろ夏に含まれるんだよね。旧暦だとちょっと違うんだったかな。でも、なんだか不思議。こんなに寒いのに夏なんて。
まだまだコートが手放せない。
指定の防寒具は特にないので、お気に入りの山吹色のダッフルコートにえんじ色のマフラー。
なんだかこれだと、中学の時と変わらない気がしてくる。でも、その下に着ているのは、真新しいブレザーの制服。
中学はセーラー服だったので、なんだか気分一新もあって楽しい気分になる。
まだまだ着慣れていないので、まさしく新入生って感じがするのが難点。でも、それはしょうがない。実際に新入生だし。
まだ桜も満開とまではいかないようで、蕾が膨らんでいるだけみたいだ。咲くのはもう少し暖かくなってからかな。
入学式や卒業式には桜のイメージがあるけど、実際にその時期に咲いているかは微妙だ。全国的にはどうかわからないけど。
学校へ続くこの道は、あたしと同じようにコートを着た新入生が保護者と一緒に歩いている。
もっとも、保護者と一緒じゃない人も結構いるみたいだ。高校ともなればそういうのってないのかな。どっちみち、あたしの場合は一人なんだけど。
この歩いている人の誰かと同じクラスだったりするのかな……。
きっと、そうなる人もいるかもしれない。
選択授業で一緒になる人がいるかもしれない。
そう考えるとなんだか不思議だ。
全く知らない人ばかりだから余計にそう感じるのかもしれない。
同じ中学の人は、何人かいるのかもしれないけど、あたしは知らない。
親しかった人はいないはずだ。
いたとしても、そんなにいないはずだから、あたしにとってはみんな初めての人たち。
それを望んでここを受験したんだから。
それにしても、やっぱり寒いな……。
春はまだ遠い。
まだまだ冷え込む日が続くって、天気予報で言ってたっけ。
ああ、手袋もしてきた方がよかったかな。
手を擦りあわせながら後悔する。
それにしても、みんな緊張した顔をしている。新しい環境だからわからなくもないけど。
でも、やっぱりあたしは楽しみだ。
高校じゃ今までとは違うあたしでいよう。
あたしの横を、楽しそうにおしゃべりしながら女子グループが通って行く。きっと、同じ中学出身なんだろう。
そういえば、高校でもやっぱり女子ってグループを作ったりするのかな。できれば、そういうのがないといいんだけど……どうなんだろう？
でも、やっぱりそういうのはなくなったりしないんだろうね。大人になっても、会社じゃそういうのがあったりしそうだし。
近所付き合いとか、将来的にはママ友達とか……そういうのって、どうして女の世界からなくならないんだろう。
でも、どこかに入らないと、高校三年間ずっと一人っていうのもイヤだしな……。
ダメダメ。
ブンブンと首を振る。
新しい環境で当たらし生活を始めるんだ。前向きに考えよう。
きっと、楽しいクラスになるし、仲のいい友達もできる。気兼ねしなくていいような、本当の友達が。

校門をくぐると人だかりができていた。

どうやら、クラス分けが発表されているらしい。
「あたしは、何組だろう……」
合格発表の時みたいに、クラス毎に名前が書かれている。
一組から順番に見ていく。
ああ、知らない名前ばっかりだ。当たり前だけど。
一組にはなくて、次は二組。
やっぱり当たり前だけど、知らない名前ばかり。
次は三組……と、その中にあたしの名前があった。クラスメイトに知っている名前は当たり前だけどない。
担任は女の先生みたいだ。どんな先生だろう。
そして、どんな人たちがいるのかな。
楽しいクラスになるといいな。
「新入生のみなさんは、クラスを確認して、体育館へ移動して下さい。クラス毎に席を用意していますので、順番に着席して下さい。保護者の方は、保護者席へお座り下さい」
合格発表の時みたいに拡声器で叫んでいる。
別に友達と一緒にしゃべったり、友達が何組かを探したりするわけじゃないし、それに寒いので体育館へ移動する。
体育館の中も温かいわけじゃないけど、風がないだけまだマシのような気がする。
「三組、三組……」
と、クラスの席を探す。
体育館に並べられたパイプ椅子の背中に、クラスを書いた紙が貼られている。
そして、座面にはそれぞれの名前が書かれた封筒が置かれていた。
とりあえず三組の場所を探して、今度は自分の名前を探す。
出席番号順みたいなので、ある程度の場所を予想して移動する。
「えっと……あたしは……あった」
通路から三番目だった。
まだあまり集まっていないみたいだ。みんなまだ外にいるんだろう。寒いのに。
隣にも前にも誰もいない。
ぽつんと一人座っていると、妙に淋しくなってくる。
だけど、それもすぐに終わって、次第に席が埋まっていく。
「初めまして、よろしく」
とりあえず右隣になった人に挨拶する。
「あ、うん。よろしくお願いします」
なんだか妙に緊張しているみたいだ。それとも、あたしなにか変だったかな。
右隣の彼女は、所在なさそうに封筒の中を見ている。
そういえばなにが入ってるんだろう。まだ確認してなかった。
封はされてないので中を覗くと、そこには紙が入っていた。
「なんだろう……」
取り出してみると、クラブの紹介用紙だった。部員求む！　と書かれたポスターがいくつか入っていた。
なるほど……これだったら、とりあえず目を通すだろう。でも……紙の無駄な気がしなくもない。エコから逆行してるよね、これ。関係ないのかもしれないけど。
なんとなく隣の人とも会話しづらいので、その紙を見る事にした。
なにを話せばいいんだろう。
お互い新入生で、同じ条件なのに、なにを話せばいいのかわからない。
ああ、なんだかもどかしい。
そんな風に悩んでいると、左隣の人もやってきたみたいだ。
「初めまして。よろしくお願いします」
顔を上げて挨拶をする。

「初めまして。よろしくお願いします」
　まるで鸚鵡返しのように、同じ言葉が返ってきた。
　そして、やっぱり緊張しているみたいで、その人もどうしていいのかわからず、キョロキョロとしていたけど、やがてあたしと同じように封筒の中を見だした。
　あたしももう一度読み始める。
　色んな部活があって楽しそうだな……。別に強制的にどこかの部に所属しないといけないわけじゃないみたいだけど、どこかに入部するのもいいかもしれない。仮入部期間もあるみたいだ。
　そうしてポスターを見ていると、式の時間になったようだ。封筒の中に戻して、姿勢を正す。
　新しい生活の始まりだ。

　式が終わると、担任の先生に連れられて教室へ移動する。
　担任の先生は小柄な人で、ショートカットが可愛い先生だった。年上の人に、それも先生に可愛いって失礼かもしれないけど、可愛い感じの人だった。ちなみに、担当は数学Ａらしい。
　式の時に座っていた順に自然と並んでいるので、お互いに知らない同士ばかりなのか、会話はなく静かだ。もっとも、あまりしゃべってると注意されちゃうんだろうけど。
　そのまま教室までやってきて、順に座るように指示された。
　席に座って周りを見る。
（どんな人たちがいるんだろう……）
　別に荒れた学校でもないし、そこそこ勉強ができないと入学できない学校なので、見た感じは真面目そうな人たちばかりだ。
　もっとも、まだ猫を被っていて、実際はそうじゃないかもしれない。
　あたしはどうだろう。周りからはどう見られているんだろう。やっぱり気になってしまう。
　猫を被り続けるべき……なんだろうな。
　教室の前では、担任の先生が挨拶をしている。なんだかやっぱり可愛い。
　先生の挨拶が終わると、順に自己紹介をしていく事になった。
　今日は入学式だけで、そういうのは新学期が始まってからだと思っていたので、不意打ちだ。
　なにを言えばいいんだろう。
　誰もが戸惑い気味だった。みんなも同じ考えだったんだろう。
　それでも、出席番号順に立って自己紹介をしていく……のだが、先生の提案で教卓の所で自己紹介をする事になった。つまり、教室の前で自己紹介をする羽目に。
　ますますの不意打ちだ。
　可愛い先生だけど、なんだか意地悪だ。
　この場に立ってするだけでも緊張しちゃうのに、教室の前でなんてどうすればいいんだろう。
　だからって、断れるわけじゃないし……。
　みんな緊張しながら、教室の前に立って自己紹介をしていく。
　やっぱり、知っている人がいても気持ちは一緒だと思う。クラスのほとんどは初対面のはずだから。
（なにを話そう。なにを話そう）
　そんな事ばかり考えていると、なにも耳に入ってこない。
　あれ？　次は誰だっけ？
　前を見ると、あたしの席の三つ前の人が自己紹介をしていた。しかも終わりみたいだ。
　入れ替わるように、あたしの二つ前の席の人が前に出る。
（どうしよう）
　心臓が破れそうなくらいドキドキしてる。
（どうしようどうしようどうしよう）
　考えれば考えるほどパニックになる。
（そうだ、前の人のを参考に……）

でも、今までの人のは聞こえてなかったし、今も緊張しすぎているのか全然聞けるような状況じゃない。
（どうしようどうしようどうしよう）
ますます緊張してきた。余計に聞こえなくなってくる。
そんな事をしていると、前の席の人が立ち上がった。
（ああ、もうすぐだ）
胸に手を当てて落ち着かせようとする。
でも、なかなか心臓は落ち着いてくれない。
（落ち着こう落ち着こう）
深呼吸をする。
そんな事をしていると、前の席の人が戻ってきた。
いよいよ次だ。
ゆっくりと立ち上がる。
足が震えているのがわかる。武者震いのはずがない。
ゆっくりと、一歩一歩を確かめるように歩いていく。
手と足が同時に出てるんじゃないかと思って意識しながら歩く。
教卓までなんとか歩いて、そこから教室を見る。
（うわぁ……）
こうして顔を見るのは初めてだ。こんな人たちが同じクラスで、一年間過ごすんだ。
あたしは一礼をしてから自己紹介を始める。
「初めまして、愛藤菜々です。よろしくお願いします」
そう言って、もう一度一礼する。
（あ、なにを言うのか考えてなかった。どうしよう）
顔を上げると、どうしていいかわからなくなる。
顔が熱くなっているのがわかる。
「あ、え、えっと……その……」
なにを言えばいいのかわからない。
「よろしくお願いします」
なんとかそれだけ言って、礼をして席へ戻る。
（恥ずかしい……）
慌てて席に着く。
（なんだろう、この自己紹介。名前を言っただけだよ……）
机に突っ伏して後悔する。こんなの、高校生がするような事じゃないよね。なんだよ、この自己紹介は。
自己嫌悪の無限ループだ。
結局、ずっと後悔しっぱなしで、誰の自己紹介も聞こえていなかった。
あ、明日からどうしよう。結局誰の名前もわからないや。

自己紹介を終えると、今日提出するよう言われていた書類を先生に渡し、明日からの予定を聞いて解散となった。
明日は始業式があるらしい。その後にオリエンテーリングがあり、そこで部活紹介などもあるようだ。
実質的に授業が始まるのは、少し先になるのかと思いきや、その翌日からは通常授業らしい。
時間割を見ても、なんの授業かわからないものが多い。中学の時にはなかったようなものがいくつかある。
一応、先生が説明してくれたので、必要な教科書はわかる。
あ、そういえばノートを買っておかないと。これだけ授業の種類が多いと、ノートの種類もそれだけ必要って事になる。
今日の帰りに文房具屋さんに寄っていこう。
教室内では、まだ残っている人たちもいるけど、ほとんどがすぐに教室を出ていく。
残っている人たちは、中学が一緒だった人たちっぽい。

他の人たちも、同じ中学だった友達の所へ行ったみたいだ。
あたしは、そそくさと教室を出て、玄関で靴を履きかえて帰路につく。
校門の辺りでは、保護者の人たちが待っていた。結構な時間が経っていると思うけど、それでも待ってたんだ。
そんな保護者の人たちを横目に歩いていく。
ちらりと、合格発表の時にあの彼と一緒にいた女の人を見かけた気がした。隣にいる男の人となにか話していた。
少し気になったけど、知っているわけでもないのでそのまま素通りする。
どう考えても、彼の両親でもなさそうだし、兄姉でもなさそうだ。
（気にしてもどうなるわけじゃないし）
今日はノートを買って、明日の準備をしないと。
そういえば、宿題の提出もあったっけ。
なんだか、慣れるまでしばらくは慌ただしい日々が続きそうだ。

授業が始まりしばらく経つと、なんとなくの日々の流れがわかってくるようになった。
それでも、まだまだ慣れるまでは緊張する日が続きそうだ。
主に、クラスメイトとまだ打ち解けていないので、それが課題だろう。
自己紹介の時に誰のそれを聞いていない事もあって、顔と名前を一致させるのに四苦八苦している。
もっとも、他の人たちだって、一度で覚えられるわけじゃないので、スタートラインは同じだ。
でも、同じ中学の人はいないし、同じ趣味の人とかもわからない。
なにもわからない状態で、どう話していいのかわからずに、結局そういう事ができずに一人でいる事が多くなってしまった。このままじゃ、孤立しちゃうんじゃ……と、不安になってくる。
なにかきっかけってないかな……。
小学校の時ってどうだったんだろう。特別親しい友達っていなかったかもしれないけど、それでもそれなりに親しい人たちがいた。中学はその延長だったし、こうして新しい関係を築いていくのって、久しぶりで忘れてしまった。
休み時間とか、親しく話す相手もいないので、本を読む事が多くなってしまった。これじゃ余計に孤立しちゃうとわかってても、他にどうすればいいかわからない。

「おい、今年の新入生はレベルが高いらしいぞ」
「ああ、俺も聞いた。ちょっと見たけど、それマジっぽいぞ」
「そりゃすげぇな」
「その中でも、とびっきりなのがいるって噂だけど……」
「ああ、それオレ見た。マジマジ」
「マジなのか。妄想じゃないのか？」
「マジだって。リアルに存在した女神だぜ」
「なんだよ、そのたとえ」
「まあ、二次元脳だし、しょーがねぇだろ」
「二次元だっていいんだぞ」
「はいはい。それよりも、三次元だろ。現実を見ろって」
「だから、お前らの妄想はどうでもいいんだって。マジでレベル高いんだって」
「実際見たらビビるぞ」
「おいおい、それ狙ってみるか？」
「おまえじゃ無理だって」
「でも、レベル高めの誰か一人くらいはさ……」
「だから無理無理。鏡見てから言えっての」
「お前もだろうが、それ」
「わかってるっての。つうか、夢だろ。ドリームだって」
「その言い方もどうよ」
「でもよ、後輩女子つったら、たまらんだろ」
「なんだよ、またゲームか？」
「リアルでもさ、先輩って言われてみ？　可愛く言われたらたまらんぞ」
「……確かに。ちょっと想像してみたけど、いいなそれ」
「想像って、妄想の間違いだろ？」
「それはともかく、確かに先輩って呼ばれるのはいいよな」
「でも、オレはお兄ちゃんとかの方が……」
「はいはい。お前はそれでいいから」

「そうだな。お前はそれでいいって。うんうん、二次元いいよな」
「なんだよ、それ。お前らだって本当はいいと思ってるんろ」
「それはない」
「……」
「おいおい、もしかしてお前もか？」
「確かにそれもいいかもな。妹系の後輩っていいんじゃないかな……って」
「おいおい、ロリなのか？　ロリがここにいたぞ」
「つうか、これ以上ここで話してもしょうがねぇだろ。とにかく見てみようぜ」
「だな」

「ねぇ、ねぇ聞いた？　今年の新入生の女子って可愛い子多いみたいなんだけど……」
「バカな男子どもが騒いでたから知ってる。で、実際どうなの？」
「う～ん、確かに可愛いかな……。でも、そこまで騒ぐほどでもって感じかな」
「でもさ、男子どもが好きそうな感じの子が多いのは、そうかもよ」
「それある」
「確かに」
「男受けしそう」
「もしかして、それ目当てで入学してきたとか？」
「あんなバカども狙って？　ありえないでしょ」
「でも、それ本当だったらマジ受けるよね」
「受ける受ける。マジヤバいって」
「あははっ、ヤバいヤバい」
「それよりさ、新入生の男子にさ可愛い子いたんだけどさ……」
「マジ？」
「結構、わたしの好みだったな……」
「ホント？　あんたの好みって微妙じゃん」
「そんな事ないって。ホントに可愛いんだって」
「なにそれ。わたし色に染めるってやつ？」
「それ、なんか古くない？」
「昭和チック」
「でもさ、バカどもよりはマシじゃん」
「そうだよね……。なんか、それもありな気がしてきた」
「おっ、あんたも物色してみる？」
「ホント、あんたら肉食ね」
「色々としておきたいじゃない」
「どうぞ、ご自由に」
「興味なし？」
「ああ、年上専門だっけ？」
「まあね。年下なんてただのガキじゃない」
「わかってないな……。そこがいいんじゃない」
「私にはわからん。理解できない」
「でたよ、おっさんキラー」
「その言い方やめってってば。ただの年上好きで、オヤジが好きなわけじゃないって」
「でも、オヤジでも大丈夫でしょ？」
「上っていっても十くらいまでだって」
「充分、おっさんだっての。せめて、二つ三つが限度でしょ」

「そうだよね……」
「まあ、オヤジ好きはおいといてさ、可愛いチェリー君見に行こうよ」
「なんかエロい」
「そんな事言ってもさ、あんたも一緒でしょ」
「まあね。んじゃ、ちょっくら行ってきま～す」
「行こ行こ」

学校のあちこちでそんな会話が繰り広げられていた。
なんかそんな事ばっかりなのかな……。
校内を歩いてると、そんな声がたまに聞こえてくる。

なんとか話をするとすれば、選択授業の調理栄養の授業くらいだ。
この授業はグループでの授業なので、同じグループになった人たちとは話すようになった。といっても、グループは四人なので、あたしを除くと三人だけど。
ここから人脈を作っていけばいいんだろうけど、あたしにはそんなスキルはない。
この授業の間だけでも、誰かと話せて気分転換になる。料理も嫌いじゃないし、この授業を選んで正解だったかもしれない。
この授業は、女子がほとんどで男子が少ない。普通は受験とか考えて、五教科のどれかを選ぶんだろうけど、あたしは進路なんてまだまだ考えられないからこれ。きっと、他の人たちも同じような感じかもしれない。
中には、真剣に調理師、栄養士を目指している人もいるみたいだけど。
でも、この授業ってそこまで本格的にするのかわからない。もしそうなら、ちょっと大変かもしれない。
でも、やっぱり料理は気分転換になる。調理実習が多いのも楽しい。
エプロンを着て、髪はムファッサでまとめる。一般的にはシュシュと呼ばれているヘアアクセサリだけど、あたしはムファッサって呼んでる。どこかで聞いて、可愛いなって思ったので、あたしはムファッサ。
（よし、やるぞ）
今日は肉じゃがを作る。無難といえば無難なんだろう。今でも男の人が彼女に作ってもらいたい料理ってこれなのかな？　なんだか、そういうイメージが強い料理。
別にそんなに難しいわけじゃないんだけど、なにがそんなにいいんだろ。
分担して材料を切って……って、なんだか家庭によって材料が違うんだね。この授業で初めて知った。
ジャガイモは肉じゃがだから入れるんだけど、入れるお肉が牛肉だとばっかり思ってたけど、豚肉を入れる家もあるみたい。なんか不思議。
ニンジンとタマネギはだいたい入れるみたいだけど、糸コンニャクを入れたり、シラタキを入れたり、グリンピースやキヌサヤをいれたり色々とあるらしい。
なんだか、それぞれの家庭事情みたいなものや、家庭の味がわかって楽しい。
「愛藤さん、そっちどう？」
同じグループの子が訊いてくる。
「だいたい切り終わりました」
「じゃあ、こっちに切り終わったやつくれる？」
「はい」
切り終わったジャガイモやニンジンを渡す。
「ありがと」
鍋に入れて煮始める。
残っていた分も切って、そのまま鍋に入れる。
「じゃあ、こっからは私に任せんしゃい」
にこやかに笑いながら腕まくりをして、絶妙な量に調整した調味料を投入していく。彼女曰く、調味料の黄金率らしい。
あとは出来上がるのを待つだけだ。
その間に、今作っているもののカロリー計算をしなければならない。ただの調理自習じゃなく、栄養管理でもあるからわかるんだけど、これはやっぱり大変だ。
栄養士を目指すなら絶対に必要な事なんだけど。
あたしにすれば、ちょっと料理で息抜きのはずだったんだけど……計算違いだったかもしれない。
「ねぇ、これってどのくらい使ったっけ？」
「えっとね……ああ、一〇〇グラムですね」
「これって、大さじ何杯入れたの？」
「ああ、それは大さじ二杯」

「黄金率計算はお願いね」
「わかってますって。私にしかわからない秘密の調合だしね」
「秘伝なの？」
「企業秘密です」
「なにそれ」
　そんな風に笑いながら計算を進めていく。
　もちろん、その間も鍋の様子を確認する。
　それにしても、一時間の授業で終わらせるというのが、なかなか大変だ。普段は結構のんびりとしているので、時間は結構使ってる。
　分担すれば早くできるのは当然だけど、それでもあたしにすればすごい事だ。
「そろそろいいんじゃない？」
　お箸でジャガイモを刺して出来具合をみている。
「よしよし、私が味をみましょう」
　小皿に少しとって口に入れる。
「はふはふっ。……抜群」
　グッと親指を立てる。
「さすが黄金率？」
「それは、実際に食べればわかるって」
「楽しみにしてますね」
「なんか、お腹空いてきたよ」
「さっきお昼食べたとこじゃないの？」
「この授業があるのわかってるんだから、セーブしてるに決まってるじゃん」
「まあ、そうか」
　女三人寄れば姦しいっていうらしいけど、四人ならもっとなのかも。
「出来たんなら食べようよ」
「だね。とりあえずお皿の準備」
「了解」
　人数分プラスワン――先生の分の器を用意する。
「おおっ、すごいね」
「お嫁にいけるね、こりゃ」
「いやいや、男なんぞこれでいちころでしょ」
「でも、やっぱりそれプラス顔がね……」
　そう言って、あたしの方を見てくる。
「人気あるもんね……」
　なんだか空気がおかしくなってきたかも。
「それより、今は私の黄金率肉じゃがをご賞味あれ」
　その言葉にホッと胸を撫で下ろす。
（ありがとう）
　心の中だけでお礼を言う。実際に口にすると、それはそれで問題になる事を中学時代にイヤというほど経験した。
「そうだね、いい匂いでお腹空いてきたかも」
「食べよ食べよ」
　先生に提出分として一人前を出してから、あたしたちは手を合わせて、みんなでいただきます。
　一口ジャガイモを口に入れると……。
「ほふほふ、熱っ。でも、おいし」
「うんうん、家のよりおいしい」
「これって、お金取れるね」

「なに、黄金率肉じゃが商品化？」
「それいいかも」
　そんな会話をにこやかに聞きながら肉じゃがをほおばる。確かにすごくおいしい。
　これは、是非とも黄金率を教えてもらいたい。
「おいしいね」
「うん」
　和やかなムードで授業は進んでいく。っていうか、授業だって忘れてたかも。
　今日の授業はこれで終わりだし、かなりリラックスしてる。
　でも、この後に片付けがある。しなきゃいけないのはわかるんだけど、やっぱりこれが面倒。料理で大変なのは後片付けだと思う。
　調理自体は楽しいけど、これはどうも好きになれない。
　食べた後にみんなで片付ける。さすがに手分けするのであっという間。
　最後に栄養素やカロリー計算をしたプリントを提出して終了。
「ふぅ、今日もおいしかったね」
「確かに、あんたがいるとなにかとおいしいよね」
「そうそう、味付けの天才だね」
「いやぁ……もっと褒めて褒めて」
「褒める褒める」
「このグループでよかったよ……」
「だね。これで、料理の腕が……っていうか、さっきの味付け教えてよ」
「あ、あたしも」
「そうそう、教えてよ」
「企業秘密だって言ったでしょ」
「そこをなんとか」
「お願いします」
「お代官様、お姫様」
「なんか、よくわからんけど……仕方ない、お教えしましょう」
　そう言って、メモ帳にすらすらと調味料の比率を書いてくれた。
　これであれが再現できるんだ。
「ありがとう」
「これで、料理上手に思われるね」
「なんか、授業の度に私のレシピが奪われていく気がする」
「気のせい気のせい」
「そうそう」
「そうだよね。気のせいだよね。……って、そんなわけあるか～」
　あははとみんなで笑う。
「じゃあね」
　みんなクラスが違うので、それぞれの教室に入る。
　最後の授業なので、終わる時間もバラバラなので、クラスメイトも先に帰っていたり、まだ延長していたりしているけど、だいたいあたしたちの授業が最後のパターンが多い。
　今日も、みんなは終わっていて、帰っていたり、まだ教室に残っておしゃべりしていたりする。
「お疲れ～」
「お疲れさま」
　そんな会話を交わして帰り支度をする。
「じゃあ、さようなら」
「うん、バイバイ」

「バイバイ」
教室に残っていたクラスメイトに挨拶をして靴箱に向かう。
お腹もいっぱいでなんだか眠い。
今日もとってもおいしくて、ついつい食べ過ぎちゃいそうになるのが難点。
「帰ったら作ってみようかな……」
ついそう思うけど、さすがにさっきの今日はどうかな。また今度作ってみよう。
お父さんとお母さんも食べてくれるかな……。
一緒には無理だろうけど、食べてくれるくらいはするよね。

そんな事を考えながら靴箱を開けると……。
「はぁ～」
ついため息がこぼれる。中にはきちんと折られた紙が入っていた。
中を開けると、案の定の内容だった。
「また行かないといけないんだ……」
放課後に図書館の前で待っているという内容だった。
「大変そうね」
「ええ」
言ってしまってから、あっと口を手で押さえる。
気が弛んでいたのか、つい反射的に本音が。
こんな風に言うと、また色々と言われてしまいそう。
「あ、あの……」
どう弁解したものか考えながら相手を見る。
「お久しぶり」
その顔を見て、頭が真っ白になった。
「あっ……あ、あ……」
言葉が出てこない。
あの時の……受験票をもらいに行った時にぶつかってしまった人だ。
ずっと再会したいと思いながら、なかなか会えなかったのが、やっと会えた。でも、こんな……。
「あ、あの……」
「もしかして、忘れちゃったかしら？」
「あ、ううん。そんな事ない。ちゃんと憶えてます。あの時はごめんなさい」
「ごめんなさいは心外ね」
あ、そうだ……と思い出す。
「ありがとう」
「それはあの時でチャラだと思ってたけど」
「そうでしたね」
どう接すればいいのか、失態を演じた後だけにわからない。
「わたしは水城彩。よろしく」
そう言って、手を差し出してきた。
「あ、よろしくお願いします」
思わずその手を取る。
「あなたは自己紹介してくれないの？　愛藤菜々さん」
「え、あっ……」
そういえば、再会したら改めて自己紹介をしようって……。
「ごめんなさい。……でも、あれ？」
あれ？　どうしてあたしの名前？
「どうして自分の名前を知ってるの？　って顔ね。まあ、あなた有名だものね。特に男子連中から。そして、女子も」
「……」
「でも、やっぱり迷惑してたみたいね。中にはそれが嬉しい人もいるみたいだけど、あなたがそうじゃなくてよかった。わたし、そんな事で喜んでいるような人は嫌いだから」
なんだかその言葉にホッとする。
「昔から騒がれて、迷惑そうにするとやっかまれて……どうせ、そんな感じだったんじゃないの？」
図星だった。

「図星みたいね」
　どうやら顔に出てたみたいだ。
「でも、その方が好感持てるわ。これからもよろしくね、菜々」
「あ、はい。こちらこそよろしくお願いします。水城さん」
　いきなり呼び捨てだったのでびっくりした。こんなフレンドリーにされるなんて、初めてかもしれない。みんな、なんだか壁があるように接してくる事が多かった。時間が経つにつれそれはなくなってくるんだけど、いきなりそういうのなしでっていうのは初めてかも。
「友達にその呼び方は好きじゃないかな」
「ごめんなさい。彩さん」
　慌てて名前で言い直す。
「それも好きじゃないかな。か、ざ、し」
「彩……さん」
「二文字余計ね」
　呼び捨てにした事ってなかったから、すごく抵抗がある。でも、本当に仲良くなりたかったら、そっちの方がいいよね。
「彩……」
　思い切って、そこで切る。
「そうそう。よろしく、菜々」
「はい、彩」
　改めて握手をする。
　すごくドキドキした。
「丁寧にしゃべるのは地かもしれないから、別に構わないけど、わたしに遠慮とか必要ないから。むしろ、わたしは遠慮したりしないから、そのつもりで。あと、最初に言っておくけど、ぶっきらぼうに思えても、そういう性分だから。気にしないで」
「あ、はい……」
　いきなり注意事項みたいに言われてしまった。
「今日はこれから暇……でもなかったかしら」
　彩の目があたしの手に注がれる。
「……そうだった」
　彩との再会で忘れてたけど、呼び出されてたんだった。
「それが終わったら、一緒に帰らない？　再会の記念にどこかに寄り道とか」
　あ、それっていいかも。
「はい」
　満面の笑みで返す。
「なるほど、それが男子を虜にするってわけか。……そうだ、よければついていってもいい？　どうせ、断るんでしょ？」
　なにを言われてるのかわからなかった。
「えっと……」
「今から告白されに行くんでしょ？」
「……多分」
「わたし、そういうのって縁がなかったから、興味だけはあるわけ。できれば見たいんだけど」
　あたしが告白されるのを見たい？　あんなの、見るようなものなのかな……。っていうか、相手に悪い気が……。
「相手の事を気遣ってるんなら、別にいいじゃない。どうせフっちゃう相手だし、気にしなくてもさ」
　なんだか見透かされているみたいだ。
「……わかりました」
　もう、頷くしかない。相手には悪いけど、仕方ないよね。

あしたは靴を履きかえて、彩と一緒に図書館へ向かった。
この学校の図書館は、独立した建物で、それこそ本当に図書館と呼ぶにふさわしい建物だ。
そこへ向かうと、そこには男子が一人、立っていた。あの人だろうか。そういえば、名前が書いてなかった。
なんとなく上級生っぽい。
向こうは緊張してるのか、キョロキョロとしているけど、どうやらあたしたちには気付いていないみたいだ。
「じゃあ、この辺にいるから」
「わかりました」
どうやら、彩は少し離れた所から見物するらしい。さすがにその場にはいられないといったところか。
「あの……」
あたしはゆっくりと歩み寄る。
「あっ、本当に来た」
むっ。なんだか失礼な感じだ。
「この手紙、あなたですか？」
靴箱に入っていた手紙を見せる。
「あ、ああ。俺、俺」
「どんなご用ですか？」
「あ、えっとだな……。その……」
待っていた男子は、視線を逸らしている。
（ん？）
恥ずかしくて逸らしてるって感じじゃない。誰かに助けを求めるような視線だ。
（なるほど……）
中学時代にもこういう事があった。あれは、罰ゲームで告白だったっけ。もしかして、今回もかな……。
「俺と付き合ってくれないか」
意を決したのか、こっちを見て言ってきた。
「ごめんなさい。あなたとお付き合いする気はありません」
少し意地悪に返す。
「そっか……。じゃあ」
男子は特に落ち込んだ様子もなく、むしろ肩の荷が下りたような態度で去っていく。
「よし、よくやった」
そんな声が聞こえた気がした。
彼が去ってから、彩がやってきた。
「ああいう事もあるのね」
どうやら彼女も理解しているらしい。
「たまにあるんです」
「ホントにくだらない事を。バカしかいないの、男子って。なにが面白いんだか」
あたしはそれを聞いて思わず笑ってしまった。
「なにかおかしい事でも言った？」
「う、ううん、違うの。彩があたしの言いたい事を全部、心の中を読んだみたいに言うから、おかしくって」
「菜々の代弁者にでもなりましょうか？　わたしなら、こういう性格だし、効果あるかもよ」
「本当にお願いしたいくらいです」
「あら。そんな事言うと、本当に告白される度に、ついていっちゃうけど。今度は傍で」
「うんうん」
なんだか、すごく楽しかった。
想像すると、それもいいかもしれない。
これから、彩に付き添ってもらって、代わりに断ってもらって……。相手がどういう反応をするのか、ちょっと楽しいかも。

　って、なんだか相手の恋心を手玉に取って遊ぶみたいだけど、今日みたいな相手なら別にいいよね。
「でも、真剣そうな人には、ちゃんとお断りしないとなので、今回みたいな時は、彩を呼びますね」
「ふ～ん、ケースバイケースか。それで構わないわ。それにしても……ううん、後でゆっくりと訊くわ。用事も終わったし、帰りましょう」
「はい」

　あたしと彩は近くの喫茶店シフォンに入った。
　お互いに初めてだ。中学の時は、この辺に来る事もなかったし、高校に入ってからも、帰りは一人だったので、さすがにこういう場所に来たりしなかった。
　そういえば、友達との寄り道って初めてかもしれない。
　落ち着いた雰囲気のお店だ。お店には女性の方が一人。彼女がオーナーかな？　ウエイトレスさんは特にいないようだ。
　お客はあたしたちだけで、他には誰もいない。
　静かな音楽で、なんだかまったりとして眠くなってくる。それくらい落ち着ける。
「ご注文はお決まりですか？」
「わたしは、チーズケーキとダージリンのホット、ストレートで」
「あ、えっと……あたしは……」
　お店を見ていて、メニューを全く見ていなかった。
　えっと……なににしよう。
「あ、あたしも同じので」
「はい、少々お待ちください」
　お店の人はたおやかに笑いながらキッチンに入っていく。
「どうしたの。さっきの事で？」
　彩はあたしが挙動不審だからか、そんな風に心配そうに訊いてきた。
「ううん。違うんです。こうして、友達と寄り道って高校に入って初めてだし、それに、このお店ってなんだか素敵だから、見とれちゃって」
「それはありがとうございます」
　キッチンの奥から声が返ってきた。
　カーッと顔が熱くなる。
「あ、すみません、大声で」
「いいのよ。聞き耳を立てて、しかも返事しちゃうなんて、喫茶店のオーナーとしては失格かしらね」
「あ、そんな事……」
「ありがとうございます」
　そう言いながらキッチンから出てきた。
「お待たせしました。チーズケーキとダージリンです。紅茶はお好みの量をどうぞ」
　そう言って、チーズケーキのお皿と、温められているカップを二つ、そしてティーポットをテーブルに置く。
「一応、お砂糖とミルクも置いておきますね」
　と、あたしの方をちらりと見て言う。
　そういえば、慌てて彩と一緒のを注文したんだった。確か、彩はストレートだったから……。
「ありがとうございます」
「レモンがよければご用意しますので」
「いえ、ミルクで大丈夫です」
　何度も頭を下げる。
「それと、こちらは先ほどの失礼のお詫びも兼ねてのサービスです」
　そう言って、スコーンとジャムをテーブルに置く。
「あの、これ……」
「気にしないでいいんですよ。試作品ですので、あとで感想を聞かせて下さい」
　それでは、ごゆっくりくつろいで下さい、と言い残してカウンターに戻っていく。
「なんだか悪い気がするんですけど……」
「いいじゃない。せっかくだし、いただきましょう。厚意を無にするわけにもいかないんじゃないの？」

「それはそうですけど……」
「それに、きちんと感想を言えば、それでいいでしょ」
「……そうですね」
　あたしは紅茶を注いで、お砂糖とミルクを入れる。そして、まだ温かいスコーンに手を伸ばす。
「おいしそう……」
　ジャムは三種類あって、どれから食べようか迷っちゃう。
　赤いのはイチゴジャムかな？　青紫っぽいのはブルーベリー？　ちょっと薄いオレンジ色なのは……やっぱりオレンジかな？
　どれもおいしそうだ。
　まずは、赤いジャムをつけて口に運ぶ。
「あっ、おいし……」
　ふんわりしたスコーンの食感もいいけど、このジャムの酸味もすごくおいしい。
「なんだろう、これ。イチゴじゃないよね」
　イチゴに似ていないわけじゃないけど、イチゴじゃない気がする。少し酸味があって、だけど甘さでくるまれていて……。なんだろう。
「どれどれ」
　そう言って、彩も赤いジャムを塗って一口ほおばる。
「……ん？　これは……確かにイチゴじゃないけど、なんだかそんな感じっぽいような……」
　彩にもわからないみたいだ。
「もう一口」
　わからないのが悔しいのか、彩はもう一口ほおばる。
「……やっぱりわからないかも」
　カウンターを見ると、お店の人がこっちを見ながらにやにやしている。
　どうやら、わからないのを見て楽しんでいるようだ。
　普通ならそんな風にされたらイヤな気分になりそうなのに、不思議とそんな気にはならない。むしろ、見返してみようとさえ思ってしまう。
「次は、これね。こっちはなんだろうね」
　ブルーベリーと思われるジャムを塗ってほおばる。
「……ん？」
「今度はなに？」
　彩も赤いジャムに関して諦めたみたいだ。同じようにジャムを塗ってほおばる。
「……ブルーベリーじゃないわね」
　第一印象はあたしと同じだったみたいだ。
「正確には、ブルーベリーだけじゃないかな。明らかにベースはブルーベリー。だけど、なにか別のものが入ってる感じがする」
　そう言われてみればそんな気がする。
　カウンターでは、お店の人が頷いている。どうやら、あながち間違っているわけじゃなさそうだ。
「でも、これもはっきりとわからない感じ。なんだか無性に悔しい」
　あたしは完全にお手上げだ。そもそも、そんなに味がわかる方じゃない。料理は趣味程度にはしているので、ある程度は自信はあるけど、料理評論家みたいな感じにはできない。
　考えるのは諦めて、最後のジャムを塗ってほおばる。
「なかなかくせ者ね、これ」
　彩も悔しそうにしながら、最後のジャムに挑戦する。
「……ん？」
「柑橘系のジャムとは違う。なに、これ」
　確かに酸味はほとんどなく、さっぱりとした甘さがあるジャムだった。

　マーマレードみたいなのを想像してたので、完全に意表を突かれた。
　黄色＝柑橘系だと思っていたので、こうくると想像できない。
「なに、これ。全然わからない。完敗ね」
「でも、おいしい」
　あたしは素直に諦めて、味を楽しむ事にした。
　考えても疲れるだけだし、こんなおいしいもの、楽しみたいもん。
　個人的にお気に入りなのは、黄色いジャム。だけど、紅茶と合うのはやっぱり赤いジャムかな。青いジャムもおいしい。
　ああ、やっぱりどれもおいしい。
「マスター、ジャムの正体は教えてもらえないんですか？」
　気付くと、彩がカウンターに向かってそんな事を言っていた。
「ちょっと彩、そんな事……」
「こんな挑戦されたわけだし、こっちとしてはもう完敗。せめて、その正体くらい知っておきたいじゃない。菜々は気にならないの？」
「それは……」
　あたしもカウンターに視線を向ける。
「詳細は企業秘密だけどいいかしら？」
　その様子を見て、お店の人がやってくる。
「詳細が気になるんですけど、無理ですか」
「さすがにそこまでは教えられないかな」
「そうですか」
　彩は残念そうに言うが、実際はどうだろう？　なんだか表情からわからない。
「じゃあ、支障がない程度に」
　そう前置きして、赤いジャムを手に取る。
「まずは、この赤いジャムからね」
「はい、よろしくお願いします」
　彩はぺこりと頭を下げる。
「これはね、確かにイチゴじゃないんだけど、遠くもない感じかな。クランベリーやラズベリーなどが入ってます」
「なるほど……。それで、イチゴに似た感じだったんですね」
　あたしもお菓子作りでそういうベリー系を使ったりした事があるけど、混ぜるとこんな風になるんだ……。
「なるほど。では、青いのはブルーベリーベースで、同じくベリー系の混合ジャムですか？」
「正解」
　彩の質問にお店の人はにっこりと笑う。
「ブルーベリーベースで、グーズベリーやブラックベリーなどを入れてるわね」
「やっぱり」
　彩は何度も頷いている。
　あたしはただぼぅっと聞いているだけだ。彩って料理に詳しいんだ……。
　あたしなんか、なんとかベリーって言われても、ブルーベリーやラズベリーくらいしか知らない。
「でも、この最後のが全然わからないんです。これはベリー系とは全然違いますよね」
「そうね。これはちょっとメジャーじゃない感じかもしれないわね。おいしいと思ったんだけど、あなたたちはどうだった？」
「おいしかったです」
「同じく。悔しいくらいにおいしいです。だから、余計に気になる」
　お店の人はそれを聞いて、嬉しそうに頷く。
「それはよかったわ。これはね、無花果ジャムなの」
「無花果……ですか？」

　名前はわかるけど、どんなものかピンとこない。
「なるほど……。それは全然想像できなかった。まさか無花果なんて……。」
　彩は悔しそうに紅茶を飲む。
「意地悪みたいにしてごめんなさいね。でも、おいしいって言ってもらえて嬉しかったわ。これで、正式に商品にしても大丈夫そうね」
　お店の人は、ほくほく顔だ。
「ジャム単体でも充分売れると思いますよ」
　彩の一言に、それもいいかもね、と頷いてカウンターに戻っていく。
「ホント、悔しい」
　彩は何度も繰り返しながらチーズケーキを食べる。
　これはこれでおいしいけど、さっきのスコーンの後だと驚きがない分、なんだか物足りない気がするので、さっきのレッドベリーのジャムを少しつけてみる。
「……うん、おいしい」
「菜々、そういうアレンジするんだ」
「おいしいよ」
「見ればわかる」
　なんだかそれが悔しいのか、彩は同じレッドベリーのジャムを紅茶の中に入れた。
　イギリスかどこかじゃ、そういう飲み方をするっていうのは聞いた事があるけど……なんとなく挑戦した事がなかった。
「……うん、いける」
　通常のチーズケーキセット＋特製ジャムを楽しんでいると、彩が急に口を開いた。

「で、今まで何回くらいあんな風に告白されたわけ？　ああいう遊びを含めて」
　確かに放課後に二人でおしゃべりなんだけど、いきなりそれ？
「えっと……いきなりそういうの訊くの？」
「気になるのは、そこしかないじゃないの。だって、プリンセスとかマドンナとかアイドルとか色々と言われてるじゃない」
　それを聞いた瞬間、思わずテーブルに突っ伏してしまった。普段ならなんとか誤魔化すけど、彩の前だったらいいような気がした。
「お願いだから、それは言わないでくれませんか」
　テーブルに突っ伏したまま、顔だけを上げて怨めしそうに彩を見る。
「あらら……致命的な質問だったみたいね」
　驚いているという空気は微塵もなく、あくまでも平坦な物言いだ。
「わざとでしょ？」
「ええ」
　指摘してみても、彩はしれっとそう言う。
「でも、気になっていたのも本当。やっぱり、そういうのって気になるものじゃない」
「その好奇心はわかるけど、そういう風に正面から訊かれるのって初めてかも」
「いつもは、意地悪そうな女子に言われたり？」
　コクンと頷く。まるで、実際に見ていたみたいだ。でも、そういうのって、簡単に想像できる。
「なるほど。それでも、気になるから教えてくれると嬉しいかな」
　彩はまっすぐにこっちを見る。
「どうでもよくないですか？」
「興味津々ね。色恋沙汰って興味の対象でしょ、自分が第三者だと」
「……そうかもしれないけど。当事者はそうじゃないんだよ」
「わかってるわ。だから、その当事者に訊いてるんじゃない」
「彩って意地悪だよね」
「最初に言ったでしょ」
「……そうかもしれないけど」
「ほら、早く話してくれない？」
「ううっ……」
　なんだか誤魔化せるような状況じゃなさそうだ。そんなので赦してもらえそうにない。どこまでも追求してやるって目をしてる。
「わかりました……」
　これは観念するしかないみたいだ。
　とりあえず、気持ちを落ち着かせるためにチーズケーキを一口。そして、紅茶を一口。
「じっくりと、詳細にお願いね」
「わかりましたって」
　はぁ……っと、ため息。
「じゃあ、早速どのくらいか教えてくれる？」
「どうしても言わないとダメ？」
「どうしても」
　なんとか回避しようと思ったけど、じっとこっちを見てくる。
「憶えてない」
「……」
　あたしの答えに、彩は一瞬だけぽかんとして、すぐに思い至ったようだ。

「なるほど、そうくるか」
「本当に憶えてないの。そもそも数えてないんです」
「数え切れないくらいされてる、と」
　彩は意地悪な笑みを浮かべて言う。
　わざとだ。やっぱり意地悪だ。
「普通なら、そういうのって珍しいから、大切に憶えてると思うんだけど、菜々は日常茶飯事だもんね」
「はいはい、そうですよ。あたしは毎日のようにされてますよ」
　もう開き直るしかない。
「あら、つまらない。もうちょっと遊ばせてくれないと」
　彩は本当につまらなさそうに紅茶を飲む。
「ちなみに、ヒットはどのくらい？」
「ヒット？」
「菜々がＯＫした人数は？」
「そういう事か……。ゼロです。一度も付き合ってません」
　そう言うと、残念そうな顔をされる。
「付き合ってはフってを繰り返してたらよかったのに」
「彩はあたしを悪女にしたいんですか？」
「気のせいよ」
「嘘だ……。楽しんでるよね……」
「気のせい、気のせい。それにしても、やっぱりチーズケーキはおいしいわ」
「誤魔化さないでよ……もぅ」
「でもさ、逆に告白した事ってないの？」
　彩はチーズケーキで口をもごもごさせたまま訊いてくる。
「ありません。それよりも、食べながらしゃべるのって……」
「ごめんごめん」
　彩は紅茶で流し込む。
「モテモテなのに、付き合った事ってないんだ。なんだか、わたしから……というか、他の女子からすればもったいないわね。それは、確かにやっかまれるか」
　ものすごく納得されたけど、事実だ。
　誰と付き合おうがあたしの自由のはずなのに、告白されたら付き合わないといけないって決まりもないのに、そんな事で色々と言われるのはお門違いだ。
「じゃあ、次の質問ね」
「まだあるんですか？」
「まだって、まだひとつしかしてないけど」
　そう言われればそうだ。なんだか、いっぱい質問された気分だけど。
「誰とも付き合った事のない菜々が、今気になってる人はいるの？」
「えっ？」
「好きな人はいるのかしら？」
　好きな人……？
「あら？　もしかして、モテモテ美少女は、初恋がまだだったりするのかしら？」
「そんな事は……」
　あるかもしれない。
　そういえば、好きだ好きだ言われ続けてきて、なかなかそういう気分になれなかった。
「意外ね。いえ、逆に普通なのかもね。あれだけ告白ばかりされてると、恋なんて興味なくなるのかもね」
　彩は妙に納得してくれる。やっぱり、他の女子とは違う。
「それはそれとして、現在はどうなわけ？　高校デビューはしてるの？」

「その高校デビューっていうのはちょっと……。むしろ、逆デビューしたかったくらいだし」
「逆デビュー？」
「告白されたりしない静かな高校生活に憧れてたんです。それなのに、高校でも一緒で……」
「贅沢な悩み。わたしじゃなかったら、あなた刺されてるかもしれないくらいね」
　そうかもしれない。
　勝手な逆恨みとかなかったわけじゃない。
「じゃあ、やっぱり逆高校デビューしたかった菜々は、気になる男子っていないわけね」
「……」
　なんとなく言葉に詰まる。
　あれ？　否定すればいいだけなのに。
　でも、気になってるというか……。
「あらら？　もしかして初恋の予兆？」
「そういうんじゃないと思うんだけど、気になってるというか、彩みたいに入学する前にお世話になった人がいて、その人とまだ再会できてないから……」
「なるほど。初恋ね」
「だから、そういうんじゃないって」
「どうだか」
　あたしは気分を誤魔化すように紅茶を口にする。
「それで、菜々の初恋のお相手は？　合格はしてるんでしょ？」
「うん……って、別に初恋とかそういうんじゃ……」
「どうせ名前も知らないんでしょ。今度、見かけたら教えてよ。わたしが調査してあげる」
　彩が身を乗り出すようにして言う。
「あ、そうそう。調査中にその人を好きになって、横恋慕とかはしないから安心して」
「だから、そういうんじゃないってば。そ、そういえば彩はそういう人いないわけ？」
「いないわね」
　即答された。
「ホントはいるんじゃないの？」
　なんとか仕返ししようと食い下がってみるけど空振り。
「いないわ。その辺は興味ないから。他人のそれは興味津々だけどね」
　ポーカーフェイスで言われると、全然わからない。本当なんだろうか。
「信じる信じないは、菜々次第だけどね。友達のわたしの言葉をね」
「それ、卑怯だよ」
「そうかしら」
　彩は、しれっと笑う。
　そんな風に言われたらどうする事もできない。もう、信じるしかないじゃない。
「わかりました。彩の言葉を信じます」
「それでいいのよ。あ、すみません、お湯のお代わり下さい」
　彩は勝ち誇った顔で言いつつ、カウンターの方にいるお店の人に言う。
　気が付けば、ティーカップもティーポットも空になってしまっている。
「せっかく菜々みたいな興味深い人と友達になったんだから、まだまだ色々と聞かせてもらうからね」
　お湯を注がれてティーリーフが踊る。
「この香り、スコーンとジャムに集中してたから気にしなかったけど、すごくいいリーフね」
「お客様は、色々と詳しいんですね」
「好きな事に関してだけですけど」
「いい事だと思いますよ。それでは、ごゆっくり」
　そう言って、お店の人は去っていく。

「もう、なにも話すような事ってないよ」
「そうかしら。学園のアイドルの武勇伝なんて、滅多に聞けるものじゃないんだから、話題の宝庫だと思うんだけどね。そもそも、そういうのが話せる相手なんていなかったでしょ？」
　事実だ。まさか、こんな風に話せる相手ができるなんて思ってもいなかった。告白されたら、女子からは妬まれるだけ。愚痴なんて言おうものなら、どうなるか想像もできない。
　それはいいんだけど……こうやって話すなんてないから、なんだか疲れる。
「今日の予定はなにかあった？」
「別にないですけど……」
「じゃあ、時間はたっぷりあるわね。ゆっくりと語らいましょう」
　どうやら長丁場になりそうだ。これは、覚悟が必要みたいだ。

　結局、根掘り葉掘りと高校以前の告白歴史を聞かれてしまった。
　話すのは得意じゃないけど、もう時効の出来事ばかりだし、振り返ってみれば全部話の種。それに、色々と愚痴も聞いてもらったし、なんだかんだで楽しかった。
　それに、紅茶とケーキも絶品だったのがよかった。

　あの日から、なんだかんだと彩と一緒にいる事が多くなった。
　気が置けない仲というか、本音で話せるのって彩だけだ。
　飽きられる事なく告白も続いていて、その度に彩に同席してもらっている。もっとも、少し離れた場所から見てるだけだけど。それだけでも、断って急に態度が変わったりする人の場合は助かってる。
「ホントに、菜々ってすごいわね。学園のアイドルの名は伊達じゃないわね。この学校って文化祭でミスコンってないのかしらね。あったら菜々が圧勝なのに」
「そういうのは勘弁してほしいな……」
　今までそういうのはなかったけど、なんだか恥ずかしいよ……。ある意味、あれって晒し者だし。
「いっその事、写真とかブロマイドとして売ってみない？　文化祭で商売できたら大儲けじゃない」
「そんなの絶対にお断りです。知らない人があたしの写真持ってるなんて、気持ち悪いじゃないですか」
「でも、どうせ隠し撮りされてるんじゃないの」
「そんなの想像したくないよ……」
「有名税って事で諦めなさい」
「彩は当事者じゃないからそんな事言えるんだよ」
「そうよ。当たり前でしょ」
「いっつもそれだよね……」
　なんだかいつもこんな感じだ。
　冗談混じりだけど、ちょっと本気で言ってる気がしなくもない。
　でも、あたしも気楽に返せるからいい。
「ところで、初恋の人には会えたの？」
　唐突に言われると、なんの事かわからなかった。
「……だから、初恋とかそういうんじゃ……」
「はいはい。そのお礼したい相手は……まあ、その様子じゃまだみたいね」
　コクンと頷く。
「どういう人なのか、聞いてもどうせわからないから聞かないけど、どんな人が菜々のハートを射止めたのか気になるわね。これから、教室を回って捜してみない？」
「そんなにするような事じゃないって」
「入学前のお礼なんて、早く言わないとタイミング逃しすぎじゃない。本当なら、もっと早く行動すべきだったわね」
　確かにそうかもしれない。
　本当なら、全部のクラスに行ってでも捜すべきだったかもしれない。
　お礼を言いたいという名目はあるわけだし、別にそうしておけばよかったんだ。
　でも、相手が忘れてたら……なんて思うと、どうしても後込みしてしまう。
「もしかして、相手が忘れてたら……なんて考えてない？」
　図星。
　彩は大きくため息を吐いて、
「そんな事だとは思ってたけど、なかなか曲者ね。恋愛下手にもほどがあるんじゃない？」
「そういう彩は……」
「このままだと、菜々の恋が発展しないけど、まあ、それをどうするかは菜々次第だし、あなたの自主性に任せるわ。もし、なにかあれば協力するし。でも、その前に、どんな人なのかだけでも知っておきたいわね。というわけで、捜しに行きましょう」
　自分の中だけで完結したのか、彩はあたしの手をグイグイ引っ張っていく。
「ちょ、ちょっと……」
　ああ、されるがままだ。
　そのまま彩に引っ張られるままになって、全部のクラスを廊下から見たんだけど、その度に騒がれてしまった。

やっぱり、菜々は目立つのか……なんて、彩はこぼした。
でも、無理矢理だったけど、彩に連れていってもらったお蔭で、目的の人を見つける事ができた。
「なるほど……。真面目で誠実そう……典型的にそんな感じのタイプね。まあ、菜々の相手としての第一印象は合格かな。あとは、本性だけど……それは、追々わたしが調査してあげるわ」
と、彩は目を輝かせながら言う。
「彩……そっとしておいてくれないかな……」
「そんな事だと、高校生活が終わるでしょ。大丈夫、直接接触したりしないから。親友の菜々のために、色々と教えてあげる」
「……」
なんだか、怖いな……。
もう、なにを言っても無理だろうし。このまま、何事もないように祈るだけだ。

本屋を出ようとすると雨が降っていた。
梅雨の時季だけど、こんなに土砂降りになるなんて……。空梅雨だとか天気予報では言ってるけど、所によりゲリラ豪雨とか……結局なんだろう。
（仕方ない。もうちょっと時間をつぶしてよう）
もうすぐしたら止むだろうと考えて、もうちょっとここで過ごす事にした。
特に目的もなく入ったので、新刊くらいしか見ていなかった。別にお目当ての作家さんの新刊は出ていなかったし、そもそもそんなに手持ちがあるわけじゃないので、単行本は財布的に厳しい。文庫待ちが続いてる。
作者順に並んでいる棚から、すでに読んだ事がある本を取りだしては、ぱらぱらとページをめくる。そして、最後に奥付を見る。
（もう、こんなに売れてるんだ……）
一回にどのくらいを刷ってるのか知らないけど、この刷数が多いのはやっぱり売れてるんだよね。
好きな作家さんの本がそうだと、なんだか妙に嬉しくなる。
そんな事を繰り返して時間をつぶしていると、知らないタイトルの本を見つけた。作者は、あたしが好きな人だ。どうやら、新刊が出たのを知らなかったらしい。
（どんな本だろう。タイトルはなんて読むんだろう）
タイトルにはなんだか難しい漢字が書かれている。
「ん、と」
本を取ろうと思ったけど、棚の上の方なので手が届かない。
ちらりと周囲を見ても、踏み台がどこにも見当たらない。
（どうしよう……）
そもそも、どうしてあんなに上の方に置くんだろう。
なんとか背伸びをしてみるけど、全然届かない。
諦めようかと思った時、ひょいと誰かの手が伸びて、その本を取った。
「あっ……」
横から掻っ攫われたみたいで思わず声が出た。
「どうぞ」
えっ？
その本が差し出される。
「この本じゃありませんでした？」
「あ、いいえ」
動揺しまくっていて、その手から本を奪うように取って胸に抱く。
本を取ってくれた人は、そのまま同じ作家さんの別の本を取って見ていた。

「あっ……」
　ちらりと見ると、見覚えのある人だった。
「……」
　思わず出た声に気付いて、その人があたしをちらりと見る。
　なんだかすごく恥ずかしくなって、慌ててレジへ走る。
　会計を済ませて外に出ようとして、雨が降っていた事を思い出した。
「これ使いなよ」
　そんな事を考えていると声を掛けられた。
　声の方を向くとさっきの人が立っていた。その手にはビニール傘が握られていて、それをあたしに差し出していた。
「え、あの……」
　戸惑いを隠せなかった。
　普段から男の子と話す事なんてほとんどないから、こういう時どうすればいいのかわからない。それに加えて、その人はあの時の人だ。
　素直に受け取ればいいのかな……？
　それとも、やんわりと遠慮しておくべきなのだろうか？
　全然わからない。
　そう考えていると、その人はあたしが遠慮していると思ったのだろうか、
「実はもう一本、折り畳みがあるんだ」
　そう言って鞄をぽんぽんと叩く。
「だから、遠慮なく使ってくれていいよ」
　あたしの手に押し付けるようにしてくる。
　反射的にそれを握ってしまった。
　あ、どうしよう……受け取ってしまった。
　そう思った瞬間、あたしの口が勝手に言葉を紡いでいた。
「一緒に使いませんか？」
　言ってしまってから自分でなにを言ったのかわからなかった。
　その人もきょとんとしていた。
　よく考えればわかる。一緒の傘に入るという事は……いわゆる相合傘だ。
　友だちの女の子とじゃない。男の子とだ。
　なにを言ってしまったんだろう。でも、言ってしまった言葉をいまさら取り消すなんてできないし……。
「君ってどっち方面に帰るの？」
　その人が訊いてきた。
「あの……」
　少し驚いたけど、あたしは家の最寄り駅を伝えた。
「ならさ、やっぱり君が使いなよ。俺は反対方向だからさ」
　それを聞いた時、残念そうな顔をしてしまったのだろうか、自分でもよくわからなかった。そう思ったのは、その人の言葉があったからだ。
「じゃあ、気をつけて。俺、ちょっと急ぐから」
　そう言って、彼は傘を差さずに走っていった。
（どうしよう……）
　このまま突っ立てるわけにもいかないので、傘を広げて歩き出す。
　パラパラという音が今日はなんだか心地いい。
　手にはお気に入りの作家さんの本。買うつもりなんてなかったけど、つい勢いで買ってしまった。
　反対の手には普通のビニール傘。
　その両方が、あの人にかかわるもの。

〝紅絲〟

その本のタイトルどおり、これが運命の赤い糸になるんだろうか……なんて考えてしまう。

濡れてしまわない様に、本をギュッと抱きしめる。
なんだか、あの人の温かさが残っているような気がする。
帰ったら、大切に読もう。きっと、今までで一番の物語だろうから。
自然と足早になる。

それ以降は、なんの接点もなく、ただ時間だけが流れていった。
時々、彩から噂話のように様子を聞く事はあったけど、あたしからなにかしようとする事はなかった。
そんな時間も二年が過ぎて――あの春の出会いで、あたしはこのチャンスを逃しちゃダメだと思った。
このまま、なにもないまま終わりたくない。
生まれて初めて、告白される側じゃなくて告白する側になろうとしている。